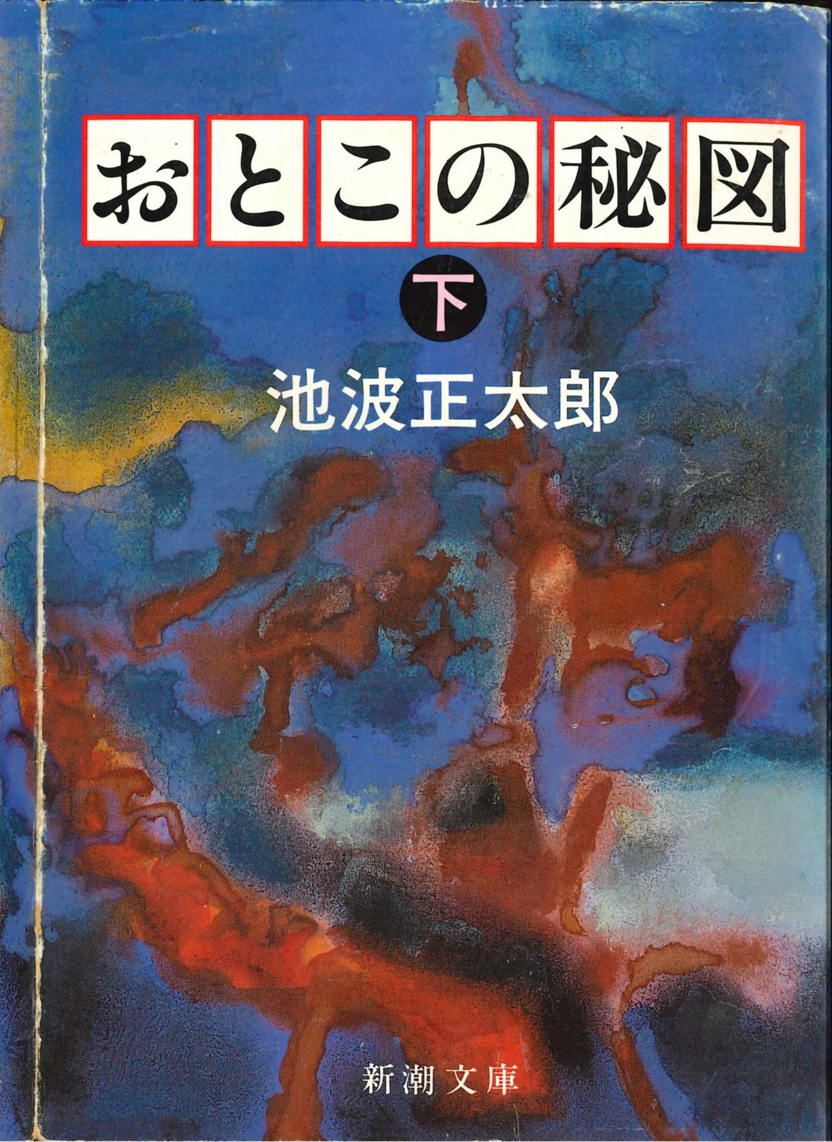


おとこの秘図

下

池波正太郎

新潮文庫

カバー　池波正太郎



おとこの秘図 下

池波正太郎

新潮文庫

おとこの秘図（下）

池波正太郎

い 16 18

新潮文庫

¥705

9784101156187

1920193007053

定価：本体705円（税別）

将軍御狩りの日、暗殺の陰謀を防ぐべく八代・吉宗の身代りとなった五兵衛は、危うく一命をとりとめた。一方、尾張家に荷担、暗躍したかつての剣友・佐和口忠蔵は死んだ。二十年後、五兵衛には、盗賊・日本左衛門との人生最後の対決が待っていた。三河・遠江一帯を傍若無人に荒しまわる、尾張家のはみ出し者らしい……。五兵衛、五十七歳――不屈の魂は、また燃え立った。

ISBN4-10-115618-2

C0193 ¥705E

カバー印刷　錦明印刷　　デザイン　新潮社装幀室

新潮文庫

おとこの秘図

下巻

池波正太郎著

新潮社

おとこの秘図（下）

池波正太郎著

新潮文庫

新潮文庫

おとこの秘図

下巻

池波正太郎著

新潮社版

3063

おとこの秘図

下巻

将軍御狩り

一

翌日も昼すぎになって……。

徳山五兵衛（とくのやまごへえ）は小沼治作をつれ、屋敷を出た。

二人とも、邸内の道場へ入り、用意しておいた衣類に着替えた。

袴（はかま）こそつけているが、だれの目にも浪人と見える姿となり、この日は二人とも、深めの目（め）塞笠（せきがさ）をかぶっている。

裏門から出て行く主従を見送る門番たちも、ちかごろは主人の行動を怪しむこともない。

これは、用人・柴田勝四郎（しばたかつしろう）の、奉公人たちへの統御がうまく行っているからにちがいない。

五兵衛は、自邸の横手の舟溜り（ふなだまり）を避け、裏門から迂回（うかい）をして両国橋を西へわたった。

舟溜りには、伴（ばん）格之助がさし向けてよこした坪井久蔵・片桐（かたぎり）半之介が交替で詰めている。

今日の五兵衛の行動は、伴格之助にも秘密のものであった。

（おもえば、危ういこと……）

なのである。

「小沼、わしから少し離れておれ」

「は……?」

「そして、わしを尾けている者がおらぬか、気をつけてくれい」

「承知いたしました」

両国橋の上で、小沼治作は、すっと五兵衛から遠去かった。

今日もよく晴れているが、微風が冷んやりとただよい、涼しげな日和であった。

御成道は、外神田から上野山下へ通ずる往還で、将軍家が菩提所の寛永寺へ詣でるときの通行路である。

大通りの両側には、名ある商家が軒をつらね、上野山下の盛り場をひかえ、江戸屈指の賑わいを見せている。

宿屋の山城屋は、御成道の東側、広小路町の中程にあった。

小さな宿屋ではあるが、場所柄だけに表の構えも上品で、その隣りに〔福市〕という蕎麦屋がある。

五兵衛は山城屋の前を通りすぎ、この蕎麦屋へ入った。

奥にも二階にも座敷があり、ひろい土間に通路が十文字に通っており、四方が入れ込みの客席。

折しも昼どきで、あふれるように客が入っている。

その片隅へ坐り込んだ五兵衛は、先ず酒を注文し、後から来る小沼治作を待った。

間もなく入って来た小沼が、五兵衛の傍へ来て、

「いかがいたします?」

「ま、のめ」

「はい」

「何か食べたらどうじゃ。わしもつき合おう」

こうした場所へ微行で来ると、若いころの経験が物をいって、余所目には、とても二千石の旗本の当主とは見えぬ徳山五兵衛であった。

夏の終りゆえ、五兵衛の好きな蒸切蕎麦はやっていない。

蒸切は、湯でさらしたそばを水で洗い、これを蒸籠に入れて熱く蒸しあげ、柚子の香りのする汁につけて食べる。

自由に外へ出られたときは、少年のころに堀部安兵衛が案内をしてくれた両国橋・東詰の蕎麦屋〔原治〕へ立ち寄り、蒸切を食べるのがたのしみであったが、このところ久しく、蒸切はおろか、普通の蕎麦切も口にしていない五兵衛だけに、

「ふうむ。うまい、うまい」

「殿。いかがいたしましょう?」

今日の目的も忘れ、運ばれてきた蕎麦切に、舌を鳴らさんばかりなのだ。

「先ず、食べるがよい」

「はあ……」
「小沼は、外へ出るたびに、こうしたものを食すことができる。うらやましい」
「何をおおせられます。私は、外で物を口にいたしたことなどございませぬ」
「ま、そう鯱張るな」
　むかしからすこしも変らぬ生まじめな小沼に、五兵衛は苦笑を洩らした。
「小沼。此処へ来てみても……さて、手の出しようがない」
「私が姿を変え、山城屋方へ泊り込んでみましたらいかがで？」
「ふうむ……」
　それは、五兵衛も考えてみぬことではなかった。
　だが、二日三日のことならばともかくも、徳山屋敷を小沼が何日も留守にしているということになれば、坪井・片桐の口から伴格之助の耳へ入るのは必定といってよい。
（何のことはない、わしも見張られているようなものか……）
　このことであった。
　それに、もしも、佐和口忠蔵が山城屋方へあらわれるようなことがあれば、一大事である。
　佐和口は、小沼の顔を、
（知りすぎるほどに、知っている……）
　からだ。
「ああ……」

　おもわず溜息を吐き、箸を置いた五兵衛が、
「いや、それはならぬ」
「いえ、佐和口忠蔵様が、たとえあらわれたとしても、大丈夫でございます。決して気づかれぬようにいたします」
「いや、待て」
「なれど……」
「それよりも小沼。芝の神谷町に店を構えている伊勢屋藤七方へ行ってみたい」
「はい」
　小沼が勘定をすませている間に、福市の通路から大きな障子戸を開け、外へ一歩、足を踏み出した徳山五兵衛の顔色が変り、いつになく狼狽の体で店の中へもどり、障子戸を閉めた。
「いかがなされました？」
「いかぬ」
「は……？」
「ま、いますこし、此処をうごいてはならぬ」
「な、何のことでございますか？」
「だまっておれ」
　ふたたび、元の席へもどった五兵衛が、小女に酒を命じた。
　席を立った客が、また、もどって来たので、小女が怪訝な顔をしたものだ。

五兵衛は入口の方へ背を向けて坐り、向う側に坐った小沼治作へ、
「戸口に気をつけているがよい」
「は……」
「外に……いや、山城屋の前に、坪井久蔵が立っていた」
「えっ……」
「今日、舟溜りの小屋に詰めているのは？」
「たしか、片桐半之介殿のはずで……」
「そうか。坪井は非番であったのだな」
「殿と私を、尾けてまいったのでございましょうか？」
「いや坪井は、この店の軒下にいて、わしに背を向け、山城屋の方を凝と見つめていた」
坪井久蔵は笠もかぶらずに、山城屋の店先を見つめていたのである。
そして坪井の傍には、いま一人の侍（これは塗笠をかぶっていた）がいて、これと坪井は何やらささやきかわしていたところへ、五兵衛が外へ出かかったのだ。
福市の店構えは、通りに面して横に長い。
その外れの軒先に立ち、細道をはさんだ向う側の山城屋惣平方を凝視している坪井久蔵は、五兵衛が外へ出て来たのに、まったく気づかず、横顔を見せてつれの侍とささやき合っていたのだ。
一瞬のことだが、五兵衛の目には、坪井たちが山城屋を、

（見張っている……）
ようにしか、感じられなかった。
さすがに味もわからなくなった酒をのみつつ、五兵衛が、
「小沼。そっと見てまいれ。気づかれるなよ。よいか」
うなずいた小沼は、表通りに面した入れ込みへあがって行き、窓の障子を細目に開け、外を見ているようだったが、やがて、もどって来た。
さいわいに、依然として店の中は立て込んでい、人びとは五兵衛主従の行動を怪しむこともない。
「どうであった？」
「見えませぬ」
「しかと？」
「はい」
「ふうむ……」
五兵衛は深刻の表情となり、冷えた酒を口にふくんだ。

二

すでに、伴格之助がひきいる〔蜻蛉組〕は、山城屋惣平方へ、
「目をつけていた……」

ことになる。

そして、いまこのとき、蜻蛉組が監視しているというのは、将軍・吉宗の命をねらう曲者どもと山城屋が、

「関わり合いがある……」

ことになるではないか。

これでは、小沼治作が山城屋へ泊り客となって入り込むことなど、論外の沙汰というべきであろう。

（佐和口忠蔵殿は、尾張屋源右衛門殿たちに与し、上様の御命をねらいたてまつるつもりなのか……）

数年前、久しぶりに吉宗が小梅の辺りへ狩りに出たとき、これを鉄砲でねらい撃った曲者がいると、岳父・藤枝若狭守から耳にしたことがある。

そのとき、運よく吉宗に弾丸は命中せず、供の者が一人、撃ち殪されたという。

そして、曲者は逃げた。

（では、そのときの曲者も佐和口殿ではなかったのか……？）

そうおもったとき、徳山五兵衛の脳裡を掠めた一事がある。

少年のころ、堀内源左衛門道場へ通っていて、佐和口忠蔵の教導を受けていたときのことだ。

或日、稽古を終えてのちに佐和口が、

「もしも、相手に鉄砲を突きつけられたとき、権十郎殿は何となされる？」

問われたことがあった。

何とこたえたか、いまは忘れてしまったが、いずれにせよ、佐和口の失笑を買ったにちがいない。

「権十郎殿。鉄砲と申す飛び道具は、な……」

佐和口は筆を把って巧みに鉄砲の絵図を描きつつ、その性能について、くわしく説明をしてくれた。

「鉄砲を突きつけた相手と自分との間合いによって、こなたの仕様も変らねばなるまい」

佐和口は、少年の五兵衛に問いかけ、その反応を看ながら、いろいろと教えてくれたものだ。

そのとき五兵衛は、

（佐和口どのは、鉄砲も遣われるらしい）

そうおもった。

「む、やはり……」

五兵衛が軽く膝を打ったのを見て、小沼が、

「いかがなされました？」

「いや、なに……こちらのことじゃ」

蕎麦屋の中が、いくぶん、しずかになっている。

昼どきがすぎて、客足が減ったのである。

おもいのほかに、五兵衛と小沼は、此処に時間(とき)をすごしてしまった。

「小沼。いま一度、外の様子を見てまいれ」

今度は障子を細目に開け、小沼は外を見わたしてから、もどって来た。

「大丈夫にございます」

「よし。では外へ出よう」

二人は蕎麦屋を出て、すぐに笠をかぶった。

「すこし、歩みぶりを変えたがよい。そうすると姿かたちも変ってまいるゆえ、それと気づかれぬものじゃ」

と、五兵衛がいった。

「はい。殿、これより芝の伊勢屋へまいられますか?」

「いや。やめにしておこう」

山城屋方が蜻蛉組に見張られているとするなら、伊勢屋藤七方も目をつけられているのではないか……。

そうでないともいえるが、

(いずれにせよ、近寄っては危ない……)

ことになる。

それは、小沼治作も同じおもいであったろう。

「では、御屋敷へおもどりなされますか?」

「いや……」

ふと足をとめた五兵衛が、

「お前は、一足先に帰っていてくれ」

「いや、それは……」

「案ずるな。久しく日野屋(ひのや)のあるじの顔を見ておらぬ。ちょうどよい。この近くゆえ、立ち寄ってみる。何、すぐにもどるゆえ、大丈夫じゃ」

「さようでございますか……」

「こころみに、舟溜りの番小屋を見てまいれ」

「はい。では、お気をつけられまして……」

「お前も、な」

小沼と別れた徳山五兵衛は、池(いけ)の端(はた)仲町の高級小間物店・日野屋文吉(ぶんきち)方へ向った。

ゆっくりと歩みつつ、五兵衛の胸の内へ、しだいに或る決意が凝固しつつあった。

(このような探りを、これよりはいっさい絶ち切ることだ)

このことである。

こうしたまねを自分がしたところで、何にもならぬ。

佐和口たちの姿を見出したとしても、どうするのか。

「佐和口殿は将軍家の御命をねらっているのですか?」

と、尋ねたところで、二千何百石の旗本である自分に、佐和口が、
「そのとおりだ」
と、こたえようはずもない。
仮に、佐和口が「そうだ」と、うなずいたとしよう。しかし、五兵衛の説得を受けいれるはずがない。
五兵衛としては、幕臣の一人として将軍の命をまもり、天下の騒乱を防ぐことは当然なのであり、むろん、わが一命を賭しても、
「悔ゆるところはない」
ゆえに、ここはあくまでも、吉宗と伴格之助の命ずるまま、
（将軍家の御身がわりになればよい。あとのことは、すべて忘れきってしまうことだ）
と、おもうにいたったのだ。
そして、御狩りの当日に、曲者どもが襲いかかるようなことがあれば、奮然、彼らを相手に闘えばよい。
（たとえ、佐和口であろうと尾張屋であろうと、容赦はせぬ。それは相手方も充分にわきまえていよう）
こころが決まると、徳山五兵衛の心身は、すっきりと軽くなった。
尾張屋や佐和口等から受けた恩義は別のことであって、
（恩義と大義を、男として選ぶならば、恩義を切り捨てるは当然のことではないか……）

なのである。
御成道から日野屋は、目と鼻の先であった。
「まあ、まあ……おめずらしいことでございますな」
出迎えた日野屋文吉は、老いて尚、元気いっぱいに見うけられた。

三

日野屋文吉は、徳山五兵衛が本所見廻り方に再任したことを、まだ知ってはいない。
ゆえに、目塞笠を手にした浪人姿の五兵衛を見て、
（また、何ぞ面倒なことでも起ったのか……？）
不安になったらしい。
そこで五兵衛は、
「また、御役に就いたのじゃ」
と、知らせた。
「まあまあ、さようでございましたか」
日野屋は、五兵衛を奥座敷へ招じ、
「大分に、おすごしでございますな」
酒のことである。
「匂うか？」

「はい」
日野屋の家族たちが、挨拶にあらわれた。
その間に、酒肴がととのえられ、運ばれて来た。
「ときに、殿さま……」
「何じゃ？」
「京からは、あの、何も便りはございませんか？」
「京……あ、お百合がことか？」
「はい」
「何とも、いってよこさぬわ」
「それはそれは……つまらぬことを、お尋ねいたしまして……」
「何の、かまわぬ」
いたって恬淡たる五兵衛の態度が、日野屋文吉は解せなかったようだ。
お百合が、ことわりもなく京へ去ったときの、五兵衛の昂奮ぶりが、
（まるで、嘘のように……）
としか、おもわれぬではないか。
（なれど、御役に就かれた殿さまが、このように御元気なれば、先ず安心……）
日野屋は、胸をなでおろしたようである。
五兵衛が日野屋にいたのは半刻（一時間）ほどであったろう。

だが、この日、五兵衛が日野屋へ立ち寄らず、小沼治作と共に本所の屋敷へもどってしまっていたら、佐和口忠蔵を見かけることもなかったにちがいない。
日野屋を出た五兵衛は、そのまま帰邸するつもりであった。
しかし、知らず知らず、足が御成道へ向いてしまった。
ということは、それが帰邸の道すじであったからでもある。
今度は、宿屋の山城屋の前を通らず、御成道の大通りをへだてた西側を歩みつつ、笠の間からそれとなく山城屋の方を見やったのは、当然というべきであろう。
そのときだ。
山城屋からあらわれた侍がひとり、あたりを見まわしてから編笠をかぶった。
笠の内へ隠れる一瞬前の、その侍の顔が、五兵衛の瞳孔へぱっと飛び込んできた。
（あっ……）
おもわず、五兵衛は足をとめた。
まぎれもない、佐和口忠蔵だったからである。
御成道の大通りを行き交う人びとを間にして、五兵衛が佐和口を発見できたのは、僥倖であった。
いや、五兵衛にとっては、むしろ、かえって面倒なことになったといってよい。
せっかくに、肚を決めたのだが、佐和口忠蔵が山城屋から出て来たのを見ては、胸がさわぐのをどうしようもない。

（やはり、そうであったか……）

舌打ちを鳴らしたいおもいである。

大和屋という薬種問屋の軒下へ身を寄せ、御成道を南へ行く佐和口忠蔵を見まもった徳山五兵衛が、

（よし）

こころを決め、佐和口の尾行にとりかかろうとしたときだ。

どこからあらわれたか、一人の侍が佐和口の背後から尾行しはじめた。

いや、単に侍が一人、歩いているというのなら、五兵衛も気にかけなかったろう。

だが、その侍こそ、先刻、蕎麦屋の軒下から山城屋を注視していた蜻蛉組の坪井久蔵なのだ。

坪井も笠をかぶっていたが、五兵衛の鋭い目はこれを見逃さなかった。

（あ……佐和口殿が、坪井に尾けられている……）

これは、五兵衛としても尾行を断念するよりほかはない。

（伴格之助殿の手は、ここまで廻っていたのか……）

このことであった。

「むう……」

笠の内に低く唸ったのみで、五兵衛は二人の姿が、人ごみの中に消え去るのを見送るよりほかに仕方もなかった。

そして、茫然と踵を返した。

本所の屋敷へ着くと、

「大変でございます」

小沼治作が走り出て来て、

「遊佐良仙先生が、お亡くなりになられました」

と、告げた。

「そうか……」

激しい衝撃はなかった。

徳山家の主治医・遊佐良仙は八十に近い老齢に達していた。

すでに診察もできなくなり、ぼんやりと日をすごすことが多くなっていたことを、五兵衛は知っている。

今日の昼ごろに、

「ああ、ようねむったわい」

寝所から起き出て、厠へおもむこうとして廊下を歩むうちに、ばったりと倒れ伏し、そのまま息絶えたのだそうな。

「では、すぐに遊佐屋敷へまいる」

「はっ」

「供をしてくれ」

「心得ました」

用人の柴田勝四郎をつかわしてもよいのだが、

(それでは、こころがすまぬ)

と、おもった。

幕府から二百俵の扶持をいただき、名医の評判が高い遊佐良仙は、五兵衛が少年のころから、いろいろと面倒をみてくれた。

亡父・徳山重俊の難病も、良仙あればこそ、あれまでに保った。

のみならず遊佐良仙は、先代の用人・柴田宗兵衛とちからを合せ、五兵衛の家督が適うようにと、懸命に徳山重俊を説得してくれたものである。

すぐさま駕籠の用意をさせ、身仕度をととのえた五兵衛は、小沼治作のほかに四名の供をつけ、神田小川町の遊佐良仙邸へおもむいた。

正式の通夜も葬儀も日をあらためてということであったが、さすがに名望が高い遊佐良仙だけに、弔問の客が引きも切らなかった。

夜に入ってから、五兵衛は帰邸した。

今日いちにちの出来事が、なかなかに五兵衛を眠らせてはくれなかった。

一睡もせず、徳山五兵衛は朝を迎えたわけだが、朝餉をすませ、居間の脇息にもたれ、ぼんやりしていると、小沼治作があらわれ、

「片桐半之介殿が、お目通りを願っておりますが……」

「何……片桐は昨日、詰めていたのではないか。今日は、坪井久蔵であろう」

「は……」

小沼も、すこし顔色が変っていた。

「何事か、起ったのか?」

「さて、それは……」

昨日の今日である。

五兵衛も小沼も、緊張せぬわけにはいかぬ。

「よし、通せ」

そういって、五兵衛は坐り直した。

四

居間へあらわれた片桐半之介は冷静そのもののような面もちであったが、それでも、どこかちがっている。顔色がやや蒼ざめていた。

「おぬし、今日は、非番ではなかったのか?」

先ず、五兵衛のほうから尋ねると、

「さようでござる」

「坪井久蔵は、いかがしたのじゃ?」

「それが……」

一息入れてから、片桐半之介が、
「身罷りました」
呻くがごとくいい出たのには、さすがの五兵衛もおどろいた。
「坪井が……亡くなったと……?」
「はい」
「それは、どうしたことじゃ」
「殺められまして……」
と、いいさした片桐が、目を伏せてしまった。
「殺害された……」
「はい」
「そうか……」
尾行する坪井久蔵に気づいた佐和口忠蔵が、
(斬ったか……)
このことである。
「昨日か?」
わかりきっているのに、そう尋かずにはいられぬ五兵衛であった。
「はい」
「どこで、そのような……?」

「そのことは、伴格之助様より、お聞き取り下さいますよう」
片桐は、格之助の〔呼び出し〕を五兵衛へつたえにあらわれたのだ。
すぐさま、五兵衛は身仕度をととのえ、単身、江戸城へ向った。
今日は、ひどく暑い。
鍛えぬかれた五兵衛の躰だが、歩むうちに、じっとりと汗ばんできた。
〔御意簡牘〕によって、例のごとく、吹上の庭の〔上覧所〕内の伴格之助の居住区へおもむくと、
「よくこそ」
いつものように、格之助が出迎えてくれた。
こころなしか、格之助は沈痛の面もちに見えた。
「さ、こちらへ」
奥の間へ五兵衛をいざなった伴格之助が、
「片桐より、お聞きおよびでござろうが、坪井久蔵が殺害されましてな」
「それは、何者に……?」
「わかりませぬ。なれど、推測は成り立ちます」
「では、上様御命をねらいたてまつる曲者の一味とでも?」
「さよう」
坪井久蔵の死体が発見されたのは、昨日の夕刻であったそうな。

まだ、あたりも明るい夕暮れどきに、斬られた。

場所は、麻布(あざぶ)の広尾の毘沙門(びしゃもん)堂外の小川のほとりで、血に染(そ)んで倒れ伏している坪井を発見したのは、通りすがりの百姓であった。

おもうに坪井は、自分に万一の事があった場合、どこへ照会すればよいかという一種の身分証明書のようなものを身につけていたに相違ない。

それでなくては、このように早く身許(みもと)がわかるはずはない。

それも蜻蛉組に所属しているという証明ではなく、もっと、さしさわりのないところへ知らせが届くようになっていたのであろう。

「麻布の広尾で……」

「さよう。坪井ほどの男が、ただ一太刀に頸(くび)すじを切り割られておりましてな」

「ふうむ……」

まさに、佐和口忠蔵が斬ったと、五兵衛は確信をした。

「徳山殿。実は……」

「何でござる?」

「下谷(したや)の、御成道に山城屋という宿屋がござる」

「ふむ……」

どうしたものか、このときの五兵衛は胸もさわがず、あわてもしなかった。

伴格之助が、昨日の自分の行動をまったく知らぬことが、よく看て取れたからであろうか。

「われら、長年にわたって探索をおこない、ついに突きとめたる曲者の隠れ家ともいってよい」

「その、山城屋が……?」

「さよう。いますぐにも打ち込んで、山城屋におる者どもを捕えることは、わけもないことでござるが……」

「ふむ……」

「それでは、曲者の一部を捕えることにしかなりませぬ。後の者どもの、江戸における隠れ家は山城屋一つではござるまい」

「なるほど」

「いずれにせよ、われらは、上様御狩りの当日、曲者どもを一網打尽にいたす所存にござる」

それまでに、でき得るかぎりの探索を推しすすめておきたかったと、伴格之助はいった。

「おもうに、昨日、山城屋を見張っていた坪井久蔵は、何者か、こころ当りのある曲者が山城屋よりあらわれたのを見て、後を尾(つ)けたのであろうかと……」

坪井は、共にいた一人を山城屋の見張りに残し、単独で佐和口忠蔵を尾行したことになる。

「すると、坪井久蔵を殺害した曲者は、別の隠れ家へおもむこうとしたのでござろうか。広尾の近くの……?」

「いや、そのような間の悪いことをする相手ではござらぬ。かの曲者は故意に、坪井を広尾

までさそい出したのでありましょう」

「ふうむ……」

「そこで、徳山殿に、お願いがござる」

「うけたまわりましょう」

「われら蜻蛉組に対しては、曲者どもも要心をおこたりませぬし……また、顔を見知られておるやも知れませぬ。明日より、徳山殿に山城屋の見張りをおたのみいたしたいが、いかが？」

このとき、徳山五兵衛の五体の血が、たちまちに燃えあがった。

それならば、

山城屋の探索ができるわけだ。

（天下はれて……）

「よろしゅうござる」

強くうなずいた五兵衛を、たのもしげに見やった伴格之助が、

「おたのみ申す」

わずかに、頭を下げた。

このときの五兵衛は、もはや佐和口忠蔵や尾張屋源右衛門と自分との過去を、いっさい忘れ去った心境になっていたといってよい。

（佐和口忠蔵を、斬って捨てることも辞さぬ）

ほどに、五兵衛の肚は決まっていたのである。

それから、長時間にわたり、伴格之助と打ち合せをすましてから、五兵衛は本所の屋敷へ帰った。

帰って、すぐに手紙をしたため、

「急ぎ、これを日野屋文吉へわたしてまいれ」

家来にいいつけてから、居間へ小沼治作をよび寄せ、これまた打ち合せをすませたころには、すでに夜に入っていた。

そこへ、日野屋へ使いに出た家来が帰って来て、

「万事、しかとうけたまわりましてございます」

との、日野屋文吉の返事を、五兵衛につたえた。

この夜ふけ、凄まじい雷雨が江戸の町を見舞った。

五

翌朝。

徳山五兵衛は、小沼治作を従えて屋敷を出た。

行先は、根岸の、日野屋文吉の寮（別荘）である。

日野屋は、昨日の五兵衛の手紙を見て、ぬかりなく仕度をととのえておいてくれた。

その仕度とは、小沼が身につける町人の衣裳その他である。

むろん、髪かたちも町人のものにして、小沼は当分、この日野屋の寮に寝泊りをすることになる。

五兵衛が髪かたちまで、変えてしまうわけにはまいらぬ。

伴格之助は、

「徳山殿に、万事おまかせいたす。おもいのままに見張っていただきたい」

といったが、これは、なかなかにむずかしい。

日夜、隙もなく見張ることになれば、当然、山城屋が見える場所に、見張り所を設けておかねばならぬ。

ただ、五兵衛と小沼の二人が、毎日のように山城屋の前をうろうろしていたのでは、

「かえって、怪しまれることになる……」

ではないか。

そのことを五兵衛がいうと、伴格之助は、

「いかさま……」

うなずいて、膝(ひざ)をすすめ、

「ともあれ、明日、お出張(でば)り下されば、われらより連絡(つなぎ)をつけ申す」

そして、格之助は、

「そのことはさておき、上様御狩りの当日についてでござるが……」

絵図面をひろげて、打ち合せに入ったのだ。

ともかくも、明日のことは、

「おもうままに……」

ということなので、五兵衛は日野屋文吉をたのむことにした。

くわしいことは、打ち明けず、

「御役目によって、これこれのことをたのみたい」

と、いったのみである。

日野屋の人柄を、よくわきまえている五兵衛だけに、その口から、この事が他へ洩れる気づかいは絶対にないと信じている。

根岸の寮ならば、小沼は、さまざまに変装をして、山城屋の見張りをすることができるし、何といっても、本所の屋敷からいちいち出て行くのでは、

（急場のときに、間に合わぬ）

と、おもった。

根岸から御成道までは、わけもない近距離である。

「のう、小沼……」

のぼりきった朝の日ざしを笠に受けつつ、根岸へ向って歩みながら、五兵衛が憮然(ぶぜん)となり、

「かようなまねをするのが、何やら莫迦(ばか)々々しくなってきた……」

「何故でございます」

「まるで、子供が遊び事をしているようじゃ。そうおもわぬか」

「おもいませぬ」
小沼は、勇み立っているらしい。
根岸の寮へ着くと、日野屋文吉が待ち受けてい、寮番の作兵衛に手つだわせ、すぐさま、小沼治作の髪かたちを変えてしまった。
そして、どこにでも見かける町人姿にさせ、背負う荷物と菅笠(すげがさ)を小沼にわたした。
荷物の中は空で、まことに軽い。
日野屋と作兵衛は、一言も問いかけなかった。
「殿様。これで、よろしゅうござりますか？」
「おお……見ちがえるようになった」
小沼は、町人姿となった自分を、物めずらしげに見まわしている。
「では、今日から小沼を、此処(ここ)に泊めてもらう。よいな」
「かしこまりました」
「では、行ってまいる」
「お気をつけなされまして……」
五兵衛は袴(はかま)をぬぎ、これを小沼の荷物の中へ入れさせ、着ながしの浪人姿であった。
根岸から車坂、上野山下から御成道へ出た五兵衛は、
「ひとまわり、いたしてみよう」
小沼にささやき、自分は、先ず、山城屋の筋向いにある薬種問屋・大和屋方の軒下へ佇(たたず)んだ。

山城屋には、別だん、変った様子も見られぬ。
(佐和口忠蔵は、昨夜、山城屋へもどったのであろうか？)
いざ、見張りをたのまれてみると、これはいかにも、
(所在ない……)
ものなのである。
さりとて、気をゆるめてはならぬ。
人が行き交う御成道の大通りを、いつまでも立って見つめているというのも、何やらはばかられてきた。
そこで五兵衛は通りを突切り、一昨日入った蕎麦屋(そばや)の〔福市〕へ入って行った。
まだ、昼前のことで、客も込み合っていない。
昨日、小沼と坐った入れ込みの片隅へ腰を落ちつけ、先ず、酒を注文した。
今日は、やや暑いので、戸障子二枚が開け放したままになっている。
そこから通りの一部分が、五兵衛の目に入った。
福市の中庭から吹きぬけてくる風が涼しい。
二度三度と、五兵衛が盃(さかずき)を口にふくんだときであった。
通りから入ってきた五十がらみの町人が、まっすぐに、五兵衛の隣りの席へすわり、蕎麦切(きり)を注文した。身なりのよい、裕福そうな町人だ。

この町人が、
「徳山様でございますな?」
いきなり、ささやいてよこしたのには、五兵衛もおどろいた。
「さよう」
「私は、伴格之助殿の手の者にござる」
と、町人は、ほとんど五兵衛の顔を見ぬままにいう。
「すぐに、此処を出て、御成道を南へ……神田の方へ、急ぎおすすみ下され」
「む……」
「早う、出て下され」
正面を向いたままの、町人の両眼が、わずかに切迫の色をただよわせていた。
うなずいて立ちあがった五兵衛へ、
「すぐさま、こなたより、連絡をつけますゆえ……」
と、町人がいった。
五兵衛は勘定をすませ、すぐに福市を出た。
そして、筋違御門の方へ向って急ぎ足に歩みはじめた。
人通りはあるが、前方が見えぬほどではない。
間もなく、向うからやって来た托鉢僧が、
「徳山様。わたくしの前へ出て下され」

と、声をかけてきた。
これも、蜻蛉組の一人なのか……。
托鉢僧は、身を転じた。
つまり、この僧は筋違御門の方からやって来て、五兵衛を見かけるや、これに自分の前を歩ませつつ、自分もまた、やって来た道を引き返すかたちとなったのだ。
「振り向かれますな」
「うむ……」
「前に、小柄な男が、扇子にて日をよけながら歩いております」
「む、たしかに……」
「あの男は、いま、山城屋から出てまいりました」
「何と……」
「私どもでは、かえって、こころもとないところもございます。徳山様が、あの男の行先をお突きとめ下されますよう」
「よし」
「突きとめられましたなら、本所の御屋敷へもどられ、片桐半之介殿へ、おつたえ下されますように」
「心得た」
「では、おたのみを……」

托鉢僧の語尾が、すっと消えた。
五兵衛から身をはなし、ふたたび、山城屋の方へ去って行ったのである。
(どうも、わからぬ……)
前を行く町人の尾行をつづけつつ、徳山五兵衛は笠の内で、くびをひねった。
蜻蛉組の探索の仕方が、よく、わからぬ。
こうした場合、尾行に慣れぬ自分よりも、蜻蛉組の一人がやったほうが、よいのではないか……。
「われらにては、かえって、こころもとない」
とは、いったい、どういうことなのであろう。
そこには、こうした隠密行動の探り合いの中の、いろいろとむずかしい状態があるのだろうと推測はできるが、実感はわいてこない。
後に残した小沼治作のことも気がかりであったが、いまは仕方もなかった。
(いわれるままに、あの男の行先を突きとめねばなるまい)
男は、筋違御門前の広場を右へ折れた。
小柄ではあるが、それだけに足の運びの歯切れがよく、これまでに一度も後を振り返らなかった。
年齢(とし)のころは、後姿から見て四十前後ではあるまいか。

六

徳山五兵衛は、この日の尾行に成功した。
そういってよい。何故なら、件(くだん)の男の行先を突きとめたからである。
途中、男は二度ほど背後に目を配ったが、五兵衛に気づかなかったようだ。
五兵衛は、笠をかぶったままではなく、あるときは大胆に笠をぬぎ、顔をさらしたままで尾行し、しばらくすると、また、笠をかぶったりした。
何となく、自分までも伴格之助に、
(操られているような……)
おもいがして、尾行しながらも五兵衛は不快になってきた。
(どうともなれ)
半ば捨鉢(すてばち)な気分になっていたともいえなくはない。
かえってそれが、尾けられている男から見て、五兵衛の足の運びに不審を抱かせなかったものか……。
それはさておき、男が到着した場所は、芝の神谷町の小間物屋・伊勢屋藤七方だったのである。
(やはり、そうか……)
山城屋と伊勢屋。それに佐和口忠蔵となると、いよいよ、おだやかでない。

神谷町の伊勢屋の店舗は、前の橘町のそれにくらべると、さらに小体な構えであった。

そこへ、男が入って行くのを見届けた五兵衛は、

（いま少し、わしが探ってみようか……）

その誘惑に、おもわず胸がさわいだけれども、

（いや、それはかえってまずい）

みずから、そのおもいを断ち切るようにして、すぐさま身を返した。

本所の屋敷へ帰った五兵衛は、用人・柴田勝四郎をよび、

「小沼は、もどったか？」

「いえ、もどりませぬ」

「そうか……もしやすると、今夜はもどらぬ」

「それは、また……？」

「案ずるな。それよりも、舟溜りの番小屋へ行き、片桐半之介に、これへまいるようにと……」

「はい。坪井久蔵殿は、いかがなされたので？」

「知らぬ。早く、よんでまいれ」

柴田用人は、くわしいことを五兵衛が打ち明けてくれぬので、不満らしい。

すぐに、片桐が奥庭づたいに居間の前へあらわれた。

「片桐。突きとめたぞ」

「まことで……」

と、片桐の両眼が煌りと光った。

すでに、今日の五兵衛の行動について連絡を受けていたのであろう。

「芝の、神谷町に、伊勢屋藤七と申す小間物屋がある」

「伊勢屋、藤七でございますな？」

「うむ。そこへ入った」

見る見る片桐半之介の顔に血がのぼってきた。

蜻蛉組の探索は、まだ伊勢屋におよんでいないことが、片桐の様子でわかる。

そして、橘町のころの伊勢屋についても、

（知らぬらしい……）

と、五兵衛は看て取った。

「かたじけのうござる。伴格之助様も、さぞ、およろこびなされましょう。それがし、ただちに伴様の御耳へ達します」

「うむ……」

「では、ごめん」

片桐が急ぎ去るのを見送り、五兵衛は深いためいきを吐いた。

よくはわからぬが、蜻蛉組にとって、事態はよほどに切迫していたものらしい。

冷え冷えとした夕闇が、奥庭に淡くただよっている。

夏は、過ぎ去った。

日中の強い日ざしも、もはや夏のものではない。

「もし……」

いつの間にか、老女の千（せん）が控えの間へ入って来て、

「お召し替えを……」

「おお。その前に湯を浴びたい」

「すぐにも……」

「よし、まいる」

浪人姿のままというわけにもまいらぬ。

千に手つだわせて、着替えをした。

「ちかごろは、何かと、大変な事でございますな」

「うむ……」

「奥方様も御案じあそばして……」

「さようか。よし、夕餉（ゆうげ）の膳は共にいたそう」

「それは何よりのことにございます」

千の声は、低く、しわがれていた。

髪も白く、顔にも、いつの間にか皺（しわ）がきざまれている。

千は、五十六歳になっていたのだ。

それでいて、着替えの世話をするとき、千の指先が不必要に、五兵衛の胸や腕にさわるのである。

それがどうも、何ともいえぬ気もちにさせられる。

千と自分との秘密……といっても、少年のころのおもい出にすぎぬのだが、それだけに印象が強く、いまだに、若かった千の肌身の量感や熱さが生なましく脳裡（のうり）によみがえってくるのに、五兵衛は閉口するのだ。

着替えをすました五兵衛を見やって、千が、にっと笑いかけた。

五兵衛は、背すじが寒くなり、顔をそむけつつ、

「せがれも、共に……」

と、いった。

この夜。

久しぶりに五兵衛は、妻の勢以（せい）、長男の頼屋（よりや）と共に夕餉の膳についた。

次男の監物（けんもつ）（十歳）は、すでに分家の徳山重之（しげゆき）の養子に入り、屋敷を去っていた。

その監物の事を語り合っていると、いかにも、勢以が自分の妻だというおもいがしてくる。

二人が結婚をしてから、早くも十三年の歳月がすぎていたのだ。

七

翌朝になると、片桐半之介を通じて、伴格之助からの呼び出しがあった。

「伴格之助様は、いたく、およろこびでございました」
片桐の声も、こころなしか弾んでいるようだ。
「昨日のことが、それほどに？」
「はい」
「ふうむ……」
どうもわからぬ。
相手方の隠れ家を一つ、新たに発見したからといって、
（いささか大仰な……）
と、おもった。
ともかくも、徳山五兵衛は江戸城へ向った。
城門の番士たちは、かの〔御意簡牘〕を出して見せる五兵衛の顔を見おぼえたらしく、親しみを見せた一礼を送ってよこす。わるい気もちではない。
伴格之助は、上覧所の番所の前へ立ち、五兵衛を迎えた。
「わざわざのお運び、痛み入り申す」
格之助は、いんぎんに頭を下げる。
「いや、なに……」
「さ、先ず……」
いつもの部屋へ入ると、格之助が軽く両手を突くかたちをして見せ、

「昨日は、御苦労千万……」
「いや、なに……」
「おかげをもって、長年の痼が除れましてござる」
「……？」
痼だなぞといわれても、五兵衛には、さっぱり実感がわいてこなかった。
（蜻蛉組の探索なぞというものは、面倒なものだ……）
後を尾けたり、見張ったり、そのような事を長年にわたって繰り返しているよりも、怪しいとおもうなら、ただちに踏み込んで、一人でも二人でも引っ捕えて来て、拷問にかけても泥を吐かせてしまえばよいようにおもわれる。
（なれど、それも、なるまい）
さすがに五兵衛は、おもい当った。
もしも、曲者どもの背後に、尾張家の存在が浮き出してくるようなことになれば、これは、よほどに神経をくばらねばならぬことだ。
生半可な探索ではなるまい。
一人、二人を捕えたがために、相手方の警戒をよんでは、それこそ、
「元も子もなくなってしまう……」
と、伴格之助は考えているにちがいなかった。
「あれから、そちらの方で、神谷町の伊勢屋へ探りを入れましたか？」

こころみに、五兵衛は尋ねてみた。

すると、

しっかりとうなずき、五兵衛を見返した伴格之助の両眼が、あきらかに昂奮の色を浮かべていて、

「はい」

「曲者どもは、江戸市中に、これまで五ヶ処の隠れ家を設けておりましてな」

「何、五ヶ処も……?」

初耳である。

五兵衛は、おもわず膝を乗り出した。

「それに、伊勢屋藤七方を加え、合せて六ヶ処。これで、すべてが判明いたした」

何故、六ヶ処がすべてなのか、そこが五兵衛にはのみ込めない。

「徳山殿。これにて、後は上様御狩りの日を待つのみでござる」

「はあ……」

「もはや、御成道の山城屋からも、神谷町の伊勢屋からも、お手をお引き下されたい」

「承知いたした」

そうこたえるほかにないではないか。

何か、伴格之助が勝手に自分を操っているようで、またしても五兵衛は不快になってきた。

それを伴格之助は看て取ったらしく、

「これほどの事より、そこもとへおつたえできぬが残念でござるが……おゆるし下され。何事も上様の御指図によることゆえ……」

率直に、いったものである。

将軍・吉宗は、そこまで口をさしはさむのか……。

五兵衛は、目をみはるおもいがした。

「徳山殿。われらの探索には裏の裏がござる。そこのところを、よくよく、おふくみおき願いたい」

「なるほど……」

「そこもとをたのみにおもわぬからではござらぬ。そこもとは徳川譜代の臣でござる」

「さよう」

「なれば、そこもとには、われらの探索の裏の裏まで見せることはならぬとの、御上意でござる。徳川家の旗本は、そこまで汚濁にまみれてはなりませぬ」

「汚濁と申される?」

「いかにも」

うなずいた格之助が、一種、哀しげな微笑を口もとにただよわせて、こういった。

「それはもう、汚なく、醜いものでござる」

格之助の一語一語には、はっきりと誠意が感じられた。

「昨日の事も、そこもとをわずらわさずにいたしたかった……なれど、急場のことゆえ、

こなたの人手も足らず、さりとて他の人をさし向けようにも、それを選ぶ間がござらなんだ」
　そして、このたびの探索は、かの内山弓之助が所属している締戸番(しめどばん)とは、まったく関係がないことだ、といった。
　ここまでいわれては、五兵衛も納得せぬわけにはいかぬ。
「さすがに徳山殿。みごとに、六つ目の隠れ家を突きとめて下された。上様もおよろこびでござる」
　世辞をいっているともおもわれぬ口調なのだ。
「さて、そこで徳山殿！」
「はい？」
「これよりは、たびたび、此処へ御足労願わねばなりますまい」
「心得申した」
「御狩りの当日に、いささかの油断があっても事は成りませぬ」
「なれど、曲者どもは、果してあらわれましょうか？」
「あらわれます」
　きっぱりと、格之助がこたえた。
「上様御身がわりの徳山殿とわれらとの連絡(つなぎ)に、一分の隙もあってはなりませぬ」
　将軍御狩りの事は、

「内々に……」
　とのことであったが、それでも幕臣の間では、うわさがひろまりつつあるようだ。
　昼すぎになって、徳山五兵衛は江戸城を出た。
（そうだ。小沼治作は、今日も山城屋を見張っているにちがいない）
　小沼の事は、伴格之助に告げていない。
　これから御成道へ行こうかと考えたが、今日の伴格之助の言葉を耳にしたからは、それも何やらためらわれる。
（よし。屋敷へもどり、日野屋へ手紙をとどけさせ、日野屋から小沼につたえてもらおう）
　五兵衛は、屋敷へ急ぎ帰った。
　すると、小沼治作が帰邸しているではないか。
「あ……もどっていたのか」
「殿。それが……」
「ともあれ、まいれ」
　居間へ入り、二人きりになってから、
「いかがした？」
「おどろきましてございます」
「何がじゃ？」
　昨日は、あれから五兵衛の姿が見えなくなったので、小沼は一人で、山城屋の周辺をまわ

り歩いた。

　別に心配はしていなかったらしい。

「別れ別れになろうとも、かならず案ずるな」

と、五兵衛に念を入れられていたからだ。

　夜に入ったので、小沼は根岸の寮にもどったが、今朝になると、さすがに五兵衛の身が案じられてきた。

　本所の屋敷へ駈けつけてみようかとおもったが、

（もしやして、殿は山城屋を見張られているのでは……）

　おもい直し、先ず、御成道へ出向いた。昨日と同じ町人姿で笠をかぶった小沼は一刻（二時間）ほども、山城屋のまわりを行ったり来たりしていたが、蕎麦屋の〔福市〕をのぞいて見る気になり、

「中へ、入ろうといたしますと、うしろから肩を叩かれましてございます」

「だれに？」

「片桐半之介殿でございました」

「何と申す……」

　小沼のことまでも、蜻蛉組は知っていたのか……。

　それとも偶然に、片桐が小沼を見かけたものか……。

　片桐半之介は塗笠をあげて、小沼に顔を見せた。きびしい目の色であった。

「あ、片桐……」

「徳山様は、御屋敷へもどられてござる」

「殿が……」

「さよう。二度と、このあたりへ立ちまわってはなりませぬぞ。さ、早く御屋敷へお帰りなされ」

「う……」

　片桐は、すっと身をはなし、人通りの中へ消えてしまったそうな。

　今朝、伴格之助の言葉を五兵衛につたえたのち、片桐は御成道へおもむいたのであろう。

八

　徳川吉宗は、紀州家から入った将軍だけに、その政事の裏面には、

（わしなどには、窺い知れぬ……）

　複雑な事情が、いくらもあるにちがいないと、徳山五兵衛は看て取った。

　将軍直属の隠密である締戸番さえ、今度の探索には使おうとせぬ。

　あくまでも吉宗が紀州から江戸へ移した〔蜻蛉組〕のみで、探索をおこないつつあるらしい。

　そこへ、五兵衛が選ばれ、たった一日ではあるが探索の一端を担ったというのは、将軍・吉宗や伴格之助から、よくよくの信頼を得ていたからだといえなくはない。

「小沼。これまでのことは、すべて忘れてくれ。わしも忘れる」
五兵衛は、小沼治作へ念を入れた。
だが、これより先の、将軍御狩りの前後の事を考えてみても、五兵衛としては、
（どうあっても、小沼だけは、わしの側にいてもらいたい）
切に、そうおもった。
そこで、半月ほど後に、伴格之助と面談した折、
「実は……」
と、小沼のことを切り出してみた。
「もっともでござる」
格之助は即座に、
「小沼がことは、それがしも、片桐半之介より、よう聞きおよび申した」
「では、おゆるし下さるか？」
「かまいませぬ」
このたびの将軍御狩りが、どのような目的を秘めているか、それをも、ごく簡略に小沼の耳へつたえておきたかった五兵衛が、
「いかがでござろう」
伴格之助にはかると、
「そこのところは徳山殿に、おまかせいたしましょう」

と、いってくれた。
将軍・吉宗と伴格之助が、自分へかけている信頼が、このときの格之助の反応によって、五兵衛にはっきりとわかったのである。
そこで帰邸してから、小沼をよびよせ、
「これより申すことは、お前の一命にかえても他へ洩らしてはならぬ。よいか」
「うけたまわりました」
五兵衛は、多くを語ることなく、
「来るべき御狩りに、わしは将軍家の御身がわりをつとめる。もとより死ぬる覚悟だ」
それだけいって、小沼治作を凝視した。
小沼は睨むように五兵衛を見返し、
「うけたまわりました」
これまた、こたえは簡潔をきわめている。
おぼろげながら、これまでの主人の不可解な行動のすべてが、
「理屈ではなく……」
感覚として、腑に落ちたかのようであった。
「私も、死にまする」
「たのむ」
伴格之助は、徳山五兵衛に吉宗の身がわりをつとめさせはしても、

「かならず、無事に……」
自信をもって受け合ってくれているが、実際には、事がどのように展開するか、五兵衛には見当もつかぬ。
遠くから鉄砲を撃ちかけられでもしたら、いかな五兵衛でも安全というわけにはまいるまい。
だからといって、曲者どもが行列へ接近できぬほどに警戒をきびしくしては、計画も水の泡となってしまう。
そこが、むずかしい。
また、いま一つには……。
今度の身がわりは、将軍家のかわりに五兵衛が暗殺されるだけですむわけのものではない。
何としても、曲者どもを捕えねばならぬ。
彼らが、どれほどの人数をもって、おびき出されるか、それはわからぬ。
おそらく、多人数ではあるまい。
多人数では目立つし、逃走の折に不便である。
ゆえに、その場で捕えることができたとしても、五人以上ということは先ずあるまい。
しかし同時に、伴格之助は、これまでに突きとめておいた彼らの隠れ家を一網打尽にするつもりらしい。
「なれど、曲者どもが、果してあらわれましょうか？」

「かならず、あらわれるそうな。伴格之助殿は、そのようにいっておられる」
身がわりのことは、当日になってから、将軍の馬側に従う者たちへのみ打ち明けられる。
その中へ、五兵衛は身がわりとして、単身参加する。
心細いことは少しもないのだが、何かの場合、側に小沼がいるのといないのとでは、五兵衛にとって、大分にちがう。
小沼ならば、口に出さずとも五兵衛の心がわかってくれる。
「小沼。明日よりは、また、稽古に励もうではないか」
「はい」
「お前は、馬が不得手であったな」
「御案じなされますな。馬よりも速く走れまする」
「む、そうであった」
主従は、目と目を見合せ、微笑をかわした。
日いちにちと、朝夕の冷気が加わってくる。
伴格之助の呼び出しがあるたびに、五兵衛は江戸城へおもむいた。
何度も何度も、御狩りの日の道すじが、二人の間で検討された。
なるほど、格之助の計画は綿密をきわめている。
ときには、格之助と共に、上覧所前の馬場へ出て、騎射をおこなうこともあった。
弓も馬術も、一通りは体得している徳山五兵衛であったが、伴格之助の手練の冴えには瞠

目せざるを得なかった。

九

徳山五兵衛にとっては、それこそ、
「あっ……」
という間に、将軍御狩りの当日がせまってきた。
もはや、五兵衛は脇目もふらなかった。
御成道の旅宿・山城屋や、芝・神谷町の伊勢屋藤七方が、その後、どうなったかも知らぬ。
知ろうともおもわなかった。
御狩りの日が近づくにつれ、五兵衛は、ほとんど一日置きに、江戸城内へ伴格之助を訪ねた。
格之助の計画は、当初のころにくらべると、大分に変ってきている。
つぎつぎに、いろいろな情報が格之助の耳へ入ってくるにつれて、御狩りの日の道筋も、
「変らざるを得ぬ……」
ということらしい。
そのたびに、五兵衛がよばれた。
五兵衛は、本所一帯の地形に通じているし、その日の〔立役者〕なのである。

格之助のいうことを聞いていると、
（なるほど……）
いちいち、納得ができた。
将軍・吉宗が、久方ぶりに、形式にとらわれぬ自由な狩りをするというわけだが、吉宗が通る道筋や、その道筋の要所要所を通過する時刻に、
「一分の狂いがあってはなり申さぬ」
伴格之助は、ちからをこめていった。
これは曲者どもを捕えるためでもあるが、一つには、将軍の身がわりをつとめる徳山五兵衛を、
（むざむざと死なすまい……）
ためでもあった。
その伴格之助の配慮が、五兵衛にはよくわかった。ありがたい事とおもった。
だが、五兵衛としては、
（生きて帰るつもりはない……）
のである。
（そうだ。うっかりとしていた……）
御狩りの日が十日後にせまったとき、五兵衛は愕然となった。
そして、

(ようも、おもい出せた。これにて恥をかかずにすむ)

と、おもった。

ほかでもない。

建て増した離れ屋ふうの〔書見の間〕に隠してある、あの秘図のことだ。

〔東林〕のお梶がくれた住吉慶恩描くところの絵巻物と、それの模写。さらには五兵衛の創作といってもよい秘図を合せると、それは相当の量になっているはずだ。

自分が死んでしまえば、妻や倅たち、それに用人の柴田勝四郎が、書見の間の隅々まで整理をおこなうにちがいなかった。

書見の間に造りつけた二坪の板敷きの書庫の地袋の中や、手文庫の奥深く秘め隠されている何十枚もの秘図や絵巻を、

(勢以や倅どもが見つけ出したなら、何とおもうであろう)

二千何百石の旗本でありながら、このようなまねを夜な夜な行なっていたことがわかれば、殿さまも父上もない。

「何という汚わしきことを……」

と、勢以は呆れ果て、亡夫を軽蔑し、取り返しのつかぬ絶望に身をさいなまれるであろう。

(倅どもに対しても、父親としての体面が、まるつぶれとなる)

さらに柴田用人や家来たちに、五兵衛生前の秘密が知れたなら、

(いよいよもって、赤恥をさらすばかりではないか)

このことであった。

「死んだ後のことなど、だれが何とおもおうと知ったことではない」

というのは後世の男の考え方であって、五兵衛の生きていた時代の男は、武士・町人・百姓の区別なしに、体面を重んじたのである。

「体面や見栄など、下らぬことだ」

というなら、その体面や見栄に関わることのない時代がやってきても、人間は、あまり上等にもならぬし、進歩もせぬ動物なのだ。

秘し、隠すことが不道徳であるという時代。

秘密の重味を軽んずる時代というものは、

「あまり、おもしろくない世の中……」

なのである。

それが善か悪かということは、また別のことなのだ。

さて……。

徳山五兵衛は、その夜から、久しぶりに書見の間へ引きこもった。

一枚一枚と、あれほどに熱中して絵筆を把った秘図を丹念に見はじめると、整理どころか、時がたつのを忘れてしまうほどであった。

一枚を見ては、お梶の面影を偲び、つぎの一枚をながめては、京都での若き日を想起する。

(そうじゃ。お百合を描いておきたかった……)

あの、熟れざかりの果実のような肢体の隅ずみまでが、五兵衛の脳裡に浮かんできて、

（これより、描いてみようか……）

とも考えたが、辛うじて踏みとどまった。

絵筆を把ったが最後、ふたたび我を忘れてしまうことを、五兵衛はよくわきまえている。

おそらく、御狩りの日の前夜まで、目を血走らせ、熱中することになってしまうであろう。

三日後になって……。

五兵衛は、ようやく、秘図の一つ一つに別れを告げることができた。

かつて、描きたまった多量の下絵の始末に困り、五兵衛は裏庭の一隅へ石組の〔焼却炉〕のようなものを造らせておいた。

そのときは、秘図を描くための偽装として、わざわざ絵師・村松桂春（けいしゅん）を招き、絵を習ったものである。

桂春の指導によって得た技法や絵具のあつかい方などによって、さらに五兵衛の秘図制作欲を掻（か）き立てたものであった。

五兵衛は、家来や侍女たちを遠去（とおざ）け、ひとりきりで焼却炉へ、すべてを投げ込み、焼き捨てた。

（これだけは……）

もったいないとおもったが、慶恩作の絵巻物も、おもいきって灰にしてしまった。

小沼治作は、五兵衛が御狩りの日にそなえ、身辺の整理をしているとおもい込んでいる。

そこで五兵衛は、小沼に張り番をさせておいた。

小沼もまた、

（殿様と共に……）

死ぬる覚悟である。

小沼は、将軍になりすました五兵衛の馬側に、ぴたりとつきそうことになっている。

曲者どもが、どのような方法で襲いかかるか、それは知らぬ。

しかし、先ず、鉄砲で狙撃（そげき）されることを考えておかねばなるまい。

伴格之助も、これにそなえて、何やら考えているらしい。

五兵衛は、むろん、弾丸を我身に受けるつもりだ。

それでなくては、曲者の所在がわからず、これを捕えることができぬ。

そのとき、

「わしにかまわず、まっしぐらに、曲者どもを捕えよ」

五兵衛は、小沼にきびしくいいふくめておいた。

小沼も、決死の覚悟で、曲者へ躍りかかるつもりでいる。

十

将軍御狩りの当日が、四日後にせまった。

その朝。

徳山五兵衛は、用人・柴田勝四郎をよんで、
「今日は、わしの供をいたせ」
「は……そりゃ、まことで？」
「いやか？」
「いつ、いやと申しましたか」
このところ、五兵衛が小沼のみを相手に、何やら忙しげにしているので、柴田用人は、いささか、さびしかったらしい。
「用人たる私に隠し事をあそばすとは、はなはだ、おもしろくない」
勝四郎は、妻に当り散らしていたようだ。
「いずこへ、まいられます？」
「駿河屋へまいる。このところ、久しく無沙汰をいたしたゆえ」
日本橋本石町の扇問屋・駿河屋又兵衛方は、五兵衛の生母・お静の実家である。
お静の父で、五兵衛には祖父にあたる先代の駿河屋又兵衛は、十八歳の五兵衛が江戸を出奔したのちに、八十一歳で病歿した。
あれから、もう約二十年の歳月がすぎてしまった。
いまは、養子の又太郎が当主となり、駿河屋又兵衛を名乗ってい、年に何度かは徳山屋敷へ挨拶にあらわれ、交誼は絶えていない。
五兵衛にしてみれば、実父の徳山重俊よりも、祖父の先代又兵衛と、柴田勝四郎の養父で、

先代の徳山家の用人をつとめていた柴田宗兵衛の二人が、
「まことの父……」
のように想われてならぬ。
この二人の、五兵衛への愛がなかったら、
（今日の、わしもなかった……）
ことになる。
そのように、五兵衛はおもいきわめている。
「駿河屋へまいって、それから神尾家へ立ち寄るつもりじゃ」
と、五兵衛が勝四郎にいった。
徳山家の親類にあたる旗本・神尾五郎左衛門守親もまた、奔放だった若き日の五兵衛の、よき理解者であり、妾腹の五兵衛が徳山の家督を継ぐことを得たのは、ひとえに神尾守親の尽力があったからといってよい。
これまた、五兵衛にとっては大恩人といわねばなるまい。
「かしこまりました」
柴田勝四郎は、緊張していた。
駿河屋と神尾の両家を、突然、おもいたったように五兵衛が訪問することに、
（これは徒事ではない）
柴田用人は、ちかごろの主人の挙動とおもい合せてみて、強い不安をおぼえた。

神尾守親は、このところ健康を害しているそうな。
「勝四郎。明日は、藤枝家へまいるが、このときも、供をいたせ」
「は……」
いよいよもって、不安である。
この日。
徳山五兵衛は紋服に威儀を正して馬に乗り、用人の柴田勝四郎に小沼治作。それに若党二名、中間三名を従え、屋敷を出た。
簡略にではあるが、一応、二千石の旗本の外出の供揃えをととのえたことになる。
これまた、五兵衛にしては滅多にないことであった。
「これ、小沼。ちかごろ、殿様御身に、何ぞ変ったことでもあったのか?」
主人の馬の背後につきそいつつ、小沼治作へ低声に問うた。
「さて、存じませぬが……」
「嘘を申せ。お前が知らぬはずはないではないか」
「公方様御狩りの御供をおおせつけられましたことは……」
「それは存じておる。本所見廻り方をおつとめなさる上からは、当然のことじゃ」
「はい。そのほかのことは、私も存じませぬ」
柴田用人は、いまいましげに小沼を見やったが、そのとき、馬上の五兵衛が振り向いて、
「勝四郎」

「は……」
「これへ」
馬側へ走り寄った用人へ、
「小沼を、いじめるな」
五兵衛が笑いかけた。
二人の声が、耳へとどいたらしい。
「いえ、何をもって、そのような……」
「小沼とて、何も知ってはおらぬのじゃ」
「では、やはり何事か、お隠しあそばす事があるのでございますな?」
「お前には、かならず打ち明けよう。いま、しばらく待て」
「は……」
この五兵衛の言葉によって柴田勝四郎の不満が消えた。
だが、不満は消えても、不安は消えなかった。
本石町の駿河屋へ到着すると、
「これは、まあ……」
当代の駿河屋又兵衛が、あらたまった徳山五兵衛の来訪にびっくりしたようで、店の奉公人たちも目をみはっている。
店の横手の通路から、五兵衛一行は奥へ通った。

五兵衛は、柴田勝四郎のみを従え、奥の仏間へ入った。
当代の又兵衛は、五兵衛の生母の姉・お文を妻にしている養子であるが、すでに六十をこえている。
この夫婦の長男・宗次郎も、四十に近く、妻との間に二男一女をもうけているし、
（駿河屋の行末は、いささかも心配なし）
と、五兵衛はよろこんでいた。
徳山重俊は、五兵衛の生母を、徳山家の墓地へ葬ることをゆるさなかったが、五兵衛は家督するや、すぐに生母の墓を菩提所に移した。
しかし、駿河屋の菩提所にも、分骨のかたちで、お静は葬られているし、仏壇には位牌もある。
祖父と生母との位牌の前に、徳山五兵衛は長い祈りをささげた。
次の間で、駿河屋又兵衛夫婦が柴田勝四郎を見て、不審そうな面もちであった。
柴田用人の不安も、いよいよ強まってくる。
「何ぞ、あったのでございましょうか？」
たまりかねたように、又兵衛が、勝四郎へささやいた。
「さ、それが……」
いいさして、勝四郎は頸を振った。
又兵衛の妻・お文は、五兵衛にとって、血を分けた伯母にあたるわけだが、これも気づか

わしげに、夫と柴田用人の顔を交互にぬすみ見ている。
仏間から出た五兵衛は、勝四郎と共に奥の一間へ案内をされた。
この一間で、五兵衛は、祖父の又兵衛に「刀がほしいので……」と、金五十両を出してもらい、江戸を出奔したのであった。
茶菓のもてなしを受けながらも、徳山五兵衛は、にこやかに又兵衛夫婦へ語りかけ、別に変った様子もない。
ただ、そこへ挨拶にあらわれた宗次郎夫婦に、
「駿河屋の行末は大磐石。亡き祖父どのも、母上も、さぞかし、よろこんでおられよう」
しんみりといったのが、柴田勝四郎は気にかかってならぬ。
ややあって……。
五兵衛は上機嫌で、駿河屋を辞した。
これを、又兵衛・宗次郎夫婦が見送ったが、五兵衛は、馬上から振り返って、軽く頭を下げ、手をあげて見せた。

十一

その日の午後。
徳山五兵衛は、番町の神尾五郎左衛門守親の屋敷へおもむいた。
神尾家は、故徳山重俊の亡妻・滝子の実家であり、当主の五郎左衛門守親は滝子の甥にあ

たる。
神尾守親は、どうしたわけか、五兵衛が少年のころより目をかけてくれた。
父の重俊は、血を分けた我子の五兵衛に徳山家をゆずりわたすのが、
「嫌で嫌でたまらぬ……」
とあって、一時は親類の男子を養子にもらい受けようと画策したりしたものである。
それを、神尾守親が最後に説得し、五兵衛の家督を、徳山重俊に承知させた。
用人の柴田宗兵衛にとって、神尾守親の助力は、
「たとえようもなく、心強かった……」
そうな。
そのころ、宗兵衛と共に、五兵衛の身を案じてくれた神尾家の用人・福田平太夫(へいだゆう)は五年前に病歿し、いまは長男の高之助が父の跡をつぎ、神尾家の用人となっている。
そして、徳山家の用人・柴田勝四郎とは親交が深い。
これは、両家の先代の用人と同様であった。
福田平太夫が亡くなったとき、徳山五兵衛は、
「平太夫は、わしの恩人の一人である」
こういって、通夜にも葬儀にも詰めきっていたものだ。
二千何百石の大身(たいしん)旗本が、親類の家の用人に対し、これだけのことをするのは異例である。
それだけに、福田高之助は非常に感動したらしい。

五兵衛は亡き柴田宗兵衛から、福田平太夫の助力をくわしく聞かされていた。それを忘れなかったのだ。
こうなると福田高之助も、
「柴田宗兵衛殿は、さほどまで、亡き父をたのみにおもうていてくれたのか……」
ひいては、宗兵衛の養子の柴田勝四郎にまで、好意を抱くという結果になる。主人の神尾守親にしても、むろん、悪い気もちはせぬ。
武家の親類筋の交誼というものは、およそ、このようにして深まるものなのであって、主人たちだけでは、どうにもなるものではない。
「おお……よう、まいられた」
神尾守親は、よろこんで五兵衛を迎えた。
健康を害しているというが、いつも病間に臥(ふ)せっているわけではないらしい。
五郎左衛門守親も六十に近い年齢となった。
五兵衛にとっては、この年の新年以来の対面であった。
以前は元気がよく、体格も大きかった神尾守親の躰(からだ)が、しばらく見ぬうち、大仰にいうなら、
「半分ほどに、萎(しぼ)んでしまった……」
ようにおもえた。
やはり、健康を害しているのだ。

新年の挨拶におもむいたときの守親は、顔色こそすぐれなかったけれども、
（かほどに、お窶れではなかった……）
のである。
しかし、今日の神尾守親の血色はすぐれている。
守親の病患は、心ノ臓にある。
まさに難病であった。
これは後になってわかったことだが、この夏、神尾守親は何度目かの発作を起し、
「一時は危うかった……」
と、福田用人が柴田用人に、そっと洩らした。
「いえそれは……」
「さて、今日は何としても、夕餉の膳を共にいたそう」
「帰しませぬぞ」
神尾守親は、たのしげにいう。
話題は、四日後の将軍御狩りのことに移って、
「諸事、御簡略にあそばすと洩れ聞いたが、いかがなものであろう?」
「と、申されますのは?」
「いや……何ぞ、物騒な事でも起らねばよいがとおもうているのだが……」
「はあ……」

いまの五兵衛には、こたえようもない。
神尾守親は、かつての将軍暗殺未遂事件を、耳にしていたのであろう。
「当日は、五兵衛殿も骨折りであろう」
と、守親がいったのは、五兵衛が本所見廻り方として出動するであろうとおもったからだ。
「ともあれ、一所懸命に相つとめるつもりにて……」
「うむ、うむ。五兵衛殿なれば、ぬかりはあるまいが……」
「何分、上様の御側に従うわけでもありませぬゆえ」
「いかにも……」
五郎左衛門守親は、しきりに引きとめたが、五兵衛は、やんわりと辞退し、
「年の内に、いま一度、お訪ねいたします」
「すりゃ、まことか?」
「そのときは、ゆるりと御馳走になりまする」
「さようか。たのしみにして、待っておりますぞ」
「はい」
「何としても……」
と、神尾守親が何ともいえぬ優しげな微笑を浮かべ、
「これにて、張り合いができ申したわ」
「張り合い……?」

「うむ。年の内に、五兵衛殿がまいられるまで、何としても生きていたくなった。このことじゃ」

「何を申されますことか……」

五郎左衛門守親よりも、一足先に、五兵衛はあの世へ行く覚悟をしている。

「三途の川の渡し場にて、お待ちしております」

などと、いいたいところなのだが、まさかにいえたものではない。

いかにも名残り惜しげな神尾守親に別れを告げ、五兵衛は日暮れ前に本所の屋敷へもどった。

そしてこの夜。書見の間にこもった五兵衛は、何通かの遺書をしたため、手文庫の奥へおさめたのである。

そのとき、こうおもった。

（ああ……お梶どのがくれた慶恩作の絵巻のみは、まだ残して置くのだった。焼き捨てるのは御狩りの前日でもよかったのに……）

十二

翌日。

徳山五兵衛は、妻・勢以の実家である藤枝若狭守邸へおもむいた。

供揃えは、前日と同様であった。

若狭守方教は、この年、病患が重って、一時は危ないとおもわれたほどだが、何とか酷暑の夏を乗り切った。

依然として、病間をはなれることはできぬが、

「おお……よう、まいられた」

身仕まいをととのえ、臥床の上へ起き直った顔色が意外に冴えている。

こころなしか、病み疲れていた痩身にもちからが加わったかのようにおもわれ、五兵衛は心強かった。

自分が亡き後は、長男の頼屋が跡をつぐことになる。

いうまでもなく五兵衛は、将軍家の身がわりとして死ぬわけだから、のちのちのことは心配もあるまい。

だが、何といっても頼屋は十二歳の少年にすぎぬ。

自分が、徳山家の当主となり、藤枝家から勢以を妻に迎えて以来、岳父・若狭守方教のあたたかい庇護あってこそ、無難にすごすこともできた。

御役目に就くことを得たのも、幕閣内に隠れた勢力をもつ岳父の取りなしがあったればこそである。

それをおもえば、

（頼屋が成長するまで、何としても若狭守様に生きていていただきたい）

五兵衛は切実に、そう考えていた。

しかし、将軍の身がわりになることや、伴格之助との関係など、五兵衛は岳父に一言も洩らしてはいない。

ゆえに、わが言動をもって、頼屋の行末をたのむわけにもまいらぬ。

「御回復、まことにもって祝着に存じまする」

平凡なよろこびの言葉の中に、痛切な願いと祈りをこめていうや、五兵衛は頭を下げた。

「かたじけない」

若狭守も礼を返し、手を振って侍臣を遠去け、五兵衛と二人きりになった。

夏の盛りに、小沼治作を従え、変装をして御成道の山城屋を見張ったりしたことが、つい昨日のようにおもわれるが、すでに秋は探い。

小春日和の奥庭の何処かで、しきりに鶸が鳴いている。

雀よりも小さなこの鳥が、昨日の昼ごろに、開けておいた障子の向うから病間へ入って来て、若狭守がいるのも気にかけず、しきりに鳴いていたそうな。

「人なつかしげな小鳥じゃ」

若狭守が、目を細めていい、

「いよいよ、上様御狩りの日が近づいて、五兵衛殿も何かと忙しいことであろう」

「はい」

すると若狭守が、

「上様の御供をなさるそうじゃな」

と、いった。

「…………？」

見廻り方として、本所一帯の警戒にあたるのが五兵衛の役目で、それ以外のことは秘密になっているはずだ。

御供というなら、将軍の狩りの列に加わることを意味する。

実際は加わるどころでなく、将軍になりすまして、狩りをおこなわねばならぬのだが、それにしても藤枝若狭守から、この言葉が出たのは意外であった。

「いえ、私は……」

いいさした五兵衛を、若狭守は軽く手をあげて制した。

そして二度三度と、うなずいて見せた。

「よい、よい。何も申されるな。何も彼も存じておる」

若狭守の眼は、そのように五兵衛へ語りかけているようだ。

岳父は、どこまで事実を知っているのであろうか……。

数多い幕臣の中でも、藤枝若狭守は将軍・吉宗から特別に目をかけられているという噂は、五兵衛も耳にしていた。

これまでにも何度か、

(岳父上は、ようも、このようなことまで御存知じゃ)

五兵衛は、若狭守が幕府の内情に通じていることを知らされ、目をみはったことがあった。

「五兵衛殿」
「はい」
「のちのちのこと、いささかも案じられるな」
この言葉にも、五兵衛は衝撃を受けた。
こちらの眼を凝と見つめて、藤枝若狭守が、
「頼屋殿は、わしの可愛ゆい孫でござる」
と、いった。
(岳父上は、やはり、何も彼も御存知なのだ)
あきらかに、五兵衛の顔色は変っていたにちがいない。
何かいいかけようとする五兵衛を、若狭守が、またも手をあげて制した。
「身どもも、まだ死なぬ。いや、死なれぬ」
「かたじけなく……」
辛うじていいさしたのが精一杯であった。
「何の……」
と、たのもしく若狭守が、
「これしきのこと……」
いいはなったものである。
そして、急に、きびしい顔の色になって、

「さ、もはや帰らるるがよい」
「は……」
「これにて相すみ申した。こころおきなく御役目をつとめられよ」
と、若狭守が、すでに用意をしてあったと見え、枕元に置いてあった一振の大刀を取って、
「来国光でござる。御狩りの当日の差料になされ」
凛然たる声音であった。
「はっ」
五兵衛は国光の一刀を岳父から受け、押しいただいた。
全身が緊張に引きしまり、五兵衛の満面は紅潮した。
近年は頓に官僚化してきた武家の中にあって、岳父が、このような武士であったことを五兵衛は初めて知った。
五兵衛の生涯において、古来からの武士であるとの印象を受けたのは、このときの岳父・藤枝若狭守のほかには、恩師・堀内源左衛門と堀部安兵衛の、
「二人のみ……」
と、いってよい。
目礼をかわし、若狭守と五兵衛は別れを告げた。
このとき、かねてからの、
(このようにして、果して曲者どもが罠にかかるものなのであろうか……?)

その懸念が、五兵衛の脳裡から消え去ったといってよい。
将軍・吉宗と、伴格之助がひきいる蜻蛉組は、よほど巧妙に手をまわしてあるに相違ない。
もしやすると、蜻蛉組の息がかかった者が、曲者どもの組織の中に入り込んでいるのやも知れぬ。
または、将軍自身の手によって、何らかの高等手段がめぐらされているのやも知れぬ。
そして、かならず曲者どもをおびき寄せるつもりなのであろう。
帰邸した五兵衛は、すぐさま居間へ勢以と頼屋をよび、
「岳父上より、来国光の一刀をいただいた」
と、告げた。
「ま、それは何よりのことでございました」
勢以も、よろこばしげに、
「その国光は藤枝家伝来のものと聞きおよんでおりまする」
「さようか。いかにも、な……」
「はい」
「岳父上には、まことに血色もすぐれ、御回復の様子であった」
「まことでございますか？」
「まことじゃ。近いうちに……いや、明日にも頼屋をともない、御見舞いにまいるがよい。そうじゃ。そういたせ」

「では、おゆるしを……」
「おお、まいるがよい。わしがはかろうてつかわそう」
「かたじけのう存じまする」
勢以は何年にも実父の若狭守に会っていない。
この夏、病状が悪化した折に、五兵衛のすすめによって実家へおもむこうとしたら、
「これしきのことに、いちいち顔を見せるにはおよばぬ」
藤枝若狭守が、きびしく拒否をした。
こうした、むかしの武家の親子の関係というものは、到底、現代人のおもいおよばぬところであろう。

十三

将軍御狩りの当日が、いよいよ、明日にせまった。
この日。
徳山五兵衛は、朝から離れ屋の〔書見の間〕に引きこもっていたが、夕餉をすませたのち、
「勝四郎を、書見の間へ……」
老女の千にいいつけ、一足先に離れ屋へ向った。
用人の柴田勝四郎が、書見の間へあらわれたとき、五兵衛は、岳父・藤枝若狭守から贈られた来国光二尺二寸六分の一刀を抜きはらい、刀身をあらためていた。

「殿。それは、藤枝様からの?」
「うむ。この小杢目のみごとさはどうじゃ。反りぐあいも、わしにはちょうどよい。まさに逸品」
「ははあ……」
いまは亡き養父の柴田宗兵衛とちがって、勝四郎は剣術にも刀剣にも、
「まったく、関わり合いのない……」
ような顔つきをしている。
「殿。何ぞ……?」
「明日は、上様御狩りの日じゃ」
「はい」
主人の五兵衛が、本所見廻り方として出動することは、柴田勝四郎も心得ている。
「それで、な……」
いいさした五兵衛が、国光の銘刀を鞘へおさめ、
「わしは、今夜……夜ふけに屋敷を出ねばならぬ」
「今夜に……」
「さよう」
勝四郎の顔が曇った。
(またしても、何やら不審の事が……)

と、おもったのであろう。
「このことは、かまえて余人に洩らすな。よいか。わしは裏門から出る。供は小沼治作一人でよい」
またしても、小沼だ。
勝四郎は不満であった。
「ま、もっと近くへ寄れ」
「は……」
「もっと……これ、もっと近くへと申している」
「はい」
「勝四郎。用人たるそのほうへ、これまで何事も相談をせず、小沼のみを引きつれて、わしがうごきまわっていたについては、さぞ、不快であったろう」
こういわれると勝四郎、返す言葉も出ない。
「ゆるせ」
かたちをあらためた五兵衛が、両手を膝の上へ置き、軽く頭を下げ、
「相すまぬとおもうていた」
「と、殿……」
勝四郎は、あわてて、
「そのような……私めは、別に、その……」

「いや、そうでない。勝四郎の不念(むねん)は、よくわかっていた。いたなれど、このようにせねばならなかった。そのほうが用人の重い役目を背負うているのでなければ、何も彼も打ち明けていたであろう」

「…………？」

「なれど用人は、わが家宰である。打ち明けたところで、そのほうが、あわてふためこうとはおもわぬが……用人なればこそその心痛が必ず起る。その心痛が、そのほうの気振(けぶ)りにあらわれてはならぬと考えた。それゆえ今日まで、打ち明けなかったのじゃ」

「殿……」

と、柴田勝四郎が昂奮(こうふん)し、

「それは、いったい、何事なのでございます？」

「わしはな、勝四郎。今夜、この屋敷を出たならば、二度と、もどれぬやも知れぬ」

「ええっ……」

「声が高い」

「はっ……」

「そのように、そのほうは、すぐ顔の色に出る。なれば打ち明けかねたのじゃ」

「お、おそれ入ります」

そういう声も震えはじめてきて、

「また、いずれかへ出奔あそばされまするか？」

「いいや……」

「では、何故？」

「死ぬるのじゃ」

「何と、おおせられます」

「徒(いたずら)に死ぬるのではない」

「と、殿……」

「将軍家の御身がわりになるのじゃ」

「う……」

わずかに口を開けたまま、柴田勝四郎の驚愕(きょうがく)の表情が、空間に凍りついたようになった。

「勝四郎……これ、勝四郎。いかがしたぞ」

「…………」

五兵衛の眼が光って、

「これしきのことに、おどろいてどうするのじゃ」

「は……」

「かように申せば、これまでのことが、おおよそ、そのほうにも納得が行ったであろう。どうじゃ」

「どうじゃ？」

こたえぬ勝四郎の両眼が泪(なみだ)に濡れてきはじめた。

「う、迂闊でございました」
「くわしいことをはなしても同じことゆえ、くだくだと、いまさらに語るまい」
「では、あの……明日の御狩りに、曲者どもが……?」
「うむ」
「そ、それは、たしかなことなので……?」
「先ず、たしかじゃ」
「はあ……」
と、息を引いた勝四郎の肩が、がっくりと落ちた。
白いものがまじった髪が、わなわなと震えている。
「勝四郎。この徳山の家の行末については、いささかも案ずることはない。ないが、これより先、わしがだれよりもたのむのは、そのほうじゃ。わし亡き後の家をつぐ倅も、まだ年少ゆえ、そのほうの助けなくしては、到底、一人前の武士にはなれぬ。むかしのわしが、そのほうの養父によって今日あるのと同じことじゃ」
両手をつき、頭をたれた柴田勝四郎が男泣きに泣きはじめた。
勝四郎は、ちょうど五十歳になっている。
若いころの彼は、どちらかというと楽天家であって、めったなことにもおどろかなかったし、ふっくりとした顔には微笑が絶えなかった。
そのころは、まだ柴田宗兵衛が用人であり、先代の徳山重俊の死についで、五兵衛が家督をするという、徳山家の歴史の中でも、もっとも波瀾が多い時期の、重い責任を宗兵衛は背負っていたのだ。

そのころの柴田宗兵衛の苦悩については、すでにくわしく書きのべてきたわけだが、宗兵衛は、どちらかというと感情の押えがきかぬほうで、主人の徳山重俊へも、面を犯して諫言を投げつけたりしたものである。
その先代の養父に似てきたというのではないが、近年の柴田勝四郎は、用人の重責に神経を張りつめている所為か、いざとなると感情の激発に堪え切れなくなるようであった。
「立派な用人……」
申すまでもなく、勝四郎は、
である。
いまどきの旗本の家に、
「これほどの用人は、多くあるまい」
と、藤枝若狭守なども、勝四郎をほめているそうな。
養父の苦心を、若きころの勝四郎は目にも見、耳にも聞いている。
その養父の教えを、ことごとく我物にして今日にいたった。
だが、何といっても宗兵衛と勝四郎とではちがう。
どちらがよい、どちらが劣るというのではない。
ただ、人物がちがう。

柴田宗兵衛は剣術によって心身を鍛えもし、わが一命をかけて事にあたった。戦国のころの武士の心をもって、泰平の世に生きた。堀内源左衛門といい、堀部安兵衛といい、いずれも、戦国の名残りを身に体していた。

この人びとは、

（いつも、死ぬる日のことをおもうていた……）

徳山五兵衛は、いまにして、そのことをおもう。

それがよいというのではない。

ただ、時代が移り変ったのである。

十四

五兵衛が今日まで、明日の大事を柴田勝四郎に打ち明けなかった理由も、そこにあった。

もしも、用人が柴田宗兵衛であったなら、真先に打ち明けていたろう。

たとえ、伴格之助のゆるしを得なくともだ。

だからといって、柴田勝四郎を信頼していないわけではない。

だが、いまここに、主人から大事を打ち明けられた勝四郎の驚愕と悲嘆の態（さま）はどうだ。

ずっと前に、このことを打ち明けていたなら、今日にいたるまでの勝四郎を見て、勢以も頼屋も、千も侍女も、家来・奉公人たちも、これを怪しまぬわけにはゆくまい。

本来ならば、柴田勝四郎へあてた遺書のみでもよかったのだ。

五兵衛は、よほど、そうしようかとおもったのだが、今夜、禁を破って打ち明けたのは、用人の勝四郎へ対する礼儀だと考えたからである。

今後の勝四郎に対しては、

（いささかも、案ずることはない……）

のであって、天下泰平が打ちつづく世に、我子の頼屋を補佐するのに、柴田勝四郎ならば、

（すこしも危ないことはない……）

このことであった。

「よし、よし」

やさしく声をかけて、徳山五兵衛が、

「そのほうが、今日までのはたらき、あらためて礼を申す」

「な、何を、おおせられますことやら……」

「頼屋がことを、くれぐれもたのむぞ」

「は、はい」

「藤枝若狭守様が、万々、御承知じゃ。何事にも、御指図を仰げ。よいな」

「は……」

「この手文庫の奥に、それぞれに当てた遺書が入っている。心得ておくがよい」

「と、殿……」

「また、泣くのか。よいかげんにせよ」

「な、なれど……このようなことが、この泰平の世に起ってよいのでございましょうか？」

まさに、この言葉こそ、柴田勝四郎のモラルなのだ。

「なればこそ……」

と、五兵衛は、ちからをこめていった。

「なればこそ、わしは、よろこんで上様の御身がわりをつとめるのじゃ。起ってよいものではないゆえ、これよりは起らぬようにせねばならぬ。いまの将軍家が、わしが子供のころのような将軍家であったなら、御身がわりもつとめかねたであろう。それよりは、いさぎよく腹を掻っ切ってしまっていたろうが……いまの上様はそうでない。いまの上様に、いまこのとき万一のことがあっては天下のためにならぬ、どうじゃ、さようにおもわぬか？」

「は……」

「よし。これで、よし」

「あの、小沼一人のみにて……」

「そのように、決められておるのじゃ。間もなく、小沼が此処へまいる。そして屋敷を出るが……そのほうに見送ってもらおう」

「はい」

「裏門の門番のみに気をつけるがよい」

「こ、心得ましてございます」

裏門の門番たちは、これまでの主人の、こうした突飛な行動に慣れている。

さして、案ずることもあるまい。

やがて……。

小沼治作の声が、戸の外から聞こえた。

「殿。御仕度がととのいましてございます」

「わかった」

すでに五兵衛は、羽織・袴をつけていた。

立ちあがって、堀部安兵衛から形見に贈られた美濃の名工・蜂屋兼貞が鍛えた七寸四分の無反の短刀をたばさみ、岳父より贈られた来国光の銘刀をひっさげた徳山五兵衛が、

「勝四郎」

「は……？」

「そこの包みを開けて見よ」

「これでございますか？」

「うむ」

五兵衛が坐っていた傍らに鬱金色の布に包まれた品が置いてある。

勝四郎が開いて見ると、中に紋服と袴がおさめられ、仕つけの糸がかかったままであった。

「その紋服は、わしが着たものを縫い直させたのじゃ。そのほうの躰に合せてある。形見にとらす。受けてくれい」

まさに、柴田家の家紋の三つ巴がついているではないか。

だれにもさとられず、五兵衛は、このようなことを、いつ、どのようにしておこなったのであろうか。

柴田勝四郎は、ひれ伏し、またしても泣いた。

「勝四郎。まいるぞ」

「は、はい」

仕方もなく、よろよろと身を起した勝四郎が、奥庭に面した戸を開けた。

そこに、小沼治作がひかえている。

「御用人様」

と、小沼が両手をつき、

「これまでの私めの、さし出がましき振舞い、何とぞ、おゆるし下されますよう」

「何の……」

辛うじて、勝四郎が、

「殿を、たのみましたぞ」

「はい」

三人は、奥庭の木立を縫って裏門へ向う。

星が降るような深夜である。

裏門へかかって、柴田勝四郎が門番所へ、

「殿のお出ましである」

声をかけた。

門番が飛び出して来たが、さして、おどろかぬ。

前にも何度か、同じようなことがあったからだ。

裏の潜傍門（くぐりわきもん）が開いた。

するりと外へ出た五兵衛が、つづいて出ようとする柴田用人へ、

「かまうな」

「は……」

「では、行ってまいる」

「お気をつけられますよう」

「うむ」

主人を送り出した後で、

「門を閉めよ」

門番に命じたときの柴田勝四郎は、さすがに平静を取りもどしていたようだ。

徳山家敷の横手の堀には、早くも片桐半之介が小舟に乗って待ちかまえていた。

「徳山様。御苦労千万に存じます」

「明日は、よい日和になるであろうな」

「はい」

片桐が漕（こ）ぐ舟は、五兵衛主従を乗せて大川（隅田川）の闇へすべり出て行った。

十五

翌日の早朝……。

八代将軍・徳川吉宗は、御狩りの行列をととのえて江戸城を出発した。

この日。

将軍に従うものは、大番組が五組。新御番組が四組。それに先手組、目付、鷹匠、鳥見役などをふくめて三百五十余名であった。

吉宗が将軍就任当時の、気軽な御狩りの人数にくらべると、かなり多くなっている。

大番組は、旗本の中でも代表的な武官といってよい。

戦陣の折には、将軍直属の旗本として真先に戦わねばならぬ。

この大番組の精鋭が、騎乗の将軍の前後をびっしりと固めていたのでは、沿道の警備はないにせよ、いかな曲者といえども、襲いかかることは不可能である。

大川をわたり、本所から亀戸村へ至る間にも、何度か鷹を放ち、狩りをおこなった。

この間にも、吉宗の周囲の警戒はきびしかった。

吉宗が、亀戸村の名主・山口喜右衛門屋敷へあらわれたのは、四ツ半（午前十一時）ごろであったろうか。

威儀を正した名主の喜右衛門が出迎え、平伏するのへ、

「おお……」

馬から下りた吉宗が、つかつかと歩み寄って、

「喜右衛門、久方ぶりじゃの」

気軽に、声をかけた。

吉宗が、亀戸村の名主屋敷へ立ち寄るのは、約十年ぶりのことだ。

しかし、吉宗の記憶力は、名主の名も顔も忘れていない。

「はっ……」

ひれ伏したまま、喜右衛門は、感動のあまり声も出ない。

「喜右衛門」

「は、はい」

「案内いたせ」

「あ、これは、まことにもって……」

「は、はは……今日は、久しぶりの狩りの日じゃ。そのように畏まらずともよい」

「お、恐れ入り、たてまつりまする」

ようやくに立ちあがった喜右衛門は、かねて徳山五兵衛から指示があったので、すぐさま、奥庭にのぞむ離れ屋の隠居所へ案内をした。

「おお。この見事な椎の樹には見おぼえがある」

「樹齢、二百年におよびまする」

「うむ、うむ……」

吉宗に従って、近習や小姓も隠居所へ入った。
喜右衛門は、
「このたびの御狩りには、決して、おもてなしをいたさぬよう。茶を運ぶことも相ならぬ」
と、五兵衛からいいわたされている。
（やはり、この前のときは、女中のお玉が何ぞ無作法をしたにちがいない。それにしても公方様には何のお咎めもなく、今日の御狩りに御立ち寄り下されたとは……ああ、まことにありがたい公方様じゃ）
そうおもいながら、喜右衛門は母屋へ入り、家族・奉公人たちと共に畏まっていた。空は鏡のように晴れわたっているが、風が、やや冷たい。
このあたりでは、今朝、初霜が降りたそうな。
土地では〔梅屋敷〕と、よばれているほどの、名主自慢の梅林は花をつけてはいないが、奥庭の雑木紅葉が、まことに美しい。
どこかで、しきりに鵙が鳴いている。
将軍・吉宗は、この前、お玉を手ごめにしようとして徳山五兵衛に当身をくらい、気をうしなった一間へ入った。
この離れ屋は三間から成り、小さな台所と湯殿がついている。
その台所で、すでに湯茶の仕度がととのえられていた。
将軍の弁当は、例のごとく、実に粗末なものであった。

握飯、梅干、野菜の煮物と香の物、それだけである。
将軍が、弁当をつかいはじめた。
湯茶を運んであらわれたのは、何と片桐半之介ではないか。
半之介が将軍の給仕をすると、小姓や近習たちは、離れ屋の外へ出て行った。
離れ屋のまわりは、大番組の士がこれを警衛し、一分の隙もない。
「半よ」
と、吉宗が片桐半之介へよびかけた。
蜻蛉組の片桐半之介は、紀州から連れて来た家来だけに、吉宗の言葉づかいは、殊のほか打ちとけたものになる。
「どうじゃ？」
「はい。委細、遺漏なく……」
「さようか、よし」
そこへ、しずかにあらわれ、両手をつかえた者がいる。
将軍の前へ出るにしては、あまりにも穢苦しい百姓の老爺なのだ。
これが、変装をした伴格之助であった。
「格之助。徳山五兵衛の仕度は、いかがじゃ？」
「間もなく、ととのいまする」
「遺漏ないそうじゃの」

「はい」

自信をもって、伴格之助がうなずいた。

「そのほうが長年の苦心、今日は実を結ぶか……」

「御案じあそばされますな」

「たのむぞ」

「はっ」

いったん、外へ出ていた片桐半之介が、また、あらわれた。

半之介は、大番組の士と同じ姿（いでたち）をしている。

「よろしゅうございましょうや？」

と、半之介が伴格之助へ低声（こごえ）に尋（き）いた。

格之助がうなずく。

また、半之介が出て行き、奥の茶室へ合図をした。

茶室の中から、もう一人の将軍・吉宗があらわれた。

すなわち、吉宗に成りすました徳山五兵衛秀栄（ひでいえ）である。

入って来た五兵衛を見た吉宗が、

「おお……」

目をみはって、

「立派じゃ」

おもわず、いった。

平伏しようとする五兵衛へ、

「そのまま、そのまま」

と、吉宗がいう。

「は……」

「いますこし、よう見せよ」

「はい」

「ふうむ……」

またしても将軍が、感嘆の声を発した。

背丈や体格は、吉宗によく似ている五兵衛であったが、むろん、顔貌（がんぼう）は似ていない。

切長の両眼は似かよっていぬこともないが、吉宗の、いかにもたくましげな太い鼻筋や、顎（あご）のあたりまで垂れて見えるといってもよいほどの巨大な耳は、五兵衛のものではない。

亡母・お静ゆずりの、五兵衛は美男子であった。

その美男が、剣術の修行と、若いころのさまざまな体験によって醸し出される風格をそなえている。

「ふうむ。余にくらべて、よほど将軍らしい」

と、吉宗が伴格之助をかえり見た。

格之助は、苦笑をこらえている。

五兵衛としては、
「身の置きどころもない……」
おもいがしたに相違ない。
「五兵衛」
「はっ」
ようやくに、五兵衛は両手をついた。
「このたびの、はたらき、満足におもうている」
「恐れ入りたてまつります」
「何事も、天下のためと心得てくれ。吉宗、このほかに申す言葉がない」
五兵衛は、ただ、平伏するのみだ。
「余も、不徳の者じゃが……いざ、将軍の座に就いてみると、なかなかに死ねぬものじゃ。格之助は、そのほうの一命を失うことなく曲者どもの始末をいたしたいと申すが、なかなか、さようにはまいるまい」
「心得ておりまする」
「たのむぞ、五兵衛秀栄」
「申しあげまする」
「何じゃ。何なりと申せ」
「私めは、上様に強いられて死ぬるのではござりませぬ」

「ふむ、ふむ……」
「上様を嫌うておりますなれば、こたびの御役目は相つとめませぬ。腹を切りまする」
「おお……おお……」
「このことを一言、まことに、ぶしつけながら申しあげたく……」
「しかと聞きとどけた」
将軍・吉宗が、さもうれしげに、伴格之助へ、
「申してくれたことよ」
と、いった。
格之助の両眼が、うるみかけたようである。
「では、これにて」
五兵衛が、吉宗に一礼し、立ちあがった。

離れ屋から奥庭へ出た将軍姿の徳山五兵衛を、大番組の一隊が颯と取り巻いた。
この中に、片桐半之介もまじっている。
ということは、片桐以外にも、蜻蛉組の士が組み込まれているのではあるまいか……。
片桐の傍に、小沼治作の顔も見えた。
すでに五兵衛は、葵の御紋がついた将軍用の陣笠を深くかぶっていた。
「それ……」

片桐半之介が、うなずくや、大番組の一隊は五兵衛を押し包むようにして、梅林を走りぬけ、表門から外へ出た。

将軍の愛馬が、そこに待機している。

この馬は、名を〔天鼓〕といい、栗毛の駿馬だ。

〔天鼓〕は、雷の別名である。

すでに五兵衛は、伴格之助の介添で、江戸城内の馬場へ密かに引き出された〔天鼓〕へ何度か乗っていただけに、

「たのむぞ」

胸の内に天鼓へいいつつ、ひらりと鞍上の人となる。

すかさず、大番組が五兵衛の周囲をかため、名主屋敷を出発した。

「お発ちらしい」

あわてて、山口喜右衛門が走り出て来たときには、御狩りの行列はうごき出していた。

「お見送りも、いたさなんだ……」

何やら、たよりなげな顔つきになり、喜右衛門は母屋へもどって行った。

隠居所の周辺には、まだ、御供の人びとが残っているようであったし、今朝も暗いうちに、数人の家来を従えて名主屋敷へあらわれた徳山五兵衛から、

「こなたから知らせあるまでは、隠居所へ近寄らぬように」

と、念を押されていた名主・喜右衛門なのである。

五兵衛に従っていた五名の家来の中に、伴格之助・片桐半之介・小沼治作がふくまれてい、残る二人は大きな挟み箱を担いでいた。

その中に、将軍と同じ衣類・道具などが入っていたのだ。

さらに、これは供の中でも身分の低い士が身につける衣類もおさめられていた。

その衣類を、いま、将軍の衣裳を脱いだ徳川吉宗が、急いで身につけつつある。

依然、隠居所のまわりは、別手の大番組によってかためられていた。

吉宗は、手早く着替えをすませ、塗笠をかぶった。

そこへあらわれたのが、締戸番の内山弓之助であった。

「内山。仕度はよいか？」

と、吉宗。

「はっ。いつにても……」

「では、まいろう」

「こなたへ、お運び下されまするよう」

内山弓之助が、隠居所の裏口へ……つまり台所口へ、吉宗を案内した。

小姓も近習も、ついては来ない。

裏の戸を内山が開くと、そこには、吉宗の姿と同じ服装の士が二十名ほど待ち構えていた。

その中へ、吉宗がすっと入って行った。

すると……。

馬にまたがった内山弓之助が先へ立ち、これは、名主屋敷の裏門から出て行った。
裏門の外にも、同じような一隊が待機している。
この中で、陣笠をかぶり、立派な姿をしているのは内山弓之助をふくめて三名にすぎぬ。
あとの四十余名は、いずれも徒歩であり、吉宗も同様だ。
騎乗の内山が先頭に立った。
他の、馬上の二名は列の後ろについた。
一隊は、ゆっくりと歩をすすめている。
亀戸村の住人たちは、これを遠くから見まもっていた。
今日は将軍の御狩りであるが、住人たちへは、
「平常のままにてよし」
の、通達があったので、先刻、名主屋敷から走り出て行った将軍？一行も住人たちの遠目にたしかめられたはずだ。
吉宗は列の中にあり、実に、しっかりとした足取りで歩んでいる。
下士の姿になった大番組の精鋭が、吉宗のまわりをそれとなくかためていた。
この一行は、まっすぐに大川へ向っている。
それというのも、はじめから、彼らは将軍の供揃え(ともぞろえ)に加わっていなかった。
徳山五兵衛たちが未明に名主屋敷へ到着してから一刻(いっとき)のちになって、この一隊が名主屋敷の裏手へあらわれた。

土地の人びとも、名主屋敷でも、これは御狩りのための、何かの下準備があっての事らしいと看ていた。
そして、御役目がすんだ一行が引きあげて行くのだと、おもっていたにちがいない。
一行は、ゆっくりとした足取りを変えることなく、両国橋を西へわたった。
吉宗は塗笠の内から、江戸市中のありさまを見やりつつ、微笑を浮かべている。
たとえ一時(いっとき)にせよ、将軍の座をはなれ、しかも徒歩で江戸の町を歩むことなどは、これがはじめてであったろう。
こうして……。
一行は無事に、江戸城へもどったわけだ。
本所の徳山屋敷では、用人・柴田勝四郎が邸内の、自分の長屋へ朝から引きこもっている。
「殿は、早朝に屋敷を出られた」
と、勝四郎はいい、
「いささか、腹が痛むゆえ、殿の御帰りまで、やすませてもらおう」
長屋へもどって来た。
そして、仏間へこもり、
(何とぞ、殿の御身をまもらせたまえ)
念じつつ、養父・柴田宗兵衛の位牌(いはい)を拝みつづけている。
家族の者は、

「外へ出てはならぬ」
と、勝四郎にいいわたされたので、異様な主の様子をいぶかしみつつ、息をひそめていた。

十六

この日……。
将軍は、牛田の薬師堂へ一泊し、翌日、ふたたび御狩りをつづけることになっていた。
隅田川が遡って西へ屈曲し、荒川となるあたりの北岸が牛田村で、南に大川と綾瀬川をひかえた一面の田地の中に、薬師堂がある。
薬師堂は、真言宗・千葉山西光院と号し、約四百年も前に、当国の領主・千葉氏が草創したもので、開山は覚音法印とか。
現代の東京都足立区。京成電車の関屋駅のあたりだ。
薬師堂・西光院へは五日ほど前から幕府の役人が出張って来て、将軍一行の宿営準備をおこなっている。
今日も朝から、将軍御狩りの一行とは別に、警衛の士が五百余も詰めかけ、西光院を中心に幔幕を張りめぐらし、諸方に仮小屋も設け、二重三重の警備をととのえ、将軍一行が来るのを待機していた。
これに、御狩りに従う士を合せると八百から九百の士が将軍を護って一夜を明かすことになる。

以前の将軍・吉宗の簡素な御狩りに引きくらべると、いささか大仰にも感じられる。
だが、これなら、将軍が西光院へ入ってからでは曲者の奇襲もあり得まい。
将軍警衛に匹敵する人数をそろえ、夜襲でもかけるというのなら別のことだが、そのようなことができるはずはない。
得体も知れぬ数百の一隊が江戸市中に潜伏したり、または、他国から入り込むなどということは、まったく不可能である。
曲者のねらいは、以前の奇襲を看てもわかるように、吉宗の体裁かまわぬ簡略な行動へ、
「つけこむ事……」
にある。
さて……。
亀戸村の名主屋敷を出た御狩りの一行へ目を転じようか。
将軍・吉宗の身がわりとして馬上にある徳山五兵衛の前に、片桐半之介が、これも騎乗で行く。
半之介は、五兵衛の前方、約三間のところをすすむ。
その間隔に、
「狂いを生じませぬよう」
と、半之介は五兵衛に念を入れた。
小沼治作は、五兵衛の左側につきそい、そのまわりを大番組の士が騎乗で、または徒歩で

囲み、目付、鷹匠、鳥見役なども加わっているわけだが、五兵衛としては、
(前を行く片桐の背中を見ておればよい……)
このことであった。

将軍の御狩りが、どのようなものかは、五兵衛もわきまえている。

狩りが始まると、吉宗は単身、馬を走らせ、供の者たちも一団となってこれを護るというより、むしろ散開して、遠巻きに将軍を警衛する。

これが、十年前に、本所見廻り方としての徳山五兵衛が見とどけた御狩りの実態である。

今度も、略、同様のかたちをとっているようだが、今日のところは御狩りというより、野駈けといったほうがよいのやも知れぬ。

鳥見役も鷹匠も加わってい、突網や投網の用意もしてあるが、切網や種々の罠を使っての御狩りは、明日におこなわれると触れ出されていた。

五兵衛は、片桐半之介の背中から目をはなさなかったが、警護の大番組の中でも、五兵衛の〔将軍〕の近くにいる士たちは、果して大番組なのかどうか、それもわからぬ。

鷹匠や鳥見役の姿など、五兵衛の目には入らなかった。

このあたりの住民たちへも、
「平常のままにて、おかまいなし」
の、通達が行きわたっている。

ために、田圃の道や野道に、百姓姿の老爺や男女が歩いていたりして、御狩りの一行が近

づくと、あわてて跪いたりする。

だが、その中に時折、五兵衛の目には、
(何やら、曰くありげな……?)
百姓もまじっていたようだ。

つまり、五兵衛の前を行く片桐半之介へ、目くばせをしたり、地についた手で何事か合図を送ったりするのに、気づいたのである。

おもうに、こうした百姓たちは〔蜻蛉組〕の一員なのではないか……。

彼らは、このあたりの住民たちを装い、御狩りの一行がすすむべき道すじの模様や、情況を片桐半之介へ伝えているのではあるまいか……。

五兵衛には、
(どうも、そのように……)
おもわれた。

とすれば、蜻蛉組は或る程度、曲者たちのうごきを捕捉しているのではなかろうか……。

すべてが、わかっているのではない。

完全に、彼らが潜み隠れている場所を突きとめているなら、何も、五兵衛が身がわりをつとめることもない。

馬蹄の響みに包まれ、五兵衛は無心に片桐の背中に見入っている。

いつの間にか、日は、かたむきはじめていた。

片桐は、一度も振り向かなかった。
小沼治作は、時折、五兵衛を見やっているようだ。
桔梗色に澄みわたった大空を、鶴の群れが渡っている。
いま……。
御狩りの一行は、曲りくねった中川沿いに、北へ向っていた。
中川は、大川と利根川の間にながれているので、この名がついたそうな。
このあたりまで来てしまうと、徳山五兵衛も、あまり地形にくわしくない。
（そろそろ、立石村のあたりへ、さしかかっているのではないか……）
右は中川のながれ、左は田圃と木立が一面にひろがっていて、前方左手に、小さな寺の屋根が見える。
（立石の南蔵院か？）
と、五兵衛はおもったが、そうではなかった。
その寺は、中川沿いの道から七、八間ほど左へ切れ込んだところに藁屋根の山門があり、境内の木立の向うに本堂の屋根がのぞまれた。
中川沿いの細い道を行くのだから、御狩りの一行は、辛うじて二列を保つのがようやくのことだ。
五兵衛の右側の士が後方に下り、小沼治作が左側に馬をすすめる。
此処へ来るまでに、木立や野の中を駈けめぐり、狩りをおこなってきたので、一行の足並

はゆるくなっている。
夕闇が、淡くただよいはじめた。
このまま、牛田の薬師堂・西光院へ到着すれば、
（何のこともない……）
のである。
中川の川面に、釣り舟が一つ、浮かんでいた。
（何を釣っているのか？）
ふと、五兵衛がそれに目をとめた、その瞬間であった。
すぐ間近で、つづけざまに二発の銃声が起り、徳山五兵衛の躰が馬上に大きく揺らいだ。

十七

二発の弾丸のうち、一発は五兵衛の陣笠を掠めて飛びぬけ、一発は、左肩に命中した。
（ついに、来た……）
来るべきものがである。
その瞬間の激烈な衝撃を受けたとき、五兵衛は自分が、
（死んだ……）
と、感じた。
しかし、不様に馬から落ちるところを、曲者にも味方の人びとにも見せたくはなかった。

「むう……」
　何ともいえぬ苦痛が五体を締めつけてくるのに堪えつつ、五兵衛は馬の首へ取りすがった。
　さすがに、将軍・吉宗の愛馬〔天鼓〕である。
〔天鼓〕は鉄砲の響音を聞いても、竿立ちになったり狂奔したりせず、栗毛の躰をぴたりと止め、微動だにしなかった。
「と、殿……」
　すかさず小沼治作が馬を寄せ、五兵衛の楯となった。
　すべては、一瞬のことである。
　駈け寄った供の士たちが、徳山五兵衛を抱え下し、
「それっ……」
　これを護って、川沿いの道を後退する。
　それよりも早く、供の士が一斉に寺の山門へ向って突き進んだ。
　また、銃声が聞こえた。
　いつの間にか、寺の側面からも槍・突棒を構えた一隊があらわれたし、寺の背後の田圃道からも二十名ほどの士が走り寄って来る。
　中川に浮かんでいた釣り舟がうごきはじめたのも、このときだ。
「あれにもおるぞ!!」
「逃すな!!」

　たちまちに十騎ほどが中川のながれへ馬を乗り入れ、釣り舟を追った。
　釣り舟の中に、二人の男がいて、一人が必死に対岸へ舟を寄せている。
と……。
　対岸の木立からも、捕手の人数が走り出て来た。
　岸辺へ躍りあがった曲者二人は、刃を振りかざし、猛然と捕手の中へ躍り込んだ。
　徳山五兵衛を将軍・吉宗と信じて、狙撃した曲者は、釣り舟の二人ではない。
　寺の山門の何処からか、または木立に隠れていて鉄砲を撃ったのである。
　後の始末がどうなったか、徳山五兵衛は知らぬ。
　警衛の士に護られ、二町ほど後退したあたりの百姓家に担ぎ込まれた五兵衛は、直ちに手当を受けた。
　幕府の御番医師が二人も、御狩りの人数に加わっていたのを、五兵衛は、はじめて知った。
　弾丸は、五兵衛の左肩の骨の下を背中の方から撃ち込まれてい、外科医たちは、これを剔出した。
「これなれば、大丈夫であろう」
　剔出の苦痛の中で、五兵衛は、そうした医者の声を聞いたようにもおもう。
（助かったのか、おれは……死なずにすむのか……）
　夢の中にでもいるような気もちであったが、それにしては、あまりにも苦痛が激しい。

剔出が終ると、熱い薬湯をのまされ、今度は急造の輿のようなものに寝かされた。

これを約百名の士が護り、亀戸村の名主屋敷の、例の離れ屋へ担ぎ込んだのである。

すでに、夜に入っていた。

名主の山口喜右衛門も、家族も奉公人も、いっさい、離れ屋には近づけぬ。

「いったい、何事が起ったものか……」

屋敷の周りには、篝火が燃え、水も洩らさぬ警備が布かれたものだから、名主屋敷の人びとは瞠目している。

離れの隠居所の、吉宗が休息していた座敷に寝かされた徳山五兵衛は、全身が痺れるように重くなり、意識を失った。

というよりも、深い眠りに落ちたといったほうがよいであろう。

そして、得体の知れぬ重苦しい夢を見つづけた。

暗い闇の底から、死装束の亡父・徳山重俊があらわれ、にんまりと笑いかけながら、五兵衛を手招ぎしたり、白い蛇に胴体を巻きしめられたまま、高い崖の上から海原へ真逆様に落ち込んだり……そうした奇妙な、嫌な夢ばかりで、その間に三度ほど、五兵衛は目ざめたと後になって聞かされたが、おぼえていない。

気がついたとき……。

目の前に、小沼治作の顔があった。

「おお、小沼……」

「と、殿……」

小沼が、うれしげに、

「大丈夫でございますぞ。御無事にあられますぞ」

低いが、ほとばしるようにいった。

「む……」

たしかに、おれは生きている……と、五兵衛はおもった。

それが実感として、胸にとらえられたのは、このときがはじめてである。

座敷の障子が、晩秋の日に明るい。

五兵衛は、事件の翌朝だとおもったが、実は翌々日の朝であった。

「さほどに、眠っていたのか……」

「はい」

「う、う……」

突然、左肩の傷が痛み出した。

「殿……」

「いや、何でもない」

「伴格之助様のおゆるしを得て、御屋敷へは、殿の御無事を知らせてまいりました」

「さようか……勝四郎のみへ、申したのであろうな?」

「御念にはおよびませぬ」

「ようも、生き残ったものよ……」
あのときのことをおもい返してみると、馬上の五兵衛は、右手の中川に浮かぶ釣り舟に気づいて、ふと、視線を転じた。
（妙な釣り舟……？）
そうおもったかどうかはおぼえていないが、視線を転じたとき、いくらか躰の向きも変ったのであろう。
それでなければ、あの寺の山門のあたりから撃ち込まれた弾丸が、背中の方から入るはずもない。
釣り舟に気を取られなかったら、徳山五兵衛の一命は絶たれていたと看てよい。
「小沼……」
「はい？」
「あれから、いかがに相なったのじゃ？」
「私も、くわしくは存じませぬが、曲者どもは一網打尽になったかとおもわれます」
「さようか……」
それならば、伴格之助が、これまでの苦心は実をむすんだことになる。
五兵衛が狙撃されるや、伝令が八方へ飛んだらしい。
そして、江戸市中から他国へ出る街道という街道、道という道へは隈なく人数が繰り出して通行を禁じた。

このときは、先手組をはじめとして、町奉行・大岡越前守が指揮する南北の町奉行所も総動員で警戒に当ったらしい。
それも、いまは解けたという。
「ここは、何処じゃ？」
「亀戸村の名主屋敷の、隠居所でございます」
「お……そういえば……」
名主屋敷の、当夜の警備も解けていた。
いまは、合せて三十名ほどが五兵衛を警護しているのみだ。
庭で、しきりに鵯が鳴いている。
「小沼。水を……」
五兵衛がそういったとき、御番医師の茨木宗隆が入って来た。

十八

茨木宗隆が、つき添ってきた医生に手つだわせ、五兵衛の傷の手当をおこなっているとき、宗隆の背後の襖が開き、伴格之助が静かに座敷へ入って来た。
それと気づいた徳山五兵衛へ、二度三度とうなずいて見せた格之助の顔を、どのようにいいあらわしたらよかったろう。
五兵衛への無限の感謝と、五兵衛が一命を取りとめたことへのよろこびと、また、格之助

自身が、
(大任を果した……)
という安心とが、無言の笑顔に綯(な)いまざってあらわれていた。
傷の手当が終るまで、格之助は沈黙をつづけ、いたわりをこめ、凝(じっ)と五兵衛を見まもっている。
手当を終えた茨木宗隆が、格之助をかえりみて、
「御回復も早かろうと存じます」
と、いった。
「かたじけのうござる」
「では……」
五兵衛へも一礼し、宗隆は医生を従え、座敷から出て行った。
小沼治作も、その後から廊下へ出た。
伴格之助が五兵衛の枕元へ寄って来て、
「痛みますかな?」
「いや、何のこともありませぬ」
「さようか……まことにもって、申しわけのないことをいたした」
「何の……」
「将軍様(うえさま)にも、いたく、およろこびでござる」

格之助の両眼が赤くなり、潤みかかっていた。
「曲者(くせもの)どもの始末は……?」
「御安心下され、徳山殿。召し捕りました者どもは、男女をふくめ、合せて三十余名におよびまいた」
「三十、余名……」
「さよう」
「男女をふくめて、と、申されましたな?」
「さようでござる」
もしや、その女の中に、曾我(そが)の喜平治(きへいじ)のむすめ・お玉(たま)が、
(ふくまれているのではないか……?)
と、五兵衛はおもった。
おもわずには、いられなかった。
だが、いうまでもなく、それを格之助に尋ねることはできぬ。
「徳山殿……」
顔を、さし寄せるようにして、伴格之助が、
「過ぐる日、そこもとが御成道の山城屋から出てまいった男の後を尾(つ)けなされて、みごと、神谷町の小間物屋・伊勢屋藤七方へ入るを突きとめられた。このことがなくしては、このたびの上首尾をまねくことが、かなわなかったろうとおもわれます」

ささやいてよこした。
「はあ……」
うなずきはしても、それほどのことを自分がしたという実感はない。
ただ、格之助が命じるままに、尾行をしたのみなのである。
それにしても、伊勢屋藤七方を突きとめたことが、以後の蜻蛉組（せいれいぐみ）の探索と活動を容易ならしめたことは、事実らしい。
伊勢屋の所在がわからなかった場合、三十余人の逮捕は、
「むずかしかったと、申してよい」
格之助は、そういった。
つまり、将軍御狩りの事を相手方に知らせることにより、相手の蠢動（しゅんどう）をとらえようとしたのであろう。
「こなたも、三人ほど、死なせましてな」
「御狩りの当日にでござるか？」
「さよう」
曲者どもの抵抗も、激しかったらしい。
ところで……。
彼らが、前の道を通る将軍を狙撃するために潜伏していた小さな寺は、最応寺（さいおう）という天台宗の寺で、曲者どもとは無関係らしい。

御狩りの前夜に、曲者が潜入し、寺僧や小者（こもの）などを一間へ監禁してしまったのだ。
「では、山城屋と伊勢屋へも捕手が打ち込みましたのか？」
おもいきって、五兵衛が問うた。
「いかにも。そこもとが御身がわりとなって撃たれたとの知らせが入ると同時に、打ち込みまいた」
「なるほど……私を撃ったる曲者は？」
「二名でござった」
「どのような？」
「浪人でござった」
「浪人……」
喉（のど）が乾いてきて、五兵衛は口を噤（つぐ）んだ。
すると格之助が、傍の塗物の吸い飲みを取って、
「さ……」
手ぎわよく、水をのませてくれ、
「お疲れになってはいかぬ。傷所（きずしょ）にさしさわりましょう」
「いや……」
「いずれ、ゆるりと……」
いいさして伴格之助が、五兵衛の右手をさぐり、これをつかんで押しいただくようにし

た。

それは、取ってつけたような、わざとらしさがすこしもない仕ぐさであった。

そうせずにはいられぬ格之助の心情が、素直に、五兵衛の胸へつたわってきた。

「それがし、これより、御城へまいらねばなりませぬ」

「さようでござるか……」

「明日にも、また、御見舞いつかまつる」

「いや、もう、お気づかい下さるな」

「徳山殿。実は、これからが面倒なのでござる」

「…………?」

一瞬、引きしまった伴格之助の顔が、またも笑みくずれて、

「では、これにて……」

五兵衛に一礼し、座敷を出て行ったが、入れちがいに小沼治作がもどって来た。

「殿。およろこび下さい」

「どうした?」

「茨木宗隆先生が申されますには、四日五日のうちには、本所の御屋敷へ、お帰りになってもよいそうでございます」

「ほう……そうか」

「はい。ようございましたな」

「小沼。お前は、わしが撃たれた後、あの場所に居残っておらなんだのか?」

「何をおおせられます」

小沼が、それどころではないという顔つきになり、

「すぐさま、私は、殿のお側へ……」

「む。そうであろうな」

苦笑を洩らして五兵衛が、

「わしを将軍家とおもいこみ、鉄砲で撃った曲者は二人であったそうな」

「ははあ……」

「そのうちの一人は、もしや、佐和口忠蔵ではあるまいか……?」

小沼治作が、沈黙してしまった。

佐和口忠蔵は、すでに五十をこえているはずだ。

もしも佐和口が最応寺の中に、他の曲者たちをひきいていたとしたら、捕えられたことになる。

捕えられたなら、死刑はまぬがれまい。

「小沼……」

よびかけて、五兵衛が、

「もはや、どうにもならぬことよ」

「はい」

「何事も忘れよう。な……」
「さよう……さようでございますな」
「それにしても、よう、生きていられたものよ」
「実を申しますと、私は、殿の御命があの日かぎりで打ち絶えようとは、いささかもおもいませなんだ」
「まことか。いや、そのような顔つきではなかったぞ」
「それは、まさかに笑ってもおられませぬ」
「ふむ。いかさまな……ところで、屋敷へは何と申してあるのじゃ?」
「伴格之助様の御指図にて、御供の衆の鉄砲のあつかいの過ちで、お怪我をなされたと、かように申しつたえました」
「それでよい」
「なれど、御用人様のみには、ありのままを……」
「うむ」
　五兵衛が一命を失わずにすんだと聞いたとき、用人・柴田勝四郎は昂奮とよろこびのあまり、小沼治作の顔を打ちはたいたそうな。

十九

　それから六日後の夕暮れに、徳山五兵衛秀栄は、本所の屋敷へ帰った。

　駕籠から下りた五兵衛が、人の肩も借りずに居間まで歩んだのは、さすが、躰の鍛え方が常人とはちがっていたからであろう。
「めでたく、おもどりになられまして……」
いいさして、妻の勢以が絶句し、泪ぐんだ。
　勢以が、このように感情の高ぶりを表現したのは、
（かつて無かった……）
と、いってよい。
　五兵衛は、むしろ呆れ顔に妻を見まもったのである。
　老女の千は、五十六歳になっている。
　現代の女の五十六歳ではない。
　千が生きていたころの女の五十は、現代の六十にも匹敵しよう。
　髪も薄く、白くなってしまい、しわも増え、若いころはあれほどに豊満だった躰が、杉箸のようになってしまった。
　もはや、老婆である。
　生きて帰った五兵衛をみるや白い髪を震わせ、千は泣き咽ぶばかりであった。
　十二歳の長男・頼屋は、神妙の面もちだ。
　くわしい事情はわからぬにせよ、徳山家の家族や奉公人たちは、五兵衛が鉄砲で撃たれたことを、単なる事故だとはおもっていない。

それというのも……。

当日の日暮れから翌日朝にかけての、物ものしい江戸市中の警戒のありさまなどと合せ看て、

(何事か、異変が起った……)

と、感じぬわけにはゆかなかったのであろう。

すでに寝所には臥所の仕度がととのえられてい、五兵衛は居間からそちらへ移り、身を横たえた。

そこへ、あらためて、用人・柴田勝四郎があらわれ、

「殿。今日まで、生きた心地もいたしませなんだ……」

「小沼より、わしの命に別条なきことを聞いたのであろう」

「はい。なれど……なれど、信じきれませなんだ」

勝四郎は、五兵衛が屋敷を出るとき、将軍の身がわりになることを打ち明けただけに、

「御顔を見るまでは……」

あれこれと、おもい迷っていたらしい。

「御形見に頂戴いたしましたる紋服、いかがいたしましょうや?」

「取っておけ。そのほうの定紋を、わざわざつけさせたのだ」

「恐れ入りましてございます」

「念のために申しておく。こたびのことは、相なるべく他へ洩れぬよう、奉公人たちへもつ

たえておくがよい」

「心得ましてございます」

「勝四郎」

「は……?」

「長々と、苦労をかけたことよ」

「何を、おおせられますことやら……」

「これよりは、元の五兵衛秀栄にもどることができる。安心をしてくれ」

「はっ」

またしても五兵衛は、柴田用人に泣かれた。

(いずれもみな、年を老ったゆえか……)

屋敷にいると、何やら、いずれも老人たちに囲まれているようなおもいがしてくる。

父の代から仕えている家来たちは、みな、五十、六十の老齢に達していた。

ところが……。

翌朝になって、五兵衛の従弟で分家の当主である徳山権左衛門重之が、養子の貞明をつれ、見舞いに駈けつけてきた。

貞明は、すなわち今年の三月、分家へ養子にやった五兵衛の次男・監物である。

十歳になる、その監物が養父の徳山重之よりも先に廊下を走って来て寝所へ入り、

「父上……」

叫ぶようにいって、両手をついた。
そのとき、徳山五兵衛は胸がしめつけられるようなおもいがした。
自分の手許(てもと)にいたときの監物は、幼年のころから、まことに静かな温和な子で、高声(たかごえ)を発したり、廊下を走ったりすることなど、ほとんどなかったといってよい。
それだけに、おもいもかけぬ監物の、自分を案ずるこころの昂(たか)ぶりを見て、五兵衛はおどろきもし、感動もした。
「うむ……」
身を横たえたまま、うなずいて見せたとき、われにもなく両眼から熱いものがふきこぼれてきた。
「父上。大事ございませぬか？」
十歳の監物の手が差しのべられてきたのを、しっかりとにぎりしめ、
「おお、大丈夫じゃ」
「ようございました」
「うむ、うむ。監物は……いや、いまは小左衛門貞明となったのじゃな」
「はい」
「分家の暮しに、馴染(なじ)んだか？」
「はい」
徳山重之は、病弱の身で、子が無いので、監物を養子にすべく、必死に五兵衛へ嘆願した

だけに、監物は大切にあつかわれている。
そこへ、
「御本家の兄上……」
と、徳山重之が入って来た。
重之も、五兵衛を慕っているだけに、昨夜、五兵衛が帰邸したことを耳にするや、夜が明けるのが待ち遠しく、まんじりともせずに朝を迎えたという。
「わしがことを、何処から耳になされた？」
「はい。藤枝若狭守様より、わざわざ御使者がまいられましてな」
「ほう……さようか……」
岳父の藤枝若狭守から大鯛(おおだい)一尾に祝いの品々が届けられたのは、この日の昼すぎであった。
つづいて、神尾五郎左衛門守親からも、大鯛が届けられた。
「よし。ならば、今宵(こよい)は祝いをいたそう。わしも、書院へ出よう」
と、五兵衛が柴田用人へいいつけた。
「奉公人たちへも、酒を出してやるがよい」
「心得ました」
「いずれへも、たくさんに馳走をしてやってくれ。よいな」
「はい」
五兵衛も、何やら、うれしさがこみあげてきた。

やはり、生きていたことは、
（悪いことではなかった……）
のである。
そして、
（これで、すべては終った……）
と、おもい、尾張屋源右衛門や佐和口忠蔵などに関わるいっさいの事を忘れることにした。
そして忘れきることができたのだが、これから約二十年後になって、若き日の徳山五兵衛に関わる人びとの残滓が、おもいもかけぬ事件となって五兵衛の前に出現しようとは、予想もできぬことであった。

歳月

一

五兵衛は、
（これで、もう、すべて終った……）
ような、おもいがしていた。

何が、すべてなのか……。
何が、終ったのか……。
それを、はっきりと口に出してはいえぬし、ただ漠然と、そのようにおもったにすぎぬ。
強いていうなら、自分の、男としての人生における高まりが絶えた……そのように感じたのやも知れぬ。
年少のころからの波瀾が頂点に達し、五兵衛は間一髪のところで三十七歳の生涯を終えたやも知れぬ。
おもえば、享保十一年（一七二六年）という、この年には、お梶のむすめのお百合が出府したことにより、おもいもかけぬ夢を見ることを得た。
そうかとおもうと、次男の監物を養子に出すことになったり、お百合が忽然と京へ去った直後に、これまた意外な秘命が将軍・吉宗から下って、季節のうつろいも、月日の推移もわからぬほどの緊迫した明け暮れを送ってきた。
そして、いま……。
徳山五兵衛は、危うく取りとめた一命を静かに養っている。
五兵衛は、十も二十も年をとったような気もちになっていた。
引きつづいて、御番医師の茨木宗隆が来邸してくれ、手当をつづけ、日毎に五兵衛の傷所は回復しつつあったが、何ともいえぬ深い疲労が消えず、
（もしやすると、傷は癒っても、このまま、わしは病にかかり、寝ついてしまうのではない

か……）

　とさえ、おもわれた。

　当時は無我夢中であったが、お百合との逢い引きから引きつづいて秘密の御役目をつとめ、その間は、屋敷のものに、

（気取られてはならぬ……）

というので、相当に神経をつかっていたのであろう。

　そうした、いろいろの疲労が一度に出たと、いえなくもない。

　そういえば、あの頑健な小沼治作も、事件直後に突然、高熱を発して、十日ほども寝込んでしまったのである。

　小沼は、ようやく床を払い、五兵衛の寝所へあらわれた。

「もはや、よいのか？」

「大丈夫にございます。まことにもって、だらしのない始末で……」

「なんの。わしを見よ。まるで死人のように疲れておるわ」

「殿には、まったくもって、大変でございました」

　そのとき小沼は、御成道の旅宿・山城屋や、芝・神谷町の伊勢屋藤七方が、どうなっているか……それを、たしかめてまいりましょうかと、五兵衛にいい出た。

「そうじゃな……」

　五兵衛は気乗りした様子もなく、目を閉じて、しばらく黙っていたが、

「外から見て来るのみならば、かまうまい」

「はい」

「そのついでに、池の端の日野屋へ立ち寄ってもらおう」

「承知いたしました」

「日野屋のあるじには、わしが鉄砲疵を受けたことなど申すなよ。いささか取り込み事があるゆえ、こちらから知らせあるまで、屋敷へはまいらぬようにとつたえておくがよい」

「心得ました」

　翌朝、小沼治作は笠に顔を隠し、屋敷を出て行き、日暮れ前にもどって来た。

「小沼。いかがであった？」

「日野屋のあるじが、大層、心配の様子でございました」

「さようか。それで……？」

「山城屋も伊勢屋も表の戸の上から木を打ちつけ、町奉行所の小者が見張りに立っておりました」

「ほう……」

「日野屋のあるじに、それとなく聞きましたところ、御狩りの日の夕刻に、奉行所の捕手が出張り、山城屋の家族から奉公人、泊り客まで御縄にかけて連れ去ったそうにございます」

「ふうむ……」

「伊勢屋方も、おそらく同様と存じ、近辺で聞き込みもいたしませず、帰ってまいりました

が……」

「それでよい、それでよい」

すべては、終ったのである。

それにしても、伴格之助が指揮する蜻蛉組（せいれいぐみ）の活躍は、

（見事なもの……）

と、おもわざるを得ない。

その活躍の実態を、むろん、五兵衛は知るよしもなかったけれども、自分が、あの日のあの場所で、曲者（くせもの）どもに確実に狙撃（そげき）されるところまで事を運ぶまでには、なみなみならぬ苦心があったろう。

そこまで、油断ならぬ曲者たちを引きつけるためには、おそらく蜻蛉組から、一人二人が曲者どもの組織（しくみ）の中へ潜入していたことも考えられる。

それならば、これは一年や二年のことではないはずだ。

もっと年月をかけ、あくまでも曲者どもの一味になりきり、しかも蜻蛉組との連絡をたもちつつ、今日に至ったはずである。

そして、彼らの誘導が功を奏したのではあるまいか。どうも、そのようにおもえてならぬ。

伴格之助からの連絡は絶えたままであった。

徳山屋敷の横手の舟溜（ふなだま）りからいつの間にか二隻の舟が消えた。

番小屋に待機していた四人の船頭の姿もなく、片桐半之介も、まったく顔を見せぬ。

それが、また、何となく五兵衛にはさびしかった。

（御役に立てた……）

その安堵（あんど）と疲労は別にして、これまでの息づまるような日々に、

（もはや二度と、出合うこともあるまい）

そうおもうときのさびしさは、いったい、どうしたことなのか……。

まさかに、二十年後の自分が、ふたたび、おもいもかけぬ事件に直面し、忘れ去った人びとの面影が、その事件の裏側に潜んでいようなどとは、それこそ夢にもおもえぬことであったにちがいない。

いま一つ。

その事件よりも、考えようによっては、

「あっ……」

と、さすがの五兵衛が、しばし、言葉も出ぬような驚愕（きょうがく）が行手に待ちかまえていようとは

……。

そもそも五兵衛は、これより先、二十年もの〔生活〕が自分にあろうなどとは、考えていなかった。

茨木宗隆も、五兵衛の疲労がなかなか回復しないので、わずかながら眉をひそめたようだ。

「傷所が癒ったのちも、しばらくは……いや、来春、梅が咲くころまでは、しずかにおやすみになるがよいと存ずる」

　宗隆は、そういった。
　五兵衛は素直にうなずいた。
　勢以や千をはじめ、柴田勝四郎も小沼治作も、懸命に五兵衛の看護にあたってくれているが、ともかくも食欲が出ない。
　そのくせ、いくらでも眠れる。
　寝所にいて、いつ夜が明けたのか、日が暮れたのか、その区別もつかぬほどに、眠っては醒め、醒めたかとおもうと、また眠りこける。
（こうしているうちに、いつか、すっと息が絶えてしまうのではないか……それならよいな。うむ、それもよい）
　夢うつつの中で、そんなことが脳裡に浮かぶ。
　そのくせ、夢は、ほとんど見なかった。
　茨木宗隆は、柴田用人に、
「長い間、精神と躰にたまっていた疲れが、このたびのお怪我によって、一度に、ふき出してまいったにちがいない」
と、洩らしたそうな。
　もう、冬が来ていた。
　享保十一年が、間もなく終ろうとしている。
　師走に入って間もなく、五兵衛の岳父・藤枝若狭守の病状が、ふたたび重くなった。

　それと前後して、神尾五郎左衛門守親も重態におちいった。
　勢以は、
「このことを殿様のお耳へ入れてはなりませぬ」
老女の千や柴田用人へ、きびしく申しわたした。

二

享保十二年の新年が明けた。
徳山五兵衛は、三十八歳。
妻の勢以は三十三歳。
長男・頼屋十三歳である。
老女の千は、五十七歳になった。
新年を迎えた藤枝若狭守の病状は、やや好転したが、すこしの油断もならぬ。
神尾守親は、依然、重態がつづいていた。
だが、五兵衛は何も知らない。
五兵衛は、一月の中旬になってから、急に、食欲が出てきはじめ、一同をよろこばせた。
そして……。
奥庭の白梅の蕾がほころびかけるころに、徳山五兵衛は床払いをおこなった。
内輪のみの祝宴がおこなわれた翌日、五兵衛はすぐさま、乗物の仕度をさせ、岳父・藤枝

若狭守の見舞いにおもむいた。

「おお……」

若狭守方教（まさのり）は、依然、病間に引きこもりきりであるのはもちろんだが、おもいのほかに、血色が冴（さ）えていた。

若狭守が一時、重態となったのを五兵衛は知らぬだけに、

「いよいよ、御回復の御様子にて、祝着に存じまする」

「何の、わしよりもそこもとのことが大切じゃ。このように外出（そとで）をされても、かまいませぬのか？」

「もはや、大丈夫にて……」

「ふうむ……」

若狭守が、いたわりをこめた眼（まな）ざしで、五兵衛に見入った。

何といっても三ヶ月余を臥（ふ）していたのだから、五兵衛の窶（やつ）れは、だれの目にもあきらかであった。

「肩の傷は、もはや、よろしいのか？」

「御存知でありましたか……」

「いささか……」

では、御狩りの当日の様子も、およそ、この岳父の耳へ入っているのであろう。

「いやはや……まことにもって、御苦労なことであった」

「おそれ入ります」

「将軍様（うえさま）にも、いたく、およろこびと洩れうけたまわった」

「さようで……」

「近きうちに、御沙汰（ごさた）があろうとおもう」

「は……？」

「それに……」

いいさして若狭守は、いおうかいうまいかと思案をしていたようだが、ややあって、

「それに、そこもとの躰が回復いたさば、またしても忙（せわ）しゅうなろう」

と、いった。

（忙しくなる……？）

それは、何のことなのか。

尋ねようとおもったが、ひかえることにした。

岳父は、必要な事のみ以外を口にせぬ人である。それを五兵衛は、よくよくわきまえていた。

「勢以も、さぞ、よろこんでおりましょうな」

と、今日の藤枝若狭守の、聟（むこ）の五兵衛に対する態度や言葉づかいが、いつもにも増して丁重なのである。

何をおもったのか、若狭守が突然、勢以のことを口にのぼせた。

「いまにしておもうに、わがむすめは、五兵衛殿にふさわしゅうない女であったようじゃ」
「何を、おおせられますことか……」
「いや、そうでない。そうでござらぬ」
見ると、こころなしか、岳父の両眼が潤んでいるようにおもわれた。
「は……」
「いやなに、五兵衛殿……」
「勢以は、乳母や老女が、いささか堅苦しゅう育ててあげてしもうたように、おもわれる……」
そういわれると、返す言葉もない。
「そのようなことはありませぬ」
と、こたえたのでは、かえって追従になってしまう。
何も彼も知りぬいた上での、若狭守の言葉なのだ。
だが、いまの五兵衛は、堅苦しいままに徳山家の人となりきった勢以へ、自分の妻としての不満をおぼえぬようになってきている。
「五兵衛殿。ようも、辛抱をして下された」
「いえ……」
微(かす)かにかぶりを振って、五兵衛が、
「武家には、堅苦しき女がよろしく……」

「まこと、さようにおもうて下さるか……」
「近ごろ、よき妻を迎えたことを、よろこんでおります」
「まことか。すりゃ、まことか?」
「はい」
「む……」
今度は、はっきりと、若狭守の両眼へ泪(なみだ)が伝わるのが見えた。
「まことに、おもしろくもなき、わがむすめなれど、徳山の家のために一命を捨てることあらば、いささかも迷うことはござるまい。いざというときには、存分に為(な)し下されよ」
どうも、今日の藤枝若狭守は、
(いつもとは、ちがう……)
ようにおもわれる。
これまで、五兵衛の前で泪顔など見せたことのない若狭守だったし、そもそも、結婚後十四年もすぎてから、いまさらのように勢以のことを話題にのぼせたのも解(げ)せなかった。
しかし、若狭守方教は疲労の色もなく、祝盃(しゅくはい)の仕度をさせ、五兵衛と酒を酌(く)みかわしたが、
「さて、いつまでも、お引きとめはなるまい。床払い早々にお訪ねいただき、まことにかたじけのうござった。疲れが出てはなりませぬ。日暮れには、また冷え込んでまいろう」
五兵衛に帰邸をすすめた。
これも、また、めずらしいことであったといえよう。

自分のことはさておき、五兵衛も、病床の岳父の前で長居しているのが、気になっていたところゆえ、
「では、これにて……近きうちに、また、お訪ねいたしまする」
「待っておりますぞ」
まだ、日も高いうちに、本所の屋敷へもどったのだが、さすがに疲れが出て、
「ああ……このように、だらしもない躰になってしまっては、徳山五兵衛も仕方がないわ」
寝間の臥床(ふしど)へ横たわり、勢以に苦笑して見せ、
「わしに引きかえ、藤枝の岳父上(ちちうえ)は、まことに御血色もよく、それに、めずらしく勢以のことを何かと気づかっておられた」
「まことでございますか。そのようなことがあるはずはございませぬ」
「まことのことよ」
勢以は、信じかねる面もちであった。
藤枝若狭守の死去が、徳山屋敷へ知らされたのは、翌朝のことである。

三

この日の朝。
例日は暗いうちに目覚め、次の間に詰めている家来へ、枕元の鈴を振って合図をする藤枝若狭守が、いつまでも眠っているようなので、

「殿……殿。お目覚めにございましょうや?」
家来が声をかけても、返事がない。
そこで、寝所へ入って見ると、仰向けに寝ている若狭守の様子が、どうも異常であった。
近寄って、よくよく見ると、すでに若狭守が息絶えているではないか。
前夜、眠りに入ったまま、目覚めることなく息を引き取ったものとおもわれる。
心ノ臓(しんのぞう)に急変を来たしたらしい。
前日、徳山五兵衛を屋敷に迎えた折には、あれほど元気であっただけに、岳父死去の知らせを受けたときの、五兵衛のおどろきと落胆は非常なものであった。
藤枝若狭守の葬儀を終えた後、五兵衛は三日ほど、寝込んでしまったほどだ。
それに引きかえ、病状が絶望視されていた神尾五郎左衛門守親が、めきめきと回復しはじめたのである。
それを、五兵衛にしてみれば、
「何よりの、なぐさめ……」
としなければならなかった。
今年、三十八歳になった五兵衛であるが、藤枝若狭守と神尾守親は、
「かけがえのない御人(おひと)」
であって、父の徳山重俊などとは、くらべものにならぬ。
いかに血を分けた肉親であろうとも、縁(えにし)の薄いものは、如何(いかん)ともしがたい。

しかし、たとえ他人であっても、行きずりに出合うた人であっても、その縁が深ければ、肉親以上に血が通い合うのである。

ようやくに気を取り直し、床を払った五兵衛が、柴田勝四郎から神尾守親の病状好転を聞いて、

「それは、何よりのことじゃ。明日にも、御見舞いに出よう」

そういったとき、小沼治作が居間へあらわれ、

「片桐半之介殿が、まいられました」

「何、片桐が……すぐさま、これへ」

五兵衛の顔に、血がのぼった。

去年以来、伴格之助からは何の音沙汰もなかっただけに、五兵衛はいささか昂奮をしたのであろう。

片桐半之介が、小沼にみちびかれて次の間へ入って来た。

「久しく、御無音に打ちすぎまして、まことに、申しわけもありませぬ」

「何の……ま、これへ。これへ」

「はい」

居間へ入り、五兵衛の窶れた顔を見て、片桐は、しばし言葉もない。

ややあって、

「まことにもって、御苦労をおかけ申しました」

こういって、片桐が、俯いた。

「いや、もはや大丈夫。このとおりじゃ」

「恐れ入ります」

「伴格之助殿に、お変りはないか？」

「おかげをもちまして……」

一礼した片桐半之介が、

「何時にても、よろしゅうござるが、御城中へ、伴格之助様をお訪ね下さるようにとのことで……」

「おお、さようか」

「もはや、外出はかまいませぬか？」

「何時にてもよい」

「では、勝手ながら、明後日に……」

「心得た」

片桐は早々に、帰って行った。

引きとめられ、事件のその後について、五兵衛から問いかけられるのをおそれていたようだ。

そして、翌々日の四ツ（午前十時）に、徳山五兵衛は単身、江戸城へおもむいた。

むろん、かの〔御意箇牘〕を懐中にしている。

その御意簡牘を見せて、五兵衛は例のごとく竹橋御門から、御城の内へ入った。
おもえば、内山弓之助にみちびかれ、はじめて吹上の庭で将軍・吉宗に目通りをしたのは、去年の新緑のころであった。
そのときから、一年に近い月日が過ぎているわけだが、五兵衛の感覚としては、
（三年にも、五年にも、おもわれる……）
のである。
左の内濠をへだてて、石垣の上に五十三間櫓。前方に北桔橋御門が見え、そのあたりの濠端に、ずんぐりとした躰つきをした、禿頭の侍が五兵衛を待っていた。
伴格之助だ。
それと見て、五兵衛が足を速め、近づいて行くと、格之助も気づき、
「おお……」
というように口を開け、小走りに走り寄って来た。
「伴格之助殿」
「徳山五兵衛殿……」
おもわず、たがいに呼び合い、手と手を握り合った。
二人とも、去年の御狩りの一日へ賭けた緊張の、当時は無我夢中であったにせよ、いまとなって、その重味をしかと感じぬわけにはゆかなかった。
「まことに、もって……」

いいさした格之助は、後の言葉がつづかなかった。
重傷の後の病臥。さらに敬愛する岳父の死去に遭った徳山五兵衛は、さすがに憔悴の色を隠せぬ。
格之助も、五兵衛が、
（かほどに窶れていようとは……）
おもわなかったらしい。
「うっかりとしておりました。御駕籠をさしむけるのでござった」
「いや、なに……」
「お一人にて？」
「さようでござる」
「まことに、気のつかぬことを……」
「何の。もはや大丈夫にござる」
「では……」
伴格之助が先へ立ち、吹上の庭の一隅に在る〔上覧所〕内の別棟へ、五兵衛をみちびいた。
格之助が起居している、いつもの、あの部屋であった。
これまた、いつものごとく、伴格之助が奥へ入り、朱塗りの盆の上へ酒の仕度をし、もどって来た。
先ず、木盃を取り、無言のままに酌みかわす。

盃（さかずき）を置いた格之助が、
「こたびは、藤枝若狭守様御逝去（ごせいきょ）のよし、愁傷のかぎりでござる」
と、いい出た。
言葉は、在り来たりのものだが、格之助の声には哀悼の実感がこもり、藤枝若狭守の死去を惜しむこころが、まざまざと看てとれた。
こうなると言葉の表現などは、どうでもよくなってしまう。
頭を下げた格之助へ、
「かたじけのうござる」
五兵衛も盃を置き、頭を下げる。
岳父を失った悲しみを、格之助となら、
（分け合える……）
おもいがしたほどだ。
「将軍様（うえさま）にも、いたく御悲嘆あそばされまいてな」
「もったいなきこと……」
これも、嘘ではあるまい。
徳川吉宗が紀伊家から入って八代将軍の座に就いてより、幕臣・藤枝若狭守は何かと重用されていたにちがいない。
それも、表向きにではなく、種々の秘密の御役目をつとめていたことが、五兵衛にはよくわかっている。

吉宗は、五兵衛に会うことをたのしみにしていたそうだが、折悪しく、風邪（ふうじゃ）をこじらせてしまい、発熱が去らず、病間に引きこもっているそうな。
「それは……大事ではありませぬのか？」
「いや、御案じなされるな。徒（ただ）の風邪でござるゆえ」
「はあ……」
「いずれにせよ。近きうちに、上様へお目通りなさることも、めずらしきことではなくなりましょう」
「それがしが……？」
「さよう」
「と、申されるは？」
「新しき御役目に就かれましょうゆえ」
と、はじめて、伴格之助が微笑を浮かべた。

四

新しい御役目とは、何であろうか……。
五兵衛は、まったく、そうしたことを考えていなかったし、これよりは、ふたたび無役となって、平凡な日々を送るつもりだったのである。

〔本所見廻り方〕になったのは、去年の特殊な任務のためにであり、それが終ったいまは、解任されるのを待つのみであった。

これは、前に、伴格之助からも念を入れられていた。

「いやなに、徳山殿。新しい御役目と申しても、去年のごときものではござらぬ。もはや二度と、御迷惑はおかけ申しませぬ」

と、格之助がいうので、

「どのような御役目に……?」

おもいきって、五兵衛は問いかけてみた。

「いや、それは、それがしも存ぜぬこと。すべては上様の御胸の内にござる」

それ以上、尋ねてもはじまらぬ。

また、強いて知りたいともおもわなかった。

けれども、伴格之助が言い出たことゆえ、嘘ではあるまい。

そのような内意を、吉宗が格之助へ洩らしたにちがいない。

藤枝若狭守が死去してより、五兵衛は身心が空虚(うつろ)になってしまい、何をする気にもなれなかったのだが、新しい御役目に就くとなれば、それがどのようなものにせよ、

(このままではおられぬ)

そう、おもわざるを得ない。

いまの自分の体力と気力とでは、

(たとえ、どのような軽い御役目とても、つとまるものではない)

からだ。

だが、ふしぎなもので、伴格之助の言葉を聞くや、五兵衛の躰が緊張に引きしまり、何やら活力がわきあがってきたのである。

「ときに……」

と、伴格之助が居住いを正した。

顔から、微笑が消えている。

「おかげにて、どうやら、うまく始末がつき申した」

「曲者どもの……?」

「さよう。これにて、上様の御命をねらいたてまつる者も、先ず、あるまいと存ずる」

「それは、何よりのことでありましたな」

「はい、はい」

曲者どもが、どのように始末をされたのか。

そして、曲者の中に、お玉や佐和口忠蔵、それに尾張屋源右衛門などが含まれていたか、どうか……。

気にならぬではないが、それを尋ねてみても、これまた、はじまらぬ事なのである。

また、伴格之助から言い出さぬ以上、こちらから押して尋(き)くべきではない。

ただ、格之助は、曲者の一部が処刑されたことを告げ、

「そのかわりに、天下の何処へも傷をつけまいとの、上様のおこころを生かすことができるやにおもわれます」

「…………」

すると、やはり、曲者どもの背後には、将軍・吉宗を怨む尾張家の暗躍が存在したのであろうか……。

もし、そうならば、吉宗は今度の大がかりな検挙によって、うごかぬ証拠をつかんだのではないだろうか。

そうして、尾張家を威圧し、しかも尚、これを、

「咎めぬ」

という処置をするつもりなのか。

ともかくも、自分が身がわりとなったことは、

(むだではなかった……)

ということになる。

それより深い事情については、旗本・徳山五兵衛秀栄の関知するところではないのだ。

「われらも、これにて、しばらくは息をつけ申す」

ためいきを吐くようにいった伴格之助の面上にも疲労の色が濃かった。

「さて、徳山殿」

「何でござる？」

「御意簡牘の木札を、御所持でありましょうな」

いわれるまでもない。それがなければ、単身で此処まで入って来られるわけがないではないか。

「持っております」

「お返しを願いとう存ずる」

「あ……」

なるほど、隠密の御役目が終ったのちも、五兵衛が〔御意簡牘〕を所持しつづけるいわれはない。

「これは、気づかぬことを……」

懐中から、銀に葵の紋を彫りつけたものを塡めこんだ桜材の小さな木札を白絹に包んだまま取り出し、五兵衛は伴格之助の前へ置いた。

「御苦労でござった」

深く頭をたれてから、格之助は背後の白木の三方へ乗せた。

その瞬間、徳山五兵衛は、何ともいえぬ寂寥をおぼえたのである。

なるほど一命を賭した秘密の御役目をうけたまわったにせよ、二千二百四十石の旗本として、五兵衛はおどろくべき特権をあたえられた。

一枚の木札を示せば、裃もつけぬ単身で江戸城の奥深くまで、自由に出入りをするなどということは、幕府最高の役職にある老中でさえ、ゆるされるものではない。

いま思い返してみるに、これは、いかなる立身出世を遂げるより、愉快なことであったともいえよう。

その愉悦を、その特権を失うことが、さびしかった。

「さ、一献……」

と、伴格之助が五兵衛の盃へ酌をし、自分の盃へも酒をみたした。

無言で双方が盃をあげ、眼と眼を見合せ、うなずき合ってから、しずかに盃をほした。

「徳山殿……」

盃を置いた格之助が、

「おいでなされ」

と、立ちあがった。

格之助は、五兵衛を吹上の庭へいざなった。

広大な吹上の庭の一角に、去年、五兵衛が吉宗に目通りをした〔梅の腰掛〕とよばれる場所がある。

その名のごとく、茅屋根の風雅な東屋を中心にした梅林は、いま、紅白の梅が満開であった。

人ひとり見えぬ静寂の中に、徳山五兵衛は立ちつくした。

まるで、夢の中にいるようだ。

馥郁とした梅の香りに包まれ、二人は、いつまでもいつまでも無言で佇んでいた。

薄曇りの空を、一羽の鳶が高く低く、悠々と旋回している。

伴格之助が何をおもったか、腰の印籠を外し、

「これを……」

と、五兵衛へ差し出した。

五

それは、質実そのものの伴格之助の風采と、あまり縁がないような、すばらしい細工の印籠であった。

蒔絵と螺鈿により、葡萄の実と栗鼠を描いたものである。

この印籠を、

「それがしの形見とおもわれ、お受け下され」

と、格之助がいった。

「形見と申される……?」

「いやなに、まだ当分は生きておりましょうが……何分にも御存知のごとき御役目を相つとむるからには、これより先、徳山殿とも、先ず、お目にかかる機会もござるまい」

「なるほど……」

たしかに、そのとおりだ。

伴格之助は依然として、将軍・吉宗のために隠密の活動をつづけねばならぬし、徳山五兵

衛は、他の旗本と同様に平常の生活にもどる。
「さ、お受け取り下され」
「では……」
辞退する理由もない。
受け取って見て、
「これは……」
五兵衛が、印籠の細工の見事さ、美しさに瞠目（どうもく）した。
かの秘図を描きつづけているうち、五兵衛は絵師・村松桂春について正式に絵を習いもしたし、しぜん、目も肥えてきていたのであろう。
「田舎育ちのそれがしには似合わぬ品でござるが、徳山殿の腰に在れば、その印籠もよろこびましょう」
「かたじけない。頂戴いたす」
「こころよく、お受け取り下され、うれしゅう存ずる」
と、格之助が、東屋の腰掛へ五兵衛をさそった。
「かまいませぬのか?」
「はい」
この〔梅の腰掛〕は、将軍のみが使用するものと、五兵衛はおもっていたのだ。
「のう、徳山殿……」

肩を寄せ合うように、並んで腰を下した伴格之助は、
「前に、おはなし申しあげたる、曲者（くせもの）どもの渠魁（きょかい）・尾張屋源右衛門でござるが……」
「はあ……?」
さすがに、五兵衛の胸がさわいだ。
といっても、以前からくらべれば、五兵衛も滅多なことではおどろかぬようになってきている。
「このたび、曲者どもを取り調べましたるところ、三年前に、京の外れの嵯峨野（さがの）にて病死していたことが判明いたしましてな」
「ふうむ……」
おもえば、あの当時に病死してもふしぎではない年齢に達していたはずの尾張屋源右衛門なのだ。
正しい年齢は知らぬが、当時、十八歳の五兵衛の目には、
（六十をこえて……）
見えたものである。
もっとも、年少の者の目に映る大人の姿は、実際よりも老けて見えるわけだから、あるいは、当時の源右衛門は五十前後であったやも知れぬ。
（糸瓜（へちま）のような顔……）
と、五兵衛がおもったほどに、長い顎（あご）で喉（のど）もとが見えぬほどの顔。そして長い躰の尾張屋

源右衛門であった。
　また、眸が見えぬまでに上瞼がたれ下っている細い両眼といい、長い鼻すじといい、まさに異相といってよかった。
　それでいて、
（江戸の父上よりも、格段に立派だ）
　と、五兵衛が源右衛門をながめたように、何ともいえぬ品格があって、去年、伴格之助が、
「尾張屋源右衛門は、若きころ尾張家に仕えていた……」
　といったのを聞いた折、五兵衛は、
（なるほど、さもあろう。それならば、おそらく、低い身分の家来ではなかったにちがいない）
　推測をしたものだ。
「尾張屋源右衛門は、若きころ、同じ尾張家の臣を殺め、名古屋城下を脱け出したのでござるが……」
　伴格之助の声に、五兵衛が、
「それは、また、どのような？」
「いや、そのことは、別に、取るに足らぬことと存ずる。なれど、尾張家では蔭ながら源右衛門を庇護し、後に、京へ旅宿を開かせ、その主人に据え、同時に、特別の役目をあたえたのでござろう」

「特別の役目……」
「さよう」
　うなずいた格之助が、微笑を浮かべた。
　徒の微笑ではない。
　何ともいえぬ哀しげな微笑であって、その笑顔を、五兵衛は終生、忘れることができなかった。
　去年の晩春、初夏のころから今日まで、徳山五兵衛は、おもいもかけぬ隠密の役目にはたらき、伴格之助らの仕事を垣間見ることを得たわけだが、
（このようなことを何年も何年も、つづけにつづけていたのでは、たまったものではあるまい）
　と、考えたことがある。
　妻や子、家族と家庭……そうしたものをすべて、打ち捨ててしまわねば、できる仕事ではない。いや、つとまる役目ではないのだ。
　伴格之助の私生活については、まったく知らぬ五兵衛だが、現に、格之助は江戸城内の、こうした場所に独りで暮しつづけているのである。
　徳川幕府と尾張家。
　徳川将軍と尾張家の複雑な関係については、すでにのべておいたが、それだけに尾張家としては、諜報網をととのえざるを得なかったろう。

事実、それは諸国大名家にくらべると、卓絶した組織を誇っていたといってよい。

源右衛門は、京都の旅宿・尾張屋の主人になりすまし、その一端を担っていたことになる。

しかも、ついに、将軍暗殺計画の首魁となっていた。伴格之助の言によればのことだが……。

「では、その尾張屋源右衛門なるものは、三年前に病死していたと申される？」

「さよう」

「ならば、このたびの陰謀を指揮したる者は、いずこの、何者でござる？」

おもいきって、五兵衛は尋ねてみた。

「さよう……」

伴格之助は、一瞬、いいよどんだが、五兵衛にならば、これほどのことを打ち明けても、

（さしつかえなし）

と、判断したものか、

「それが、浪人でござってな」

「浪人と申される……」

「さよう。佐和口忠蔵と申し、その父親は、伊勢の桑名の浪人にて、一刀流の剣客でござった」

「ふうむ……」

そのことは五兵衛も、わきまえている。

「その佐和口は、父親の代から、尾張屋源右衛門と懇意の間柄にて、これが縁となったのでござろう。佐和口忠蔵は源右衛門と心を合せ、上様の御命をねらいたてまつることになったようにおもわれます」

「…………」

「まことに、浪人が増えるばかりにて……このことについては、上様も、ほとほと御頭を痛めておわします」

五兵衛は、こたえなかった。

むかし、恩師・堀内源左衛門道場にいたころからは想像もつかぬ変貌をとげた佐和口忠蔵の心境の推移については、さすがの五兵衛も判断がつかなかった。

おもうに……。

佐和口忠蔵も、尾張屋源右衛門という人物の魅力に引き込まれてしまったのではないか。

そして、一介の剣客として生涯を終えるよりも、源右衛門のために一命を賭けることに生甲斐をおぼえたのではないだろうか……。

それにしても、

（大坂の長崎屋に嫁いでいる、佐和口の妹・お幸は、どうなったのであろう？）

五兵衛のおもいが、そこへ至ったとき、期せずして伴格之助が、お幸のことをいい出たのである。

六

「佐和口忠蔵は、五日前に、首を打たれまいてござる」
そう告げたのちに、
「その佐和口に、妹がひとり、ござってな」
と、格之助がいい出た。
五兵衛は、瞬き一つしなかった。
佐和口が処刑されることは、当然であったからだ。
「その妹も、一味に？」
わざと、素知らぬ顔で尋ねた五兵衛へ、
「いやなに、妹のほうは何も知りませぬ。大坂の、さる薬種舗に嫁いでおりましてな」
「さようでござるか……」
「この方へは、何のおかまいもなく、おそらく佐和口の妹とやらは、兄が行方知れずになったままと、あきらめておりましょう」
「なるほど……」
佐和口の妹・お幸からの、五兵衛への音信がぷつりと絶えてから、何年になろうか……。
まさに、お幸は、兄の行方を追うことをあきらめてしまったにちがいない。
「さて、徳山殿……」

「はあ……」
「このようなことを、そこもとへ申しあぐるのは、将軍家の思（おぼ）し召しを、わきまえておいていただきたいゆえでござる。何となれば、いまも申したごとく、そこもととそれがしとは、ふたたび面語の折もなきことと存ずるゆえ……」
つまり、今度の事件において、逮捕した曲者たちと、それに関（かか）わる一味の者以外へは、
「手をつけぬ」
ことが、将軍・吉宗の意向だということなのだ。
結果は未遂となったが、将軍暗殺の大異変を、吉宗は可能なかぎり、隠密裡（り）に、
「ほうむりたい」
と、しているらしい。
それというのも、曲者どもの背後にある徳川御三家の一、尾張家のことを慮（おもんばか）ったからであろう。
この事件を白日のもとに曝（さら）してしまっては、どこまでも相手方を追求せねばならぬし、そうなれば、天下が騒然となること、いうを待たない。
これも御三家の一である紀伊家から、将軍位に就いた徳川吉宗は、これから、さらに腰を据えて治政に取り組まなくてはならぬ。
将軍と、その親族とが忌わしい暗殺事件を中心にして対決するようなことになれば、
「わが治政に汚点を残す……」

ことにもなろう。
ただし、尾張家に対しては、素知らぬ顔をしているわけでもあるまい。
捕えた曲者たちへの、きびしい取り調べと、彼らの隠れ家の捜索とによって、吉宗と蜻蛉(せいれい)組(ぐみ)とは、相当の証拠を、
（つかんだに相違ない）
と、五兵衛は看ている。
もっとも、それは、尾張家が曲者どもへ、あからさまに、
「将軍を暗殺せよ」
との指令を下したのではない。
あくまでも、尾張屋源右衛門、佐和口忠蔵を中心とする曲者一味の計画と実行なのであって、曲者たちも、尾張家との結びつきを、どの程度までわきまえていたかである。
源右衛門、佐和口など少数の者は、たとえ尾張家との関わり合いがあったにせよ、白状をしなかったろうし、末端の曲者たちが自白をしたとしても、それは尾張家へ影響をおよぼすほどのものではなかったのではあるまいか。
しかし、これまでの長年にわたる蜻蛉組の探索の積み重ねと、今度の事件での捜査と取り調べによって、将軍家は、たとえわずかではあっても、双方の関連を証拠としてつかむことを得たにちがいない。
なればこそ、吉宗は、事件を秘密のうちに解決したともいえよう。

すなわち、将軍と幕府は、その証拠を、尾張家へ突きつけたとみてよい。
尾張家としても、これを、みとめぬわけにはまいらなかったろう。
おそらく……。
曲者どもが暗躍するための費用、隠れ家の設置その他について、尾張家は相応の援助をしていたものと推察される。
それも、尾張家の隠密組織が密(ひそ)かにおこなっていたのであろう。
そこの接点を、蜻蛉組が、
（突きとめることを得た……）
のではあるまいか。
「曲者どもは、いずれも、何らかのかたちにて、むかしは尾張家とのつながりがあったのでござるか？」
徳山五兵衛の問いに、伴格之助は、あいまいな微笑を浮かべて、
「しかとはいいきれませぬ」
と、いったのみだ。
五兵衛は、うなずき、
（この上、問うてみてもはじまらぬ……）
おもい直したのである。
いずれにせよ、これからは、

（尾張家も、温和しゅうなろう）

それが、将軍・吉宗のねらいだといってよい。

こうした徳川吉宗の寛大な扱いをうけては、吉宗への怨念と将軍位への執念を、尾張家は捨て去るほかはない。

たぶん、曲者たちと連繋のあった尾張家の士が少数は浮かびあがったろうが、吉宗は、まったく、尾張家への制裁をおこなわなかったらしい。

そのかわり、しかるべき証拠の品や証言は、しっかりと将軍・吉宗の手に握られてしまったのではあるまいか。

「さて、徳山殿。名残り惜しゅうはござるが……」

いいさして、伴格之助が腰掛から立ちあがった。

五兵衛も、わずかに頭を下げ、腰をあげた。

いつの間にやら、日がかたむきはじめているではないか。

さほどの時間が過ぎたとはおもわれなかったが、早くも二刻半（五時間）もの時間を、五兵衛は格之助と二人きりですごしたことになる。

吹上の庭に、日が翳りはじめ、鶯の声も絶えていた。

どちらからともなく、五兵衛と格之助は手を差しのべ、しっかりと握り合い、声もなく一礼した。

それから、伴格之助は、五兵衛を竹橋御門外まで見送ってくれた。

これから先は、かの〔御意簡牘〕がなくとも五兵衛の通行が可能である。

そこで、立ち止った五兵衛が、

「格之助殿。では、これにて……」

挨拶をしかけるのへ、

「あ、いや……」

格之助が手をあげて制し、尚も名残り惜しげに、一ツ橋御門外まで、五兵衛につきそって来た。

両人とも、言葉は絶えている。

門外を出て、濠端の道を歩みつつ、徳山五兵衛が二度三度と振り向くたびに、一ツ橋門外に立った伴格之助が、手をあげて、これを打ち振るのが見えた。

このときより、二度とふたたび、五兵衛は格之助を見ることがなかった。

七

ふしぎなもので……。

徳山五兵衛が伴格之助との関係をもったのは、わずか一年に満たぬ月日であったが、徒事ではない明け暮れをすごした所為もあってか、その印象は、まことに強烈であった。

以後の五兵衛は、尾張屋源右衛門や佐和口忠蔵などよりも折にふれて、格之助の風貌をおもい浮かべるようになる。

夢の中にも、格之助は何度もあらわれてきた。

その夢の中に、何とも奇妙なのが一つあった。

その夢は、こうだ。

梅薫る吹上の庭で、五兵衛と語り合っているうちに、突然、伴格之助が尻を捲りあげたものである。

その白くて豊満な臀部が、格之助の風貌とは、

「まったく、別の……」

生きもののようにおもわれ、五兵衛が息をのんでいるのへ、格之助にやりと笑いかけたかとおもうと、突然、放屁した。

しかも、たてつづけの放屁の、すさまじいばかりの音響に、五兵衛が、ただもう魂消ていると、

「これでよし。これでよし、よし……」

格之助が唄うようにいい、白くてふとやかな臀部をむき出しにしたまま、吹上の庭を彼方へ遠去かって行く。

五兵衛は立ちつくしたまま、これを見送っている。

と、一度も振り返らずに遠去かりつつあった伴格之助が、豆粒ほどに小さくなってから、くるりと振り向いた。

現実ならば、その顔も定かではないほどに遠去かっていたのだが、そこは夢だ。豆粒ほどの顔が五兵衛には、はっきりと見えた。

顔が変っている。

格之助の顔ではなく、なんとそれが、むかしむかし、五兵衛が少年のころ、自邸の文庫蔵で手ごめにした侍女の鶴の顔になっている。

つまり、侍の姿をした鶴なのだ。

これも奇妙なものだが、さらに、おどろいたのは、吹上の庭の芝生に身をくねらせて迫って来た蛇が、いきなり五兵衛の足へ嚙みついてきた。

「あっ……」

その衝撃で、五兵衛は目ざめた。

満身が、気味悪い冷汗に濡れつくしていた。

夢というものは、まことに、ふしぎなものであって、

(それは、我知らず、おのれの胸の底に潜むものが、さまざまに組み合わさって、夢の中にあらわれるのであろうか……)

五兵衛は、いたく興味をおぼえたものだ。

年少のころから、徳山五兵衛は、よく夢を見るほうであった。

夢は、さめた直後なら、はっきりとおぼえているものだが、間もなく忘れてしまうという。

しかし、伴格之助放屁の夢だけは、あまりにも奇妙であったゆえ、五兵衛は日記に書きとめておいた。

さて……。

〔御意簡牘〕を返上し、吹上の御庭で伴格之助と別れた、その日、本所の屋敷へ帰ると、病後だけに疲労が激しく、

（わしは、いつの間に、このような益体もない躰になってしまったのか……）

つくづく、なさけないとおもったが、翌朝になると起き出せたし、寝込むようなことにはならなかった。

これは、やはり、気が張っていたからにちがいない。

隠密の大任から解き放たれた虚脱感のかわりに、伴格之助から、

「近きうちに、新しき御役目に就くことになりましょう」

との言葉をあたえられた。

それが、どのような役目かは知らぬが、格之助のいうことに、

（嘘いつわりはない……）

といってよい。

となれば、その御役目をつとめられるだけの体力と気力を、いまのうちに養っておかねばならぬ。

五兵衛は、邸内の道場へ出て行き、すこしずつ、躰を剣術の稽古に慣らしてゆくようにつとめはじめた。

そして、夏が来るころには、五兵衛も、

（もはや、大丈夫……）

体力の回復に自信がもてるようになれた。

それにしても、新しい役目についての御沙汰は何もない。

将軍・吉宗は、引きつづいて米価や物価の調節をはじめ、新しい法令をいくつもつくり、治政に没頭している。

徳山五兵衛は、久しぶりで剣術の稽古に没頭した。

やはり、年少のころの、堀内源左衛門に薫陶を受け、一時は、父・重俊の冷遇にたまりかね、

（江戸を出奔して、一介の剣客になってしまおう）

決心をしたほどの五兵衛だけに、いったん、稽古にはげみはじめると、

（やはり、よい。つまるところ、わしの生涯にはこの道一つより無かったのではないか……）

いまさらに、おもわれもする。

外神田に心貫流の道場を構える窪田甚五郎安照が、引きつづいて、三日に一度は徳山屋敷へあらわれ、稽古をつけてくれるし、小沼治作をはじめ、家来たちも倦むことなく出精する。

門番の足軽たちにも、五兵衛は稽古をゆるした。

五兵衛は、久しぶりに稽古へ没頭することを得たので、それが新鮮に感じられ、一方には、日に日に体力がつき、何やら若々しい気分にもなって、しだいに、日々が充実してきた

ようだ。

秋風が立ちそめるころになって……。

池の端仲町の高級小間物店の主人・日野屋文吉が急死をした。

日野屋は、すでに七十を超えていたし、それにしては、あまり寝込んだこともなく、五兵衛も日野屋文吉が死ぬることなど一度も考えてみたことがない。自分が若いころから、

（日野屋は、いささかも変っておらぬ……）

ように、おもえていたからだ。

亡くなった日の午後。

日野屋文吉は、跡つぎの息子の文太郎へ、

「明日は久しぶりで、徳山様へうかがって、殿様のお顔を拝見してこよう」

などといい、奥へ入り、昼寝をした。

一刻ほどして、文太郎の妻のお里が奥へ行くと、文吉が、

「いま、何刻だろうね？」

と、尋ねたので、お里が、しかるべき返事をするや、

「そうかえ。ならば、もう少し寝よう」

こういって、すやすやと寝息をたてはじめた。

ところが、いつになっても起きて来ない。

夕闇がただようころになり、お里が気づき、奥へ行って、

「もし……もし……」

声をかけたが、返事がない。

すでに、そのとき、日野屋文吉は息絶えていたのだ。

知らせを受けて徳山五兵衛は、小沼治作一人を連れたのみの微行で、日野屋へ駈けつけ、文吉の通夜の席へ連なった。

二千何百石の直参としては、破格の事といってよいだけに、日野屋方の感動は非常なものであった。

五兵衛としては、当然の事をしたまでである。

五兵衛が若いころから今日に至るまで、日野屋文吉は、単に屋敷へ出入りの商人としてではなく、何かにつけて、

（わしが最も頼りにしていた者の一人……）

だったのである。

ことに、京の〔東林〕の、お梶・お百合の母娘との関わり合いにおいて、五兵衛は日野屋文吉から受けた好意と、骨身を惜しまぬ取り持ちを、忘れることができない。

身分のちがいはあっても、五兵衛は胸の内で、

（まるで、わしの叔父ごのような……）

親しみをおぼえていたのだ。

（さまざまな事に関わり合ってきたというに、死別れをするときは、このように果敢無いも

のなのか……)

このことであった。

八

日野屋文吉が亡くなったときは、日野屋との過去の出来事が脳裡へ浮かんできて、それは必然、いまは亡きお梶や、お百合との思い出をよぶことにもなる。

(お百合は、いまも東林にいるのであろうか……)

だからといって、無性に会いたいというのではない。

去年の異変以来、徳山五兵衛は、

気分になってしまっている。

(十年も年をとったような……)

老け込んだというのではないが、たとえば、お百合のことを想ってみても、あの若い凝脂(ぎょうし)に照っていた女の肌の感触や匂いを想起して、心が燃えることもない。

妻の勢以の肌身を抱くことも忘れてしまった。

もっとも、いまだに五兵衛は、十四年も連れ添った勢以の裸身を見たことがない。

いや、見せてはもらえぬままに、交渉が絶えてしまった。

それでいて、ちかごろは勢以のことが、まるで肉親のようにおもえてきて、女だの妻だのというよりは、自分が生まれたときから、勢以も自分の屋敷にいたような気がしてならぬ。

(お百合は、三十をこえていようか……)

そうおもったりして、はっと気づき、

(わしも、どうかしている……)

お百合が突然に江戸へあらわれ、五兵衛と濃密な情交の日々をすごしたのは、去年の初夏ではないか。

とすれば、お百合は二十三歳になっているわけだ。

この一年が、十年にもおもわれるという五兵衛の感覚は、こうしたところにも看てとれる。

このとき……。

京都に住み暮すお百合の身には、徳山五兵衛が、それこそ、

(夢にも見なかった……)

事態が起っている。

いや、すでに起っていた。

それが、どのようなことか……。

五兵衛が知るのは、これより先、約三十年近くも先のことになる。

ところで……。

日野屋文吉の死後、一ヶ月ほどがすぎてから、徳山五兵衛は新しい御役目に就くことを命じられた。

その役目は、

〔御書院番頭〕
であった。
この〔書院番〕というのは、戦時ともなれば小姓組と共に将軍を護る、つまり将軍の親衛隊であって、平時は江戸城中の要所をかため、儀式に際しては小姓組ともども、将軍の介添をつとめる。
また、将軍が外出の折は駕籠の前後をかためなくてはならぬというわけで、まことに重い役目だ。
書院番は、いま、五組から成ってい、各組に一人の組頭があり、その下に番衆五、六十人。および与力十騎・同心二十人が配属される。
徳山五兵衛は、第三組の組頭に任命されたわけで、二千二百四十石の身分としては、異例とまではいいきれぬが、相当の昇進といってよい。
さらに、この役目は、将軍護衛の重責を担うだけに、徳川譜代の家柄の出でなくてはつとまらず、いわば、名誉の〔御役目〕といってよい。
五兵衛にしても、
（まさかに……）
この御役目に就こうとは、おもってもみなかった。
書院番の頭ともなれば、将軍・吉宗の側近く仕えるわけゆえ、五兵衛の胸は躍った。
躍らざるを得ないではないか。

けれども、五兵衛は自戒をした。
今年の春、吹上の庭での伴格之助の言葉を、おもい起したからである。
あの事件は、
「闇から闇へ、ほうむり去られた……」
ことになっているのだ。
五兵衛が将軍・吉宗の身代りになったこともふくめて、目撃者がないわけではないから、密かなる風評はあろうとも、あくまでも、これを表沙汰にしてはならぬ。
それが、吉宗の意向なのだ。
（そのことを、わしは忘れまい）
と、五兵衛は胸に誓った。
どこまでも、新しい徳山五兵衛として、将軍や蜻蛉組と関わり合った五兵衛ではない五兵衛として、新しい役目をつとめねばならぬ。
こうして、いざ、役目に就いてみると、吉宗のほうでも、まるで新しい五兵衛に接するような態度でのぞんできた。
去年の事は、気ぶりにも出さぬ。
それでいて、何かの拍子に、五兵衛を見やる吉宗の眼の色には、特別の親しみをこめた感情がわずかにあらわれることもあった。
そのたびに、五兵衛は感激したものである。

当然ながら、

（上様は、あのときのことを、お忘れになってはいない）

のである。

なればこそ尚更（なおさら）に、五兵衛は身をつつしみ、こころをつけて役目をつとめた。

なるほど、この役目は生半（なまなか）の〔御役目〕ではない。

城中ではむろんのこと、将軍の外出ともなれば、必死懸命につとめねばならぬ。

まして徳山五兵衛は、あのような大異変を、それこそ、

（身をもって……）

体験しているだけに、寸時も、こころをゆるさなかった。

ただ、吉宗を見るとき、おもわず、

「伴格之助殿は、いかがしておられましょうや？」

尋ねかけたいおもいに駆られ、五体が熱くなったものだ。

五兵衛の書院番頭就任と共に、徳山屋敷にも、こころよい緊張が行きわたった。

何といっても名誉の御役目だけに、勢以も頼屋も、柴田勝四郎以下の家来、奉公人たちも気をゆるめずに五兵衛をたすけてくれる。

それが、こころよい。

書院番を、どれほどつとめねばならぬのか、それはさておき、

（わしも、これよりは、どうやら大過なく、直参としての生涯を終えることができそうな

……）

五兵衛は、そうおもった。

間もなく、五兵衛は四十歳になる。

当時の四十歳は、現代の五十歳にも五十五歳にも相当しよう。

（これで決まった……）

おのれの一生が、である。

これより先は、これまでのような波瀾（はらん）は起るまいと考えられた。

けれども、これから先の徳山五兵衛秀栄（ひでいえ）の後半生には、むしろ前半生の変乱にもまさるといってよい出来事が待ち構えている。

それは、将軍の身代りになったほどの事ではないにせよ、五兵衛が老年にさしかかっただけに……いや、その後の、すでに老いた五兵衛の身にも、驚愕（きょうがく）の事どもが待ち構えているのである。

いまの五兵衛は、それを知らぬ。

ただ、若年のころとはちがい、これからの徳山五兵衛の後半生は急坂を下るがごとき早さで展開されることであろう。

九

男の少年期の一年は、

「老年の十年にも十五年にも相当する」

と、いわれる。

男であるからには、だれしも、この言葉をもっとものこととおもうであろう。

少年期から青年期にかけては、大人としての成熟期よりも万端にわたって気をくばることもできず、未熟なままに、せまい環境の中で、

「一日も早く、大人になりたい」

踠きつつ、日を送っているわけだが、そのころの記憶力は、日々の出来事の一つ一つを、頭脳へ……というよりも、その若い肉体へ、しっかりと刻みつけてしまう。

ゆえに……。

若き日には成熟した大人への願望に焦り、新しい年の明けるのが待ち遠しいのだ。それが歳月の経過を、非常に長く感じさせるのやも知れぬ。

そして、年長けて若き日を振り返ってみるとき、現在のおのれの、あまりにもたよりない日々の記憶に引きくらべ、むかしの記憶の鮮明さに、

(若いころは、一日一日が充実していたものだ。一年一年が、あれほどの内容にみちていた……)

と、おもうのであろう。

現代の人びとのありようはさておき、一時代前までの日本人は、大人になるや否や、われ一個のみの人生というものは消え失せてしまう。

大人としての責任は、その仕事の上に、家長としての暮しの上に、繁雑をきわめて伸しかかってくる。

われ一人の自由も、長くて、もてあましていた日々も、途端に消え果ててしまうのだ。

社会の人としての責任が大きく重くなるにつれ、二倍にも三倍にも時間が、

「増えてほしい……」

ことになる。

こうなれば、それこそ、

「あっ……」

という間に、一年が過ぎ去ってしまう。

徳山五兵衛秀栄が、書院番頭をつとめた期間は、足かけ五年にわたり、役目を解任せられたとき、四十二歳になっていた。

この五年間の短かさは、五兵衛にとって、これまでにおぼえがないほどで、懈怠もなく懸命に御役目をつとめるうちに経過した五年の歳月の果敢無さをおもい、五兵衛は憮然となった。

また、この五年の間、将軍・吉宗としても、緊迫の明け暮れがつづいていたようである。

それだけに、五兵衛の役目も油断はならなかった。

たとえば、かの〔天一坊事件〕などというものが起ったりした。

これは、何処からかやって来て品川へ住みついた天一坊改行という山伏が、

「われは、将軍の御落胤である」

と名乗り、

「近きうちに、三十万石の大名に取り立てられることになっている」

などと吹聴しては、浪人どもをあつめ、その浪人たちは、天一坊が将軍に目見えをするときの仕度金を献上したりしていることが発覚し、関東郡代・伊奈半左衛門の手によって捕縛され、評定所の裁決が下って処刑をされた。

つまり天一坊は、一種の詐欺師のようなものであったのだろうが、これが講談や芝居になると、かの町奉行・大岡越前守が重要な役をつとめ、天一坊の生い立ちも、なかなか手の込んだ巧妙な筋立になっている。

吉宗は、すでにのべたように、女色の点でも相当の強者であったし、

「まんざら、嘘ではない」

という説も、ないではない。

いずれにせよ、この事件も、闇から闇へほうむられてしまった。

吉宗は、天下の平穏を願うためには、自分の暗殺に関わる重大事件をも、表沙汰にはせぬほどの将軍なのである。

これに類似した事件が、吉宗の治政中に数度ある。

天一坊事件の折も、蜻蛉組の探索がおこなわれたにちがいないと、徳山五兵衛はおもった。

だが、伴格之助はむろんのこと、片桐半之介とも、五年の在職中に、五兵衛は会うことが

なかった。

さらに、いま一つ。

これは天一坊一件とは、くらべものにならぬ事変が起った。

事変とよぶには、いささか大仰であるやも知れぬが、その波紋の大きさは他の小事件と比較にならぬ。

大名が一人、急死したのだ。

その大名とは、ほかならぬ尾張家の君主・徳川継友である。

将軍御三家の一である尾張・名古屋六十一万九千石の徳川家は、これも御三家のうちの紀州藩・徳川家と八代将軍位を争い、ついに敗北し、紀州から吉宗が入って将軍となった。

そのときの尾張・徳川家の悲歎と憤激は非常なものであって、なればこそ、徳山五兵衛が吉宗の身代りとなった事件も惹起したわけだ。

さて……。

紀伊家の徳川吉宗と将軍位を争った尾張家の徳川継友の急死については、侍医・高橋玄仙の診療日誌にも、そのころ東国一帯に蔓延していた麻疹にかかったのが原因だと書き記してあるが、

「いや、これは将軍家が手をまわされ、毒殺してしまったのだ」

との風評がながれ、江戸はさておき、尾張名古屋の城下では、騒然たるものがあったという。

尾張藩士の激怒、憤激も再燃し、したがって、将軍警護の役目にあたる書院番も緊張せざるを得ない。

吉宗は、これを意に介する様子もなく、継友亡き後の尾張家は、継友の弟の宗春(むねはる)をもって継がしめたのである。

これは、徳山五兵衛が書院番頭を解任せられた前年のことであった。

十

無役となった徳山五兵衛は、特例をもって、

〔寄合組〕(よりあいぐみ)

に、列せられた。

三千石以下の幕臣が無役となったときは〔小普請組〕へ入るわけで、五兵衛も父・重俊亡き後、家督をした折には、小普請へ列していたのである。

それが今度は〔寄合〕入りとなった。これはあきらかに、五兵衛の実績がみとめられ、幕府が格を上げてくれたことになる。

亡父の重俊も、長年にわたって諸役を歴任し、遺漏がなかったのをみとめられ、晩年に無役となったときは、三千石以上の資格をもって〔寄合〕に列した。

父子二代にわたっての名誉といってよい。

こうして五兵衛は、御役目をはなれた。

ふたたび、退屈の明け暮れを送ることになったわけだ。

依然として、剣術の稽古をつづけてい、それはそれで、五兵衛にとっての生甲斐(いきがい)ではあったが、何といっても若いころとはちがう。

四十をこえた徳山五兵衛秀栄が、剣術のみで、こころが満ち足りるわけのものでもない。

これまでの五年間の、緊迫にみちた明け暮れの中にあってこそ、寸暇をぬすみ、木太刀(きだち)を握ることも愉快であったが、

「さあ、暇になったから、一日中、道場へ入っていてもよい」

となれば、あまり有難くもない。

仕事の閑暇に、ひろびろとした野外へ出て、ゴルフをするからこそたのしいのであって、これが毎日のようにゴルフをたのしみなさいといわれても、さて、どんなものであろうか……それと同じようなものだ。

或夜……。

久しぶりに、五兵衛は離れ屋の〔書見の間〕に入ってみて、

(ああ……しまった……)

と、おもった。

将軍の身代りになることが決まり、御狩りの当日が近づいたとき、東林のお梶から贈られた住吉慶恩描くところの絵巻一巻と、五兵衛みずからが熱中した男女の秘戯図を残らず焼き捨ててしまったことが悔まれてならなかった。

（このような日々が、わしに残されていたのなら、あのとき、焼き捨てるのではなかった……）

このことである。

自分の描いた絵はさておき、せめて、慶恩作の一巻だけは残しておくべきであったと、五兵衛は唇をかみしめた。

秘戯図の出来栄えもすばらしいものであったが、あの絵巻には、お梶の面影と、自分の青春そのものが塗り込められているようなおもいがする。

（死後の恥など、深く考えずともよかったのじゃ）

いかに口惜しがっても、追いつかぬ。

われ知らず五兵衛は、二坪の板敷きの書庫の地袋の戸を開けて見た。

絵筆・絵具・画紙など、あのころの諸道具が薄く埃をかぶっていた。

書見の間は、五兵衛の許可がなくては出入りができぬことになっている。

ふと、絵筆を手に把ってみたとき、五兵衛は勃然と五体が燃え立った。

その翌日。

用人・柴田勝四郎を居間へよんだ五兵衛が、

「数寄屋橋御門外の玉章堂へ、使いを出してもらいたい」

「はい」

玉章堂・近江屋源四郎は、文房具の老舗であって、以前、五兵衛は秘図制作のための諸道具や絵具を、この店でととのえた。

「またも、絵をお描きあそばしますか?」

と、勝四郎は察しがよい。

もっとも、この用人は、五兵衛が描く絵がどのようなものか、いささかも知ってはいない。

「うむ。暇になったので、な……」

「結構の事と存じまする」

勝四郎は、大賛成だ。

四十をこえた殿様が、若い家来たちと共に、剣術の激しい稽古をやっているのを見て、

（万一、怪我でもあそばしたなら……）

心配でたまらなかったらしい。

柴田勝四郎は剣術にも絵画にも無縁の男なのだが、どうせ、殿様が何かするというのなら、おとなしく絵筆に親しんでくれたほうが、二千二百四十石の用人として、

（どれほど、気が安まるか……）

知れたものではない。

「では、すぐさま……」

勝四郎が使いを走らせ、この日の午後には、玉章堂の主人・源四郎が屋敷へあらわれた。

かくて、ふたたび、六年前までの秘密の夜が、徳山五兵衛にもどって来たのである。

絵という絵は、すべて焼き捨ててしまったのだから、もはや、手本にするものがない。

「ふうむ……」

筆紙の用意をととのえ、夕餉を終えるのも、もどかしく、書見の間へ閉じこもった五兵衛秀栄は微かに唸り声を発し、瞑目をした。

五兵衛は先ず、住吉慶恩の絵巻を想い起そうとしたのだ。

すると、どうであろう。

あの絵巻の一齣一齣が微細にわたって、脳裡へ浮かんできたではないか……。

人物のみではなく、点景の一木一草に至るまで、はっきりとおぼえていたことに、われながら五兵衛はおどろいた。

なるほど、数年にわたっての夜な夜なを、この秘戯絵巻と共に送ってきた五兵衛ゆえ、当然のことやも知れぬ。

むかしの宮廷の、やんごとなき男女が、密会の部屋へ入って来るところから始まる絵巻は、奥庭の闇に螢が飛んでいる夏の夜の、男女ふたりきりの酒盛りから、やがて貴族の男が酔いにまかせ、女に挑みかかる。

はじめは拒んでいた女が、しだいに呼吸を荒らげ、男の頸すじへ双腕を巻きつけ、男は、つぎつぎに女の衣類を剝ぎ取ってゆく。

昂奮の血の色に染まった、豊満な女の裸身を見るや、男は猛然と自分の身につけているものを脱ぎ捨て、女を抱きしめる。

さてそれから、愛撫に熱中し、没頭する男女の、ありとあらゆる姿勢が展開される。

「うむ……」

強くうなずいた五兵衛が、墨を磨り、筆を手にした。

先ず、紙へ筆を下してみる。

すると、意外なほどの円滑さで筆がうごいてゆくではないか。

(む。これは……)

五兵衛は、息をのんだ。

息をのみつつ、絵筆を走らせる。

ともかくも、こころおぼえのままに、簡略な素描をするつもりであったが、わけもなく一齣を描き終えてしまった。

何年も手にしなかった絵筆であるが、あれほどの秘戯図を数年にわたって描きつづけていた五兵衛だけに、筆さばきも堂に入ったものだ。

(よし。これなら、やれる……)

五兵衛の双眸の光りに、ちからが加わった。

その翌朝……。

遅くなって居間へあらわれた五兵衛に、柴田勝四郎が、

「いかがでございました?」

「何がじゃ?」

「昨夜は遅くまで、絵筆をお把りあそばしたとか……」

「おお。さよう。久しぶりのことゆえ、つい、時がたつのを忘れてしまってな」
「さようでござりましたか……」
「やはり、おもしろい」
「さほどに?」
「絵を描くことは、よいことじゃ」
「いかさま」
「疲れてのう」
「あまり、度をおすごしあそばされてもいけませぬ」
「心得ている」
こたえる五兵衛の瞼(まぶた)が、赤く腫(は)れあがっている。
「勝四郎、御作を拝見いたしたく存じまする」
「いや、待て」
「は……?」
「まだ、人に見せるような絵にはなっておらぬ。何分にも久しぶりゆえ、おもうように手がうごかぬ。絵も剣術と同じことじゃ」
「ははあ……」
「そのうちに見せてつかわそう」
「奥方様にも、拝見がたのしみじゃとおおせられまして……」

「さようか」
五兵衛は、油断してはならぬとおもった。
人に見られても恥じることのない絵も、
(描いておかねばならぬ)
のである。
夕暮れが近づくと、五兵衛はそわそわと落ちつかなかった。
そして夕餉をすますや、たちまちに書見の間へ閉じこもった。

十一

享保十七年の晩春。
神尾五郎左衛門守親が病歿(びょうぼつ)した。
一時は、五兵衛の岳父・藤枝若狭守よりも先に、
(身罷(みまか)るのではないか……)
と、おもわれたほどに、神尾守親の病患は重かったものだが、ここ三年ほどは、すっかり回復し、
「六十をこえてよりは、われながら、ふしぎに躰(からだ)の具合がよくなったようにおもわれる。これならば五兵衛殿、あと五年……いや、十年ほどは、わけもなく生きておられるような気がしてまいった……」

或日、訪問した徳山五兵衛に、神尾守親は、たのしげにそう語ったが、それから七日後に急逝したのである。

神尾屋敷の奥庭には、すばらしい八重桜の老樹があって、江戸市の他の桜が散りかけるころ、ようやくに花が開く。

したがって、散るのも遅い。

年によっては、苗売りの呼び声が市中をながして歩くころまで、花が残っていることがある。

その日の朝。

神尾守親は、満開の桜樹の下に立ち、つきそっていた用人の福田高之助（平太夫の息で、いまは父の跡をついでいる）をかえりみて、

「そうじゃ。今日は夜桜の酒宴をいたそうではないか」

と、いい出た。

「は。結構に存じまする」

「五兵衛殿を招きたい。日暮れ前までに、こちらへ到着されるよう、すぐさま使いを出すがよい」

「心得ました」

「そうじゃ。そのほうと仲のよい、徳山家の用人・柴田勝四郎も招いてつかわせ」

「かたじけのう存じます」

両家の用人は、先代の平太夫・宗兵衛のころからの親交が、そのまま引き継がれている。

「では……」

福田用人が、その場を立ち去り、中小姓の長井平馬へ主人の口上をつたえ、本所の徳山屋敷へ使いに出した。

親類どうしであり、ことさらに交誼が深い両家のことゆえ、こうした場合には見栄も体裁もいらぬわけで、五兵衛もおそらく、頭巾に顔を隠し、柴田勝四郎と小沼治作の二人のみを供に、微行で来邸するにちがいない。

「手配りをいたしましてございます」

いいながら、奥庭へもどって来た福田高之助が、

「あっ……」

おどろきの声を発し、

「だれかおらぬか。出合いなされ、出合いなされ」

叫びつつ、桜樹の下へ駈け寄った。

神尾守親が、そこに倒れ伏しているのを見たからである。

「と、殿……」

抱き起すと、すでに息絶えた主人の、いかにも安らかな死顔が高之助の胸もとへ、がっくりと埋まった。

あまりにも呆気ないといえば、呆気ない。

しかし、満開の桜花に見惚れているうち、突如、心ノ臓のはたらきが止ったのだから、苦しみも一瞬のものであったろうし、当時としては年齢に不足があったともいえぬ。

知らせを受けた徳山五兵衛は、直ちに番町の神尾屋敷へ駈けつけ、遺体を前に、茫然として声もなかった。

五兵衛秀栄は、このとき、四十三歳になっている。

神尾五郎左衛門守親は、五兵衛の父・徳山重俊の亡妻・滝子の甥にあたる。

滝子は、神尾家から徳山重俊の後妻に入り、跡つぎの右近を生んだが、早世したので、妾腹の五兵衛が徳山家を継いだ。

滝子は、五兵衛を身ごもったお静に対して、相当に辛く当ったらしい。

やがて、滝子もお静も世を去ったわけだが、それからは、ほかならぬ徳山重俊が我子の五兵衛を憎み、

（他家から養子を迎えても……）

五兵衛を退けようとはかった。

そのころに、神尾五郎左衛門守親は、

「わしは重俊殿は大きらいなれど、権十郎には何としても徳山の家を継がせたい」

というので、用人・柴田宗兵衛を蔭から援助し、ときには単身、徳山屋敷へ乗り込んで来て、徳山重俊を強硬に説得したりしてくれたものだ。

五兵衛秀栄にとっては、

（わが父にまさるお方……）

であったといってよい。

そのころの神尾守親は、いまの五兵衛よりは若かったはずである。

（何ということだ……）

ここ数年の間に、岳父の藤枝若狭守、日野屋文吉、神尾守親など、五兵衛の生涯にとって、

「欠くべからざる……」

人びとが相次いで、世を去った。

こうした期が来るとは、つい十年ほど前の五兵衛の、考えてもみなかったことだ。

先代の用人・柴田宗兵衛や、外祖父・駿河屋又兵衛の死などは、それぞれ、悲しみのうちにも順当のものとして、五兵衛は受けとめていたし、しかるべき間隔をもって、人びとの死がめぐり来ていたような気がする。

だが、このところ、五兵衛の身辺には死去する人びとが、

「絶え間もない……」

ようなおもいがする。

一つには、すでにのべたごとく、歳月のながれが急速度となって、五兵衛の明け暮れを通りすぎて行くからやも知れない。

現に……。

徳山屋敷では、老女の千の具合いがよろしくない。

千も、六十二歳となった。
年齢からいって、千の老体が衰弱してきたのも当然といえようが、このところ、千は、
「寝たり起きたり……」
の状態がつづき、医師の診断も、はかばかしくない。
食欲が、めっきりとおとろえてしまい、五兵衛の妻・勢以も一方ならぬ心配をしている。
このように、自分の身辺の人びとについては、その死を、わが目に見きわめることもできるのだが、たとえば、佐和口忠蔵や尾張屋源右衛門などについては、彼らの元気のよい姿に接したきり、音信が打ち絶え、何年も後に、それぞれ、おもいがけぬ死様となって、それが五兵衛の、
「耳へきこえたのみ……」
なのであった。
これこそ、呆気もないことだといってよい。
あの曾我の喜平治や、小田原城下の針屋・堺屋太兵衛をめぐる奇怪な人びとも、大半はこの世にいないと看てよい。
酒匂川の堤の茶店の、おとき婆などは、
（疾くに、世を去っているにちがいない……）
けれども、おとき婆のせがれで、若いくせにでっぷりと肥えた寅吉などは、
（まだ、生きてあるやも知れぬ……）

このごろの五兵衛は、しきりに、若き日の自分へ想いを馳せることが多い。
これはやはり、
（わしが老人に近づいたしるしなのやも知れぬ……）
のである。

十二

十八歳の五兵衛が曾我の喜平治に助けられ、おとき婆の茶店へ身を移されたとき、案内に立った伊之蔵という男は、たしか、喜平治のことを、
「お頭……」
と、よんだ。
つい、口をすべらしたらしいが、
「喜平治殿は、いったい、何のお頭なのだ？」
と、五兵衛が問いかけるや、
「何でもいいだよ」
伊之蔵は、二度と寄りつきがたい口調に変って、こたえようともしなかった。
曾我の喜平治や、堺屋太兵衛が、尾張屋源右衛門の暗躍に関わり合いがあるのか、ないのか……。
喜平治のむすめのお玉が、佐和口忠蔵と行動を共にしていたことを、おもい合せてみれば、

関わりがないとは申せぬ。
いや、大いにあるはずだ。
深夜の書見の間へ閉じこもり、あれやこれやとおもいめぐらしていると、果てしがなかった。
絵筆を把ることも忘れてしまうことさえあった。
とはいえ、密(ひそ)かに秘戯図を描きつづける夜な夜なは、もはや徳山五兵衛秀栄にとって、
「ぬきさしならぬ……」
ものとなっていたのである。
すでに五兵衛は、住吉慶恩作の秘戯図一巻の下絵を完成していた。
これを上質の紙に写し、彩色(さいしき)するわけだが、さすがに以前とちがい、夜を徹して描きつづけるだけの根気はない。
それだけに、また、絵筆の運びが丹念となってきたことも事実だ。
また、秘戯図のみか、季節の草、花、野菜なども描かねばならぬ。
これは、家族や奉公人たちへの偽装であった。以前もそうしていたのだが、あのころは秘戯図以外の絵は、
(いやいやながら……)
描いていたともいえる。
ところが、数年の歳月が経過したのちに絵筆を把ってみると、直面(まとも)な絵を描くことも、

「おもしろくなってきた……」
のであった。
五兵衛は、住吉慶恩の絵巻を復元したのちに、いよいよ、自分自身の構想による秘戯図一巻を描きはじめるつもりだ。
それは、あのときの、お百合とすごした根岸の寮での日々を主題にしようと考えている。
つまり、自分とお百合との交情のありさまを、
(あますことなく描いてくれよう)
と、五兵衛はおもった。
新鮮な女の果汁を、おもうさまむさぼった、お百合との日々が、五兵衛の脳裡へよみがえってくる。
その記憶の糸を一筋、また一筋と手繰(たぐ)り寄せるたびに、
(あ……そうじゃ。忘れてはならぬ)
すぐさま、簡略な素描をしておく。
これがまた、たのしいのだ。
何といっても記憶力が減退しつつある年齢に、五兵衛は達したわけだから、いちいち描きとめておかねばならぬ。
(こうなってみると、御役目から離れたことも、さして、さびしいことにはならぬ)
そのうちに、微行で根岸へ行き、おもい出も深い日野屋の寮の佇(たたず)まいを写生しておかねばな

らぬ。

　当時は何分にも、お百合の肌身に熱中していたことゆえ、日野屋の寮の部屋の様子や庭の景色なども印象が浅い。

　日野屋の寮といえば……さよう、寮の番をしていた作兵衛も、三年前に世を去っている。

（そうじゃ。作兵衛も絵巻の中へ描いておきたいものだ）

　おもいつくと、すぐさま目を閉じて、作兵衛の風貌をおもい起し、素描をしておく。

（お百合と、あの寮で、はじめて出合うたころ、根岸川から水を引き入れた庭の池のほとりに、白と紫の菖蒲が咲きそろっていた……）

　そこでまた、筆を走らせる。

　ついでに、女物の小さな扇子へ菖蒲を淡彩で描き、

　妻の勢以に見せると、

「どうじゃ？」

「まあ……おみごとに……」

　勢以の嘆声に、嘘いつわりはなかった。

「気に入ったか？」

「はい。申すまでもございませぬ」

「では、つかわそう」

「私に？」

「受けてくれ」

「うれしゅうございます」

と、三十八歳の勢以が目をみはって少女のように素直なよろこびを見せたものである。こういうところに、勢以の率直で、純な気性が看て取れるのだ。

　勢以は、病間を設けてもらい、そこに臥している老女の千をなぐさめるつもりで、

「これは、殿様がお描きになった……」

　菖蒲の扇子を見せたところ、病みやつれた千が、凝と扇面に見入り、

「私も、欲しゅうございます」

と、つぶやいた。

「おお。おたのみしてあげましょう」

　勢以は、こうしたことが千のなぐさめになるのなら、何よりのことともおもった。

「まことでございますか？」

「おお、すぐにも……」

「かたじけのうございます。なれど……なれど、殿様は、私にも、お描き下されましょうか？」

「念にはおよばぬ。殿様が御幼少の砌より、まことの母親同様に育てくれしそなたではないか。よろこんで、お描きなされよう」

「それならば……あの、お願いがござります」

「何のことじゃ?」

「まことに、あつかましきことながら、御幼少のころの殿様のお姿を、お描き下さるよう、奥方様より、おたのみをなし下されませ」

「ほう……それは、おもしろい」

すぐさま、勢以は五兵衛の居間へおもむき、千の願いをつたえるや、

「何、小さいころの、わしの姿を描けとか……」

「はい」

「ふうむ……」

五兵衛は、眉をひそめたが、嫌とはいえなかった。

このところ、五兵衛は千の病間も見舞っていない。

どうも、見舞う気になれなくなってしまった。

何故というなら、六十二歳となった千が、老女とはおもえぬ妖しげな眼の色になって、五兵衛を凝視し、二人きりのときには、

「千は……おもい残すことがござりまして、死ぬにも死にきれませぬ」

などと、ささやきかけてくるのである。

それは、いったい、どういうことなのであろうか……。

(わからぬ。どうも、わからぬ)

そうおもいはしても、五兵衛の感覚としては、千の言葉の奥底に潜むものがわかるような

……いや、すでにわかっているような徳山五兵衛であった。

「殿……お描き下されましょうや?」

「う……嫌とも申せまい」

「かたじけのう存じます」

その夜。

五兵衛は書見の間へ引きこもってから、

(わしの子供のころを描けと申す……どのように描いたらよいものか……)

これは、なかなかにむずかしかった。

翌日。居間へ手鏡を運ばせ、四十三歳のわが顔を映し、つくづくと見やった五兵衛が、

(わしは、いつの間に、このような顔になってしまったのだ……)

愕然となった。

その衝撃は、現代の男たちには到底わかるまい。

むかしの、二千何百石の〔殿さま〕は、毎日、鏡にわが顔を映して見ることなど、ほとんど、なかったのである。

十三

四十三歳の、わが顔を、幾ら鏡に映して見ても、

(はじまらぬことだ……)

と、五兵衛はおもった。

子供のころの自分を描くための、参考にはならぬ。

(千め、難題を持ち出して、わしを困らせる)

はじめは、顔を顰めていた徳山五兵衛だが、

(おそらく、千は、来年の桜花を生きて見ることもあるまい)

となれば、これは老女・千の、最後のたのみということになる。

(そうじゃ、千あればこそ、今日のわしがあったとも申せよう。これは何としても、描いてやらねばならぬ)

そうなると五兵衛は、しだいに熱中しはじめた。

そして数日かかり、何枚も下絵を描いたのちに、

(顔かたちなどに、こだわることはない)

と考え、眼を閉じて、脳裡へ浮かぶ五、六歳の自分の姿をとらえたのち、一気に描いてみた。

(ふむ。これならば、よい)

気に入った。

そのとき、いま一つの着想が浮かんだ。

自分のほかに、千の父親であり、先代の用人でもあった柴田宗兵衛の姿を描き添えてやったら、

(千は、さぞ、よろこぶであろう)

さらに、

(そうだ、そこへ、若き日の千の姿をも描き添えてやろう)

こうなると、とても扇面には描き切れない。

そこで、五兵衛は、これを軸に仕たてて、千の病間の床の間へ掛けてやることにした。

(よし。決まった……)

そこで、この着想を勢以にはなすと、

「まあ、それはよいおもいつきでございます。千は、きっと、よろこんでくれましょう」

「なれど、すっかり大事になってしもうたわ」

「お描きあそばすのに、長くかかりましょうか?」

「そりゃ、二日三日というわけにはまいらぬ」

「なれど……あの……」

「いかがした?」

医師がいうには、来年の春どころではなく、

「生きてあるのが、ふしぎなほど……」

なのだそうである。

「さようか……」

五兵衛も、それと聞いては落ちついていられなくなり、早速、下絵にとりかかった。

元禄七年の早春。あの堀部安兵衛が義理の叔父・菅野六郎左衛門に助太刀し、城北・高田の馬場において村上兄弟たちと決闘をした折、亡き柴田宗兵衛が、

「ぜひとも、当日の堀部殿のはたらきを若様に見せておきたい」

と、おもいたち、千と共に五歳の自分の手を引き決闘場へおもむいたときの、その三人の姿を、五兵衛は描くことにした。

当時の千は、二十四歳であった。

そこで五兵衛は、若いころの千の姿によく似た侍女のお元をよび、これを写生した。

このときは書見の間ではなく、居間で筆を把った。

若い侍女と二人きりで離れ屋へ閉じこもることが、何やら、はばかられたからだ。

何枚も描いた下絵によって、構図がすっかり定まるや、五兵衛は、一夜のうちに描きあげ、淡彩をほどこした。

密画ではないが、簡略な絵筆のうごきに生彩があり、ことに柴田宗兵衛の像は、

（われながら、よく描けた……）

と、五兵衛はおもった。

現用人の柴田勝四郎に見せるや、

「むう……」

勝四郎は、亡き義父のおもかげを、まざまざと感じたらしく、低い唸り声を発したまま、喰い入るように見入り、身じろぎもせぬ。

「どうじゃ?」

こたえはない。

五兵衛を見た勝四郎の両眼から、たちまちに熱いものがふきこぼれてきた。

勢以も、小沼治作も、かほどまでに五兵衛の技量が見事なものだとは、おもわなかったらしく、感嘆の声をあげたものである。

「小沼。どうじゃ?」

「恐れ入りましてございます」

小沼治作は五十三歳になってい、相変らず邸内の道場へ出ては、屋敷の者に稽古をつけながら、

「ちかごろの殿様は、すっかり怠けておいでなさる」

道場へあらわれぬ五兵衛への不満をも忘れ、

「お見事な……」

これまた、いつまでも見入ってうごかなかった。

世辞をいわぬ小沼の称讃だけに、五兵衛も、まんざらではなかった。

「すぐさま、表具師をよべ」

「はっ」

徳山屋敷へ出入りの表具師は、両国・村松町の中川善助で、これにいいつけ、できあがった絵を、

「急いでくれ」

取りあえず、簡単な表装にさせた。

そして、これを持って、五兵衛が勢以と共に千の病間へおもむいた。

「千。できあがったぞ。よく見るがよい」

手ずから、五兵衛は絵の軸を床の間へ掛けた。

これを見て、千が瞠目した。

幼いころの五兵衛の姿を扇子へ描いていただければと、千はおもっていたにちがいない。

それが、このように、おもいもかけぬ絵となってあらわれたのだから、千は驚愕してしまった。

「う、うう……」

感動のあまり、千の容態が、すこしおかしくなったのには、五兵衛も勢以もあわてた。

すぐに医師がよばれ、手当がおこなわれた。

ともかくも、大事にはいたらなかったので、五兵衛は胸をなでおろしたものだ。

千をよろこばせようとしたのに、よろこびのあまり息絶えてしまわれたのでは、たまったものではない。

「先ず、よかった。しずかに、千の臥床を床の間へ近づけてやるがよい」

と、五兵衛は侍女たちにいった。

十四

この日から、千の病状が好転した。

「ふしぎなことも、あるものでござる」

医師も、くびをひねるほどで、痩せこけた老顔へ微かに血の色も浮いて見えたし、わずかではあるが食欲も出てきて、

「重湯がおいしいと申されました」

と、侍女が勢以に告げたそうな。

さらに、千は別の変化を見せた。

これまでは、日に何度も、

「殿様の、ごきげんはいかがじゃ?」

とか、

「お顔が見たい……」

とか、看病の侍女へ洩らしたりしていたのが、ぴたりと熄んだ。

そして、床の間の絵を凝と見つめ、見疲れるや、昏々と長時間を眠りつづける。

目覚めると、また、絵に見入ったままだ。

勢以は、千の臥床の上部の下へ折りたたんだ蒲団を入れ、仰向けに寝たままでも床の間が見えるようにしてやった。

「かたじけのうございます」

千は、うれしげに礼をのべたが、

「そのときの千の顔は、まるで五つか六つの童女のようにあどけなく見えましてございます」

と、勢以が五兵衛へ告げた。

「ほう……さようか……」

「殿様も、日に一度は、見舞うてやって下さいませ」

「うむ……」

これまでは、見舞いに行くと、千が何ともいえぬ妖しげな眼の色になるので、それが嫌さに、ついつい、五兵衛の足も遠退いていたのである。

五兵衛を生むや、たちまちに死去した生母にかわり、千は五兵衛を育てあげてくれた。

若きころの千は、五兵衛の乳母であった。

ゆえに、疚しいことは何もないといえば、それまでなのだが、そこはやはり、単なる乳母と若様だけの関係でもなかったといえよう。

若くして寡婦となった千は、その生涯を徳山五兵衛の養育と、徳山家への奉公にささげた。

女ざかりの情熱は、少年の五兵衛につきそってはなれぬ明け暮れにかたむけられ、乳母としてよりも女として、五兵衛へ愛をそそいだと看てよい。

だからといって、二人は男と女のまじわりをしたわけではない。

ないが、しかし、添い寝をしてくれる千の肌身のやわらかさや、弾力や、甘酸っぱい匂いを、五兵衛は幼時から、

「わがものとして……」

育ったのである。

あれは、五兵衛が十二歳のころであったろうか……。

めずらしく高熱を発した五兵衛が、そのまま重病となり、故遊佐良仙の治療によって、ようやく回復しつつあったときの初夏の夜に、千が、五兵衛のかわいた喉へ、口うつしに水をのませてくれたことがある。

あのときの千は、たしかに異常であった。

病みあがりの五兵衛の躰へ、半裸の肌身を密着させ、狂おしげに重い乳房を顔へ押しつけたりした。

そして……。

いつの間にか、切なげに呼吸をあららげた千の手が五兵衛の股間へさし入れられた。

五兵衛の、おとこのちからが股間から迸り出たのは、このときであった。

いまも、約三十年前の、あの夜のことをおもい浮かべると、五兵衛はたまらなくなってくる。

ところが、千のほうは老いて尚、あの夜のことを、

（お忘れではございますまい……）

とでもいいたげな眼の色になって、五兵衛を見ることがあった。

自分と五兵衛だけが知っている秘密の香りを、白髪と皺（しわ）によろわれた細い躰の奥底で、千は密かにたのしんでいたのだろうか……。

五兵衛が、千を避け、つとめて言葉をかわさぬようになったのも、このためであった。

その千が、

「大分に具合いがよいそうではないか」

と、病間へあらわれた徳山五兵衛へ向けた眼（ま）ざ（な）しは何の邪気もなかった。

双眸（そうぼう）は、清らかに澄みきっている。

このような千の眼を、かつて五兵衛は見たおぼえがない。

「かたじけのうござります」

わずかに両手を出して合せ、千が笑いかけてきた。

その微笑こそ、勢以がいうように、

「童女そのもの……」

といってよかった。

五兵衛は得体の知れぬ感動をおぼえ、おもわず枕元へ坐って、千の両手を包み込むように握りしめた。

病む以前の千に、このようなことをしたなら、どのような勘ちがいをされたか知れたものではない。

「お手をわずらわせまして、申しわけもございませぬ」

という千の声にも、無邪気なよろこびが感じられる。

「気に入ったか、あの絵が……」

「はい」

「なれば、よかった」

「どのようにして、お描きあそばされましたか……？」

「むかしを、おもい起して……」

いいさして五兵衛は、はっとなった。

またしても、千に、

（むかしを、おもい起されてはたまらぬ……）

と、気づいたからだが、うなずいた千の微笑は慈母のように五兵衛を包んだ。

つぎの日から、かならず日に一度は、千の病間へあらわれる五兵衛を見ることができる。

千の様子には、いささかも変りがなかった。

さして言葉をかわすこともないのだが、五兵衛と共に、床の間の絵を見つめ、微笑をかわし合うだけで、千は満足しきっているように見えた。

日毎（ひごと）に、秋が深まりつつあった。

奥庭の落葉が風に舞って障子をたたくこともあったが、病間は明るかった。

この部屋は、勢以の居間だったものを、

「日当りがよいゆえ……」
と、勢以が千の病間にしてやったのである。
千は病みおとろえていても、庭に鳴く鳥の声を、
「鶸(ひわ)がやってまいりました」
とか、
「頬白(ほおじろ)が鳴いておりまする」
などと、聴きわけた。
やがて、冬が来た。
そして、千の病状も、ようやくあらたまった。
千の息が絶えた夜半、つきそっていた侍女の知らせを受け、五兵衛と勢以が駈けつけたときは、すでに千はこの世の人ではなかった。
つきそっていた侍女は、お元であったが、急に千の呼吸が切迫したようなので、擦りよって、
「もし……もし……」
声をかけると、千が手を差しのべたので、これを握りしめ、
「お苦しゅうございますか?」
問いかけると、千はかぶりを振って、
「何の……」

と、笑みを浮かべてから両眼を閉じ、微かに、
「ごんじゅうろ、さま……」
つぶやいたそうな。
権十郎……すなわち徳山五兵衛の前名だ。
お元は、
(これはいけない)
と、判断し、すぐさま、他の侍女たちを起し、五兵衛と勢以の許(もと)へ走らせたのであった。
六十二歳の生涯を終えた、千の穏やかな死顔は美しかった。
「千も、死んだか……」
その一言に、五兵衛の無量のおもいがこもっている。
死なれてみると、これはまことの母の死にのぞんだような気持になってくる。
五兵衛は生母の顔を知らず、その乳房を口に含んだこともない。
いまさらながら、
(ああ……あのように、千を疎んじるのではなかった……)
それのみが悔まれてならぬ。
むしろ、千とのおもい出をあからさまにして、もっと快活に千へ語りかけてやったなら、千の胸底に澱(よど)んでいた鬱屈も明るく発散できたのではなかろうか……。
千の葬儀が済むと、五兵衛は、夜な夜な〔書見の間〕へ引きこもるようになった。

そして、また、新しい年が来た。
享保十八年である。
徳山五兵衛は、四十四歳となった。
この年の初夏に、五兵衛は意外なことを耳にはさんだ。

十五

その日。
徳山五兵衛は、根岸の日野屋の寮へおもむいた。
供は、例によって小沼治作ひとりの微行である。
小沼は、筆紙に絵具などを包みにして持参した。
「日野屋の寮へまいられて、何をなさいます？」
小沼は不審げに尋ねたが、
「いやなに、いまごろの、あの寮の庭の池のほとりには、白と紫の菖蒲がみごとに咲きそろっているはず。それを描いておきたいのじゃ」
五兵衛が、そうこたえると、
「なるほど、さようでございましたか……」
主人の言葉のままに、納得をしたようだ。
実は五兵衛、いよいよ、日野屋の寮でお百合と過した愉楽の日々を、一巻の絵巻物にするため、夜毎に書見の間へ引きこもり、下絵を描くことに熱中している。
焼き捨ててしまった住吉慶恩作の秘戯図一巻の模写は、彩色も終り、すでに完成をしている。
絵巻物にするための表装の仕方も、簡略ではあるが、表具師の中川善助の教えを受け、五兵衛みずからがやってのけた。
今度の絵巻物は、先ず、下谷・坂本の通りで町駕籠を乗り捨てた徳山五兵衛が、根岸の里へ歩み入る姿から描きはじめるつもりであった。
着ながしに両刀をたばさみ、塗笠に面を隠した七年前の自分の姿を描くのはわけもなかったけれども、お百合を描くことは、なかなかにむずかしい。
お百合の裸身については、隈なくおぼえているつもりだが、あの折、身につけていた衣裳や髪のかたちなどが、空覚えであったから、その考証が面倒で、五兵衛は、屋敷へ出入りの書廛・方円堂から絵草紙などを取り寄せ、参考にしている。
もっとも、これは他の書物や画帖を購入して、その中へ忍ばせてきてもらうのだ。
（わがものとすることを得た……）
五兵衛なのである。
さ、そうなると、いよいよ二人が登場する舞台……すなわち、日野屋の寮を絵筆で描写しなくてはならぬ。

そこで今日、五兵衛は根岸へあらわれたのだ。
いまの日野屋は、亡き文吉の倅・文太郎が跡を継ぎ、二代目の日野屋文吉となっている。
数日前に五兵衛は、日野屋へ手紙を持たせてやり、今日の事を申し入れたところ、
「どのようにも、お使い下されますよう」
と、日野屋から返事があった。
五兵衛と小沼治作が根岸の寮に着くと、日野屋が出迎え、すぐさま酒肴が運ばれたので、
「いや、日野屋。かようにもてなされては困る。わしは、ただ、庭の菖蒲を描きにまいったのじゃ」
「あの、殿様が、絵を、お描きあそばす……?」
「さようさ」
「これは、すこしも存じませぬことで……」
日野屋は、目をみはっている。
「折角に仕度をしてくれたゆえ、では、遠慮なしにいただこうか」
五兵衛は盃を取り、なつかしげにあたりを見廻した。
しばらくして、五兵衛が庭先の写生にとりかかるのを傍で見ていた日野屋が、驚嘆の声を発した。
日暮れ前に、五兵衛は絵筆を置き、
「また明日、寄せてもらってよいか?」

「はい、はい。そのかわり、一つ、お願いがございます」
「ほう……」
「私めも明日、此処へまいりましてもよろしゅうございましょうか?」
「それはかまわぬ。この寮は、おぬしの持家ではないか」
「明日もまた、拝見させていただきたいのでございます」
「私の絵を、か?」
「はい」
「埒もないことよ」
だが、日野屋は決して世辞をいっているのではない。真から五兵衛の絵に感服してしまったらしい。
駕籠をよぶという日野屋へ、五兵衛は「この上は、かまってくれるな」と辞退をし、小沼を供に、根岸の寮を出た。
「小沼。この辺りを歩むのも、久しぶりじゃな」
「はい」
小沼も、七年前のことを、おもい浮かべているらしく、目を細め、あたりを見まわしつつ歩んでいる。
その小沼の髪へ、めっきりと白いものが増えたのに、五兵衛は気づいた。
いや、小沼のみではない。

五兵衛自身の鬢のあたりへも、白いものがまじりはじめている。
明るい初夏の夕暮れであった。
坂本から、上野山下へ出ると、まだ、人通りが日中に変らぬほどの雑踏ぶりで、
「どうじゃ、小沼。そっと蕎麦でも食してまいろうか？」
何やら、たのしげな気分となって言い出した五兵衛へ、言下に、
「結構でございますな」
小沼が応じた。
「では、御成道の福市へまいろう」
「はい。それがよろしゅうございます」
〔福市〕は、七年前のあのとき、宿屋の山城屋を見張るために、浪人姿の五兵衛と小沼が利用した蕎麦屋である。
「よし。では……」
「む……？」
先へ立った五兵衛の袖を、小沼治作が引いた。
「あれを、ごらんなされませ」
小沼が、目顔でしめした。
「あ……」
おもわず五兵衛が塗笠を外し、いましも、こちらへ近寄って来る侍へ顔を見せ、

「久しいのう」
声をかけた。
「あ、これは……」
羽織・袴の侍も、五兵衛と知って刮目した。
この侍、蜻蛉組の片桐半之介であった。
「声をかけては、いけなかったか？」
折も折である。
ところもところ、人も人である。
なつかしさに、おもわず声をかけてしまってから、五兵衛は、片桐が徒の侍ではないことに気づいた。
「何の……」
片桐は、別に困った様子でもなく、
「おなつかしゅう存じまする」
一礼してから、いぶかしげに、
「まるで、七年前そのままのお姿でございますな」
「いや、実は……」
ざっと、今日の外出について語り、
「いかがじゃ。蕎麦をつき合うてくれぬか？」

「はい。お供をいたしましょう」
意外に、片桐はこだわらぬ。
〔福市〕の片隅へ三人して坐り込み、先ず盃をあげたわけだが、こうなると五兵衛としては、どうしても尋ねなくてはならぬ気持になってきて、
「ときに、伴格之助殿は、お達者か?」
何気なく問いかけたのに対し、片桐半之介の顔色が急に沈んだ。
「いかがした、片桐……?」
「は……」
「何ぞ、伴格之助殿に、変事でも……?」
いいさした五兵衛へ、片桐が呻くようにいった。
「身罷りました」
「何……亡くなられた、と……」
「はい」
「むう……」
五兵衛の手から盃が落ちた。
「そ、それは、あの……病にかかられてのことか?」
片桐は声もなく、かぶりを振った。
小沼は傍を向き、聞いていない態を見せながらも、二人の会話が、立てこんでいる店の中の人びとの耳へつたわらぬように気をくばっているらしかった。
「では……」
いったんは声をのんだが、おもいきって五兵衛が、
「では、御役目の上のことにて……?」
片桐半之介が、うなずいた。
「ふうむ……」
もはや、これ以上の問いかけに、片桐がこたえてくれぬことを、徳山五兵衛は、よくわきまえている。

十六

伴格之助を主軸とする蜻蛉組の役目については、その隠密の活動の、いかに複雑で危険なものかを、徳山五兵衛はよくわきまえている。
蜻蛉組の活動の根元は、いうまでもなく八代将軍・徳川吉宗なのだが、この事実は、あくまでも隠しぬかねばならぬ。
ゆえに、たとえば蜻蛉組の人びとが、或る大名家の内情を探ろうとして、捕えられたとする。
選びぬかれた者たちだけに、いかな厳しい取り調べを受けても、拷問にかけられても、彼らは決して秘密を洩らしたりはせぬであろう。

そして、ついには処刑されてしまうことになる。
これは、当然の事といってよい。
これに対し、将軍・吉宗は救いの手を差しのべることができぬ。
蜻蛉組は、どこまでも、吉宗とは無関係の立場に立たねばならぬからだ。
蜻蛉組を束（たば）ねる伴格之助にしても、みずから探索の危険を冒すこともあろうし、そのとき、相手方の、
「刃（やいば）に殪（たお）れる……」
ことも、充分に考えられる。
御成道の〔福市〕で、徳山五兵衛が「病にかかられたのか?」と尋ねたのに対し、片桐半之介は、かぶりを振って見せたではないか……。
これが何を意味するのか、五兵衛には、およそ察しがついた。
それにしても、よくも片桐半之介が五兵衛へ知らせてくれたものだ。
それというのも七年前の〔将軍御狩り〕事件に、五兵衛が蜻蛉組と苦労を分ち合ったからであろう。
（徳山様へなら……）
伴格之助の死を洩らしてもかまわぬ、と、片桐は判断したにちがいない。
しかし、くわしい事情を語ることはできぬ。また、五兵衛も強いて尋ねなかった。
〔福市〕を出て、御成道で右と左に別れるとき、片桐半之介は微笑を浮かべ、

「今日は、まことにおもいもかけず、徳山様へお目にかかれ、うれしゅう存じました」
と、いった。
「それは、わしもじゃ」
「これより先、もはや、二度と、お目にかかることもございますまい」
片桐の声に断定的なものが感じられ、五兵衛は胸を衝かれた。
御成道を南の方へ遠去（とおざ）かる片桐半之介の姿は、たちまちに濃い夕闇の中へ消えてしまった。
見送っていた徳山五兵衛が、小沼治作をうながして歩み出しつつ、
「小沼。聞いていたか……」
「はい」
「ちかごろは、われらが知る人びとの、よう死ぬることよ」
「はあ……」
「小沼も、死ぬるときには、傍にいる者が欲しくはないのか?」
「と、申されますのは……?」
「別に……」
「女房が欲しくはないかと申している」
「いまからでも、遅くはないのだぞ。わしが見つけてやろう、どうじゃ」
「おかまい下されますな」
「はてさて、困った男よ」

「いずれにせよ、私めは、殿より一足先に、あの世へまいりますゆえ……」
「そりゃ、わからぬぞ」
「いえ、わかっております」
　何故か、きっぱりと小沼治作がいったものだ。
「何故、わかる？」
「何故でも、わかりまする」
「わかるものか」
「私めが、死にましたる折、殿に一本の線香なりと手向(たむ)けていただけますなら、それにて満足にございます」
「これ、大きな声を出すな。人が振り返って見るではないか」
「かまいませぬ」
　小沼は、ひたむきな熱い視線を五兵衛へ向け、たじろがなかった。
　五兵衛は眼を逸(そ)らし、
「はて、さて……」
　口の中で、何やらぶつぶつと呟(つぶや)いたのが、何やら老人(としより)じみて見えた。
（千といい、小沼といい、奇妙なやつばかりが、わしを取り巻いている……）
　両国橋をわたり、本所の屋敷が近くなったとき、用意の提灯(ちょうちん)へ明りを入れ、先に立っていた小沼治作が急に振り向き、

「殿……」
「何じゃ？」
「片桐半之介殿のことでございますが……近く隠密の御役目にて、遠国(おんごく)へでも出かけられるのではありますまいか？」
「ほう……小沼も、さようにおもったか」
「はい」
「実は、わしも、そう感じた。なればこそ片桐は、われらと別れを惜しむつもりで福市へ来てくれたのであろうし……また、伴格之助殿が亡くなられたことも、おもいきって打ち明けてくれたのであろう」
「そのように、おもわれます」
　このときより、五兵衛は、二度と片桐半之介の顔を見ることがなかったし、その消息も聞かなかった。
　さて……。
　徳山五兵衛が、自分とお百合との交情のありさまを、
「あますところなく……」
　描いた絵巻一巻が完成したのは、翌々年の正月であった。
　おもいのほかの月日を要したのは、五兵衛が、
「凝りに凝った……」

からであろう。
それだけに出来映えは、われながら満足したし、完成後の五兵衛の疲労も深かった。
(もう、これよりは、絵筆を持つまい)
と、五兵衛は決心した。
男女の秘戯図を描くことはたのしいのだが、何といっても、これまた隠密の仕事ゆえ、いろいろと神経をつかわねばならぬ。それが五兵衛を疲れさせるのだ。
この年、享保二十年の秋に、二十一歳となった長男・頼屋が妻を迎えた。
三千五十石の旗本・服部大和守保貞の養女・琴が十七歳で徳山家へ嫁いで来たのだ。
翌享保二十一年は、改元の事あって元文元年(一七三六年)となる。
この年、早くも琴が頼屋の子を生んだ。
しかも、男子であったから、これには徳山五兵衛も、
「でかした、でかした」
大よろこびであった。
武士の家に嫡子が絶えることは、一大事である。
かくて、五兵衛は四十七歳にして初孫を得たことになる。この孫の名を「内匠」という。
琴は温順で美しい嫁であったが、どうも病がちで、内匠を生んだ翌々年に病歿してしまった。
気に入りの嫁だっただけに、五兵衛の落胆は非常なものであった。

この年の夏ごろから、四十九歳の徳山五兵衛が、ふたたび秘戯図を描くことに没頭しはじめたのは、琴を失った悲しみをまぎらわせるためだったのやも知れぬ。

十七

徳山五兵衛秀栄の秘戯図の制作は、尚も数年の間、つづけられてゆく。
男と女……ことに女の裸身というものは、いかに描きつくしても、
(描き切れぬ……)
おもいが、募るばかりなのだ。
(この年齢になって、わしは何という莫迦げたことをしているのか……)
二千二百余石の大身旗本の当主が、である。
なればこそ、これは、あくまでも他人の目にふれてはならぬ。
そのことに神経をくばらなくてはならぬ日常のことが、また、
しだいに、
(何と、愚かな……)
ことなのであった。
胸の底に重く沈み、澱んでいる疚しさに堪えようとして、五兵衛は家族や家来たちの前で、
「気むずかしい殿様……」
に、なりつつあった。

夜ふけの自分への劣等感を、日中の自分が無意識のうちに押し隠そうとするため、口数も少なくなり、謹厳な顔つきをくずそうともせぬ。

小沼治作に対しても、そうなってしまった。小沼は、さびしげであった。

この間に……。

兄・継友の跡を継ぎ、徳川御三家の一である尾張・名古屋六十一万九千石の大守となった徳川宗春を、将軍・吉宗が蟄居せしめている。

吉宗は将軍の威令をもって宗春をしりぞけ、尾張家の分家にあたる松平友著の嫡男・宗勝に本家を相続させたのである。

将軍・吉宗としては、

「耐えに耐えていたが、やむを得ず……」

この決断を下したにちがいない。

尾張宗春の、将軍への批判というか、反抗というか……それは、将軍・吉宗が予想もせぬかたちをとってあらわれた。

宗春は、尾張藩主となって間もなく、先ず〔温知政要〕と題した政教の書一巻を著わした。

これは、尾張藩の施政のあらましと家来たちの心得を説いたものだというので、宗春は数百部を刷り、これを家臣たちへ分ちあたえた。

その一冊が、将軍・吉宗の目にとまったのは当然であろう。

尾張藩へ対する吉宗の警戒は、依然、解けていなかったから、蜻蛉組をはじめ、締戸番をもふくめて、将軍の諜報網は尾張・名古屋の城下へも充分に張りめぐらされていたであろうからだ。あるいは、尾張藩士になりきり、間諜の秘命を遂行していた者もいたのではないか……。

吉宗は〔温知政要〕を見るや、たちどころに、内示をもって、

「絶版、破棄」

を、命じたという。

内容が、吉宗と幕府政治を辛辣に批判したものだからだといわれている。

たとえば、

「和漢古今ともに、武勇知謀千万人にすぐれし名将……」

が、いざ、権力の座に就くと、たちまちにして、

「慈仁の心なく、私慾さかんにして栄耀奢りきわめ、人民を済うの本意なかりしゆえなり」

なればこそ、子孫は二代とつづかぬのだ、と、宗春は書き記している。

これが吉宗の忌諱にふれたのも、将軍家と尾張藩の確執の歴史があったからにちがいない。

尾張宗春は、さらに、

「人には好き嫌いのあるものなり。しかるを、わが好くことは人にも好ませ、わが嫌いなることは人にも嫌わせ候ようにするは、はなはだ心せまきことにて、人の上たる者、べっしてあるまじき事なり」

と書いている。

これは将軍・吉宗が大好きな吝嗇(けち)を諷(ふう)したのだという。
これまでは尾張藩も、倹約第一の将軍にそむいてはならぬというので、藩士たちが遊所へおもむくことも、芝居見物までも、きびしく禁じていた。
それを、宗春が、
「つまらぬことよ。芝居見物までも封じてしもうては、心にゆとりがなくなり、いつにても刺々(とげとげ)しゅうなって、物を見る目もせまくなり、いざというときの用にたたぬものばかりとなってしまうではないか」
と、芝居見物のみか、遊所への出入りも自由にさせてしまった。
そして、宗春みずから、猩々緋(しょうじょうひ)の装束に鼈甲笠(べっこうがさ)という姿で、長さ二間（三メートル余）の金の煙管(きせる)を茶坊主の肩に担がせ、これで煙草をふかしながら、寺詣(てらまい)りだの、物見遊山などをやってのける。
「遊女町などは、どしどし設けさせるがよい。町が栄える」
などと、いい出し、城下町は、以前と見ちがえるばかりに賑(にぎ)わいはじめた。
尾張宗春は、三十をこえても妻を迎えぬ。
そして江戸の新吉原の遊女・春日野(かすがの)というのをわがものにして、これに裲襠(うちかけ)などを着せ、名古屋へ連れ帰ったりした。
夏の盆踊りがはじまる。
すると、六十一万九千石の殿様が白い牛にまたがり、紅提灯(べにぢょうちん)を手にした供まわりの家来を

従え、城を出て、町中の盆踊りへ繰り出して来るのだ。
ついには、宗春が、
「みな、まいれ。まいれ」
とばかり、町民を下屋敷の庭へ入れ、笛や太鼓で大さわぎをしたあげく、
「ほうびを、つかわすぞよ」
と、金銀をふり撒(ま)く。
これでは、いかに六十一万九千石でも、財政が大きな赤字となるのは当然である。
物の本に、
「名古屋の膨脹発達は、特に、このときよりいちじるしく、宗春が膨脹的名古屋の恩主たること、もとよりなれど、同時に、奢侈淫逸(しゃしいんいつ)の風を助長せしめたる責任(せめ)をまぬがれざるべし」
と、ある。
徳川御三家の一である尾張の殿様が、このようなまねをしていたのでは、将軍・吉宗も、黙ってはいられなかったろう。
尾張宗春の、
「気宇が大きい」
などという人もいないではないが、どう考えても、これは無茶乱暴にすぎる。
のちになって、宗春は、財政の窮乏が極限に達したので、おのれの放漫政治のあやまりに気づき、今度は、あわてて緊縮政治に切り替えたが、もはや、追いつくものではない。

そして、ついに……。

将軍・吉宗の断が下ったのである。

十八

将軍と尾張藩の風評は、徳山五兵衛の耳へも入らぬではなかったけれども、五兵衛は、ほとんど関心をしめさなかった。

五十歳になってからの五兵衛は、

（もはや、わしの行先は見えた……）

と、おもっている。

現代の男たちの平均死亡年齢にくらべると、当時は五十歳で死去しても、

「早死をした……」

ことにはならなかった。

五兵衛は、そのころ、

（これが、わしの最後の秘戯図になるであろう）

と、こころに決めた大作絵巻の下絵に取りかかっていた。

その内容は、およそ破天荒なものであって、下絵を描きつつ、五兵衛がおもわず、にんまりと笑みを浮かべることさえある。

この絵巻には、いうまでもなく五兵衛自身と、お梶・お百合も登場するが、そればかりではない。

妻の勢以も、亡き柴田宗兵衛や老女の千も、藤枝若狭守も、将軍・吉宗もあらわれようという……まことにもって、

（他人（ひと）の目にふれたなら、一大事……）

の大作になるはずだ。

（この、最後の絵巻を描き終えるまでは、二年……いや、三年はかかるであろう。その後、これまでに描きためたすべての秘図を少しずつ焼き捨てて行き、おのれの寿命と照らし合せ、ついには一つ残らず焼き終えたのちに、わしが死ぬる……何（なに）ともして、そのようにもって行きたいものじゃ）

そのことのみが、五兵衛の脳裡（のうり）をしめているのだ。

まさかに……。

これより先の、自分の暮しに変化が起ろうなどとは、おもってもみなかったのである。

寛保元年（一七四一年）となって、徳山五兵衛が五十二歳の折に、二十七歳となっていた長男の頼屋が、縁あって後妻（のちぞえ）を迎えることになった。

旗本・松平甚九郎康寛（やすひろ）の女（むすめ）・安子（やすこ）がそれだ。

五兵衛にしてみると、安子は、前妻の琴にくらべて、

（いささか、見劣りがする……）

ので、おもしろくない。

何が見劣りするかというと、容貌がであった。

長男の亡き嫁の琴は、どこか〔東林〕のお梶の面影を偲ばせるものがあった。

ところで、いま、五兵衛が下絵に取りかかった秘戯絵巻は、どのような構想によるものかというと、先ず第一に、将軍・吉宗の閨房を描くつもりなのだ。

夜のお伽をする中臈の顔を、勢以のものにして、これに吉宗が挑みかかる。

勢以が必死になって、裸身を見せまいとするのへ、吉宗は猛然として、つぎつぎに勢以の着衣を毟り取ってゆく。

さすがの勢以も将軍には敵わず、ついに肌身を灯火の下に曝すことになるのだが、その乳房は、ほとんど無きに等しい。

将軍・吉宗は、大いに落胆するが、それでも気を取り直し、勢以の躰を抱く。

精力のみなぎる、たくましい将軍の愛撫に、勢以が、しだいに乱れはじめる……そこまでは、下絵を描きあげたが、

（さて、これから、どのようにいたそうか……）

苦虫を嚙みつぶしたような顔つきで居間にいるとき、ふと、吉宗と勢以の組み合せが脳裡へ浮かんできて、五兵衛がにやりとすることがある。

ちょうど、そのとき、側に侍女などがいたりすると、気味わるそうに殿様の顔を見やり、あわてて廊下へ出て行ってしまったりする。

（これは、おもしろい）

絵筆は自由自在なのだ。

勢以が髪を振り乱し、白眼をつりあげ、男の腕の中で、のた打ちまわる姿などをだれが想像できたろう。

（それにしても、わしは何で、このようなことがおもい浮かぶのか……？）

ふしぎでならぬ。

それでいて、お梶とお百合だけは、たとえ絵巻の中でも他の男の腕に抱かせたくはない。

（そうじゃ。小沼治作にも、たれぞ、よい女を抱かせてつかわそう。小沼は、おそらく生涯、ただの一度も女の肌身を知らずに終るのではないか……よし。せめて絵巻の中で、美しい女を抱かせてつかわそう）

そのようなことをされても、何で小沼がうれしいものか、であった。

小沼の相手には、侍女の雪を抱かせることに決め、雪が居間へあらわれたりすると、五兵衛は凝と見つめる。

その喰い入るような視線は、雪の衣裳の下の肌身へまで、突き刺さってくるかのようだ。

（殿様は、私に、おぼしめしが……）

と、雪はおもいはじめた。

五兵衛は、夜ふけの書見の間で、雪を描こうとおもうからこそ、凝視するわけだが、若い女にはそれがわからぬ。

女というものは、ちょっと見つめられたり、親切にされたりすると、妙な勘ちがいをする

生きものなのである。

五十をこえた徳山五兵衛の明け暮れは、先ず、このようなものであった。

寛保二年の年が明けて、五十三歳になった。

そして、この年の正月早々に、おもいもかけぬ台命が五兵衛へ下ったのである。

五兵衛は〔御使番〕に任ぜられた。

この御役目は、戦場へ出れば将軍直き直きの命令を伝えたり、戦功者の監査に当ったりするわけだが、平時は諸大名の治績や動静を視察したり、将軍の上使をつとめたりする。

（まさか、いまになって、このような御役目に就こうとは……）

五兵衛は、むしろ茫然となった。

徳山屋敷では、久しぶりの慶事であるから、親類方をはじめ、諸方からの祝いの声や贈物がつぎつぎに寄せられ、賑やかなことになった。

かくて五兵衛は、ふたたび、江戸城中において将軍・吉宗に接することもあるようになった。

あの〔将軍御狩り〕の事件が終り、御書院番頭をつとめて以来、十一年ぶりに、五兵衛は吉宗の顔を見たわけだ。

徳川吉宗は、五十九歳になっていた。

六十に近い老軀にしては、実にたくましいが、さすがに鬢髪も薄く、白くなり、十六年前の、この将軍の全身にみちあふれていた精気は、ほとんど感じられなかった。

将軍は五兵衛を見ても、往年の事件について、

「曖気にも出さぬ……」

ことは、以前、五兵衛が書院番頭をつとめたときと同様である。

それでいて、五兵衛を見やる眼の色は優しげであり、微笑はあたたかい。

（上様は、わしをお忘れではなかった……）

五兵衛は感動した。

その感動は、この年も暮れようとするころ、層倍のものとなって五兵衛をよろこばせた。

徳山五兵衛に〔布衣〕がゆるされたのである。

〔布衣〕とは狩衣の一種なのだが、五兵衛の身分として布衣を身につけることをゆるされたのは、従六位に叙任したことになる。

これは、将軍と幕府が、いかに五兵衛を重く視ているかの表現といってよい。

久しぶりで、五兵衛の顔が笑みくずれたのも当然であったろう。

そして、翌々年の正月十一日。

五兵衛秀栄は、御先手組・筒頭（鉄砲頭）に再任した。

この再任によって、五兵衛の晩年を、おもいもかけぬ激動の日々が見舞うことになる。

十九

徳山五兵衛秀栄が、御先手組・筒頭に再任したのは、延享元年（一七四四年）のことで、と

きに五兵衛は五十五歳になっていた。
　五兵衛が、将軍・吉宗の身がわりとなって重傷を負ってから、何と十八年もの歳月が経過しているわけだ。
　けれども、五兵衛の感覚としては、あの事件が五、六年前のこととしかおもわれない。
　少年のころは、
（ああ、早く新しい年が来ぬものか……新しい年が一度に三つも四つも来ればよい。そして一日も早く、大人になりたい……）
　切望してやまず、一年の月日の長さ重さを、
（もてあましていた……）
　ものなのである。
　そして何と、小沼治作は六十五歳の老人になってしまっている。
　用人・柴田勝四郎は六十八歳。
　この二人の老人の元気なことは、まことにたのもしく、柴田用人は、倅（せがれ）の平太郎が三十六歳になって、妻の八重との間に初太郎という五歳の子をもうけているにもかかわらず、
「わしはな、平太郎。死ぬる間ぎわまで、御役目をつとめる覚悟じゃ。そのつもりでおれ」
　などと、息まいている。
　柴田平太郎は、若いころから剣術のほうで、小沼治作に目をかけられ、みっちりと仕込まれたものだから、相当に遣う。

　そこで五兵衛は、平太郎を家来に取り立て、側近くにおくことにした。
　そうしておけば、平太郎が父の跡を継ぎ、用人となったときの役に立つと考えたからで、それは取りも直さず、自分の跡を継ぎ、徳山家の当主となるべき長男・次郎右衛門（じろうえもん）頼屋のためになることとであった。
　頼屋といえば、この年の秋に、新御番入りを幕府から命じられた。
　新御番というのは、旗本の嫡子の中から選ばれる。
　ほんらいならば、相続前の身の上なのに、特別に召し出されて御役目につき、つまり俸給もいただけるわけだから、これは名誉の事といってよい。
　しかも現在、父の五兵衛秀栄が先手組の頭をつとめており、父子がそろって御役目についたわけで、こうした例は、
「まことに少ない」
　とあって、親類たちも大いに祝ってくれた。
（ありがたいことじゃ）
　五兵衛は、将軍・吉宗の配慮に感動した。
（上様は、十八年前のことを、いまだ、お忘れになってはおられぬ）
　このことである。
　新御番の役目は、両御番（御小姓番（おこしょうばん）・御書院番）と同じく、江戸城内外の警衛に当り、将軍外出の折には、御駕籠（おかご）の前衛をつとめる。

旗本の子息の、家督前の御役目としては、これまた名誉の事といわねばならぬ。

頼屋は赤児のころ、病弱の気味であったが、勢以の丹精が実ったかして、長じてのちは、すっかり丈夫になった。

この、五兵衛の長男が、もう三十歳になっているのだ。

（そうじゃ……）

五兵衛は、おもい起した。

自分が、秘戯図を描くことに熱中しはじめたのは、ちょうど頼屋の年ごろであった。

（それにしても、頼屋などは気の毒なものじゃ）

と、密かに五兵衛は、憐れんでいる。

五兵衛に引きくらべて、頼屋の三十歳は、まことに順調そのものであり、前の妻を病気で失い、再婚をしたことぐらいが、彼の前半生の変化にすぎない。

こうしたことは、別に珍しいことでもあるまい。

少年のころから、父母の膝元にあって、旗本の子息としての教育を受け、真面目に成長した頼屋は、五兵衛と勢以の間に生まれただけに、なかなかの美男子である。

（頼屋なぞ、京の都へ一人、気ままに二年三年を暮すことができたら、さぞかし、たのしげなおもいをするであろうに……）

つくづくと、そうおもう。

おもうが、しかし、

「若きころの、わしのまねをいたせ」

ともいえまいではないか。

頼屋へも、一通りは刀槍を修行させてはあるが、真剣を抜いて相手と闘った経験なぞ一度もないのだ。

東林のお梶のような女との、目眩めくような熱した日々をすごしたこともない。

（それで、もはや、三十になってしもうたのか……）

人の世の旨酒も知らず、生くるか死ぬかをおもうてもみぬ冒険をしたこともなく、可哀相な……と、五兵衛はおもうわけだが、何、頼屋にしてみれば、はじめから、そうした体験をせずにすごして来たのだから、別に父親から憐れんでもらうこともないわけであった。

頼屋は、新御番入りとなって、緊張の日々を、こころよくすごしているように見える。

（ま、何よりのことじゃ）

父親として、いまさら、何をいうことがあろう。

まさかに、金をあたえて、

「すこしは、女道楽でもしてまいれ」

などと、すすめるわけにもまいらぬではないか……。

八代将軍の治世も、すっかり落ちつきを見せ、将軍も老いてきて、往年の迫力が感じられない。

将軍・吉宗も、六十をこえた。

ちかごろは、健康もおもわしくないとのことで、江戸城の奥深く、引きこもっていることが多くなった。

いまの吉宗は、別の意味で、

「すこしも早く、為しておかねばならぬ」

ことがあった。

ほかでもない。

自分の跡をつぎ、九代将軍となるべき長男・家重についてである。

家重は、三十をこえていたが、生来、まことに病弱であって、言語障害があり、父の吉宗ですら、家重の言葉を、よく聞きわけることができぬ。

しかし、家重の長男で、吉宗には孫にあたる竹千代（のちに十代将軍・家治となる）は、いま、八歳にすぎぬが健康でもあり、文武の道にも熱心であった。

したがって、祖父の吉宗が、この愛孫へかける期待は大きい。

吉宗が、初代将軍・徳川家康の幼名であった竹千代の名をあたえたのも、すでに早くから期待を寄せていたにちがいない。

吉宗は、学識の深い奥坊主の成島道筑を付け添え、竹千代に和漢の書物を学ばせているし、馬術は、竹千代が五歳のころから吉宗自身が抱いて馬に乗せ、いまでは、かなり乗りこなせるようになっている。

こうしたわけで……。

吉宗としては、何ともして、愛する孫の竹千代を将軍にさせたい。

それには、竹千代が成長する日を待たねばならぬ。

だが、そのときまで、自分が将軍位に就いていられるかどうか、吉宗は自信を失っているといってよい。

吉宗自身、尾張家との苛烈な争闘を経て、紀州家から江戸城へ入り、将軍となってからも、その争いが尾を引き、何度も暗殺されかかっているだけに、ここは何としても、

「病弱ながら家重を九代将軍に据え、自分が大御所として、できうるかぎり後見をし、竹千代を十代将軍にさせたい」

のであって、そのためにも吉宗は、次男の宗武をもって〔田安家〕を立てさせ、三男の宗尹に〔一橋家〕を、さらに家重の次男・重好に〔清水家〕を立てさせ、これを〔御三卿〕と称せしめた。

そして、この御三卿の中からも将軍の継嗣が可能となるようにしたのは、いうまでもなく、尾張・紀州・水戸の〔御三家〕に対応させたのである。

こうして吉宗は、自分の直系による徳川将軍の存続をはかろうとしたわけだが、早くも、家重の資性が、

「将軍として、ふさわしからぬ……」

との説が幕府に起りつつあった。

老いた将軍・吉宗は、おのれの健康が蝕まれつつあるのを自覚しながら、事を急がねばな

らなかった。

二十

翌、延享二年の九月一日。

徳川吉宗は、長子・家重をもって九代将軍の座に据えることを公表したので、翌二日の記録には、

「群臣、城中に出仕して、賀し奉る」

と、ある。

さらに吉宗は、同日、諸国大名へ対しても、隠退の声明をおこなった。

そして、同月の十九日に、吉宗は隠居の身となって江戸城・西の丸の御殿へ引き移り、西の丸からは家重が本丸へ移り、九代将軍の座についたのである。

ところが、それから間もない十月九日になって、大御所となった吉宗は、老中・松平左近将監乗邑を免職させ、つい先ごろに加増したばかりの一万石を没収し、隠居を命じた。

松平乗邑は、徳川家康直系の血筋であり、吉宗が将軍となってより、大いに重用せられ、何かにつけて褒賞を受け、昇進を重ね、ついに幕府最高の役職である老中に任じられたほどの人物だ。

吉宗ほどの将軍の気に入られたのであるから、松平乗邑の才幹は尋常のものではなかったにちがいない。

幕府の記録には、

「……宿老・松平乗邑、久しく権威をさしはさむふるまいあるにより、大御所（吉宗）より、しばしば御告諭ありしかど、さらにあらためし様もなく、おのれの意を主張する事ども、御胸に違えりとの事にて、職をゆるされ、出仕をとどめらる」

と、ある。

松平乗邑が、かねてから徳川家重の将軍位に就くことを危ぶみ、吉宗の次男で田安家の主となった宗武を迎えようと画策したことが、吉宗の勘気にふれたのだともいわれている。

だが、そこには、いろいろと複雑をきわめた事情があったと看てよい。

「……されど、その事の仔細は、秘して伝えざれば知るものなし」

と、記録は語っているのみだ。

この事について、次郎右衛門頼屋が、父の五兵衛に尋ねたところ、

「さようさ。真の事情は、わしにもわからぬ。なれど、推しはかることはできる」

と、五兵衛がいったので、すかさず頼屋が、

「では、父上は、どのように思しめされますか？」

「いや、これは自分の一存ゆえ、わが子といえども洩らすべきではあるまい」

五兵衛は、あくまでも慎重に、堅苦しい口調でこたえたが、

「なれど……大御所には、左近将監様の嫡子・和泉守様をもって旧領の下総・佐倉六万石を継がせ給うた。この一事を、よくよく、慮ってみれば、おのずとこたえが出てまいろう。

次郎右衛門は次郎右衛門なりに考えてみるがよい」

「はい」

「そうして、いま、胸におもうたことをよくおぼえていることが大切じゃ」

「は……」

「そして、これより先の、松平和泉守様の成り行きにこころをつけておるがよい。さすれば、大御所の御胸の内が奈辺にあったかが知れよう」

「相わかりました」

「大事なのは、そのときじゃ。いま、おぬしが胸におもうていた事が果して適中していたか、どうか……それをしかと心にとめ、おのれの識見を養わねばならぬ」

などと、いかめしげにいう父の五兵衛秀栄が、いまも暇さえあれば書見の間へ引きこもり、熱し切った両眼を見据え、裸身の男女がたわむれているありさまを絵筆に写しているなどとは、頼屋が想像もできぬことであった。

妾腹(しょうふく)に生まれた父が若きころ、屋敷を出奔したことがあると……それほどのことは頼屋も耳にしていたろう。

だが、その内容までは知らぬ。語るものとてないから当然なのだ。

ゆえに、次郎右衛門頼屋が物心ついてからの父の姿というものは、いかにも二千二百四十石の旗本らしく折目の正しい、謹直な人物という印象しかないのであって、これは、分家の徳山重之の養子となった次男の監物も同様にちがいない。

監物といえば、すでに養父の重之が病歿(びょうぼつ)してしまい、いまは分家の主となって、徳山小左衛門貞明となり、この年で二十九歳になっている。

徳川吉宗は、自分の身がわりになって死にかけた徳山五兵衛への義理を忘れず、分家の徳山貞明へも目をかけてくれた。

すなわち、元文二年には御小姓組に列し、その後は吉宗が御狩りに出るたびに貞明は供をしている。貞明は騎射に長じていて、それが吉宗の意にかない、短刀を賜わったりすることも度び度びであった。

その後は、御小納戸(おこなんど)をつとめ、さらに寛保三年には、実父の五兵衛同様、布衣をゆるされている。

そればかりではない。

吉宗は、よほど、貞明が気に入ったらしい。

自分が隠居の身となって、西の丸へ移るや、すぐさま徳山貞明を西の丸の御小姓に転じせしめた。

これは二年後のことだが、貞明が従五位下・甲斐守(かいのかみ)に叙任したのも、大御所・吉宗のはからいによってである。

西の丸へ入ってからの吉宗は、なぐさみに書画の筆を把(と)ったりするとき、かならず徳山貞明をよんで、墨を磨(す)らせたりしつつ、

「どうじゃ。本所の父は、すこやかにしておるか?」

などと、五兵衛のことについて尋ねることがあるという。
それを小左衛門貞明から聞くたびに、五兵衛は、おぼえず泪ぐんだりする。
さて……。
それは、小左衛門貞明が甲斐守に叙任する前年の延享三年の七月二十一日。
突然、徳山五兵衛に幕命が下り、おもいがけぬ役目に就任することになった。
しかも、これには大御所・吉宗の特別な意向がふくまれていたのである。

火附盗賊改方

一

その新しい役目とは、
〔火附盗賊改方〕
であった。
むかし、徳山五兵衛が十三歳のころ、亡父の重俊は六十五歳で〔盗賊追捕〕の御役目をおおせつけられたことがあった。
四十数年前の当時は、この〔盗賊改方〕とは別に〔火附改方〕という役目があり、それぞ

れに盗賊と放火犯を取り締っていたわけだが、いまは、この二つの役目を合せて〔火附盗賊改方〕となった。
将軍家膝元の大江戸は、町奉行所その他があり、警察と市政にたずさわっているが、そこは官庁だけに、それぞれの管轄があって、諸般の規則や手つづきに縛られ、緊急の処置ができかねる場合もある。
世の中が平穏ならばそれでもよいのだが、近年はことに江戸へ流れ込んで来る無宿の者や浮浪人が増加し、物騒な犯罪も、それに従って増えるということで、ここ数年は、火附盗賊改方の役職を廃していた幕府が、このたび、徳山五兵衛秀栄をもって復活させたことになる。
五兵衛の父・重俊は、この役目を命じられたとき、
「ああ、このような御役目は一日も早くやめさせていただかなくては……」
と、諸方へ辞任の運動をおこなったほどだし、また、就任してからも、まったく熱が入らず、配下の与力・同心にすべてをまかせていたものだ。
いずれにしても、ありがたい役目ではない。
この役目は、先手組のうちの一組の頭が兼務することになってい、そうなると先年の、徳山五兵衛の先手組・筒頭就任は、今日の事を幕府が慮ってのことであったのだろうか……。
自分の屋敷を〔役宅〕として、犯人を押し込める牢屋を造ったり、取り調べのための白州やら、与力・同心たちの詰所など、屋敷内を大改築しなくてはならぬ。
徳山重俊も、そのようにしたわけだが、なにぶん四十余年もむかしのことだし、当時の設

備が残されているわけではなく、あらためて改築をすることになった。その費用も大きい。

そればかりではない。

犯人の探索や、市中の見廻り、警戒などのためには、ずいぶんと金がかかる。

幕府から〔役料〕が支給されるけれども、それほどのものでは、到底まかないきれぬ。

つまりは、長官みずからが金を出して穴を埋めねばならぬ。五兵衛の亡父が一日も早く辞任したいとおもったのもうなずけよう。

しかも、懸命に役目を遂行するとなれば、兇悪の徒を相手にするだけに、こちらも一応は「いのちがけ」の覚悟で事に当らねばならない。

しかも、同じ犯罪に関わる役目でも、町奉行所は、

「檜舞台」

といわれ、火附盗賊改方は、

「乞食芝居」

などと、世間から比較をされている。

つまり、一段下った役目だというのだ。

この御役目が下ったとき、むろん、五兵衛秀栄は、つつしんで受けたわけだが、

（はて……？）

不審にもおもった。

これまでの自分へ対しての、前の将軍・徳川吉宗のおもいやりから推して看ると、五十七

歳にもなった老年の自分へ、盗賊や無頼の徒を相手に忙しく立ちはたらくばかりではなく、個人としては損失の多い御役目を命じられるということが、解せなかったのである。

それとも、吉宗が隠居をしてしまったので、幕府の方針が、がらりと変ってしまったのであろうか……。

いや、そのはずはない。

いまも吉宗が大御所として、現将軍・家重の後見をつとめ、幕府の閣僚たちへも睨みをきかせていることは事実であった。

これよりは、わずかに残る余生を秘戯図の制作に没頭しつつ、書きためて隠してある下絵などを少しずつ整理し、焼き捨てて行き、

（わしが息絶ゆるときは、すべてを灰にしておかねばならぬ）

それのみが、これより先の自分の為すべきことであるとおもいきわめていた、徳山五兵衛の目算は、がらり外れてしまった。

亡父ほどではないが、

ためいきが出なかったとはいえない。

（やれ、やれ……）

（せめて十年前のことならば、わしも、よろこんだやも知れぬ）

このことであった。

火附盗賊改方の長官ともなれば、みずから変装して江戸市中を巡回することも、当然ゆる

される。

身分に関わることなく、自由自在に市中を歩きまわることができるのだ。

だが、六十に近い老齢となった、いまの五兵衛には、それも、

（億劫な……）

ことになってしまった。

しかし、やらねばならぬ。

徳山五兵衛は、本所の自邸の改築に取りかかった。

あまり熱心にはならぬ五兵衛に引きかえ、六十七歳になった小沼治作は見ちがえるばかりに生気を取りもどし、大工や左官の指図に大童となった。

これまでは組屋敷にいた与力や同心たちも屋敷へ詰めかけてきて、これまでの徳山屋敷の静けさは、一夜のうちに失われたといってよい。

ところで……。

なつかしくも、めずらしい訪問客が単身で徳山屋敷へあらわれたのは、五兵衛が火附盗賊改方を拝命してより十日ほど後のことである。

この客の名を聞いたとき、

（まだ、生きていたのか……）

五兵衛秀栄は、瞠目した。

その客とは、神田・小川町に屋敷を構える八百石の旗本、内山弓之助正安であった。

ちょうど二十年前のあのとき、将軍・吉宗から徳山五兵衛へ〔秘命〕が下った折、亡き藤枝若狭守を間にして、秘密裡に連絡がとられ、五兵衛を江戸城内・吹上の庭へ案内したのが、内山弓之助であった。

内山弓之助は、吉宗が紀州から連れてきた隠密の一人で、亡き伴格之助が、

「内山殿は、締戸番の一組を束ねているのでござる」

と、自分へ告げたことを、いまさらに五兵衛はおもい起した。

締戸番とは、後年の御庭番でかの〔蜻蛉組〕とは別の、将軍直属の隠密組織だ。

蜻蛉組は、吉宗個人の隠密ゆえ、吉宗が隠居したいまは、おそらく解体したにちがいない。

それに引きかえ、締戸番は代々の将軍が引き継いで秘密の役目にはたらかせる。

「おお。めずらしき人の見えられたことよ」

なつかしげによびかけて、書院へあらわれた徳山五兵衛へ、内山弓之助が両手をつかえて、

「久しゅう無音に打ちすぎまして、申しわけもありませぬ」

二十年前と少しも変らぬ丁重な物腰で挨拶をした。

内山弓之助は、おそらく七十を超えていよう。

髪も眉毛も薄くなり、真白に変じていたが、引きしまった瘦身はむかしのままだし、老顔の血色もよく、口跡がさわやかである。

向い合って、二人きりになったとき、五兵衛が、

「いまも、御役目を?」
尋ねるや、内山が静かに、
「いまは倅(せがれ)めが、相つとめおります」
「では、隠居なされてか?」
「はい」
「それはよい。ようまいられた。まことに久しぶりじゃ。こころゆくまで酌(く)みかわそうではないか」
「は……それはさておき、このたびの御役目、まことにもって御苦労に存じあげます」
「いや、なに……」
「実は、そのことにつき、御都合をもうかがいませず、突然、参上いたしました」
と、内山弓之助が奇妙なことをいい出した。

二

実は一昨日、内山弓之助は、突然、西の丸の徳川吉宗に呼び出された。
内山は五年前に隠居の身となっていたが、そこは長らく締戸番をつとめて来ただけに、時折は吉宗の呼び出しを受けることもないではなかったけれども、吉宗が隠居してからは、
「このたびが、はじめてでありました」
と、内山弓之助がいった。

「上様……いや、大御所様には、おすこやかにおわしますか?」
「は……それが……」
内山が口ごもるのを見て、徳山五兵衛は眉を顰(ひそ)めた。
隠居してからの吉宗の健康が、
「おもわしくない……」
との声が、密(ひそ)かに五兵衛の耳へもとどいていたのだ。
一昨日、西の丸へあがった内山弓之助に、吉宗は、
「いま、こうして、来(こ)し方を振り返ってみると、予は将軍となってより、かく西の丸へ入るまでの、およそ三十年の間に、将軍として為さねばならぬことの半分も為すことができなんだわ」
弱々しげに洩らしたそうな。
吉宗は、将軍位に就くや、
「東照宮のむかしにもどるべし」
と、みずから率先して質実剛健の生活態度をしめし、先(ま)ず、五代将軍・綱吉(つなよし)がのこしていった虚飾の風潮をあらため、幕府自体の赤字財政の再建を目ざし、精力的にはたらきつづけた。
そして、この二点については成功をおさめたが、そのためには吉宗の独裁をもってしても、長い長い歳月をついやさねばならなかった。

後年、享保の改革とか復古政治とかいわれた吉宗の奮闘は、ともかくも将軍家と幕府との財政だけは建て直しをすることを得て、

「吉宗がいなければ、徳川幕府は明治維新を待たずに崩壊していたろう」

などと、後世の学者たちに評されてもいる。

戦乱が絶えて後の七、八十年にわたる平和は、必然、国の生産力を高め、それまではおもいもかけなかった産業を生み、便利で贅沢な人間生活のいとなみを展開させることになったが、それでいて、たとえば国内に大飢饉が見舞ったとなると、米が経済の主体である日本では、たちまちにして地獄の様相となってしまう。

しかも日本の土地は、それぞれの大名たちに分けあたえられているのだから、A国の大名や領民が飢饉で苦しんでいても、B国の大名にとって、それは他国の事ゆえ、

「知らぬ顔……」

をしていてもよいわけなのだ。

ゆえに、

「あるところにはあり、ないところにはない」

というアンバランスは、そのまま封建の世のありさまを端的にあらわしていることになる。

煎じつめれば、将軍・吉宗の超人的なエネルギーと、その意欲も、この一事を、

「どうすることもできなかった……」

のであろう。

どうにかするためには、将軍みずからが政権を投げうち、国土を万民の物にしなくてはならない。

だが、その一事が、いかにむずかしいかは、二十世紀の今日を看てもわかる。

江戸時代は外国との交際を絶ち、したがって海外貿易による経済的発展が芽吹かなかったことは事実であるが、たとえ海外貿易がおこなわれたとしても、当時、それが日本の経済にどれほどの利益を生んだかは、疑問といわねばなるまい。

「余に、あと二十年のいのちがあればのう」

と、大御所・吉宗は内山弓之助にいって、さびしげに笑ったそうな。

「二十年と、な……」

「はい」

「ふうむ……大御所様の御胸の内には、さまざまな目論見が、まだ一杯に詰まっておわすのであろうか……」

その徳山五兵衛の言葉にはこたえず、内山弓之助が、

「さ、その折に、大御所様がおおせられますには……」

「ふむ……?」

吉宗は先ず、五兵衛の近況について内山へ問いかけたのち、先年、五兵衛を御先手組・筒頭に任じたのは、

「今日のためにである」

と、いった。

つまり、火附盗賊改方へ五兵衛を就任させるためであったという。

何故(なぜ)なら、火附盗賊改方は御先手組から選ばれるゆえにだ。

「大御所様が、そのように、おおせられた……？」

「はい」

「はて……？」

どうも、五兵衛には、吉宗の意中がわからぬ。

盗賊や放火犯人や、博奕(ばくち)の取り締りをさせるために、

（大御所様は、何故、選(え)りに選って、このわしを……？）

吉宗は、内山弓之助に、

「これは何としても、五兵衛秀栄につとめてもらわねばならぬ」

と、いった。

「わしの目の黒いうちに、いま一度、五兵衛にはたらいてもらわねばならぬ」

と、いった。

内山から、そう聞かされても、

「ははあ……？」

まだ、五兵衛にはのみこめなかった。

「わしの目の黒いうちに……」とは、いったい、何を指すのであろうか……。

内山弓之助も、はじめのうちは、

「何のことやら、すこしも、わかりませなんだ……」

と、五兵衛に、

「おわかりでありましょうか？」

「いや、わからぬ。この老骨を、いまさらに何とおぼしめされておらるるのか……？」

五十七歳の五兵衛秀栄の眉毛の半分は白く変じてい、したがって頭髪も同様であった。

「なるほど。大御所様より、よくよく、うけたまわりましたところ、まさに、このたびの御役目は、そうでなくてはかなわぬところと相わかりましてござる」

「ほう……」

「実は……いや、それよりも先ず、近ごろ、三河・遠江(とおとうみ)一帯を荒しまわっている盗賊のことどもを、お聞きおよびでありましょうや？」

三

「いや、存ぜぬが……」

江戸市中のことではない。

三河や遠江・駿河(するが)へかけて、そのような盗賊が跋扈(ばっこ)していることを、徳山五兵衛は初めて聞いた。

もっとも、火附盗賊改方に就任したばかりゆえ、むりもないといえるが、しかし、すでに

江戸の人びとの耳へも、この大盗の名は聞こえていたようである。

それは、東海道を江戸へ入って来る旅人たちの口から、ひろまったのだ。

五兵衛のような大身（たいしん）の武家は、市中のうわさに、どうしても疎い。

「その盗賊の首領は、日本左衛門と名乗りおりましてな」

と、内山弓之助がいった。

「何……にほん……？」

「日本左衛門でござる」

「ほう……」

おもわず笑った五兵衛が、

「それはまた、大きく名乗ったものじゃ」

「まことにもって……」

「盗賊めが、名乗りをあげて、盗みをはたらくのかの？」

「さようでござる」

内山は、笑わなかった。

「したたかな奴ではないか」

「そのとおりなので……」

日本左衛門には、配下が三十名ほどもいるらしい。

この盗賊一味が激しく連続的に跳梁（ちょうりょう）するようになったのは、去年の秋に前（さき）の将軍・徳川吉宗が引退した直後からであるそうな。

大仰にいうならば、その以前から、

「数え切れぬほどの……」

犯行を重ねており、しかも、一味の盗賊を、一人も捕えることができぬというのだ。

「それは、また、何たることじゃ」

五兵衛も、いささか呆（あき）れた。

ともかくも、人目にふれぬよう、密かに押し入るというのではないらしい。

目ざす商家や、物持ちの屋敷へ押しかけ、いきなり、大槌（おおづち）を揮（ふる）って戸を叩き壊し、堂々と押し込み、金品を強奪して引きあげる。

まさかに、日中の犯行ではないにせよ、あまりにも大胆な盗賊どもではないか。

「それを、いままで、手を束（つか）ねて見ていたのか……」

「いや、そうではありませぬ」

たとえていうなら……。

この夏のはじめに、駿府（すんぷ）（静岡市）の豪商・近江屋（おうみや）八右衛門（やえもん）方へ日本左衛門一味が押し入ったときのことだ。

首領の日本左衛門は顔も隠さず、近江屋前の表通りへ床几（しょうぎ）を据え、これに腰をおろし、

「それっ」

手にした采配（さいはい）を打ち振るのが合図で、盗賊どもが近江屋の戸を打ち破り、一斉に押し入っ

た。

　これを、ちょうど、夜まわりの役人が通りかかって見つけたので、すぐさま、捕物の手配をした。

　そこで、二十名ほどの捕手が近江屋へ駈け向ったわけだが、

「おお、来たな」

　日本左衛門は床几から腰もあげず、銀の煙管で煙草を吸いながら、

「かまわぬから、蹴散らせ。蹴散らせ」

といった。

　すると、十名ほどの配下が刀を引き抜き、捕手へ立ち向う。

　この手下どもの腕力が大変に強い。

　捕手たちは、日本左衛門に近づくどころか、たちまちに七、八名が斬り殪されてしまった。

「加勢を……」

「早く、加勢を……」

　遠巻きにして、加勢の人数が駈けつけて来たときには、早くも大金を奪った盗賊どもが近江屋から引きあげて行く。

　日本左衛門が、ようやく床几から立ちあがり、

「さ、早う引け。おれが殿をする」

いうや、肉迫する捕手へ我から突進し、猛然と斬り捲った。

　夜の街路に、日本左衛門が、まるで、

「怪鳥のごとくに……」

　飛びまわると、捕手が二人、三人と斬り殪される。

「早く、目潰しを……」

　捕手が用意の目潰しを投げようとするや、日本左衛門の配下どもが逸早く、先手を打って目潰しを投げつけてきた。

　これでは、どちらが盗賊なのか、わからぬではないか……。

「ふうむ……で、その折も、ついに、賊どもを捕えることができなかったと申すのか？」

「一人も捕えることができませぬ」

「何ということじゃ」

　五兵衛は、呆れ果てた。

　駿府は、かつて、徳川家康の本城が在ったところで、家康が関東へ移り、後に江戸幕府を興して初代将軍となってのち、一時は大納言・松平忠長の居城となったが、いまは幕府が城代を置き、奉行が市政を執っている。

　ということは、日本左衛門は駿府における犯行によって、徳川将軍と幕府をも恐れぬ姿勢をしめしたことにもなる。

「なるほど……」

　これは捨ててては置けぬ事だと、徳山五兵衛はおもった。

（それで、大御所様は、このわしをたのみになされ、かの盗賊を捕えさせようとの思し召しであったか……）

と、納得が行きかけたけれども、だからといって釈然としたわけではない。

たかが盗賊を捕えるために、吉宗は二年前の、自分が引退をする直前に、わざわざ五兵衛を御先手組に任じて、今日にそなえたのであろうか……。

これもまた、妙なことではないか。

それほどに慎重な配慮があるならば、何も老いた徳山五兵衛をたのみにせずとも、旗本には、いくらも人材が揃っているはずであった。

「では、この五兵衛に、件の怪盗を捕えよと、大御所様がおおせあるのか？」

こころみに尋くと、内山弓之助が、

「そのとおりでござる」

強く、うなずいて見せた。

やはり、そうであったのだ。

あらためて、老中より、徳山五兵衛へ命が下るらしい。

「うけたまわった」

五兵衛は、内山にこたえた。

たとえ、どのような役目であろうとも、吉宗の期待を絶対に裏切ることはできぬ。

「さ、そこで……」

と、内山弓之助が姿をあらため、

「大御所様が、この御役目を、ぜひにも御貴台へとおおせられまするには、理由がありまする」

「ほう……？」

「実は、その日本左衛門なる盗賊は、尾張家の御七里をつとめおりました浜島友右衛門の倅にて、本名を浜島庄兵衛と申します」

「何……尾張家の御七里じゃと……」

「はい」

はっと、五兵衛の脳裡へ閃くものがあった。

〔御七里〕とは、いわゆる御家門大名とよばれた将軍の親類にあたる大名家が設けた一種の通信機関のようなものだ。

いまでは、本格的に七里役所を設けているのは〔御三家〕のうちの尾張・紀州の両家のみである。

すなわち、尾張藩では、東海道に十三ヶ所の七里役所を設け、国許の名古屋と江戸との間の特別通信（主として、藩主自身に関係した文書）の受発の敏速をはかっている。

ゆえに、七里役所につとめる者は、足軽にせよ飛脚にせよ、足の速さを誇り、心の利いた、しっかりした男でなくてはならない。

彼らは御状箱のあつかいのみではなく、藩主の行列が通りかかれば先に立って案内もする

し、藩士の旅行にも、いろいろと世話をやく。また、担当の役所の近辺に起った出来事については絶えず目を光らせてい、これを藩庁へ報告しなくてはならぬ。
ために、たとえ身分は軽くとも、この御七里をつとめる者は、
「なかなかの威勢がある」
と、いつであったか、徳山五兵衛も耳にはさんだことがある。
日本左衛門こと浜島庄兵衛の亡父・友右衛門は、遠江・金谷（かなや）の宿場の七里役所にいた尾張家の足軽であったそうな。

四

そうなると、これは、単なる盗賊一味ではない。
徳川将軍へかける尾張家の恨みが、まだ、尾を引いているのであろうか。
まさかに、いまの尾張家が盗賊一味を密かに操っているとはおもわれぬ。
前藩主・徳川宗春が、吉宗によって謹慎を命じられて以来、尾張家は何事にもつつましく、将軍と幕府を敬う態度をくずさぬ。
ゆえに日本左衛門は、おのれ一人の考えで、
「将軍と幕府に反抗をしている……」
ものと看てよい。
前将軍・吉宗は、蜻蛉組や締戸番に命じ、長年にわたり、尾張家の反抗と暗躍の実態を探

り、これと闘い、密かに弾圧をおこなっている。
そのため、双方には相応の犠牲者も出たことはいうをまたぬ。
いまの尾張家は、完全に将軍へ恭順の姿勢をとっているが、尾張家を飛び出した者たちの反抗というのなら、
（うなずけぬことはない……）
のである。
これ見よがしに東海地方を荒しまわり、盗み奪（と）った金を諸方の貧窮の人びとへ分ちあたえているという日本左衛門の〔義賊ぶり〕には、いわゆる「有るところには、いくらも有り、無いところには、まったく無い」という幕府政治への揶揄（やゆ）がこめられているようにもおもえる。
いや、事実そうなのであろう。
それでなければ大御所の吉宗が、いまさらになって徳山五兵衛へ、このような役目を申しつけるわけがない。
おそらく吉宗には、盗賊どもについて、
「これを放置してはおけぬ」
と、みずから策をめぐらすだけの根拠があるにちがいない。
そうなれば、多勢の旗本の中でも、徳山五兵衛が適任であることはいうまでもない。
吉宗は、若き日の五兵衛が京都へ上る途中で体験した事件や、尾張屋源右衛門・佐和口忠蔵などとの関係を知っているわけではあるまいが、何といっても五兵衛は、蜻蛉組と共に、

将軍暗殺を計る曲者たちを探り、ついには将軍の身がわりともなった。

通常の旗本の中で、かの〔御意簡牘〕の所持をゆるされ、尾張家との秘密の事件にはたらいたのは、おそらく徳山五兵衛一人ではなかったろうか……。

ゆえに吉宗は、日本左衛門一味の殲滅について、

「五兵衛秀栄なれば、万事、心得ていよう」

と、内山弓之助に洩らしたのである。

尾張家へ対する吉宗の処置や考え方も、五兵衛は亡き伴格之助から耳にしている。

火附盗賊改方の長官として江戸をはなれ、おのれの独断をもって、以前は尾張家に仕えていた日本左衛門一味を捕えるには、やはり、それだけの思慮を必要とする。

徳川吉宗は、

「天下を騒がせることなく……」

尾張家から食み出した不逞の輩を、

「密かに始末せよ」

と、いっているのだ。

内山弓之助は、ちかごろの日本左衛門一味が犯行の折に、押し込み先の女に乱暴をはたらきはじめるようになった、と、五兵衛に告げた。

これは、首領の日本左衛門がするのではない。

その手下どものうちの何人かが、暴行をはたらくらしい。

それを日本左衛門は知っているのか、どうか……。

みずから「義賊」と称するだけに、押し込み先で人を殺傷することはないが、代官所や陣屋の役人などへは、いささかの容赦もなく兇刃を揮う。

「それで、日本左衛門の面体は知れてあるのか？」

「それは、もう……」

何しろ、覆面もせずに押し込み、指図をしている上に、被害者を殺さぬのだから、顔も見られている。

「見かけは三十前後。背丈は六尺におよぼうという……」

「大男じゃな……」

「さようでござる」

「ふむ……それで……」

「色白の、鼻すじの通った、なかなかの美男子だと申します」

「ほう……」

「額の、このあたりに、一寸あまりの引疵があるそうでござる」

語り終えた内山弓之助は、

「では、これにて……」

「いま少し、すごしてまいられよ。酒でも酌もうではないか」

「は……いま一度か二度、お目にかかれるかと存じます。その折に、ゆるりと馳走に相なり

ます」

「さようか」

内山は帰って行った。

その後で、徳山五兵衛は沈思に耽った。

いろいろなおもいが、胸の内に錯綜している。

約四十年前の、東海道で体験した出来事の一つ一つが、あざやかによみがえってきた。

（もしやすると……？）

だが、四十年後のいま、あの折の人びとが生きていようか。いるはずもないようにおもえる。

小沼治作が入って来て、

「何ぞ、出来いたしましたか？」

「小沼。どうじゃ、わしと共に旅に出てくれるか？」

「旅に……？」

「ちょと骨が折れる旅じゃ。この老骨には面倒なれど、出かけねばなるまい」

「お上の御用にて……」

「さよう。大御所様直き直きのおたのみらしい」

五

その後、約半月ほども、内山弓之助からは何の連絡もなかった。

また、幕府から特別の下命があったわけでもない。

しかし徳山五兵衛は、小沼治作と共に、連日のごとく邸内の道場へ出て、配下の与力・同心たちへ剣術の稽古をつけはじめた。

いま、火附盗賊改方の与力は七人、同心は三十五人であって、これはいずれも先手組・筒頭としての、五兵衛の配下でもある。

この年の残暑はきびしかったが、ようやくに秋風が立ちはじめた。

そのころ……。

遠江の見付在の庄屋で、飯沼三右衛門という老人が、江戸へ駈けつけて来て、

「おそれながら……」

と、町奉行所へ訴え出た。

またしても、日本左衛門が暴れはじめたのである

日本左衛門一味は、庄屋の三右衛門邸へ押し込み、金品を盗み奪った上、三右衛門の二人の娘に乱暴をした。

それでも尚、盗賊どもを捕えることができぬ。

たまりかねた飯沼三右衛門が、

「かくなりましては……将軍様のおちからをもって、あの憎い憎い、恐ろしい大泥棒を引っ捕えていただかぬかぎり、どうにもなりませぬ。罪科もない者たちが泣きを見るばかりでご

ざります」
涕泣しつつ、訴えたという。
この事は、内山弓之助が手紙をもって五兵衛へ知らせてよこした。
内山は、こういっている。
「自分も久方ぶりにて、いろいろと立ちまわっております。近きうちに、御下命があるかと存じますが、それまでに、御役に立つこともあろうかと存じ、手配りをいたしおります」
果して……。
この年の九月九日。
徳山五兵衛は老中・堀田相模守から呼び出されて、
「遠州へおもむき、日本左衛門一味を捕えよ」
と、命じられた。
このとき、堀田相模守は、大御所・徳川吉宗の内命であることを口にしていない。
五兵衛は本所の自邸へもどるや、配下の与力・同心たちをあつめ、下命のおもむきを告げ、
「日本左衛門めは義賊なりと称して大百姓・大町人方へ押し入り、しかも、押し込む先の婦女子を辱しめずにはおかぬということじゃ。まことにもって、上の御威光を怖れざる者ども。言語道断、不埒至極の奴輩である!!」
凛然として、
「近辺の陣屋、代官所においても盗賊どもを捕えること成らず、まことにもって歎かわしい

ことじゃ。われらは、かならずや盗賊共を引っ捕え、火附盗賊改方の面目を立てねばならぬ。それまでは、二度と江戸の土を踏まぬ覚悟でおれ」
と、気合を入れたものである。
五十七歳になったが、徳山五兵衛の立派な体格は、少しも衰えては見えぬ。
ただし、髪には、めっきりと白いものが増えた。
その五兵衛の頭髪が、
「急に黒くなられたかのごとく、若返られた……」
と、用人・柴田勝四郎が瞠目するほどに、五兵衛の声にも躰にも精気がみなぎってきはじめた。
火附盗賊改方への下命は、若年寄から達せられるのが通常なのだ。
それをわざわざ、老中の堀田相模守が五兵衛へ申しわたしたのは、幕府も、この事件を重く視ているからに相違ない。
五兵衛は、筆頭の磯野源右衛門以下三名の与力と、同心は堀口十次郎以下十名をえらび、指揮は、むろん、五兵衛みずからが執る。
そのほかに、小沼治作と、柴田用人の倅・柴田平太郎が加わり、五兵衛の身のまわりを世話する足軽の長井録蔵と小者の丈助も附いて行くことになった。
同勢は、合せて十八名ということになる。
こうして、仕度を急いでいるところへ、内山弓之助があらわれた。

内山は内山なりに、手配をととのえてくれていたのだ。
つまり、締戸番に所属している密偵を四人、さしむけてくれたのである。
これらの密偵は、武士ではない。
見たところは、いずれも平凡な町人なのだが、幕府の隠密の役目にはたらく締戸番が使っている密偵ゆえ、
「たのむに足る……」
男たちであることは、いうまでもない。
密偵たちの束ねをしているのは、新五郎という五十がらみの小柄な男であった。
この密偵たちは、いずれも、三河・駿河・遠江の地理にくわしいと、内山弓之助はいった。
こうなると、同勢は五兵衛秀栄を含めて二十二名ということになるが、
「四人の密偵は先に江戸を発たせ、彼地へ入り込ませておいたほうがよいと存じますが……」
内山弓之助が、そういい出た。
「なるほど。もっともじゃ」
そこで、この日は、五兵衛、内山、磯野与力などに四人の密偵が加わり、綿密な打ち合せがおこなわれた。
何枚もの絵図を前にして、先発と密偵たちとの連絡の仕方から、宿駅での五兵衛が泊る旅籠または本陣などについても、くわしく取り決めておかねばならぬ。
こういうことになると、徳山五兵衛は、密偵たちの進言を熱心に聞き取り、多く採り入れた。
いずれにせよ、彼らのほうが、こうしたことには、
（くわしいに、きまっている……）
からであった。
そうなると密偵たちも、知らず知らず、
（この殿様のためなら、骨身を惜しまずにはたらこう）
という気になってくる。
これは五兵衛が、単なる旗本ではないということだ。
尋常の旗本では味わえぬ波瀾を、五兵衛は年少のころから掻い潜ってきている。
翌朝。
四人の密偵が先発した。
午後になると、与力・岩瀬半兵衛と、同心・辻駒四郎が旅装をととのえて徳山屋敷を出発した。
これは、宿泊その他の事を、打ち合せと狂わぬようにするためであった。
その翌日には……。
与力一名、同心七名が、前後して江戸を離れた。

いずれも、火附盗賊改方という役目は、あくまでも隠して行動せねばならぬ。
徳山五兵衛は、帰国する備前(びぜん)岡山藩士・大沢甚太夫(じんだゆう)一行というふれこみで、与力・磯野源右衛門に同心二名。それに小沼以下四人の附き添いの者を従え、最後に江戸をはなれた。
この日は、延享三年九月十三日である。

酒匂(さかわ)川

一

その年の九月十三日は、現代の十一月初旬に相当する。
晩秋の、快晴の朝であった。
旅をするには、絶好の日和といってよい。
同心二名を先行させておいて、徳山五兵衛は、まだ日が昇らぬうちに屋敷を出た。
玄関構えまで、見送りに出た勢以が、不安そうな面もちであった。
勢以は、五十二歳になってい、髪に白いものがまじりはじめている。
「くれぐれも、お気をつけあそばしまして……」
ささやくようにいった勢以の声が微(かす)かにふるえていた。

五兵衛は、柴田勝四郎以外の屋敷の人びとに、今度の旅の目的を語っていない。
現に、供をして行く長井録蔵と丈助も、
「お上(かみ)の御用の旅である」
とのみ、聞かされていた。
勢以も同様である。
けれども、勢以の脳裡(のうり)には何といっても、夫の五兵衛が重傷を負った、あの事件が忘れられない。
(今度も、また、あのように……)
あのように危険な役目なのではないかと、勢以は感じているらしい。
いまだに五兵衛は、この老妻の乳房を見ていない。
そのように淡いまじわりしかしていないのに、夫婦となってより三十余年もたつと、勢以は完全に、徳山家の人になりきってしまっている。
こうなると肉親も同様というわけで、五兵衛の感覚としても、無意識のうちに、そうなってしまったにちがいない。
ゆえに、肉親としての心配、肉親としての不安に、老いた勢以は胸を痛めている。
むかしは、あれほどに気が強かった勢以が声をふるわせ、夫の身を気づかう姿を見て、五兵衛は目をみはった。
「案ずるな」

と一言、あとは振り向きもせずに屋敷を出た。
六十七歳になった小沼治作の足取りは軽い。
さすがに、鍛えぬいた躰ではある。
小沼の両眼は、生き生きと見ひらかれていた。
「小沼、大丈夫か?」
と、両国橋へさしかかったとき、五兵衛が振り向いた。
「大丈夫かとおおせられますのは、何のことで……?」
「いや何、今日は一気に戸塚までまいるゆえ、な」
東海道・戸塚の宿は、江戸を離れること十里半。
男の旅にしても、出発第一日目の行程としては強い。
「何の……」
と、小沼は不機嫌に、
「ようも、おおせられることよ」
つぶやくようにいった。
そちらこそ大丈夫なのか……と、いいたげな顔つきなのである。
日本左衛門一味の逮捕に向う火附盗賊改方一行の本拠は、遠州の袋井に置くことになっている。
東海道・袋井の宿駅は、江戸より五十九里余。

これを四日で到着するつもりの徳山五兵衛であった。
小沼も達者なものだが、五兵衛自身も気力が充実しているためか、速歩におとろえを見せず、まだ、空が明るみを残している時刻に戸塚の宿へ入ることができた。
与力・同心たちはさておき、一度も旅に出ていない柴田平太郎や、足軽と小者は懸命に主人を追ったが、この三人が戸塚へ入ったのは、五兵衛と小沼に遅れること半刻（一時間）であった。
「平太郎殿。まだ、御修行が足りませぬな」
などと、小沼治作が、三十八歳の柴田平太郎にきびしいことをいった。
（頑固おやじめ……）
五兵衛は、笑いをかみころしている。
戸塚は、すでに相模の国（神奈川県）である。
徳山五兵衛が、まだ権十郎を名乗っていた十八歳のころ、江戸を出奔し、先ず第一夜をすごしたのが、この戸塚の宿であった。
あのときは、たしか、旅籠〔羽沢屋九郎左衛門〕方へ泊ったことをおぼえている。
この羽沢屋が、いまも営業をしていて、五兵衛はなつかしさに堪えきれなくなり、
「おもうところあって、わしは、羽沢屋へ泊る」
単身、羽沢屋へ泊った。
他の者たちは、本陣・沢辺治兵衛方へ泊った。

　羽沢屋へ入って見ると、旅籠の人びとの顔に見おぼえはなくとも、内部は四十年前そのままなのだ。

（わしが泊った部屋へ入りたいものだ）

　と、おもったが、あいにく、その部屋には夫婦者が泊っていたので、あきらめざるを得ない。

　翌十四日の朝。

　暗いうちに、本陣へ泊っていた小沼治作が羽沢屋へあらわれ、与力・同心たちが先発したことを告げた。

「小沼。早いのう」

「何の……」

「大丈夫か？」

「そちらさまこそ」

　柴田平太郎と足軽・小者の三人は、昨夜、寝床へ入ったかとおもうと、

「雷鳴のごとき、鼾を発しましてございます」

　小沼治作が、さも、

（若い者は、だらしがない……）

　とでもいいたげな笑いを浮かべ、五兵衛にささやいた。

「さようか。初旅ゆえ、さぞ疲れたことであろうな」

「それにいたしましても、意気地がございませぬな」

「うふ、ふふ……」

　三人を背後に、五兵衛と小沼は、羽沢屋を出て、濃い朝霧がたちこめる街道を歩み出した。

（四十年前の、あの朝も、霧がたちこめていた……）

　若いときのことだけに、記憶は鮮明であった。

　あの朝……。

　戸塚の宿を出て、一里ほども行ったところにある松林で、五兵衛は、曾我の喜平治・お玉の父娘に出合った。

　父娘は、三人の旅姿の男たちの脇差に囲まれ、まさに危うかった。

　そこへ五兵衛が通り合せ、三人の曲者を追いはらい、父娘を救ったのだ。

　いま、徳山五兵衛は小沼たちを従えて、千本松とよばれる松林へさしかかった。

　五兵衛の足が、止まった。

「いかがなされました？」

　と、小沼治作。

「いや何、四十年前のことを、おもい浮かべていたのじゃ」

「あ……あの折の……」

「うむ。この松林で、わしは、喜平治とお玉を助けたのじゃ」

「ははあ……」

小沼治作だけには、くわしくではないが、およそのことを語ってある。

「のう、小沼……」

「はい？」

「わしはな、このたびの事件(こと)について、いささか、おもい当ることが、ないでもないのじや」

「と、おおせられますのは？」

「何と申しても四十年前のことゆえ、それが、このたびの事にむすびついてくれるか、どうか、それはわからぬが……」

二

四十年前のあのとき、曾我の喜平治・お玉の父娘を救った徳山五兵衛は、森の中の百姓家へみちびかれた。

道中切手（身分証明書）もなしに、

「これより、大坂へ行く……」

つもりの五兵衛へ、喜平治は、老爺(ろうや)の伊之蔵を附き添わせて、小田原の手前の酒匂川の茶店へ送りとどけてくれた。

あのとき、お玉は十五、六歳の小娘であったから、いまも生きているとすれば五十四、五歳の、老女になっているはずだ。

将軍御狩りの事件があったとき、佐和口忠蔵が捕えられ、処刑されたことは五兵衛の耳へ入っており、尾張屋源右衛門が京都郊外の嵯峨野で病死したことも、伴格之助から聞かされている。

あの折、一味の曲者どもが何人も捕えられ、しかるべく処刑されたり、処罰を受けたりした中に、

（お玉が、いたかどうか……？）

それは、五兵衛も知らぬ。

いたとすれば、女の身だとて罪はまぬがれまい。

（先ず、生きていようはずもない）

いまは五兵衛も、そうおもっている。

曾我の喜平治や伊之蔵は、当時の年齢から考えても、たとえ捕縛をまぬがれていたにせよ、すでに、

（この世の人ではない……）

ことは、たしかだといってよい。

いまにして五兵衛がおもうに、四十年前のあのころ、曾我の喜平治は盗賊の首領だったのではあるまいか……。

五兵衛は本所見廻り方をつとめた折に、無宿無頼の徒や盗賊たちの生態を、わずかながらも垣間見(かいまみ)たし、町奉行所や盗賊改方から、彼らの悪の仕組みについて知ることが多かった。

そうしたことを肚に入れておかぬと、本所見廻り方という役目はつとまらなかった所為もある。

そのときの経験から、当時を振り返ってみると、どうも、曾我の喜平治が盗賊であったような気がしてならぬ。

あのとき、五兵衛を案内して小田原へ向う伊之蔵が、

「喜平治殿は、いったい、どういう人なのだ？」

と、不審を抱いた五兵衛へ、

「これ、お頭のことは、何も尋きなさるなよ」

きびしく、たしなめた。

「おかしら……喜平治殿は、いったい、何のお頭なのだ？」

「何でもいいだよ。お武家にも、お頭はあろうがよ。どんなところにも、お頭はいるだよ。だまって歩きなせえ」

伊之蔵は、怖い顔つきになった。

それにしても「お頭」という呼び方が、十八歳の五兵衛にも、一種、異様なひびきをもって脳裡へきざみ込まれたことは事実であった。

喜平治父娘を、千本松で襲った三人の兇漢といい、森の中の、何やら秘密めいた隠れ家といい、そうした環境に生きている曾我の喜平治が〔お頭〕と呼ばれている……。

これは、

（徒の、お頭ではないな）

五兵衛は、直感したものだ。

その疑惑は、その後、酒匂川畔の茶店へみちびかれ、老婆のおとき・寅吉の母子に引き合わされ、さらに、小田原城下の針屋・堺屋太兵衛へ連絡をつけてもらい、太兵衛の案内で、暗夜の山越えに熱海へ送り込まれた過程において、いよいよ増大した。

当時、権十郎を名乗っていた徳山五兵衛は、若さと好奇心によって、これらの不思議な人びとへ警戒のこころもなく相対し、あくまでも素直に、彼らがみちびくままに身をまかせた。

あのとき、江戸を出奔した少年の自分にとっては、相手が盗賊であろうが何であろうが、

（いささかも、かまわぬ……）

という気分であった。

なればこそ相手も、五兵衛へ好感を抱き、危険を冒してまで、この少年を上方へ送ってやろうとおもったのではあるまいか……。

さ、そこで、熱海で別れるときに堺屋太兵衛は、曾我の喜平治が五兵衛へあたえた、大坂の書物所・加賀屋孫助宛の紹介状を見て、

「加賀屋さんについては、喜平治どのより、よう聞いておりまする。きっと、たよりになるお人だと存じますが、それよりも先ず、京へお立ち寄りなさるがようござります」

こういって、尾張屋源右衛門への書状をしたため、五兵衛へもたせたのであった。

その尾張屋源右衛門が、後年、佐和口忠蔵を一味に引き入れ、尾張家の隠密組織の、

「知られざる一環……」

として、八代将軍の暗殺をたくらむことになった。

これを逆にさかのぼるならば、尾張屋源右衛門→堺屋太兵衛→曾我の喜平治ということになる。

「ふうむ……」

五兵衛が語るにつれて、小沼治作のおどろきは重なるばかりとなった。

こうしたことまで、五兵衛が語り洩らしたことは一度もない。

「あの、尾張屋のあるじが、そのような……」

「となれば、曾我の喜平治も、何やら尾張家とのむすびつきがあったのではないか……」

「この松原で、喜平治父娘を襲うたのは、何者でござりましょう？」

「さて……それは、わからぬが、たとえば喜平治を盗賊の頭であったことにしてみよう。さすれば、同類の盗賊の怨みをかけられるようなことが、あったのではあるまいか……」

「なるほど……」

曾我の喜平治や堺屋太兵衛が、大がかりな盗みをはたらいていたとすると、その盗み金は、将軍暗殺のための諸計画や人手をあつめるために、

（使われていたのではあるまいか……？）

そのようにも、おもわれる。

そして、四十年を経た現在（いま）、徳山五兵衛は、東海地方を荒しまわる怪盗・日本左衛門を捕

えるため、大御所・徳川吉宗の内意をふくめた命令によって江戸を出発した。

日本左衛門の亡父は、以前、尾張家に仕えていた者だそうな。

「のう、小沼……」

「は……？」

「そうと聞けば、何やら匂ってはこぬか、どうじゃ？」

「はあ……」

剣を把（と）って立てば、若者にも引けをとらぬ小沼治作だが、こういうことには、あまり推理がはたらかぬらしい。

「わからぬか？」

「何がでござります？」

「いまは、どのようになっておるか知れぬが……わしは先ず、酒匂川の、おとき婆（ばば）の茶店が、いまも在るか無いか……それをたしかめてみようとおもう」

「あ……」

小沼が、ぽっかりと口を開けた。

はじめて、五兵衛の意図がわかりかけてきたらしい。

「な……」

「はい。では、その、小田原の針屋をも……？」

「堺屋太兵衛が生きておるなら、八十の年齢（とし）ごろゆえ、これはどうか……なれど、小田原城

下をも探ってみるつもりじゃ。よいか、小沼。わしは一人にて、おとき婆の茶店へおもむくゆえ、そのほうは、磯野源右衛門らと共に小田原へ入れ。なれど、かまえて、いま、わしが申したことを一同に洩らしてはならぬ」

「心得ましてござります」

街道に、霧がはれかかってきた。

磯野以下の与力・同心、従者たちは、五兵衛と小沼の後ろから歩みをすすめていた。

これまでは、小沼に語りつつ、ゆっくりと歩んでいた徳山五兵衛が、

「急げ。日暮れまでには小田原へ入るぞ」

と、いった。

これより、小田原までは約十里である。

三

この夜。

徳山五兵衛一行は、小田原城下の本陣・保田（やすだ）利左衛門方へ旅装を解いた。

そして……。

針屋・堺屋太兵衛については、この夜のうちに、およそのことがわかった。

堺屋太兵衛の店舗は、すでに、城下から消えていたのである。

近辺の人びとから聞き込んだところによると、

「二十年ほども前になりましょうか……せっかくに、商いも繁昌してきたというのに、堺屋さんは店をたたみ、京の方へ引き移ってしまいましたよ」

とのことだ。

二十年ほど前というならば、五兵衛が吉宗の身がわりをつとめた、あの事件の前後ということになるではないか。

これは、何を意味しているのであろう……。

堺屋太兵衛は小田原の店をたたみ、江戸へ身を移し、佐和口忠蔵等と共に、将軍暗殺のための暗躍へ没頭していたのではないか。

とすれば、太兵衛も捕えられ、

（おそらくは、処刑されてしまったのであろう……）

と、五兵衛は推察した。

太兵衛には女房もいたし、奉公人もいたが、そうした人々の行末は、いまとなってはわかりかねることだし、また、このたびの徳山五兵衛の任務とは関係のないことだともいえよう。

しかしながら、五兵衛の胸底へ仕舞い込まれている堺屋太兵衛という男は、日本左衛門の捕物と、

（真更（まんざら）、むすびついていないこともない……）

ように感じられる。

夜がふけて、五兵衛は一行を本陣の奥の間へあつめ、与力の磯野源右衛門へ、

「明日は箱根を越え、三島泊りのはずじゃな」
「はい。本陣・樋口伝左衛門方にござります」
「さようか。実は、な……」
「は……?」
「明日、わしは、ちょと寄り道をいたしてまいりたい。それゆえ、一同は先に発ち、三島にて、わしの到着を待ってもらいたい」
「かしこまりました。寄り道とおおせられますのは?」
「何、ほんの私事じゃ」
五兵衛の声には、重ねての問いかけをゆるさぬものがあった。
「さようにござりますか……」
与力・同心たちは、微かな不安をおぼえたが、長官のいいつけゆえ、これに従うことは当然であった。
「して、御供は、いかがいたしましょうや?」
磯野源右衛門がいうと、五兵衛は足軽の長井録蔵と小者の丈助のみでよいとこたえた。
「なれど、それにては……」
「かまわぬ。それでよいのじゃ」
しずかな声であったが、五兵衛の口調には有無をいわせぬものがある。
仕方なく、一同は引き下って行ったが、五兵衛が目くばせをしたものだから、小沼治作の

みが居残った。
「小沼。よう心得ていてくれよ。よいな……」
「はい。私めは、御供が適いませぬのか?」
「すべてを心得ているそのほうが、一同の中にいてくれぬと困るではないか」
「は……」
どうやら、納得したらしい小沼治作が、
「で……明日は、かの酒匂川の茶店とやらへ……?」
「うむ」
「先程、この本陣の者に、それとなく問うてみましたところ、川べりに、いまも茶店があるそうでございます」
「ほう……さようか……」
おもわず、身を乗り出した五兵衛が、
「あの、老婆は、まぎれもなく、すでに死んでいようが、もしやすると息子の寅吉は六十四、五になろうか。生きていてもふしぎではない……なれど、茶店などというものは、よく代替りをするものゆえ、行って見ぬことにはわからぬ」
「いかさま……」
小沼が引き下ったあとで、五兵衛は、
(姿を変えて、茶店へおもむいたほうがよいのではないか……)

考えてみたが、何をおもいついたかして、
「これ、録蔵はおらぬか」
長井録蔵を呼び、
「手鏡を借りてまいれ」
と、命じたものだ。
そして五兵衛は、本陣から借りた手鏡に、わが顔を映し、ながめて飽きぬ様子である。
白いものが、めっきりと増えた髪、眉毛。そして皺……。
何といっても、厳しげな五十七歳の老人の顔であった。
「ふうむ……」
これなら、わかるまいと、五兵衛はおもった。
四十年前の、紅顔の美少年といってよかった徳山権十郎の面影は何処にもない。
これならば、たとえ寅吉が生きていて、
（わしを見ても、わかるまい）
このことである。
それならば、旅の浪人者などに変装するよりも、岡山藩士・大沢甚太夫になりきって、茶店へおもむいたほうがよい。
（そうじゃ……）
また、何かおもいついた五兵衛が長井を呼び、

「磯野源右衛門を呼べ」
と、命じた。
すぐに、磯野があらわれるや、
「だれにてもよい。同心二名を、明日、この本陣へとどめておくように」
「はあ……」
磯野源右衛門の顔色が、いささか変ったようだ。
（これは、今度の御役目に、何ぞ関わることがあるのではないか……）
と、感じたらしい。
だが、五兵衛は、その上の事は口にせず、
「では、たのむぞ」
「は……」
「下ってよい」
「では……」
磯野は、堀口十次郎・横山房之助の二名を、本陣へ残しておくことにした。
翌日。
磯野与力と小沼治作・柴田平太郎の三名が、先発ということになり、早朝に本陣を出て行ったが、徳山五兵衛は、まだ、臥床からはなれていない。

四

五兵衛が、足軽の長井録蔵と小者の丈助を供に、本陣の保田利左衛門方を出たのは、昼近くなってからである。

三人とも、旅姿であった。

本陣へ居残りを命じられた堀口十次郎・横山房之助の二同心へ、

「いつにても発足できるよう、仕度をととのえておけ」

と、五兵衛は言い置いた。

「いったい、何を考えておわすのか？」

「わからぬ」

堀口も横山も、不審顔である。

五兵衛の供をして本陣を出た長井と丈助も、顔を見合せた。

先へ立って歩む主人が、東海道を下りはじめたからだ。

小田原城下を出外れたとき、五兵衛が振り向き、

「これよりは、口をきいてはならぬ。よいか」

供の二人へ念を入れた。

「また、不審のことあっても、それを顔に出してはならぬぞ」

「はい」

「何事にも、然あらぬ態にしておるがよい」

「心得ましてござります」

今日も、よく晴れわたった。

酒匂川の堤へ出ると、一面の芒の群れが風にゆれている。

昨日の夕暮れに、小田原城下へ入ったとき、五兵衛は件の茶店の有無をたしかめておこうとも考えたが、

（ま、急くこともあるまい）

おもい直したのである。

酒匂川をわたらず、堤の道を北へすすむ徳山五兵衛の背後で、また、供の二人が顔を見合せた。

（何処へ、おいでなさるおつもりなのか……？）

このことである。

堤の彼方に、見おぼえのある茶店の藁屋根が目に入ったので、おもわず五兵衛は足をとめた。

近寄ってみると、茶店は、いまも店をひらいているではないか。

五兵衛は、長井と丈助へ目くばせをしておいて、

「ゆるせよ」

声をかけ、塗笠を除って、茶店の中へ入って行った。

客は、一人もいない。

いや、四十年前も、あまり客の姿を見たおぼえがない。

街道筋でもないし、茶店の営業が成りたつような場所ではないのだ。

それにもかかわらず、四十年後のいまも店をひらいているというのは、それだけの理由がなくてはならぬ。

古びた縁台へ腰をおろした五兵衛へ、

「おいでなせえまし」

奥から、躰つきのたくましい男があらわれ、頭を下げた。

皺も深く、ほとんど頭髪も脱け落ちている老爺なのである。

「茶をくれい」

「へい」

「そこの者たちへ……」

と、五兵衛が土間の一隅に控えている長井と丈助を目顔でしめし、

「何ぞ、食べるものでもあらば、出しやってくれい」

「団子ならごぜえます」

「それでよい」

うなずいた老爺は、奥へ入った。

（いた。まさに、寅吉じゃ）

四十年前の、おとき婆の倅の面影を、五兵衛は老爺の皺の中に、はっきりと見出した。

近年の記憶の退歩に引きくらべて、年少のころのそれは、ちかごろ、いよいよ鮮烈なものとなって五兵衛の脳裡へよみがえってくるのだ。

ところが……。

寅吉のほうは、まったく、徳山五兵衛を四十年前の〔権十郎〕だと気づいていない。

むろん、権十郎については寅吉の記憶に残っているであろうが、四十年の歳月を経ていることよりも、あのときの少年の面影を、いまの五兵衛に見出せなかったのは、

（まさかに此処へ、わしがあらわれようとは、夢にも、おもわなんだにちがいない）

それもあろうが、寅吉と別れ、京都へのぼり、さらに江戸へもどってからの徳山五兵衛の環境は、いちじるしく変った。

奔放で、性行不良の少年が、二千二百四十石の旗本となり、前の将軍・徳川吉宗に目をかけられ、さまざまな要職を歴任するほどの経歴と環境とが、五兵衛の面貌や声音までも変えてしまっている。

おとき婆が生きていたとしても、わからなかったろう。

それに引きかえ、寅吉のほうは四十年前の環境を、そのまま今日に至っている。

なればこそ、むかしの風貌も色濃く跡をとどめているのである。

寅吉は茶と団子を運び終えるや、また、奥へ入ってしまった。

茶店で、しばらく時間をすごしてから、五兵衛は長井録蔵に勘定を払わせ、

「雑作をかけたな」
寅吉へ声を投げ、茶店を出た。
五兵衛は、堤の道を小田原城下へ引き返して行く。
長井と丈助の不審は、いよいよ募るばかりとなった。
本陣へもどった五兵衛は、すぐさま、二人の同心を奥の間へよび寄せた。
「このたびの日本左衛門一味に関わる男……と申しても六十をこえた老爺じゃが、夜に入ってから、この老爺を召し捕りにまいる」
と、いった。
おどろいたのは、二人の同心よりも、長井と丈助であったろう。
（あの老爺のことか……?）
それにちがいない。
「この茶店の老爺が、果して、日本左衛門一味に関わりがあるや否やは、わしにもわからぬ。なれど、無いとは申せぬのじゃ」
四人の顔色は、たちまちに緊張した。
「昨日より、どのようにいたしたらよいか……実は、わしも、おもい迷うていた」
五兵衛が決断をしたのは、茶店を出て、小田原城下へ入ったときであった。
「ほんらいなれば、かの茶店に見張りをつけ、相手にさとられぬよう、出入りする者どもの後を尾け、所在を探り、突きとめてのちに事をはかるべきであろうが……いまは、その暇とてない。一日も早く日本左衛門一味を引っ捕えねばならぬ」

「では、これより、すぐさま……」
と、堀口十次郎が身を乗り出すのへ、五兵衛が、
「いや、夜に入ってからじゃ。相手は、われらにまったく気づいてはおらぬ」
「は……」
「なるべくは、目立たぬようにして、引っ捕えたい」
「茶店には、その老爺、一人のみでござりましょうや?」
「いや……」
かぶりを振った徳山五兵衛が、半眼となり、
「上に、だれやらがいたような……」
つぶやくようにいった。
長井と丈助が、またまた、顔を見合せた。
（殿様は、縁台からすこしも、うごくこともなさらぬというに……よくも、上のことがわかるものだ）
そうおもったのであろう。
だが、あのとき、五兵衛の耳は頭上の天井が微かに軋みをたてたのを聞き逃さなかった。
上というのは、かつて五兵衛が一夜をすごした中二階のことである。
「引っ捕えましたのちは、いかがいたしますので?」

と、横山房之助。
「さよう。ぐずぐずしてはおられぬ。この本陣へ引っ立て、わしが責めてみよう」
こういいはなち、五兵衛は四人と共に、打ち合せに入った。

五

打ち合せがすむと、徳山五兵衛は四人を下らせ、本陣の主・保田利左衛門をよび寄せた。
「実は、な……」
と、今夜の捕物について語った五兵衛が、
「荷車を一つ、借してもらいたい」
「承知つかまつりました」
「それに、荷車を挽く男を二人ほど出してもらえようか？」
「わけもなきことでござりまする」
「二人のみにて、よろしいのでござりますか？」
「じゅうぶんじゃ」
利左衛門は三十前後に見えたが、よけいな問いかけもせず、しかも、協力を惜しまぬ。
それから五兵衛は、利左衛門の案内で、奥庭から裏庭などを見まわり、土蔵や物置小屋などをあらためながら、利左衛門と何やら語り合っていたようだ。
そのとき、物置小屋の中にあった樫の心張棒を五兵衛が手に取り、

「これを借りてよいか？」
「お持ち下さりませ」
夕餉をすませ、身仕度をととのえ、夜に入ってから五兵衛は、小者の丈助に、
「先刻の茶店の手前に、堤の下へ下る小道があったのを、おぼえておるか？」
「はい。下は竹藪でございました」
そのとき主人が立ちどまり、堤の下をしばらく見入っていたので、
（何を、ごらんになっておいでなのだろう？）
と、長井も丈助も頸をかしげたほどで、それゆえ、丈助の記憶に残っていたのであろう。
「よう、おぼえていたのう」
五兵衛が、丈助へ笑いかけた。
「はい……」
「よし。では、これより荷車を挽く本陣の者たちと共に、われらより先へ出て、堤の下の竹藪で待っていてくれ」
「はいっ」
荷車の上には、大きな木箱と、筵、荒縄などが積み込まれてあった。
これを挽いて、丈助と二人の男が本陣から先発した。
しばらくして、
「さて、そろそろ、まいろうか」

五兵衛は、堀口・横山の二同心と長井録蔵を従え、本陣の裏口から外へ出た。
ときに五ツ（午後八時）をまわっていたろう。
城下の商家は、ほとんど大戸を下してしまっている。
堤の道へ出たとき、五兵衛が同心たちへ、
「相手を斬ってはならぬぞ。かならず、引っ捕えるのじゃ」
「はい」
「わしは、長井と共に表口から入る。そのほうたちは裏手へまわり、逃ぐる者あらば叩き伏せてしまえ。よいか」
「心得ましてございます」
茶店は戸を閉ざし、ひっそりと、しずまり返っていた。
だが、中二階の雨戸の隙間から、灯り（あか）が洩れている。
茶店へ近づいた五兵衛が、二人の同心へ、
「行け」
と、ささやいた。
二人は堤を下り、茶店の裏手へまわった。
それから五兵衛は、長井録蔵に、
「荷車が竹藪の中にいるかどうか、見てまいれ。いたならば丈助を、こちらへつれてまいるように」
「はい」
長井が闇の中に消えて行くのを見送ってから、木蔭へ入った五兵衛は二つの龕燈（がんどう）へ火縄から火を移した。
龕燈は銅製の桶（おけ）のようなかたちをした照明道具で、中の蠟燭（ろうそく）に火を点じ、反射鏡によって灯りを外部へ拡大することができる。
この龕燈は盗賊改方の備品で、江戸から運んで来たものだ。
長井は丈助をつれ、すぐにもどって来た。
五兵衛は二人に龕燈を持たせた。
「よいか、まいるぞ」
「はい」
茶店の戸の前へ立った五兵衛が、長井の手から龕燈を受け取り、
「長井。戸を蹴破（けやぶ）れ」
と、命じた。
長井は、五兵衛にくらべても遜色（そんしょく）がないほどに背丈も高く、筋骨も立派だ。
はずみをつけて、長井は茶店の戸へ体当りをくわせた。
一度の体当りで、戸が外れた。
五兵衛は、すぐさま龕燈を長井へわたし、
「ぬかるなよ」

いうや、ずいと茶店の中へ踏み込んで行った。

暗い土間の奥から飛び出して来た人影が、

「だれだあ!!」

喚き声をあげ、五兵衛へ、つかみかかった。

寅吉であった。

右手にひっさげた樫の心張棒を揮うこともなく、徳山五兵衛の左の拳が寅吉の胸下へ突き込まれた。

「う……」

胸を押え、がっくりと両膝をついた寅吉の襟がみをつかんだ長井録蔵が、これを外へ引き擦り出した。

寅吉は、すでに気をうしなっている。

そのとき、外にいた丈助が、

「殿様あ!!」

と、叫んだ。

五兵衛は身をひるがえし、堤の道へ走り出た。

中二階の雨戸を叩き外した人影が、堤の道へ飛び下りてきた。

「待てい」

すかさず走り寄った五兵衛の足を、飛び下りて片膝をついた男が抜き打ちに薙ぎはらって

きた。

跳躍して、これをかわした五兵衛が、心張棒を男の肩先へ打ち込んだ。

男は、身をひねるようにして五兵衛の打ち込みを躱し、大刀を構えた。

浪人らしい。

「まだ、中に曲者がいるやも知れぬ。油断すな!!」

と、五兵衛が長井にいった。

長井は龕燈を左手に持ち替えて脇差を引き抜き、峰を返した。

長井も、小沼治作に鍛えられ、剣術は相当なものであった。

浪人は怒りの唸り声をあげ、大刀を振りかぶった。

六

このとき、裏口の戸を蹴破って躍り込んだ堀口・横山の二同心が外に出て来て、気絶している老爺の寅吉へ縄を打った。

茶店の外では、

「うぬ!!」

振りかぶった大刀を、今度は脇構えに移した浪人が、ぱっと飛び退ると、すかさず五兵衛は間合いをつめた。

「むう……」

浪人が、また、唸った。

逃げようにも逃げられぬ。

身をひるがえしたなら、その瞬間に、五兵衛が走り寄って一撃をあたえるに相違なかった。

二人の間合いは、約二間。

これはもう、ぬきさしならぬ間合いであったが、徳山五兵衛は樫の心張棒を右手に引っ提げたままである。

それなのに、浪人は切り込めない。

「刀を捨てよ」

五兵衛が、しずかにいった。

その背後から、小者の丈助が龕燈を浪人へさし向けているので、五兵衛の両眼のうごきが浪人には見えぬ。

それに引きかえ、浪人の顔も躰も、龕燈の灯影に、はっきりと浮かびあがっている。

いったんは中へ踏み込んで行った長井録蔵も、外へもどって来ており、これもまた龕燈を浪人へさし向けた。

茶店にいたのは、寅吉と浪人の二人だけらしい。

寅吉を縛りあげた二人の同心は、尚も茶店の内部を探りまわっている。

「刀を捨てて、神妙にいたせ」

いいつつ、五兵衛がじりじりと間合いを狭めはじめた。

「う……」

たまりかねて、浪人も退る。

年齢のころは、三十そこそこであろう。

髪の手入れもよくしてあるし、身につけているものもさっぱりとしていた。

「おのれ……おのれは、何者だ？」

辛うじて、浪人がいった。

「何者でもよい。縛につけ」

「な、何を……」

呼吸があがり、顔にも躰にも脂汗が吹きあがっていたが、浪人は刀を捨てなかった。

いや、刀は、その瞬間に浪人の手から放れたのである。

「あっ……」

うしろで見まもっていた長井と丈助が、同時に叫んだ。

浪人が左足を引きざま、脇構えにしていた大刀を下から掬い投げるように、五兵衛の胸もとをねらって投げつけたのだ。

身をひねって、五兵衛がこれを躱した。

その一瞬の間こそ、浪人が待ち構えていたものであったろう。

浪人は身を転じて逃げにかかった。

五兵衛が腰を沈め、手にした心張棒を浪人の後姿へ投げつけた。

心張棒は、みごとに逃げ走る浪人の両足に搦んだ。
これは、たまったものではない。
「あっ……」
前のめりに、浪人が転倒した。
しかし、すぐに半身を起した浪人は片膝をつき、差し添えの脇差を引きぬいたが、走り寄った五兵衛は、同時に浪人の顎を蹴りつけている。
「うわ……」
仰向けに倒れた浪人の胸下へ、五兵衛の拳が突き入れられた。
駈け寄って来た長井に、
「気をうしなっている。いまのうちに縄をかけてしまうがよい」
と、五兵衛がいった。
二人の同心が、茶店の中からあらわれた。
「他には、だれもおりませぬ」
「さようか。何ぞ、手がかりになるような物が見当らなんだか？」
「これといって、別に……」
「よし。こやつらの懐中を、あらためて見よ」
「はっ」
寅吉は、何も所持していなかったが、浪人のふところには紙入れがあった。

五兵衛は、これを自分の懐中へおさめてから、二人の同心へ、
「こやつどもを、荷車に積んだ木箱の中へ入れ、本陣へ運び、土蔵の中へ押し込めておけ。わしは、一応、茶店の中をあらため、後よりもどる」
「心得ました」
「急げ。余人の目にふれてはならぬぞ」
「はっ」
四人が、寅吉と浪人を担いで去った後も、徳山五兵衛は茶店の軒下に佇み、あたりの気配をうかがっていた。
闇の中に、酒匂川の川音がきこえている。
このあたりで、川のながれが、やや屈曲しているらしい。
星が一つ、夜空に流れた。
五兵衛は外れた戸を入れ、中へ入ってから戸締りをし、龕燈を手に茶店の台所へ踏み込んで行った。
ほとんど、四十年前と変っていない。
それから、中二階へあがり、少年の自分が一夜をすごした座敷へ入ってみた。
ここも、
（むかしのままじゃ……）
五兵衛は、なつかしげに中を見まわした。

四十年の歳月を経ているのだから、すべてが古びているのは当然であったが、余計な物が何一つ無いのも、むかしのとおりだ。
この座敷に、捕えた浪人者がいたにちがいなかった。
同心たちがいうように、手がかりとなるような物は何一つない。
寝床が敷きのべられてい、押入れの中には浪人の物らしい旅行道具などが入っていたけれども、あらためて見ると、別だんに何ということもなかった。
となりが、むかし、おとき婆の小部屋だったのをおもい出し、五兵衛は入って行った。
小さな仏壇があり、白木の古びた位牌がある。
これはどうも、おとき婆の位牌らしかった。
そうだとすると、おとき婆は、五兵衛が一夜の厄介になってから、五年後に死んだことになる。
いまは寅吉が、この部屋を使っているらしく、衣類その他があったけれども、格別に怪しむべき物とてない。
しばらくして、五兵衛は裏手から茶店を出た。
裏の戸も、外から閉ざしておいた。
本陣へもどると、
「いかがでございました？」
本陣のあるじと共に出迎えた堀口十次郎が、尋ねるのへ、

「格別のことはなかった。二人の者は息を吹き返したであろうな？」
「はい。裏の土蔵へ押し込め、横山房之助と長井録蔵が見張っております る」
「それでよし」
五兵衛は堀口と共に、奥の座敷へ入り、行燈を引き寄せ、浪人の紙入れの中をあらためて見た。
中に、折りたたんだ紙片がある。
ひろげて見ると、細長い紙片の上部に木版で雲の上に浮かぶ赤い太陽の図が刷り込まれてあるではないか。
五兵衛の眼が、煌りと光った。
その下に、
〔遠州みかの村　金兵衛方〕
と、あざやかな筆でしたためてある。
五兵衛は、紙片を堀口同心へわたし、
「見よ」
「はい」
見て、堀口の顔色が変った。
「この……この旭日の図は、日本左衛門一味のしるしではございませぬか？」
「さようにおもうか」

「はい」
「うむ」
うなずいた徳山五兵衛が、
「土蔵へまいる」
「お取り調べをなされまするか?」
「猶予はならぬ」

遠州・見付宿

一

寅吉と浪人を取り調べるにあたって、五兵衛は先ず、寅吉を土蔵から別の物置小屋へ移した。
「老爺のほうは、そのほうたちで取り調べてみよ」
と、五兵衛は二人の同心にいった。
「心得ましてございます」
「あ、待て」

「何ぞ……?」
「われらが、江戸の盗賊改方であることは、老爺に申し聞かせてもよいが、わしの名を出すまいぞ」
「と、おおせられますのは?」
「いささか、おもうところがある」
「はい。では……」
「あまりに痛めつけるな。老年ゆえ、いたわってとらせい」
「心得ました」
二人が寅吉のいる物置小屋へ入ったのちに、五兵衛は土蔵へおもむいた。
小者の丈助は、明日の発足の仕度にかかり、長井録蔵が土蔵の外へ見張りに立った。
浪人は、土蔵の柱へ縛りつけられている。
その前へ姿をあらわした徳山五兵衛が、
「これ……此処が何処か、わかっていような」
浪人は、こたえず、白い眼で五兵衛を睨んだ。
運ばせた二つの燭台の灯りを受けた浪人の顔だちは、さほどに、
(荒んではおらぬようじゃ)
五兵衛は、そのように看た。
堀口同心が、浪人の前へ、本陣から借り受けた床几を出しておいたので、それに腰を掛け

た五兵衛が、
「われらは、江戸の盗賊改方じゃ」
　わずかに、浪人の眼の色が変った。
「遠州・駿河にかけて悪行を重ねてやまぬ盗賊・日本左衛門を捕えにまいったのじゃ」
　浪人が、目を伏せた。
「これだけ申せば、そのほうも納得が行ったであろう。どうじゃ」
　浪人、こたえぬ。
「そのほうの名は？」
「知らぬ」
「ほう。おのれの名を知らぬと申すか」
「知らぬ……知らぬ」
「そのほうは、尾張家に何ぞ関わり合いがある者か？」
「何も、知らぬ」
　うつむいたままでこたえる浪人の声が、しだいにちからを失ってきはじめたようだ。
「何事も知らぬのじゃな」
「拙者は知らぬ、知らぬ」
「みかの村の金兵衛も知らぬと申すか」
　今度は、あきらかに浪人が動揺した。

　たたみかけるように、五兵衛が、
「みかの村の金兵衛は、一昨日の夜に召し捕ったぞ」
　切りつけるような鋭い口調でいった。
　浪人の躰が、震えはじめた。
　おもいきって、先刻、見たばかりの紙片に書きしたためられていた男の所在と名を持ち出してみたのだが、これは、たしかに利目があったようである。
「いまここで、わしに捕えられたことを倖せとおもえ。盗賊一味の者どもと共に捕えられたのでは、もはや、おのれの一命を助けるわけにもまいらぬぞ」
「し、し、知らぬ」
「そのほうが、素直に白状いたせば、お上においても悪しゅうは取りはからわぬ。嘘を申しているのではない。いまのうちならば、何とでも仕様がある。よいか、おのれの行末をよくよく考えてみよ」
　この浪人は、尾張家に仕えたことがないと、五兵衛は見きわめていた。
「知らぬ、知らぬ」
　という言葉づかいに、雪ふかい国をおもわせるものがあって、
「そのほうの生国は、越後ではないのか？」
　五兵衛が問うたとき、浪人は「知らぬ」とはいわなかった。
　およそ一刻（二時間）ほどして、五兵衛は土蔵から出た。

土蔵の外に、堀口十次郎が待っていて、
「手強い老爺にござります」
「さもあろう」
「痛めつけてはならぬとのおおせゆえ、尋問のみにいたしましたが、一言も口を割りませぬ」
「ふうむ……」
「責めつけてみては、いかがでございましょう?」
「ま、よいわ」
「浪人めは、いかがでござりました?」
「いささか、吐いたわ」
「さようで……」
「あの浪人、名を佐藤忠右衛門というて、越後の浪人らしい。日本左衛門一味の盗賊となってから、まだ、日も浅いようじゃ」
五兵衛は、夜が明けたなら、寅吉と忠右衛門を、小田原藩の町奉行所へ預けるつもりでいる。
相模の国・小田原が、大久保加賀守十一万三千石の城下であることに、四十年前と変りはない。
幕府の盗賊改方の〔御用〕とあれば、どのようにも便宜をはかってくれよう。

「わしが依頼状を書きしたためておくゆえ、それを持参して、両人を預かってもらうがよい。わしは夜が明けしだいに箱根を越え、三島へ向う。そのほうたちは後を追ってまいれ。心得ていようが、老爺と浪人とは牢屋の同じ場所へ入れてはならぬぞ。このことを、よくよくたのんでおくがよい」
「承知つかまつりました」
「長井録蔵と丈助も残しておく。何ぞ、役に立つこともあろう」
「では、御一人にて……」
「急がねばならぬ。先へ行っている者たちも案じていよう。明朝は馬なり駕籠なりにて箱根を越えるつもりじゃ。費用はかまわぬゆえ、乗り物の引き継ぎなど、本陣の主へよくよくたのんでおいてもらいたい」
「はい」
「そのほうたちは、二人を預けたのち、箱根の湯本あたりまでのぼり、ゆるりと一夜をやすめ。それから追いついてまいれ」
どこまでも、徳山五兵衛は行きとどいていた。
供の四人は夜が明けるまで、何かと立ちはたらいていたようだが、五兵衛は臥床へ入り、短い時間を、ぐっすりと寝入った。

二

翌朝。徳山五兵衛は単身、小田原を発し、箱根を越えて三島の宿駅へ入った。

三島宿の本陣・樋口伝左衛門方には、先着の与力の磯野源右衛門と、小沼治作・柴田平太郎の三名が、じりじりしながら五兵衛の到着を待ちかまえていた。

五兵衛が着いたと聞き、三人が飛び出して来て、

「いかがでございましたか?」

「先ずは、うまくいったようじゃ。ま、ゆるりと語って聞かせよう」

本陣の主・樋口伝左衛門の案内で、奥の間へ通った徳山五兵衛が、先発した盗賊改方や密偵たちとの、

「磯野。連絡(つなぎ)はとれておるか?」

「ぬかりはございませぬ。今朝も密偵の富八(とみはち)が引き返してまいりましたが、万事、おおせのごとく事を運んでおるとのことにて」

「ならばよし」

小沼治作が、たまりかねたように膝(ひざ)をすすめて、

「で、どのように相なりましたか?」

「まあ、急(せ)くな」

五兵衛は、さすがに、こみあげてくる笑いを押えきれず、

「一味の者を二人ほど、引っ捕えたわ」

「えっ!」

これには、磯野与力が瞠目(どうもく)してしまった。

「まことでございますか?」

「まことじゃ。まあ、湯を浴びさせてくれい」

「これは、恐れ入りましてございます」

入浴し、夕餉(ゆうげ)を終えてから、五兵衛が三人を奥の間へよび寄せ、すべてを語るや、

「なれど、何をもって、その茶店にお気づきなされましたので?」

磯野源右衛門と柴田平太郎は、それが不審でならぬらしい。

もっとものことではある。

おとき婆(ばば)の茶店については、小沼のみへ洩らしてあるのだから、この二人が知るわけもない。

小沼のみが、何やら、うれしげな微笑を浮かべている。

「いや何、いささか、おもうことあってのことじゃ」

「のちのちの心得のために、お聞かせ願わしゅう存じまする」

「いずれ、な……」

事もなげに五兵衛は、磯野与力の問いかけをかわし、

「ま、見るがよい」

越後浪人・佐藤忠右衛門の懐中から出て来た紙片をひろげて、
「ここに、遠州みかの村、金兵衛方とあるのは、おそらく、日本左衛門一味の連絡の場所、盗賊仲間で申す盗人宿でもあろうか。磯野は、いかがおもうな?」
「はい。さようにおもわれまする」
「先ず、ここから、手をつけねば相なるまい」
「では、私めがこれより、すぐさま出立いたしまして……」
「急いてみてもはじまらぬ。明朝でよい。かの越後浪人なる者は、日本左衛門一味となってより、日も浅いらしい。それへ、この紙片……いや、盗賊一味からの知らせが来たのは、この金兵衛方へあつまれとの事とみてよい」
「はい」
「一足ちがいにて、捕え損ねるところであった」
と、これは小沼へいった。
「ようございましたなあ」
小沼は、いかにも満足そうであった。
ところで……。
〔遠州みかの村〕とあるのは、見付宿（現・静岡県磐田市）の半里ほど手前にある三ヶ野村にちがいない。
そこで、金兵衛といえば、だれもが知っていよう。

現代とはちがい、町や村に住みついている者は不変であり、新しい住人ならば、すぐに目立つのである。
三島から見付までは、約二十五、六里であろう。
五兵衛は、これを二日で進むつもりだが、
「苦労をかけるが磯野、明朝は馬を仕立てて発足いたしてもらいたい」
「心得まいた」
磯野が早朝に三島を発し、馬を替えつつ、疾走して行けば、明日の夜には見付へ到着できよう。
だが、盗賊改方の本拠は、見付より一里半手前の袋井宿へ置くことになっている。
これは、日本左衛門一味に、
「気どられぬ……」
ためであった。
磯野源右衛門は、袋井宿の本陣・田代八郎左衛門方へ駈けつけ、先着の与力・同心や密偵たちと計り、長官の徳山五兵衛が到着するまでに、しかるべく手配りをすることになった。
「なれど磯野。わしが到着いたすまでは、手を出すまいぞ」
「はっ」
「密偵たちを使い、三ヶ野村を探らせておくがよい」
「承知つかまつりまいた」

「日本左衛門一味が、すべて、あつまることになっているならば、おそらく、一味の人数は三十名を下るまいかとおもう」
「はい」
「油断はならぬぞ」
「はっ」
「いささかも、気どられてはならぬ。この事を袋井におる皆々へ、よくよくつたえておいてもらいたい」
「心得ましてござります」
「さ、今夜は早く眠ろうではないか。明日よりは、眠る間とてなくなるやも知れぬ」

三

ところで……。
磯野源右衛門は、明朝の出立の準備をすませてから、臥床へ入ったが、ふと、長官との打ち合せの上で、念を入れてたしかめておかねばならぬ事でも思いついたらしく、
（まだ、起きておられるのならば……）
臥床から出て衣服を着替え、廊下へ出た。
深夜の冷え込みが、意外に強い。
奥の廊下を辿って行くと、まだ、五兵衛の部屋の灯りが先刻のままの明るさで、

（あ、まだ、おやすみではないようだ）
そうおもったので、磯野与力が、しずかに部屋の外の廊下へ来て、
「磯野源右衛門にござります」
声をかけると、部屋の中で、何やら急にあわただしい気配が起った。
紙の音がする。
散っている紙を、片寄せているような音なのだ。
（はて……?）
磯野は、気にかかって、
「もし……まだ、おやすみではございませぬか?」
こたえるかわりに、徳山五兵衛の咳払いが起った。
その咳払いに狼狽の気振りがあった。
（まさかに、女がいるのでは……?）
何とはなしに、そのような気配を感じた磯野与力も、あわて出して、
「御無礼をつかまつりまいた」
引き返そうとするのへ、
「かまわぬ。入るがよい」
妙に上擦った五兵衛の声なのである。
「は……」

「何の用じゃ？」
「出立前に、いささか、うけたまわっておきたき事のござりまして……」
「さようか……」
　と、いくらか声も落ちついたようである。
「入るがよい」
「かまいませぬか？」
「かまわぬ」
「ごめん下されましょう」
　恐る恐る、磯野は障子を引き開けた。
　女の気配も、匂いもせぬ。
　徳山五兵衛は文机を前に、端座している。
　奥の間の臥床には、いささかの乱れもない。
　五兵衛は先刻とは打って変った厳しい顔つきで、磯野を見た。
　五兵衛の老顔が、上気している。
　その両眼に昂奮の光りが宿っているのを、磯野は見逃さなかった。
「何のことじゃ？」
「は……」
　文机の上に、本陣そなえつけの硯箱が置いてある。

（何ぞ、書きものでもなされておいでであったのか……？）
　ともかくも磯野源右衛門は、おもいついた事どもをのべ、五兵衛の指示を受けた。
　そして、早々に、自分の部屋へ引きあげたのだが、
（はて……？）
　どうも、わからぬ。
　これまで、磯野が認識していた長官とは、まったく別の人物を見たようなおもいがしてならぬ。
（何を、あのように、あわてておられたのか……自分が声をかけたときの、あの、ざわざわとした紙の音は、いったい、何であったろう？）
　磯野が部屋へ入ったときの、五兵衛の厳然たる顔貌は見慣れたものであったけれども、それが、
（いかにも、取ってつけたように……）
　見えたものだ。
（何をしておられたのか……？）
　磯野は臥床へ入ったが、なかなかに寝つけなかった。
　その後も、磯野源右衛門は、この夜の徳山五兵衛の挙動が気にかかり、凝りとなって残った。その凝りは、ついに、解けぬままに終ったが……。
　一方、五兵衛は……。

磯野が去った後、かなり長い間を黙念として天井を仰いだままである。

奥庭の何処かで、生き残っている虫一つ、か細げに鳴いていた。

ややあって、五兵衛が膝をくずした。

五兵衛の手が、座蒲団の下をまさぐりはじめた。

その手が、美濃半紙の一帖（いちじょう）を取り出し、机の上へ置いた。

ということは、磯野があらわれたので、この半紙一帖を座蒲団の下へ隠したことになるではないか……。

そうとしかおもえぬ。

つぎに五兵衛は、ふところへ手を入れた。

その手は、まるめ込んだ数枚の半紙を取り出した。

これを一枚一枚、ていねいに皺（しわ）を伸ばしかけたが、突然、はっとなって、あわててまるめ込み、ふところへ入れた。

廊下で猫が鳴き、その足音が遠ざかった。

五兵衛が、ほっとした顔つきになり、またしても懐中から取り出した半紙の皺を伸ばしはじめた。

その一枚一枚に、何やら、絵のようなものが描かれてある。

五兵衛は口の中で独語しつつ、皺を伸ばした半紙をながめては、小頸（こくび）をかしげたり、そうかとおもうとにんまりと笑みくずれたりする。

ややあって、中の一枚をえらんで机上に置いた。

その上へ、新しい半紙をのせたのは、いわゆる透き写しをするつもりらしい。

五兵衛は矢立（やたて）を重（おも）しにして、硯箱の蓋をはらい、墨を磨（す）りはじめた。

そして、細筆を巧みにあやつり、紙面へ繊細な曲線を描き出してゆく。

五兵衛の双眸（ひとみ）は、まるで、楽園に遊ぶ童児のごとく輝いている。

五兵衛の額にじっとりと汗が滲（にじ）み出してきた。

まさしく、五兵衛は秘図を描いているのだ。

男は若い侍。女は町方ふうの勝山髷（まげ）。

女の、ふっくらとした臀部（でんぶ）の下から、はみ出して脹脛（ふくらはぎ）のあたりへ絡みついている諸々（もろもろ）の下着。

それへ腰を密着させ、半裸の女を抱きしめている侍の舌が、がっくりと枕から頸を落し、喜悦に我を忘れている女の耳朶（みみたぶ）をなぶっている。

女の顔は、まさに、東林のお梶そのものであった。

おもうに……。

おとき婆の茶店へ乗り込み、四十年前の事どもをおもい起した徳山五兵衛の連想が、あの、お梶にまでおよび、たまりかねて、久しぶりに秘戯図の筆を手にしたのであろうか……。

枕もとの男の大小の刀から、畳に落ちた女の簪（かんざし）にいたるまで、五兵衛の描写にぬかりはない。

ことにお梶の……いや、女の姿態や、陶酔の極に達した表情などは、浮世絵師の豊信の紅絵や師宣の一枚絵に描かれた女たちの、様式からぬけきれぬそれよりも、はるかに生なましく、纏綿たる閨房の肉感にみちているのだ。

もしも、これを磯野源右衛門が見たなら、どのような顔をするであろうか。

まして、五兵衛を畏敬している家来たちや家族が、怪盗・日本左衛門を捕えに出向く途中の一夜に、このような遊びというか趣味というか……ともかくも怪しからぬ絵を描くことに没頭しつくしている五兵衛を知ったなら、妻の勢以などは肝を潰して気絶をしてしまいかねない。

翌朝も暗いうちに……。

与力・磯野源右衛門が馬に乗って本陣を出発した。

見送った小沼・柴田が、

「磯野殿の目が、赤く腫れあがっていましたな」

「昨夜は、よう、おやすみになれなかったのでありましょうか？」

「やはり、このたびの御役目を思うと、気もやすまらぬのではあるまいか」

「なるほど……」

しばらくして、徳山五兵衛が目ざめた。

柴田平太郎が洗面や着替えの世話をしてもどって来ると、

「小沼殿……」

「なんでござる？」

「殿様も、よう、おやすみになれなかったようで……」

「ほう……」

「お眼が、赤く腫れて見えました」

「そりゃ、いけませぬな」

五兵衛ともあろうものが、たかが盗賊どもを捕えるのに、夜も眠れぬほど、

（おもい悩まれることはないはずだが……）

と、小沼治作は解しかねていたようだ。

四

徳山五兵衛は、小沼治作と柴田平太郎を従え、この朝、三島を出立し、駿河の江尻まですすんだ。

さいわいに晴天つづきであったが、薩埵峠を越えて十四里十五町の道中は、相当の（強行軍）といってよい。

三十七歳の五兵衛と六十七歳の小沼は、すこしも歩行におとろえを見せずに江尻へ入ったが、三十八歳の柴田平太郎は激しい疲労を隠しきれなかった。

江尻の宿駅の旅籠・甲州屋九兵衛方へ旅装を解いたときは、すでに五ツ半（午後九時）をまわっていたろう。

柴田は湯を浴びる気力もなく、食事をすませるや、自分と小沼の部屋へ引き取り、臥床へ入ってしまった。

膳を前に、居眠りをはじめた柴田を見かねて、五兵衛が、

「もう、やすめ」

ゆるしを、あたえたのである。

柴田を寝かせ、小沼治作が五兵衛の部屋へもどって来ると、

「平太郎め。寝たか？」

「はい。泥のごとく……」

五兵衛は、また、酒を取り寄せたらしく、

「小沼。相手をせよ」

「はい」

小沼も疲れていないことはないが、そこは鍛えぬいてある躰だけに、七十に近い老人ともおもえぬ元気さで、

「殿……」

「何じゃ？」

「平太郎殿。早くも顎(あご)が出てまいりましたな」

「さようさ」

愉快げに笑った五兵衛が、

「われらとは、鍛え方がちがう」

「まったくでございますな」

「このたびの御役目に、平太郎を連れてまいったのは、このような目にもあわせておきたいとおもうたからじゃ」

「はい。行末は、御家の御用人となられます平太郎殿ゆえ……」

「よい薬になったであろう」

「いかさま……」

「なれど、あの様子では、明日の供はなるまい」

「足手纏(まと)いになりまするな」

「そのことよ。わしは何としても明日中に袋井へ到着いたしたいのじゃ」

「はい、はい」

「平太郎を、江尻へ残して置き、後から追いついて来る者たちへの連絡(つなぎ)をさせてはどうじゃ？」

「それがよろしゅうございましょう」

「いやはや、ちかごろの男どもは、だらしのないことよ」

「まったく、まったく」

「ま、のめ」

「いただきまする」

「それにしても小沼、達者じゃのう」
「恐れ入りまする」
「それにしても小沼……」
「はあ？」
「よくも、わしの傍(そば)から離れずに、五十年近くも共に暮したことよ」
「さぞ、御迷惑でございましたろう」
「何を申す。かたじけないとおもうている」
「とんでもないこと……」
「それにしても、小沼……」
「はい？」
「ようも、独り身を通したものよ」
「われから好んでしたことでございます」
「ついに、女の肌身を知らぬままか……」
「何の……」
小沼治作が、にやりと笑ったものだから、五兵衛は瞠目(どうもく)して、口へ含みかけた盃(さかずき)を膳へ置き、
「何の……とは、どうしたことじゃ？」
「いえ、別に……」

「女が、いたと申す……？」
「さて、どうでございましたかな……」
「いたならいたと、申したらよいではないか」
「あは、はは……」
「いや、そのようにはおもえぬ。小沼は、わしの傍へ附ききりであった」
「いえ、殿がおやすみになる折までは、附きそうてもおられませなんだ」
「夜に入って、何処ぞへ出かけたと申すか、女と会うために……」
「さて……」
「妙なやつじゃな」
「ま、これほどにしておいて下されましょう」
小沼と二人きりで酒を酌(く)みかわすのは、何年ぶりのことであったろう。
こうなると、五兵衛も、ついつい若いころの気分になってしまう。
それもこれも、相手が小沼治作ゆえであるからだ。
むかしの小沼には、主人としての五兵衛へ骨身を惜しまずに仕えるうちにも、何やら突きつめたおもいがこもってい、ときには五兵衛が、はっとするほどに、こちらを凝(じっ)と見つめてくる眼の輝きがあったものだ。
いまは、そのように、五兵衛の胸さわぎをさそうような眼の色が小沼治作から消えてしまっている。

いまは、少年の五兵衛が堀内源左衛門道場へ通いつめ、小沼が供をして、共に剣をまなんだころの二人にもどったかのようである。

「さ、そろそろ、おやすみになりませぬと……」

「いますこし、酌みかわしたいのう」

「明日も明後日も、酒が絶ゆるわけでもございますまい」

「なるほど……」

三島から江尻まで、駿河湾に沿うた東海道の、すばらしい風光も、さすがに五兵衛の目に入らなかったといってよい。

それほどに、道中を急いでいたことになる。

臥床へ入ると、たちまちに、五兵衛は深い眠りへ落ち込んで行ったが、翌朝は、小沼に起されるまでもなく目ざめた。

旅仕度をととのえた小沼治作があらわれたとき、五兵衛もすでに身仕度を終え、

「平太郎は、いかがじゃ？」

「まだ、眠りこけておりますゆえ、置き手紙をしておきましたが、よろしゅうございましょうか？」

「それでよい」

まだ、夜は明けきっていない。

江尻を後に、二人は足を速めて、府中（静岡市）を過ぎた。

「今日も、よい日和でございますな」

「何よりじゃ」

「なれど、このように早く、手がかりを得ようとはおもいませなんだ」

「わしが若いころの放埒(ほうらつ)も、あながち、むだではなかったわ」

「なれど、あのころの殿には、つくづくと手を焼きましてございます」

「わしを諌(いさ)めんとして、腹へ刀を突き立てたのう」

「そのことは、もはや……」

「いや、忘れられるものではない。かたじけなくおもうている」

「またしても、何を、おおせられますことやら……」

「小沼が、いてくれなかったなら、いまの徳山五兵衛もなかったであろう」

五兵衛は、しみじみといった。

小沼の声が絶えた。

笠の内の小沼の老顔が、どのような表情を浮かべているか、それはわからなかった。

この日。

五兵衛と小沼は、途中で馬を使いもしたが、夜ふけになってから、袋井宿の本陣・田代八郎左衛門方へ到着することを得た。

五

東海道・袋井は、江戸から五十九里十二町。京都へは六十六里九町のところにあり、掛川(かけがわ)と見付の大駅の間にはさまれた小さな宿場である。

物の本に、

「……四方は岡山にして、中に田園ありて袋のごとし。井泉あり、其養水とす」

などと、地名の謂(いわ)れを記してある。

宿場へ入る手前に川がながれてい、宇天(うてん)橋という橋が架けられている。

この川を宇刈(うかり)川といい、宿場の東側から北面をまわって西へながれている。

すでに到着していた盗賊改方の一行は、分散して袋井宿の旅籠に泊っていたが、その中で、同心・辻駒四郎と四名の密偵たちは、一里半先の見付宿へ入りこみ、岡田屋という旅籠に泊っているそうな。

もっとも、密偵のうちの二人は街道をながれ歩く浮浪の徒に変装し、岡田屋へは姿を見せぬ。

辻駒四郎と二人の密偵は、備前岡山藩士・大沢甚太夫の家来と奉公人という触れ込みで、

「江戸より西上する主人を待っている……」

旅籠へは、このようにいい、滞在しているのだ。

火附盗賊改方一行と名乗り出ておけば、何をするにも便利なわけだが、此処(ここ)まで来ると、

迂闊(うかつ)なまねはできぬ。

日本左衛門一味が、このあたりに蠢動(しゅんどう)しているらしいことは、すでに見込みがついている。

先般、日本左衛門一味の犯行を江戸へ訴え出た見付在の庄屋・飯沼三右衛門も、

「一味の者のすべてとは申しませぬが、そのうちの何人かは見付の宿のあたりに、そ知らぬ顔をして住み暮しているようにおもわれてなりませぬ」

と、いっていたそうな。

遠州・見付宿は、江戸から六十里余、京都へは約六十四里半。東海道の、ちょうど中程にあたる。

見付宿の家数は約八百五十。本陣も二軒あり、脇本陣もあって、旅籠は四十二軒。

これだけの宿場になると、住民も多く、種々雑多な旅人の出入りもはげしいので、盗賊どもが、

「何喰わぬ顔をして……」

まぎれ込んでいても、なかなか人目にはつかぬといってよい。

これまで、新五郎以下四人の密偵が宿場の内外を探ってみたけれども、手がかりは全くなかった。

ところが昨日の夜半、馬を駆って袋井の本陣へ到着した与力・磯野源右衛門によって、三ヶ野村の金兵衛なる者が浮かびあがった。

「それで、金兵衛なる者は、いまも住み暮しておるのか？」

袋井宿の本陣に旅装を解いた徳山五兵衛の問いに、
「まさに、住み暮しておりまする」
と、与力の岩瀬半兵衛がこたえた。
「して、金兵衛とは何者じゃ？」
「百姓にござりますが、女房ともども、まったく田畑へは出ておりませぬようでございます」
「ふうむ……」
金兵衛は、見付や掛川、ときには府中などをまわり歩き、博奕を打ったり、娼家へ女を世話したり、品物の仲買いをしたりして暮しているらしい。
それが、近辺のうわさなのだ。
若いころの金兵衛は百姓仕事もしていたようだが、このところ十年ほどは近所づきあいも絶ち、後妻に入れたおろくという年増女と三ヶ野村の外れの家に暮しているらしいが、
「いまは、夫婦して何処かへ出かけているらしく、かたく戸締りをなし、中には人の気配もございませぬ」
ともかくも、それほどの探りはしたが、深入りをしては怪しまれるおそれもあるので、何事も徳山五兵衛の到着を待ち、手配りをすることになっていた。
だが、三ヶ野村の周辺や金兵衛宅への見張りは、
「怠りなく……」

つづけさせているとのことだ。
「それでよし」
うなずいた五兵衛が、
「何事も、明日からじゃな」
と、与力たちへいった。
翌朝になって、五兵衛は、本陣の主・田代八郎左衛門を部屋へまねいた。
八郎左衛門は六十五歳。温厚篤実の人物であることが、一目で五兵衛にはわかった。
そこで、五兵衛が、
「身どもは、備前岡山の藩士、大沢甚太夫ではないのじゃ」
打ち明けたものだから、田代八郎左衛門がおどろいた。
おどろいたにはちがいないが、しかし、この老人は取り乱すようなことがない。
（これなら大丈夫じゃ）
と看て、
「江戸よりまかりこした火附盗賊改方、徳山五兵衛秀栄である」
名乗るや、八郎左衛門が目をみはって、まじまじと五兵衛を見つめ、
「さようでござりましたか。では、日本左衛門を御召し捕りに御出張りあそばしましたか……？」
と、いうではないか。

「よう、わかったの」
「御公儀よりの御手入れが、いまあるか、いまあるかと、心待ちにいたしおりましてございます。私めは、先ごろ、江戸へ訴えに出ましたる庄屋・三右衛門が遠縁のものにございます」
「さようであったか……」
長官の五兵衛が、袋井へ到着したからには、本陣が盗賊改方の〔本拠〕となる。
そうなれば、いつまでも、岡山藩士では通るまい。却(かえ)って怪しまれることにもなる。
本陣の、すべての人びとに打ち明けるわけにはまいらぬが、すくなくとも主の八郎左衛門のみには、このことを心得ていてもらわねばならぬゆえ、五兵衛は身分と名を打ち明けたのである。
「何分にも相手が相手ゆえ、探索が長引くこともあろうかとおもう。そこのところは、そのほうが胸にのみ込んでいてくれて、よいように取りはかろうてもらいたい」
「承知いたしてございまする」
「日本左衛門一味について、何ぞ、おもい当ることはないか？」
「さ、それが……」
田代八郎左衛門は困惑の様子であった。
五兵衛は、八郎左衛門に、三ヶ野村の金兵衛については何も洩らさなかったようだ。
この日は朝から、雨が霧のように降りけむっている。

五兵衛は八郎左衛門が去った後、部屋へ引きこもったきりになった。

六

本陣の主へは、
「探索が長引くやも知れぬ」
と、いっておいたが、
（長引くようになっては困る）
五兵衛は、おもいきわめている。
何故というに、酒匂川の茶店へ踏み込み、寅吉爺(じい)と越後浪人・佐藤忠右衛門を捕えてしまったのだから、日本左衛門一味の者が、もしも茶店へ連絡(つなぎ)にあらわれたりしたら、
（これは、おかしい……）
無人の茶店の様子に、不審を抱くにちがいないのだ。
一時は五兵衛も、二人の同心を小田原へ残し、茶店を見張らせておこうかとも考えたが、二人きりでは何分にも手不足で、充分な成果はあげられまいとおもい直した。
ただし、寅吉と浪人が捕えられたことを目撃していたものは一人もない。
いずれにせよ、二人の姿が消えてしまったのだから、怪盗一味がこれを知れば、おそらく、
「これは危ない」
と、直感し、諸方へ散ってしまうおそれがある。

それに、佐藤浪人へは〔みかの村　金兵衛方〕と回状らしきものがまわっているのだ。

それなのに佐藤が、いつまでたっても金兵衛方へ連絡をつけぬとなれば、これまた、賊どもは怪しむに相違ない。

いや、すでに、金兵衛は酒匂川の茶店の一件に気づいているのではなかろうか……。

金兵衛夫婦が家に戸締りをし、姿を消してしまったのは、

（どうしたわけか？）

それが、気にかかってならぬ。

小田原から、この袋井まで、徳山五兵衛は急ぎに急いで到着をしたのだから、それより先に、茶店の一件が金兵衛の耳へ届くはずはないようなものだが、何分にも、仕組みの大きな盗賊団ともなれば、その連絡は敏速をきわめていると看てよい。

ともかくも、いまは、金兵衛宅と見付宿の周辺を見張りつづけるよりほかに道はない。

後続の人びとも、今夜中には、つぎつぎに袋井の本陣へ到着するであろう。

となれば、盗賊改方の捕物陣は、すべて態勢がととのうことになる。

昼近くなって、五兵衛は、あぐねきった自分をもてあましてしまい、小沼治作をよび寄せ、

「相手をいたせ」

「何の相手でございます？」

「それ、そこに碁盤があるではないか」

「あ、なるほど」

小沼は、碁盤と碁石を五兵衛の前へ運び、

「久しぶりでございますな」

「そのことよ」

二人とも、囲碁は強くない。

それだけに、

（ちょうどよい相手……）

なのである。

「では、まいろう」

「はい」

二人が、碁石を摘(つま)んだときであった。

与力の磯野源右衛門があらわれて、

「金兵衛夫婦が、もどったそうにございます」

「何……」

五兵衛の指から、碁石が落ちた。

「まことか？」

「見張りが、知らせてまいりました」

三ヶ野村の金兵衛宅の見張りは、与力・岩瀬半兵衛が指揮し、辻駒四郎・山口佐七の二同

心と、密偵の新五郎・由蔵の二人が受けもっていた。
知らせに駈けつけたのは新五郎であった。
新五郎がいうには、先刻、見付宿の方から三ヶ野村へ入って来た夫婦者らしい二人づれが、金兵衛宅の戸締りを開け、中へ入ったそうな。
「どう見ても、金兵衛夫婦に相違ございませぬ」
と、新五郎はいった。
二人とも旅姿ではなく、ぶらりと近辺へ出かけて行ったような風体であったというが、むろん、百姓姿ではない。
二人とも、手垢もつかぬ着物をぞろりと身につけ、髪もきれいに結いあげ、昼間だというのに酒気をおびていたらしい。
金兵衛は四十前後の、小肥りの躰つきだが、見るからに敏捷な足の運びで、
「たしかに、油断のならぬ奴でござります」
密偵の新五郎は、本陣の奥庭へまわって来て、五兵衛へ報告をした。
「いかがなされます?」
磯野源右衛門が膝をすすめて問いかけたのへ、
「うむ……」
微かにうなずいた徳山五兵衛は、ふたたび碁石を摘み取って、雨に濡れた奥庭の、黄ばんだ木立のあたりへ目をやっていたが、ややあって、その碁石をぴしりと碁盤へ打ち据え、

「よし。夫婦ともに引っ捕えよ」
と、いった。
「では、すぐさま……」
腰をあげかけた磯野へ、
「ただし、だれにも気づかれぬようにいたせ。場合によれば、夜に入ってからでもよい。こなたから駕籠を用意させ、捕えた二人を中に入れ、当本陣へ引っ立ててまいれ」
「心得ました」
しかし、五兵衛はおもい直して、酒匂川の茶店で捕えた二人を護送したときのように、荷車へ木箱を積ませ、その中へ押し込めることにした。
「磯野。わしがまいらずともよいな」
「はっ。御安心下されますよう」
「では、たのむ」
五兵衛は、小沼治作と共に、本陣へ残ることにした。
磯野源右衛門は、金兵衛夫婦のみの捕縛ゆえ、見付宿の周辺へ出張っている人数を呼びよせなくともよいと考えた。
そこで、本陣から、空の大きな木箱を二つ借り受け、これを荷車に積み、新五郎に挽かせ、くわしく打ち合せをすませたのち、前後して本陣を出て行った。
袋井から三ヶ野村までは、約一里である。

村へ入る手前に太田川がながれていて、三ヶ野橋という橋が架けられてある。

東海道の橋だけに、長さ四十余間におよぶ立派な橋だ。

荷車を挽いた新五郎は、この橋をわたってから、川沿いの道を左へ大きく迂回し、村外れの金兵衛宅から程近い雑木林の中へ荷車を隠して置くことになった。

密偵ばかりでなく、与力・同心も笠をかぶり、蓑をつけ、裾を端折って素足に草鞋ばきという、外見からは、このあたりの道のどこにでも見かける姿になっている。

磯野が出て行ったあと、五兵衛は本陣の主・田代八郎左衛門をまねき、

「今日のうちに、盗賊一味の者とおもわれる二人づれを、この本陣へ引っ捕えてまいるゆえ、牢屋がわりに土蔵を貸してもらいたい」

「すりゃ、まことでござりますか?」

八郎左衛門は、昂奮した。

「まことじゃ。なれば、この家の奉公人へも隠しておくわけにもまいるまい」

「いえ、それは……」

「ま、そのほうは、おぬしにまかせよう。いずれにせよ、われらのことが他へ洩れてはならぬ。相なるべくは奉公人たちも外へ出さぬようにしてもらいたい」

「かしこまりましてござります」

「しかと、たのんだぞ」

「はい、はい」

八郎左衛門が緊張の面持ちで出て行った後で、五兵衛は、また碁石を手にした。

「小沼。いずれにしても夜に入ってからのことじゃ」

「さようでございますな」

「さ、まいるぞ」

「はい」

七

金兵衛宅を見張っている与力・同心・密偵たちは、二手に別れ、雑木林の中に潜んでいた。これに、引き返して来る新五郎と、駈けつけて来た磯野源右衛門を加えると、合せて六名ということになる。

金兵衛宅では、台所のあたりの煙出しから煙りがたちのぼった。

そこで岩瀬与力が、新五郎を袋井の本陣へ走らせ、五兵衛の指示を待つことにした。

その新五郎が、磯野源右衛門より一足先に、荷車を挽いて三ヶ野橋をわたりきり、道を左へとった。

人目にたたぬよう、遠まわりをして金兵衛宅裏手に近い雑木林へ荷車を置き、待機している岩瀬与力へ、

「引っ捕えよとの、おおせにござります」

と、告げるつもりであった。

ちょうど、そのとき、金兵衛宅の表の戸が開き、笠をかぶり、雨合羽に草鞋ばきの金兵衛があらわれたではないか。

当然ながら、岩瀬与力の耳へは、まだ長官の指示がとどいていない。

そこで岩瀬は、同心・辻駒四郎と密偵の由蔵へ、

「後を尾けい」

と、命じた。

これまた、適切な処置といわねばなるまい。

金兵衛の女房は、まだ、家の中にいる。

金兵衛ひとりが、何処かへ出て行くのだ。

金兵衛の家のまわりは、一面の野原と雑木林のみで、歩む人影もないが、雨がけむっているし、したがって金兵衛も笠をかぶっているので、尾行する辻同心と由蔵にはまったく気づかぬ。

また、金兵衛は、あたりに目を配る様子もない。

つまりそれだけ、安心しきっているのであろう。

金兵衛は、さして急ぐでもない足取りで三ヶ野橋へさしかかった。

袋井の方へ向おうとしているのだ。

ちょうどそのとき、袋井の方から、新五郎に一足遅れた磯野源右衛門がやって来た。

金兵衛も磯野も、たがいに、その姿をみとめたが、それとは知らぬ。

二人は、三ヶ野橋の中程で擦れちがった。

擦れちがった磯野が、向うから金兵衛を尾けて来る辻同心と由蔵をみとめた。

磯野が、はっとした。

近寄ってきた辻が、

「磯野様……」

「どうした?」

「あれへ行くのが金兵衛です」

「何……」

振り向いた磯野源右衛門が、咄嗟に、

「引っ捕えよ」

と、いった。

何故だか、わからぬ。

磯野の直感が、そういわせたにちがいない。

いってから、

(いや、後を尾けて、行先をたしかめたほうがよい。捕えるのは、それからでもよかった……)

おもったときには、早くも辻駒四郎が橋板の上を駈け出していたのだ。

もう、仕方がない。

異常を感じて走り寄って来た密偵の由蔵へ、

「金兵衛を捕えるのじゃ」

いいざま、磯野は身をひるがえして辻同心の後につづいた。

このとき、辻駒四郎は懐ろから捕縄(とりなわ)を取り出して捌(さば)きつつ、一気に金兵衛の背後へ迫った。

振り向いた金兵衛が驚愕(きょうがく)し、白い歯を剝(む)き出した。

辻は、金兵衛へ体当りを喰わせた。

そのときには、早くも辻の捕縄が金兵衛の右腕へ絡みついている。

よろめいた金兵衛が何やら喚き、身を捩(よじ)ったかとおもうと左手で懐ろから短刀を引き抜いた。

金兵衛は左利きだったのである。

辻は、金兵衛の右腕へかけた捕縄をぐいと引っ張り、金兵衛がのめって来たところで、

「神妙にしろ!!」

叫びざま、組みついた。

「畜生!!」

恐るべきちからで、金兵衛が辻駒四郎を突き退(の)け、短刀を揮(ふる)って辻の顔を切った。

「あっ……」

怯(ひる)む辻の捕縄を、金兵衛は短刀で断ち切った。

そこへ、磯野源右衛門が駈けつけ、

「おのれ!!」

長十手(ながじって)を、金兵衛の左の肩へ打ち込んだ。

「あっ……」

金兵衛は短刀を落し、泳ぐようにして三ヶ野橋をわたりきり、袋井の方へ逃げようとするのへ、顔中を血だらけにした辻駒四郎が飛びついた。

辻は、金兵衛の足へ飛びつき、共に倒れた。

磯野が走り寄って、必死に起きあがろうとする金兵衛の頸(くび)すじを十手で打ち据えた。

「むうん……」

唸(うな)り声をあげ、金兵衛が泥濘(ぬかるみ)の道へ仰向けに倒れ、気を失った。

「辻。大丈夫か?」

「何の……平気です」

由蔵が追いついて来たのへ、

「早く、こやつを、あの木立の中へ運べ」

と、磯野が命じた。

辻駒四郎は頰を切られたが、傷は浅い。

木立の中で金兵衛の両手を縛りあげた磯野源右衛門が、由蔵へ、

「新五郎が向うへ到着しているはずじゃ。金兵衛の女房も引っ捕え、荷車の箱の中へ押し込め、これへまいれ。急げ」

「合点でございます」
由蔵が、泥しぶきをあげて引き返して行った。
それから、磯野が、辻の顔の傷の手当をしてやった。

八

捕えた金兵衛夫婦を木箱に入れ、盗賊改方が袋井の本陣へ引きあげて来ると、
「それでよし。余人に見られはすまいな？」
徳山五兵衛が、磯野源右衛門へ念を入れた。
「さいわい、雨中でもありまして、だれの目にも、とまってはおりませぬ」
「うむ。では、金兵衛夫婦を、別にして押し込めておくがよい」
「心得ました」
金兵衛は土蔵へ、女房おろくは物置小屋へ監禁し、厳重に見張りをつけた。
こうなると、もはや、隠しておくわけにはまいらぬ。
五兵衛は、本陣の主・田代八郎左衛門に、本陣の人びとの、
「外出（そとで）を禁ずるように」
と、指示をあたえた。
つぎに、五兵衛は、掛川宿に出張って探索をつづけていた同心や密偵たちも、すべて袋井の本陣へ引き返させたのである。

そのうちに、江尻へ残してきた柴田平太郎が袋井へ到着し、夜に入ってから、堀口・横山の二同心と、長井録蔵と丈助も、箱根・湯本から駈けつけて来た。
酒匂川の茶店で捕えた老爺（ろうや）の寅吉と佐藤浪人は、小田原藩の町奉行所が預かってくれている。
この間に、与力の磯野源右衛門と岩瀬半兵衛が、土蔵の金兵衛を取り調べ、与力の中島三郎右衛門と辻駒四郎が女房を訊問（じんもん）しはじめた。
夜に入って、雨は、いよいよ激しくなってきた。
五兵衛は本陣の戸締りを厳重にさせ、内部にも見張りを置いた。
五ツ（午後八時）ごろに、先（ま）ず、中島与力と辻同心が五兵衛の部屋へあらわれ、
「なかなか、強情な女にございます」
「さもあろう」
「ゆるやかに調べよとのおおせゆえ、だましだまし、吐かせようといたしましたが、なかなか……」
「さようか……」
「そこで、いささか、痛めつけましたところ……」
「ふむ、ふむ」
「亭主の金兵衛は、掛川宿の古手呉服を商いおります孫市（まごいち）と申す者を訪ねるため、三ヶ野村の家を出たそうにございます」

「ほう……」
「その他(ほか)の事は、何も知らぬ存ぜぬと、いい張るのみなので……」
「よし、よし」
「いかが、いたしましょうや」
「山口佐七をよべ」
「はっ」
五兵衛は、山口佐七ほか二名の同心へ密偵の源六(げんろく)をつけ、
「雨中、大儀ながら掛川へまいってくれ」
と、古手呉服屋・孫市の見張りを命じた。
袋井から掛川までは約二里半である。
山口以下四名が、本陣を出て行ってから間もなく、金兵衛を取り調べていた磯野源右衛門があらわれ、
「まことにもって、しぶとい奴にござります」
「吐かぬか？」
「ゆるやかにせよとの御言葉ではござりましたが、少々、痛めつけました。なれど吐きませぬ」
「ほう……」
「おもいきって、海老(えび)責めにかけたなら、いかがでござりましょう？」

すると、五兵衛が立ちあがり、
「では、わしが調べてみよう」
「おんみずから……？」
「うむ。何ぞ棒のような……そうじゃ、心張棒のようなものを借りてまいれ」
「はっ」
五兵衛は、側にいた小沼治作へ、
「どうじゃ、来て見ぬか？」
小沼が、にやりとして、
「かまいませぬか」
「よいとも」
徳山五兵衛が、小沼と磯野を従え、本陣奥庭に面した土蔵へ入ると、
「まことにもって……」
と、さも憎らしげに岩瀬与力が金兵衛を返り見た。
三ヶ野村の金兵衛は土蔵の柱へ括(くく)りつけられ、髪を振り乱し、口や鼻に血がこびりついている。
二人の与力に痛めつけられたのであろう。
だが金兵衛は、びくともしていない。
入って来た五兵衛を見た金兵衛の眼には、あきらかに嘲(あざけ)りの色が浮かんだ。

(なるほど……)

五兵衛は、金兵衛の面構えを一目見るや、

(こやつ、殺されても白状をすまい)

と、看た。

「盗賊改方、徳山五兵衛様であるぞ!!」

岩瀬与力が威嚇したけれども、金兵衛は、ふとい鼻の穴をわずかにふくらませただけで、何の利目もない。

五兵衛が磯野の手から心張棒を受け取るのを見て、金兵衛は、はっきりと嘲笑した。

「そんなものを使って、どうなるというのだ。無駄だ、無駄だ」

と、金兵衛はいいたげである。

金兵衛を見つめている徳山五兵衛の眼の色は、あくまでも静やかな……というよりは、むしろ、冷やかであった。

五兵衛は、まだ一言も金兵衛に口をきいてはいない。

ややあって、

「こやつに、猿轡を噛ませよ」

五兵衛が、磯野にいった。

「はい」

磯野源右衛門が、布で金兵衛の口を塞いだ。

そうしておいて、尚も五兵衛は、正面から金兵衛の顔に見入っている。

金兵衛の眼の色が、やや変ってきたようだ。

土蔵の中に、雨の音がこもっている。

磯野と岩瀬が、顔を見合せた。

小沼治作は、さも興味深そうに、五兵衛と金兵衛を交互に見やっている。

小沼は、微笑を浮かべていた。

九

それは、かなり長い時間であった。

猿轡を噛まされた三ヶ野の金兵衛の眼から、もはや嘲りの色が消えている。

そのかわりに、微かな怯えの色が滲み出てきたようだ。

徳山五兵衛が、一歩二歩と金兵衛へ近づいた。

そこでまた、金兵衛の顔を凝視している。

依然、五兵衛は口をきかぬ。

磯野も岩瀬も、

(いつ、取り調べが始まるのか……?)

固唾を呑んでいるのだが、一向に、その気配もない。

ただ、五兵衛は冷然と、金兵衛を見つめつづけているのだ。

ついに……。

金兵衛が目を伏せてしまった。

五兵衛の右手の心張棒が、そろりとうごいたのは、このときである。

磯野源右衛門と岩瀬半兵衛は、いよいよ、長官の拷問がはじまるとおもった。

五兵衛が摑んだ心張棒は、唸りを生じて金兵衛の躰へ撃ち込まれるとおもった。

まさに、五兵衛は金兵衛を、痛めつけにかかったのである。

しかし、心張棒が烈しくうごいたわけでもなく、強く打ち込まれたわけでもない。

五兵衛の躰は、ほとんど、うごかなかった。

右腕が、少し、うごいたのみだ。

心張棒の先端が、わずかに金兵衛の躰の何処かへ、

（触れたような……）

としか、二人の与力には見えなかった。

ところが、金兵衛は猿轡の中で異様な呻き声をあげ、上半身を苦しげに反らせた。

また、五兵衛の右手が、わずかにうごく。

金兵衛の顔が、苦痛に歪んだ。

心張棒が、金兵衛の躰の何処を突いたものか、二人の与力にはよくわからぬ。

「打つ音も、突く音もせぬのだ。いかにも軽く、ちょいちょいとお突きなさる。あれは、よほどに躰の急所を御存じなのであろうか……ともかくも金兵衛の苦しみ様といったら、大変

なものであった」

のちに二人の与力は、同心たちへ、そう語っている。

強く烈しく打ち据えられるときの人間の躰は、むろん、それ相応の苦痛を受けるが、これが連続しておこなわれると、しまいには痛みを感じなくなる。躰の神経が鈍くなってしまうのであろう。

さらに強烈な打撃を、あまりに加えると、気を失ってしまう。

五兵衛の棒先は、堪えがたい苦痛をあたえても、金兵衛を失神せしめるようなことはない。

そのかわり、苦痛が絶え間なくつづくのである。

五兵衛は棒先で、金兵衛の衣類を引き剝がし、半裸体にしておいて、

「ちょいちょいと……」

躰の諸方を突く。

猿轡を嚙まされているので、金兵衛の悲鳴は外に洩れなかったが、そのかわりに物凄い唸り声であった。

しばらくして、五兵衛は手をとめ、一歩退って金兵衛を見まもる。

金兵衛の顔は脂汗に濡れつくしていた。

それだけの苦痛をあたえているのだから、突かれた個所が腫れあがるとか、色が変るとかしそうなものだが、ほとんど変化は見られない。

わずかに、赤い痕がつくのみなのだ。

手をやすめている五兵衛の前で、金兵衛が狂人のごとく踠(もが)きはじめた。
金兵衛を柱に括りつけている縄が、
「ゆるまぬようにせよ」
と、五兵衛が命じた。
そのとき、小沼治作が何とおもってか、
「まだ、お責めなされますか？」
声をかけると、五兵衛が土蔵の中へ響きわたるような大声で、
「まだまだ、これからじゃ!!」
と、こたえた。
ただの大声ではない。
たとえていうなら、真剣を抜き合って闘うときの、必殺の気合声(きあいごえ)そのものであって、金兵衛の躰の縄をきびしくしていた磯野も岩瀬も、
「何しろ、それまでは気味がわるいほどに押し黙っておられただけに、突然、あの声を聞いたときには、おもわず躰が震えた」
と、同心たちに洩らしたほどだ。
ましてや、三ヶ野の金兵衛にいたっては、その恐怖が絶頂に達したといってよい。
「よいか」
五兵衛が、二与力へ声をかけ、またしても一歩、金兵衛へ近づいた。

そして、凝(じっ)と見ている。金兵衛の眼を……。
金兵衛の両眼は、哀(かな)しげに曇り、精一杯のあわれみを乞うている。
五兵衛はゆるさず、薄汗も滲んでいない顔の、眉毛一筋うごかさぬままに、金兵衛の躰を突きはじめた。

それからの金兵衛は、もう、長くは保(も)たなかった。
徳山五兵衛が土蔵の内へ入ってから、半刻(はんとき)（一時間）もかからなかったろう。
ついに金兵衛は、口を割りはじめた。
「水をのませてやれ」
五兵衛は猿轡を外させ、金兵衛に水をあたえた。
それから五兵衛が、金兵衛を訊問した時間のほうが拷問のそれよりも長くかかった。
「よく申した。そのほうの申したことが偽りでなくば、その一命だけは助けつかわすよう、わしが取り計ろうてやる」
五兵衛は金兵衛へ、こういってから土蔵を出た。
磯野も岩瀬も、昂奮を隠せない様子であった。
「本陣の内外の見張りに念を入れよ。見張りのほかの者を、すぐに、わしの許(もと)へあつめよ」
「心得まいた」
五兵衛は部屋へもどり、小沼を見て、

「見たか……」
「いや、恐れ入りましてございます。さすがに殿……」
「ほめるな。気味がわるいわえ」
「いや、まことにもって……」
「若いころの修行も、むだではなかったようじゃな」
「それはもう、申すまでもございませぬ」
「それにしても、しぶとい奴であった」
「いかさま」
「いまどきの侍どもより、骨が太いわえ」
「なれど、おもいのほかに早うございましたな」
「そのことよ、そのことよ」
　さすがに、五兵衛は満足げに笑って、
「何と、明日の夜とは、な……」
「小田原より、この方、一気に事を運ばれまいたのが、ようございました」
「まだまだ、油断はならぬ。日本左衛門一味の者に、気づかれてはならぬ」
「はい」
「こうなれば、掛川宿の、古手呉服をいとなみおる孫市と申す奴、一時も早く召し捕ってしまわねばならぬな」

「私が、掛川へまいりましょうか?」
「行ってくれるか」
「柴田平太郎殿を連れてまいりたいと存じます。いかが?」
「よいとも。平太郎めも少しは働かせておかねば、父の勝四郎へ土産ばなしもできまい。あは、はは……」
　すでに掛川へは、山口佐七以下四名が、見張りに先発している。
「では、行ってまいりまする」
「雨中、御苦労」
　小沼治作と柴田平太郎は、すぐに本陣を出て行った。
　召し捕った孫市などは、袋井へ連行せず、そのまま掛川の本陣・沢野（さわの）弥（や）三左衛門方の土蔵へ、
「押し込めおけ」
　と、五兵衛は小沼に、いいふくめておいた。
　そのうちにも、与力・同心たちが五兵衛の部屋へあつまって来る。
　五兵衛は、こういった。
「みなの者。日本左衛門召し捕りは、明夜になろう」

十

翌朝になると、雨はあがっていた。
徳山五兵衛は配下の人びとへ、それぞれに指令をあたえた。
いまごろは、山口佐七以下三名の同心と密偵の源六と、それに後から小沼治作と柴田平太郎が掛川へ向い、古手呉服屋の孫市を召し捕っているはずだ。
この合せて六名の人数は、昼前に、袋井の本陣へ引き返して来るとみてよい。
ところで……。
三ヶ野村の金兵衛は、何を白状におよんだのか……。
それは、五兵衛にとっても、
(まことに、おもいもかけぬ……)
ことであった。
今日の夜ふけに、見付の宿(しゅく)外れに住む万右衛門(まんえもん)という男の家で、日本左衛門一味が、博奕(ばくち)をたのしむことになっているというのだ。
もっとも、これは、ただの博奕ではない。
酒をのみ、博奕をしながら、つぎの盗みばたらきの打ち合せをやるらしい。
「それは、何処へ押し込むつもりなのじゃ？」
と、五兵衛は、金兵衛に尋(き)いた。

金兵衛も、くわしいことは知らぬらしいが、どうやら駿河城下の大きな商舗らしい。
昨日、金兵衛が掛川にいる孫市方へ向ったのも、孫市へ、
「見付の万右衛門のところへ、あつまってくれ」
と、首領・日本左衛門の言葉をつたえるためであった。
「金兵衛。酒匂川のほとりの茶店の老爺(おやじ)と浪人も、あつまることになっているのか？」
五兵衛が問うや、金兵衛は愕然(がくぜん)となったものだ。
「あの二人は、すでに引っ捕えたぞよ」
「げえっ……」
それから、金兵衛が申したてたところによると、あの茶店は、やはり一味の盗人宿(ぬすびとやど)で、寅吉は番人をしているわけだから、押し込みには参加をせぬ。
浪人・佐藤忠右衛門は、近ごろ、盗賊一味に加わったものゆえ、万右衛門方へはあらわれず、翌月の一日に、連絡(つなぎ)の場所である三ヶ野村の金兵衛方へ来て、日本左衛門の指令を受けることになっていた。
佐藤浪人を一味に引き入れたのは、これも越後の浪人くずれの盗賊で「今弁慶(いまべんけい)」と仲間によばれている大男らしい。
その他、坊主くずれの赤池法印養益(あかいけほういんようえき)だとか、菅田の平蔵、白輪の伝右衛門など、一味の盗賊二十名ほどが万右衛門宅へあつまるのだそうな。
見付の万右衛門も、金兵衛同様、百姓あがりの男なのだが、これも博奕や、いかがわしい

事をして暮している。

日本左衛門が、常時、何処に住み暮しているのか、それは金兵衛にもわからぬ。

連絡は、向うからやって来るのだ。

今夜、万右衛門宅へあつまる者たちは日本左衛門一味のすべてではあるまい。

だが、

（もはや、この上の探りは無用じゃ）

と、徳山五兵衛は決意をした。

ほんらいならば、つぎからつぎへと彼らの盗人宿を突きとめ、一網打尽にするのがよいわけだが、盗賊改方としては人手も不足であるし、それに今度は、盗賊改方の本拠ともいうべき江戸市中での捕物ではないのだ。

また一つには、日本左衛門を捕えてしまえば、この盗賊一味の大胆不敵な犯行は熄むに相違ない。

万右衛門宅へあつまる盗賊どもは、

（一味のうちの、重だった者どもにちがいない）

わけだから、こやつどもさえ叩き潰してしまえば、彼らの跳梁の根を絶ったことになる。

五兵衛は、磯野・岩瀬の二与力を袋井本陣へ残し、残る十一名を見付へさしむけた。

密偵たちはよいのだが、中島与力をはじめ同心たちも、本陣から借りた着物に着替えたり、髪を町人髷に結い直したり、または旅の托鉢僧に変装したりして、一人ずつ、本陣を出て行

った。

その後で、五兵衛は本陣の主・田代八郎左衛門をまねき、

「今夜、日本左衛門を捕えることができるやも知れぬ」

「へえっ……」

八郎左衛門は、仰天した。

このように早く事が運ぼうとは、まったく予期していなかった。

これは五兵衛自身も、そうおもっている。

しかし、金兵衛の自白を何処まで信じてよいのか……。

「ともかくも、今夜は捕物となろうが、それについて、当宿から屈強の人足たちを二十名ほど、出してもらいたい。賃金は弾んでつかわそう。どうじゃ」

「心得ましてござります」

「ただし、盗賊一味の捕物と申してはならぬ。どこまでも本陣の御用、お上の御用として相つとめるように申し聞かせておくがよい」

「はい、はい」

「人足たちには危難をかけぬつもりじゃ。打ち込むのは、われらのみにてよい。なれど、中には打つ網からこぼれ、二人、三人と逃げる者もあろう。これに備えたいのじゃ。万事、わしが指図をいたすゆえ、暮れ六つ（午後六時）ごろに、本陣へあつめておいてもらいたい」

昼前に、掛川から四名が引き返して来た。

古手呉服屋の孫市夫婦と奉公人三名を、今朝の明け方に捕えて、五兵衛の指図どおりに、掛川の本陣・沢野弥三左衛門方の土蔵へ押し込め、同心二名をその見張りに残してきたとの報告を聞いて、

「二名、な……」

「一名のみで、ようござりましたか?」

と、山口佐七が、

「なれば、すぐさま掛川へ馬を飛ばし、引きもどしましょうや?」

「いや、待て」

「は……」

「よいわ。孫市どもの見張りも大切じゃ。そのままにいたしおけ」

「はっ」

山口同心と密偵の源六に、

「しばらく、やすめ」

と、五兵衛がいった。

昼すぎになると、先ず、与力の中島三郎右衛門が密偵の新五郎をともない、袋井の本陣へもどって来た。

「どうじゃ?」

「まさに、万右衛門なる男が、宿外れに住み暮しおります」

「どの辺りじゃ」

「見付の宿の高札場（こうさつば）の先に、北へ入る小道がござりまして、それを四、五町行きましたところの、竹藪（たけやぶ）の中の百姓家に住んでおります」

「その近くに人家は?」

「ござりませぬ」

「ふむ。それは何よりじゃ」

うなずいた五兵衛が、

「中島。その辺り一帯の絵図を、くわしく描いてみよ」

「はっ」

中島三郎右衛門は、すぐに硯箱（すずりばこ）を引き寄せた。

中島与力が絵図を描いている間に、五兵衛は新五郎の報告を聞いた。

「なんでも、その万右衛門は年寄りの女を相手に暮しているそうでござります」

「ほう……」

その老婆のことを、万右衛門は「婆（ばあ）さま」と、よんでいるらしい。

見付の宿へあらわれ、娼家で酒をのんだり、女を抱いたりしながら、

「何か、うちの婆さまに食べさせるうまいものを、折に詰めてくれ」

などと、いう。

老婆は二年ほど前から、万右衛門の家へ住みつくようになったそうだ。

見付の宿へも、めったにあらわれぬ老婆だが、それでも顔を見かけた人のはなしによると、
「小肥りの婆さんだが、品のよい顔だち……」
だという。

十一

中島三郎右衛門の、克明な絵図ができあがると、それを前にして、三与力と小沼に柴田、それに新五郎をも交え、五兵衛は今夜の捕物についての、くわしい打ち合せをおこなった。
ともかくも、
「相手に気取られてはならぬ」
これが、第一である。
いま、万右衛門宅を見張っている盗賊改方も、このことは、よくよくわきまえている。
「かまえて、近くへ寄ってはならぬぞ」
と、五兵衛は念を入れておいた。
捕方をひきいて、徳山五兵衛が万右衛門宅へ向うのは、見付からではなく、この袋井の本陣からである。
捕方は二手に別れ、本陣の田代八郎左衛門があつめた二十名の人足たちへ得物を持たせ、これに万右衛門宅を遠巻きにさせる。
足軽の長井録蔵と、小者の丈助は本陣へ残り、三ケ野の金兵衛夫婦を見張ることになった。

これには与力一名を附けておく。
残る捕方を五兵衛がひきいて、万右衛門宅へ打ち込む。
密偵たちは連絡の役目だ。
「手にあまることあらば、斬って捨ててもよいが、日本左衛門のみは、何としても生け捕りにしたい」
五兵衛は、小沼と柴田へ、
「今夜は、はたらいてもらわねばならぬぞ」
「心得ましてござります」
柴田平太郎は、緊張に、やや青ざめていた。
「いささかも手順が狂うてはならぬ。何事も呼吸が大事じゃ」
そこへ、万右衛門宅を探りに出ていた堀口十次郎と辻駒四郎の二同心が、袋井の本陣へ引き返して来た。
「一人、二人と、旅人らしい男が万右衛門宅へ入りましてござります」
二同心の、この報告を聞き取った五兵衛は、
「よし。なれば同心一名、密偵一名を残しおき、あとはすべて、こなたへ引きあげさせよ」
たちどころに命じた。
これは、
（もはや、賊どもがあつまることに間違いはない）

と看て、こちらの見張りに気づかれてはならぬとおもったからであろう。

すぐさま、二人の同心は見付の方へ引き返して行った。

晩秋の日ざしは、すでに、かたむきはじめている。

「これでよし」

うなずいた五兵衛が、

「わしは湯を浴びてまいる。一同の腹ごしらえに手落ちなきよう、取り計ろうておくがよい」

はじめて、笑顔を見せた。

腹ごしらえのみではない。

高張提灯、龕燈、捕縄、突棒などの道具も揃えておかねばならぬ。

ゆっくりと湯殿で時間をすごした徳山五兵衛が、部屋へもどって来ると、小沼治作が、ひとり待っていて、

「殿。このようなものは、いかがで?」

こういって、さし出したものは、長さ四尺ほどの樫の棍棒であった。

これを小沼が、つかいやすいように削ったものである。

「おお……これはよい」

五兵衛が受け取り、振ってみて、

「いつ、このようなものを?」

「先ごろ、土蔵の金兵衛を見廻りましたときに見つけましたので……」

「うむ。これはよい」

「今夜の御役に立ちましょうや?」

「手ごろじゃ。うむ、手ごろじゃ」

と、五兵衛は、うれしげに尚も棍棒を振りつづける。

その笑顔は、まことに無邪気なものであった。

「小沼の得物は何であろうかな?」

「殿と同様の得物を、こしらえましてございます」

「ほう、さようか」

そのうちに、二人、三人と、見張りの者たちが本陣へ引き返して来る。

田代八郎左衛門は、人足たちを本陣ではなく、問屋場へあつめることにしておいたので、

「では、これより問屋場へ行ってまいります」

と、五兵衛の許へ挨拶にあらわれた。

「よろしゅうたのむぞ」

「かしこまりましてございまする」

見付から引き返した者の報告によると、さらに四人ほどの旅の男が、万右衛門宅へ入ったということだ。

首領の日本左衛門が、その中の何なのか、それはわからぬ。

あるいは、昨日のうちに万右衛門宅へ到着しているのやも知れなかった。

夜に入って……。

徳山五兵衛をはじめ一同が、身仕度にかかっていると、問屋場から田代八郎左衛門が帰って来た。

問屋場は宿場の公設機関であって、大名行列の宿泊や人馬の発給、公用書状の逓送、助郷人夫の取り扱いなど、宿駅の事務を管理する所だ。

田代八郎左衛門は、問屋場の〔年寄役〕をつとめてもいる。

八郎左衛門によれば、あつめた二十名の人足たちは賃金が多いので、大よろこびをしているという。

何の労働をするのか、それについても年寄役の八郎左衛門が、

「お上の御用じゃ」

といえば、いささかも疑わぬ。

「安心をせよ。人足たちが傷ついたりするようなことにはならぬ。それは、わしが身に替えて引き受けよう」

五兵衛は、八郎左衛門にそういった。

網から洩れて逃げる盗賊の数は知れてある。

得物を持った屈強の人足たちが、これを取り囲めば、どうにもなるまい。

それよりも、先ず、人足たちにしてもらわねばならぬことは、いざ打ち込みとなったとき、

万右衛門宅を高張提灯のあかりで照らしてもらわねばならない。

夜の闇の中での捕物ゆえ、照明がなくては、どうにもならぬ。

五兵衛は、捕物陣を、

「三段構え」

に、することにした。

打ち込む者は、五兵衛が先頭に立ち、磯野源右衛門・小沼治作・柴田平太郎・辻駒四郎・山口佐七などで、残りの与力・同心たちは、龕燈を手に万右衛門宅を取り囲み、逃げ出して来る盗賊どもを打ち据える。

そして人足たちが、その背後に待機するというわけだ。

与力・同心たちは、打ち込む人数が六名では、

（こころもとない……）

ような顔つきであったが、万右衛門宅は大きな屋敷ではない。

合せて四間ほどの百姓家にすぎない。このような場所へ多勢で打ち込んだところで、混乱を生ぜしめるばかりなのだ。

それを、徳山五兵衛は、よくわきまえていたのである。

十二

夜が更けて……。

日本左衛門逮捕の一行は、袋井の本陣の裏手から出て行った。

それより少し前に、問屋場へあつまった人足二十名を、田代八郎左衛門と与力・岩瀬半兵衛、池田と小池の二同心が従えて、別の道を北へすすむ。

いったんは袋井の宿場を北へはなれておいてから、道を西へ取り、人足一行は太田川のほとりで待機した。

やがて、五兵衛一行があらわれた。

五兵衛は、人足たちの前へ出て、自分の身分と姓名を告げ、

「今夜、みなの者に手伝ってもらうのは、見付の万右衛門を捕えることについてじゃ」

と、いった。

人足たちが、顔を見合せている。

彼らの耳へも、万右衛門のうわさは入っていたものとみえる。

だが、万右衛門が日本左衛門一味の盗賊であるとは知らぬ。

五兵衛も、そのことについてはふれなかった。

人足たちを、怖れさせてはならぬからであった。

万右衛門は、見付のみならず、駿河から江戸にまで手をのばし、若い娘たちを騙したり、勾引したりして、これを諸方の娼家へ売りわたしていることが判明したので、

「御公儀も捨ててはおかれず、われらをさしむけたのじゃ」

と、五兵衛はいった。

もとより人足たちは、これをうたがわなかった。

ついては、今夜、万右衛門宅で博奕がおこなわれることを突きとめたので、

「一味の無頼どもを、一人残さず引っ捕えたい」

という五兵衛の言葉を引き取って、与力・磯野源右衛門が人足たちに、その配置と役割りを、くわしく説明した。

「何よりも先ず、相手方に気取られてはならぬ。これより先は、灯りも案内の者のみが手にして、指図どおりにうごいてもらいたい」

人足たちは、手に手に棍棒のような得物を持ち、足ごしらえも充分だ。

「よし」

五兵衛がうなずいたので、岩瀬与力は二同心と共に人足たちを引きつれ、太田川に架かる橋をわたって行く。

この橋は、さして立派なものではない。

太田川の下流に、三ヶ野の金兵衛が捕えられた三ヶ野橋が架かっている。

しばらくして、五兵衛一行も太田川を越えた。

本陣の田代八郎左衛門も、

「ぜひとも、御供をさせていただきとうございます」

しきりに願い出たので、五兵衛は、これをゆるした。

八郎左衛門が、五兵衛一行の道案内を買って出たのである。

太田川をこえて、半里余も行くと、見付宿の北方半里ほどの地点へ出る。

このあたりは低い段丘が連なってい、それが見付の方へ傾斜している。

一行は、あくまでも、ゆっくりとした足取りですすむ。

袋井宿を出てから、五兵衛一行が万右衛門宅の北側にある高処（たかみ）へ到着するまでには二刻（ふたとき）（四時間）もかかっていた。

高処の一角に、小さな地蔵堂があり、そこが連絡場所ときめられている。

見張りとして残っていた同心の三井が密偵・源六と、地蔵堂の前に待っていた。

「三井。どのようなぐあいじゃ？」

と、五兵衛。

「は。人足たちは、いま、万右衛門宅を遠巻きにいたしましてござります」

「盗賊どもに、気づかれなんだか？」

「はい」

「ならばよし。われらが打ち込むのと同時に、遠巻きの輪をちぢめるのじゃ。わかっていような」

「心得ておりまする」

密偵の報告によると、それでも、万右衛門宅の前に見張りが一人、出ているという。

それにしても盗賊一味は、まさか江戸から盗賊改方の長官が出張（でば）って来ていようとは、夢にも想っていないらしく、

「人目も無げな……」

大胆さで、酒に酔った笑い声が、時折は、密偵の耳へも入るほどだそうな。

これまでに、万右衛門宅へ入って行った旅人は、

「二十名にござります」

と、三井同心が告げた。

「さようか」

徳山五兵衛は、高処の縁（ふち）に立った。

高処の下は竹藪で、その向うに万右衛門宅がある。

おそらく、この高処へは逃げて来られまいが、五兵衛は念のために、鈴木・伊藤の二同心を残して置くことにした。

月も無い、曇った夜である。

冷気が、冬のようにきびしかった。

「では、そろそろ、まいろうか」

と、五兵衛が磯野与力へ声をかけてから、

「三井。見張りの者の始末をせよ」

「はっ」

三井は源六をうながし、地蔵堂前の小道を下って行った。

田代八郎左衛門も、これにつづいた。八郎左衛門は、人足たちの後方で事態を見まもるこ

とになっている。

十三

見付宿の高札場の先の小道を右へ入り、四、五町も行くと人家も絶えてしまう。
万右衛門宅は、小道から右へ切れ込んだ奥にあった。
背後は竹藪だし、道もないので、人が入り込むこともない。
そこで、盗賊どもが出した見張りの男は、表口にいたのである。
そこは、母屋の前庭で、左手に物置小屋があり、見張りの男は、その小屋の戸を開け放しにして縁台に腰をかけ、股（また）の間に小さな火鉢を置き、煙草を吸っている。
なるほど、此処（ここ）からなら、前庭も母屋も、すっかり見わたすことができるというものだ。
母屋の雨戸は閉めきってあるが、その隙間からわずかに灯りが洩れていた。
母屋からは笑い声が聞こえていたし、見張りの男も、さほどに神経をつかっているようにも見えぬ。
そのとき……。
物置小屋の外に、人の気配がしたようなので、見張りの男は煙管（きせる）を煙草盆へ置き、
「だれだ。粂（くめ）か？」
腰をあげて尋（き）いた。
見張りの交替に、別の男が来てくれたのだと思ったらしい。

たしかに小屋の戸口の蔭（かげ）に、だれか立っているのだが、姿は見えぬ。
その外の男が低い声で、何やらいった。
「何だよ、おい……」
見張りの男が、戸口から外へ出た。
出た途端に、頸筋（くびすじ）をしたたかに撃たれ、
「う、う……」
前のめりになった男の口を、素早く押えて物置小屋へ引き擦り込んだのは、三井同心であった。
密偵の源六は、戸口に屈（かが）み込み、母屋の様子を窺（うかが）っている。
「源六。大丈夫か？」
と、三井。
「へい。だれも気づいてはおりませぬよ」
「よし。お知らせしてこい」
「合点です」
源六が、音もなく走り去った。
三井は、気絶した見張りの男の口へ猿轡（さるぐつわ）を嚙（か）ませ、用意の細引縄で手足を縛った。
闇の中を二人、三人と、盗賊改方の一行が前庭へあらわれた。
徳山五兵衛をふくめて十一名である。

はじめ、万右衛門宅へ打ち込む人数は十三名に決めておいたが、先刻、竹藪の裏の高処へ二人の同心を待機せしめたので、十一名となってしまった。

そのほかに、密偵四名が控えている。

これは、外部を包囲している人足たちへの連絡(つなぎ)をしたり、逃走する盗賊を捕方に知らせたりすることになっている。

五兵衛は、自分と共に中へ打ち込む者として、磯野源右衛門・小沼治作・柴田平太郎・辻駒四郎・山口佐七の五名をえらんだ。

残る五名のうち、二名が裏手へまわり、三井同心をふくめた三名が前庭に待ち構えた。

密偵たちは、

（これだけの人数で、うまく行くだろうか？）

と、懸念しているようだ。

しかし、打ち込みにえらばれた与力・同心たちは、いずれも、

「腕に覚えのある……」

男たちばかりであった。

「よいか。相なるべくは殺(あや)めるな。手足を傷つけて身うごきができぬようにするがよい」

と、袋井の本陣を出るとき、五兵衛は、打ち込む人びとに念を入れてあった。

「では、そろそろ、はじめようか」

五兵衛は、そういって打(ぶ)っ裂(さ)き羽織をぬいで密偵の源六へわたし、袂(たもと)から出した革紐(かわひも)を襷(たすき)

にかけた。

与力・同心たちは、いずれも裁着袴(たっつけばかま)をつけて足ごしらえも厳重に、鉢巻をしめている者もいた。

「それ」

五兵衛が合図をすると、掛矢(かけや)をつかんだ二人の密偵が足音を忍ばせ、母屋へ近寄って行く。

前庭に面した母屋の雨戸から灯りが洩れている。

其処(そこ)の雨戸を掛矢で叩き破って、打ち込もうというのだ。

「よし」

二人の密偵にうなずき、五兵衛が樫の棍棒をつかみ直した。

密偵たちが掛矢を揮(ふる)って、戸を叩き破った。

徳山五兵衛は、真先に中へ躍り込んだ。

博奕(ばくち)は、もう終っていたらしく、屈強の男どもがおよそ二十名、おもいおもいに酒を酌(く)みかわしていた。

雨戸が叩き破られたとき、さすがに彼らは、傍に置いてあった脇差や、ふところの短刀を引き抜き、一斉に立ちあがっている。

そこへ飛び込んだ五兵衛は、

「火附盗賊改方である」

などと、声をかけたりはしなかった。

いきなり、五兵衛が揮った棍棒に撃たれて、二人の賊どもが転倒している。
五十七歳の徳山五兵衛の躰は、それこそ、
「飛鳥のごとくに……」
立ちまわって、
「鋭!!」
気合声を発し、また一人を打ち据えたかとおもうと、
「日本左衛門、神妙にいたせ!!」
天井が破れ落ちるかとおもわれたほどの大声であった。
「逃げろ!!」
盗賊の声がした。
行燈を吹き消した者がいる。
しかし、掛矢を投げ捨てた二人の密偵が、前庭に四ヶ所、用意の高張提灯を突き立てた。
六十七歳の小沼治作は、身をひるがえして広い土間へ駈け下り、裏手から逃げようとする盗賊どもの側面から打ってかかった。
「えい、やあ!!」
と、勇ましい気合声をかけて、賊どもと斬り合っているのは、柴田平太郎にちがいない。
高張提灯を立ててから、密偵たちは龕燈に火を点じた。
だが、屋内は暗い。

賊どもは、ひしめき合うようにして躰を打つけ合い、
「早く、早く……」
「裏へ逃げろ!!」
「御頭は何処だ!!」
叫び交し、喚き合いつつ、滅多矢鱈に刃物を振りまわしている。
盗賊改方の、この奇襲には、さすがの彼らも、
「度肝を抜かれた……」
と、みえた。
前庭へ逃げた奴どもは、待ちかまえていた与力・同心の峰打ちをくらって気絶をしたり、中には膝のあたりを切り割られ、のた打ちまわっている者もある。
徳山五兵衛は、乱闘の渦の中を抜けて、奥の間へ踏み込んだ。
日本左衛門と見えた男が、奥の間へ逃げ込んだからである。
奥の間には、漆のような闇がたちこめていた。
「野郎!!」
「む!!」
その闇の中から賊がひとり、走り出て五兵衛へ脇差を叩きつけてきた。
わずかに退った五兵衛が、下から、すくいあげるように賊の右腕を撃った。
「あっ……」

賊の手から放れた脇差が天井へ下から突き立った。
「畜生め!!」
感心にも組みついて来た賊の脳天を、五兵衛の棍棒が一撃した。
「うわ……」
のめり倒れるそやつを蹴転がしておいて、
「日本左衛門、観念せよ」
五兵衛が、奥の間の闇へ声を投げた。
たしかに、いる。
闇の底に、人がひとり。
凝と、五兵衛を見つめている。
このとき、乱闘は屋内から前庭へ移っていた。
裏手へ逃げた者は一人もいない。
裏手の土間には、小沼治作が立ちふさがり、一人も通さなかったからである。
小沼は、土間の片隅に蹲っている老婆を見つけ、
「逃げるなよ」
しずかに、声をかけた。
老婆は虚脱したように、頭を両手に抱え、蹲ったまま身じろぎもせぬ。
密偵たちが龕燈を持って屋内へ駈け込んで来た。

「灯りを、これへ……」
油断なく、奥の間の曲者を見張りつつ、五兵衛が呼ばわった。
密偵の龕燈が近寄って来て、その灯りが奥の間を照らした。
男がひとり、立っている。
「ふうむ……」
五兵衛は、おもわず唸った。
まさに、日本左衛門と見た。
堂々たる体格の、年齢は三十前後というところか……。
それはさておき、こやつが身につけている衣裳が、まるで芝居の舞台にでもあらわれるようなもので、琥珀檳榔子の小袖に橘の大紋をつけ、大脇差をひっさげ、いささかも臆せずに五兵衛を睨みつけているのだ。
「日本左衛門じゃな」
五兵衛が、声をかけた。
「いかにも」
悪びれもせずに、日本左衛門がこたえた。
「御縄にかかれ」
「何の……」
日本左衛門は声なく笑って、

「みごと、捕えるつもりならば捕えて見よ」
と、いいはなった。
「色白く、目の中細く、鼻すじ通り……」
と、人相書にあるとおりの、立派な顔だちである。
龕燈をさし向けている密偵の手が、ふるえ出した。
（はて……？）
龕燈の灯りを正面から受けてたじろがぬ日本左衛門に、ある男の顔が重なり合ってきたので、五兵衛は愕然となった。

十四

（こ、これは……？）
さすがの五兵衛も、息を呑んだ。
生き写しとまではいいきれぬが、似ている。
たしかに、似ている。
若きころの佐和口忠蔵が、いま、徳山五兵衛の眼前に立っている。
（そうか……そうであったのか……）
日本左衛門は、佐和口忠蔵の子であったのか。
そのおどろきが、五兵衛の構えに隙を生ぜしめたのもむりはない。

何しろ、
（おもいもかけぬこと……）
であった。
日本左衛門は、この一瞬の隙を見逃さなかった。
日本左衛門は、高処から海へでも飛び込むようなかたちで、五兵衛の左脇へ身を投げつつ、
「む!!」
大脇差を抜く手も見せずに、五兵衛の足へ斬りつけた。
五兵衛は身をひねり、辛うじて躱したが、袴の裾を切り裂かれている。
転瞬……。
日本左衛門の躰が一回転して立ちあがりざま、
「うぬ!!」
今度は、密偵の顔を切り払った。
絶叫をあげて転倒する密偵の手から、龕燈が落ちた。
「殿!!」
どこかで、小沼治作が叫んだ。
日本左衛門は、怪鳥のごとく、前庭へ飛び下りている。
五兵衛が、すかさず、これを追った。
前庭では、与力や同心たちがまだ盗賊たちと闘っていた。

その斬り合いの渦の中をくぐりぬけた日本左衛門が、裏手へまわりかけるのへ、
「待て!!」
同心・堀口十次郎が横合いから走りかかって組みついた。
堀口は、たちまち振り放され、日本左衛門の一刀を肩口へ受けてよろめいた。
そこへ、徳山五兵衛が追いついた。
日本左衛門は斜めに飛んで裏手へまわり込み、五兵衛が打ち込む棍棒を大脇差で切り払った。
五兵衛の棍棒が二つに切断され、日本左衛門は、竹藪の中へ躍り込もうとしている。
棍棒を捨てた五兵衛が、走り寄りざま、腰をひねって抜き打った。
この一刀を太股(ふともも)のあたりに受けながらも、日本左衛門は竹藪の闇へ姿を没してしまった。
「たれか、おらぬか!!」
五兵衛が、大声に呼ばわった。
同心が二名、こちらへ駈けつけて来る。
(もはや、逃れられまい)
と、五兵衛はおもった。
抜き打った一刀の手ごたえは、たしかなものであった。
深い竹藪の背後は崖(がけ)であり、その崖の上には同心二名が待機している。
だが、太股を切り割られた日本左衛門が、崖をよじ登ることなどできようはずもない。

すでに、この家を遠巻きにしている人足たちは、高張提灯に火を入れ、これを一斉に立ちならべ、蟻(あり)一匹も逃すまいとしていた。
これでは、たとえ竹藪から逃げ出たところで、発見されぬはずはない。
ところが……。
ついに、日本左衛門を捕えることはできなかったのである。
同心たちや密偵が竹藪の中を隈(くま)なく探し、さらに竹藪から外部への見張りも、ぬかりなくおこなったにもかかわらず、怪盗の姿を見出すことはできなかった。
夜が明けてから、竹藪の中の土の上に、ふりまかれている血痕(けっこん)を見ることができたけれども、すでに遅い。
他の盗賊たちの大半は捕えられた。
彼らのうちの三名は、激しく抵抗したので斬り伏せられている。
五兵衛は、田代八郎左衛門をよび、捕えた盗賊どもを数珠繋(じゅずつな)ぎにさせて見付宿へ入った。
八郎左衛門は、本陣へ入り、今夜の捕物一件についての手配をすませ、五兵衛は、すぐさま、日本左衛門の追跡を命じた。
五兵衛は、充分に自信をもっていたようである。
(太股に、あれほどの傷を負うて、逃げ切れるはずはない)
しかし、この近辺に、もしも日本左衛門を匿(かくま)う者のあるときは予断をゆるさない。
ともかくも、太股の傷は深いはずだ。

見付の宿では、無頼者の万右衛門と件の老婆も盗賊一味として捕えられたというので、大さわぎになった。

五兵衛は本陣の奥の一間へ入り、事後の指揮をとっている。

見付宿の人足たちも駆り出され、日本左衛門の追跡にかかったし、捕えた盗賊一味の負傷の手当もせねばならぬ。

宿役人も、総動員された。

捕えた盗賊どもは、万右衛門と老婆を除き、赤池法印・菅田の平蔵など十名におよんだ。

こちらは同心の堀口十次郎が、日本左衛門の一刀を受けて肩口に傷を負ったほか、密偵の源六が、これも日本左衛門に顔を切り割られて死んだ。

死傷者は、これだけであった。

あとはみな、軽傷も受けてはいなかった。

さすがに、えらびぬかれた者たちだったといえよう。

もっとも、日本左衛門に五兵衛が立ち向わなかったら、さらに死傷者が出たにちがいない。

柴田平太郎も、かなり闘ったらしい。

彼は、捕物前の緊張に青ざめた顔とは打って変り、胸を張って忙しく立ちはたらいている。

「殿……」

小沼治作が、五兵衛のいる一間へ入って来た。

「おお、小沼。捕えた盗賊どもの見張りに、ぬかりはあるまいな」

「大丈夫にござります」

「御苦労であった。疲れたであろう。しばらくは、やすむがよい」

こういって小沼を見やった五兵衛が、何やら書きつけていた筆を止めて、

「どうした？」

不審げに、問いかけた。

このときの小沼治作は、何ともいえぬ顔つきになっていた。

それは、驚愕のあまりに言葉も出ぬといったような……それも徒のおどろきではなく、主人の五兵衛と共通に分ち合える意外な事実を、どのように説明したらよいのかと、おもい迷っているかのようであった。

五兵衛も、このときまで、日本左衛門の顔貌が佐和口忠蔵によく似ていたことを、まだ、小沼治作に語っていない。

語る間もないほどに、二人は多忙をきわめていたといってよい。

「殿……」

いいかけた小沼が、生唾をのみこんだ。

「いかがしたぞ？」

「は……」

「何ぞ、異変でも起ったのか？」

「いえ、実は……ただいま、この本陣裏手にて、召し捕りましたる賊どもの人体を、つぶさ

に見てまいりましたが……」

「ふむ……?」

「万右衛門宅にて捕えましたる老婆でございますが……」

「その老婆が、何といたした?」

「向うは、私めに気づかぬ様子でございましたが、まさに……」

「まさに……?」

「だれと、おもわれまするか?」

「わからぬな」

十五

小沼治作は、自分の驚愕を、どのような言葉で表現したらよいものかと、戸惑っていたようだが、いざとなると、きわめて簡単な言葉でよかったのだ。

「お玉でございます」

この一語が五兵衛にあたえた衝撃は、先刻、日本左衛門の顔を見たときのそれよりも大きかったのではあるまいか。

「お玉……」

「はい」

「まことか?」

「まぎれもございませぬ」

「ふうむ……」

あれはたしか、五兵衛が初めて本所見廻り方を拝命した年だから、正徳五年（一七一五年）の初夏のころではなかったか……。

当時、二十六歳の徳山五兵衛が編笠に面（おもて）を隠し、小沼治作を連れて市中の見廻りに出た折、両国橋の西詰で、佐和口忠蔵と共に歩んでいるお玉を見かけたことがある。

すぐに五兵衛は、小沼に二人の尾行を命じたわけだが、そのときのおどろきを、いまもって忘れぬ。

佐和口と何やら親しげに語り合いつつ、村松町の方へ行くお玉の、見ちがえるばかりに成熟した後姿を、いま、五兵衛は脳裡（のうり）に想い起した。

お玉は、たしか、五兵衛より二つ三つの年下であるから、いまは五十四、五歳になっているはずだ。

「いかがなされます?」

「う……」

「これへ、連れてまいりましょうや?」

「お玉を……」

「はい」

「ま、待て。その前に、そのほうに申すことがある」

五兵衛が、日本左衛門の顔貌について語るや、

「えっ……」

小沼の白髪が、昂奮（こうふん）にふるえはじめた。

「すりゃ、まことでございますか？」

「まことじゃ」

「こ、これは、何としたことで……」

「おどろいたか？」

「おどろかずにはおられませぬ」

「何と、おもう？」

「は……これは、やはり、殿のお考えのとおりかと存じまする。まぎれもなく、佐和口忠蔵の子でございましょう」

「うむ。それで、今度は、お玉がことじゃ」

「は……？」

「日本左衛門は、佐和口とお玉との間に生まれたのではあるまいか……」

「あっ……」というように、小沼治作が口を開けた。

「いま、ふと、そうおもうたが……」

「ま、まさに……」

「小沼も、さようにおもうか？」

「は、はい」

それから徳山五兵衛は、かなり長い間を沈思していたが、

「やはり、わしは会うまい。会わぬがよいわ」

「心得ました」

「それで、な……」

「はい？」

「お玉のみは、別に押し込めておくがよい。取り調べもいたすなと、さように磯野源右衛門へ申しておいてくれい。なれど、このことは口外いたすなよ」

「かしこまりました」

あわただしく、小沼は行った。

やがて、夜が明けた。

くわしい取り調べは、盗賊どもを江戸へ護送してからおこなわれる。

だが、捕えた者すべてというわけにはまいらぬ。

そこで、この日は五兵衛が盗賊どもを一人ずつ取り調べ、

（これぞ……）

と、おもう者のみを、江戸へ護送することにした。

すなわち、見付の万右衛門・赤池法印・菅田の平蔵・白輪の伝右衛門の四名である。

残る七名は駿府へ送り、ここに監禁をしておき、公儀の裁決を待ち、しかるべく処刑され

ることになろう。

　この日も終日、日本左衛門の探索がおこなわれたが、ついに見出すことはできなかった。

　翌日。五兵衛は先ず、駿府へ送る七名の盗賊を唐丸籠へ押し込め、出発せしめた。このときも見付・袋井の両宿から人足があつめられ、磯野与力が同心六名を従え、護送の指揮に当った。

　駿府へ向う途中、掛川へ立ち寄り、捕えておいた古手呉服屋の孫市ほか四名をも引き出し、これも駿府へ送ることになっている。

　駿府には幕府の城代がいて、牢獄もあるし、万事にぬかりはない。

　護送の一行が出発するに先立ち、徳山五兵衛は与力・岩瀬半兵衛を駿府へ差し向け、護送の人数その他の手配について、協力を依頼している。

　岩瀬は、馬を駆って駿府へ向った。

　見付宿は、本陣を中心に厳重な警戒がおこなわれた。一味の盗賊が何処かに隠れていて、捕えられた仲間を奪い返しにあらわれることもないとはいえぬからだ。

　万右衛門宅にいた老婆は、奥庭の土蔵へ押し込められている。

「そっと、顔をおあらためなさいましては……」

と、小沼治作がすすめたけれども、五兵衛は、

「いや、そのほうの目に狂いはないはずじゃ。見ずともよい。かくなってみれば何事も、それ、辻褄が合うようにおもえる」

「なれど、いまもって佐和口やお玉の仕業が尾を引いておりましょうとは……」

「二人が生んだ子は、尾張家の御七里をつとめていたとか申す浜島友右衛門とやらが、密かにもらい受け、我子として育てたのであろうか……そのように、おもわれてならぬ」

「さすれば、いまもって尾張家は天下を騒がすたくらみを……?」

「いや、そうではない。いまの尾張家は、ひたすら将軍家と公儀に恭順いたしておる。これは、公儀もよくわきまえていることじゃ」

「では、何をもって盗賊などに?」

「いや、なればこそ尾張家は、むかし、上様を害せんとして密かに立ちまわりし者どもを或いは追い放ち、或いは捕えて処罰をあたえたりしたのであろう。おそらくは、かの浜島友右衛門なども追い放たれたか、または捕えられたか……したがって、友右衛門があずかっていた浜島庄兵衛も、いまは世に容れられず、つまるところは日本左衛門などと大仰な名乗りをあげ、盗賊の首魁となってしもうたのではあるまいか……」

「日本左衛門は、実の父親が佐和口忠蔵であることを知っておりましょうか?」

「知っていよう」

　五兵衛のこたえに、ためらいはなかった。

「見せたかったぞ、小沼……」

　ようやく、五兵衛が笑顔を見せて、

「わしに立ち向って来たときの日本左衛門を、な」

「さほどに?」
「強い。やはり、佐和口の血を引いているのであろう」
五日後になって……。
四名の賊を江戸へ護送する徳山五兵衛一行は、見付の本陣を出発し、東海道を下って行った。
お玉については、見付・袋井両本陣の主へ、
「かの老婆は、盗賊どもと、さして関わり合いがないと判明いたしたゆえ、われらが此処を発して三日後に追い放つがよい」
徳山五兵衛は、そのようにいいわたし、
「何やら、哀れにもおもえる。これをわたしてやれ」
金包みを、田代八郎左衛門へ委ねた。
こうして、日本左衛門一味の捕物は終った。
のちに、捕えた盗賊どもの自白により、駿府に潜伏していた一味の者が四、五名ほど捕えられたそうな。
だが、日本左衛門の行方だけは、どうしてもわからなかった。
ともかくも、一味の犯行はぴたりと熄んだ。
日本左衛門については、幕府が全国に人相書をまわし、手配をおこなっている。
「今度、何処かで悪事をはたらけば一も二もなく足がつき、捕えられてしまうであろうよ」

と、五兵衛は小沼にいった。
それはさておき、小田原藩へ預けておいた寅吉爺と越後浪人・佐藤忠右衛門はどうしたろう。
この二人は、小田原から江戸へ護送された様子はない。
さりとて、まだ、小田原藩の牢獄に押し込められているのでもなかった。

評判

一

徳山五兵衛は、日本左衛門一味の盗賊どもを江戸へ護送する途次、小田原藩の牢獄へあずけておいた寅吉爺と佐藤浪人を引き取り、これを密かに釈放してしまった。
与力・磯野源右衛門と小沼治作が、護送の一行が江戸へ去るのを見送ったのち、小田原の本陣へ残り、寅吉と佐藤浪人の始末をおこなった。
むろん、これを表沙汰にするわけにはまいらぬ。
小田原藩へは、
「かの両名には罪なきことが判明いたしたので、解き放ち申す」

と、これは徳山五兵衛秀栄の名をもって申し入れ、二人の身柄を引き取ったのである。
磯野と小沼は、二人を酒匂川の茶店まで連行し、ここで釈放した。
寅吉も佐藤忠右衛門も、
（ま、まさかに……？）
夢を見ているような顔つきになっている。
とても、信じられなかったらしい。
磯野源右衛門は、
「こたびの事を、よくよくおもいきわめ、これより先は、世のために、いささかなりともはたらいてみるつもりになるがよい」
と、いった。
寅吉は、佐藤浪人と茶店の前に取り残されるまで、
（この場で、首でも打ち落されるのではないか……？）
そうおもっていたらしい。
小沼治作と共に、護送の一行へ追い付くため、足を速めながら磯野源右衛門が、
「両人とも、狐に化かされたような顔つきであった」
「さよう」
「のう、小沼殿」
「はい？」

「このことを、何とおもわれるな？」
「寅吉と浪人を解き放ったことでござるか？」
「いかにも。あの両人は日本左衛門一味に関わる者どもにちがいない。それを、解き放つというのは……」
徳山五兵衛の胸の内が、深い事情を知らぬ磯野源右衛門には、どうしてもわからぬ。
「小沼殿は、何ぞ、存じよりのことでもござるのか？」
小沼治作が五兵衛の股肱の者であることを、火附盗賊改方の与力・同心は、いずれもわきまえている。
それゆえ一同は、小沼の身分は低くとも、一応の敬意をはらっているのだ。
「いや、それがしとて何も存じませぬ」
小沼は、眉毛一筋うごかさずにこたえる。
「ははあ……さようか……」
「なれど、殿には殿に、深い御存念があってのことでありましょう。これが町奉行所などとはちがい、盗賊改方の御頭としての、臨機応変のなされ方なのではござるまいか」
「さ、その臨機応変が、ようわからぬのだが……」
「人の世の事は、わからぬことばかりでありますな」
「ふむ……それは、ま、そのような……」
磯野与力は、ついに、

（御頭のなされたことだ。よも、間ちがいはあるまい）

そのように、おもいこむことにきめたらしい。

日本左衛門一味の取り調べと処刑が、すべて終ったのは、この年の十二月下旬のことであった。

徳山五兵衛は、老中・堀田相模守へ委細を報告し、

「首魁の日本左衛門を取り逃しましたること、申しわけの仕様もございませぬ」

と、詫びた。

しかし、大御所・徳川吉宗は、堀田老中から事情を聞き取り、

「ようも仕てのけたものよ。さすがに徳山じゃ」

至極、満足の様子であったそうな。

かくて、この年も暮れ、延享四年（一七四七年）の年が明けた。

その正月七日。

何と、日本左衛門こと浜島庄兵衛が、京都の町奉行所へ自首して出たものである。

京都町奉行は永井丹波守であったが、その役宅へ、日本左衛門は町駕籠を乗りつけたらしい。

黒紋付に麻の裃をつけ、立派な大小を腰に帯し、堂々たる風采であったが、すっかり痩せ衰え、杖をつきながら、右の脚を引き擦っていたそうな。

奉行所には、日本左衛門の人相書も廻っていたし、京都市中の探索もおろそかにしてはい

なかったのだが、それだけに意表をつかれ、あたふたと立ちさわぐ与力や同心たちへ、

「かく、わざわざと名乗り出たるからには、逃げ隠れをいたすわけもござらぬ。おこころしずかになされ」

日本左衛門は、さも愉快げにいいはなった。

ともかくも縄を打ち、日本左衛門を白州へ引き出すと、

「何ぞ、腰をかける物を下さらぬか。それがし、遠州の見付宿にて、御役人の頭と見ゆるお人に右の太股を斬り払われ、その傷が、すっかり拗れてしまい、歩むことも坐ることもかないませぬ」

と、いい出た。

調べて見ると、なるほど右の太股が化膿し、そのあたりが、まるで、

「毬のごとくに……」

腫れあがっているではないか。

見付宿の捕物陣を単身で切り抜け、諸方を逃げ隠れしていた日本左衛門は、全国手配の犯罪者として医者の手にかかるわけにもまいらず、自分の手で膿を除ったり薬を塗ったりしていたらしい。

町奉行・永井丹波守は、

「腰をかけさせるがよい」

許可をあたえてから、吟味を開始した。

日本左衛門は、先ず伊勢の古市に潜み、それから、何と、長門の国（山口県）の下関まで、
「落ちのびました」
と、いったそうだが、果して本当であろうか。
この間に、伊勢の古市に住んでいた中村左膳という者が捕えられた。
これは、尾張の浪人であるが、日本左衛門一味ではない。
別の事件で捕えられたのだ。
古市の遊女を斬り殺したらしい。
この中村左膳と日本左衛門は、ずっと以前からの知り合いであったので、
「古市の中村宅へ潜みおりましてござる。ところが、慣れぬ他国の下関にいても落ちつきませず、ふたたび伊勢の古市へ戻ってまいりましたが、中村左膳が御縄にかかってしまい、匿ってくれる者とてなく……」
と、いうわけであった。
ともかくも、くわしいことは何も語らぬ。
長門の下関の何処にいたのかと尋かれても、
「さて、忘れてしもうてござる」
悪びれもせずに、こたえるのだ。
伊勢の古市にも居られず、それから京都へのぼり、この日まで何処かに潜伏していたのだ

が、
「その場所は？」
との訊問に対して、
「橋の下、寺の境内、あるいは諸方の木立をえらび、潜みおりました」
「いずこの橋の下じゃ？」
「さて……京の町は不案内にて、ようわかりませぬ」
野宿をしていた者が、どうして真新しい黒紋付や麻裃を身につけることができよう。
行く先々で、日本左衛門を匿った者がいるにちがいない。
しかし、彼らは、おそらく一味の盗賊ではなかったものと看てよい。
一味の者への手配もおこなわれることゆえ、その先々へ日本左衛門が立ちまわるはずはないのだ。
自首したとき、懐中に十両の金を残していたというから、日本左衛門の、これまでの逃亡をたすけたのは金のちからといってよいのではないか。その金も尽きかけ、このままでは傷が悪化し、ついには命取りになることを悟り、
（どうせ死ぬるなら……）
こちらから名乗り出て、日本左衛門らしい悪の最後を遂げようと、決意をかためたものとおもわれる。
永井丹波守は、

（こやつ、いかに痛めつけようとも、この上の事は白状をいたすまい）

と、看て取った。

最後に、日本左衛門は、しみじみとした口調で、こういったそうな。

「それがしは天下未曾有（みぞう）の大盗（だいとう）とあって諸国へ隈（くま）なく御手配にて、かくなっては、もはや天網と申すものと存じました。わが腹を掻（か）っ切ろうかとも考えましたなれど、醜き死体を他人に見出さるるよりは、みずから天網にかかり、恢々疎（かいかいそ）にして漏らさぬとの金言を真（まこと）のものといたしたく、かくは出頭つかまつってござる。

それに……それにまた、見付にて斬り払われたる太股の傷が、かほどに悪くなろうとはおもいませなんだ。盗賊と申すものは、御役人より何より、おのれの手傷・病に心弱きものでございます」

二

日本左衛門は江戸へ護送され、さらに吟味を受けたが、京都町奉行所での吟味と同様の結果となった。

そこで、

「いたしかたなし」

ということになり、延享四年三月十一日に、獄門を申しわたされた。

当日、江戸市中を引きまわしの上で、処刑をされるわけだが、何故か、火焙（ひあぶ）りにも磔（はりつけ）にも

ならず、引きまわしの後、ふたたび伝馬町（てんま）の牢内へもどされ、其処（そこ）で首を打たれることになった。

処刑の当日、引きまわしの馬へ乗せられたとき、上体をきびしく縛られた日本左衛門がつきそっていた役人に、

「見付宿にて、捕物の采配をお振りなされた御方の御名を、冥土（めいど）のみやげに聞かせていただきとうござる」

「火附盗賊改方、徳山五兵衛様じゃ」

「とくの、やま……」

「うむ」

すると日本左衛門こと浜島庄兵衛は、

「はて……?」

何やら、しきりにくびをかしげているので、役人が、

「何とした?」

「いや……その御名を、ずっと以前に、何処かで、耳にいたしたような……」

「何を申す。そのほうどもの関わり知らぬ御方じゃ」

「はい……はい」

処刑の日の日本左衛門は、いかにも神妙であった。

太股の傷も、医薬の手当によって、どうにか軽快となり、顔色もよく、いくらかは躰（からだ）も肥

えたようである。
「あれが、日本左衛門だ」
「ざまを見ろ」
「あんな悪党は、めったにいないということだ」
「押し込み先で、女を手ごめにするなぞは、まったくもって、犬畜生にも劣るやつだのう」
「それ、石を投げてやれ」
「投げろ、投げろ!!」
　江戸市中を引きまわされる日本左衛門へ、群集が石を投げつける。
　この大盗の罪状を書きしるした紙幟と捨札を先頭にかかげ、槍・捕物道具を手にした四十人ほどの警固がついているけれども、石を投げる群集には知らぬふりをしている。
　縞の着物に白の三尺をしめ、縄つきのまま馬上にいる日本左衛門の顔が、血だらけになったという。
　さて……。
　徳山五兵衛秀栄の名は、日本左衛門の処刑と同時に、江戸市中へひろまった。
　見付宿の捕物のあざやかな手ぎわもさることながら、みずから強力の日本左衛門とわたり合い、
「生け捕りにしようというので、何と、わざわざ、日本左衛門の太股を斬ったというのだから大したものだ」

「その場では逃げられたなれど、結局、徳山殿より受けた傷のために自首をして出たと申すのだから、生け捕りにいたしたも同然じゃ」
「いずれにせよ、見事なはたらきではないか」
「年少のころには、かの堀内源左衛門より薫陶を受け、赤穂浪士の堀部安兵衛とも同門であったそうな」
「ほう……さようでござるか。なるほど、なるほど」
　などと、幕臣の間の評判も非常なものとなったようだ。
　大御所・徳川吉宗からは、別に何の沙汰もなかったが、老中・堀田相模守を通じて、
「遠路を苦労であった」
　との言葉が、五兵衛の耳へもたらされた。
　吉宗は、この年、六十四歳となっていたし、やや健康を害しているらしい。
　徳山五兵衛の火附盗賊改方就任は、日本左衛門逮捕のためであったに相違ないが、あまりに評判が高くなった為か、幕府は五兵衛を解任しなかった。
　このため、五兵衛は、
「まだ、この御役目をつとめねばならぬのか……」
　いささか、うんざりした様子であったが、江戸市中での盗賊追捕をやりはじめてみると、しだいに気が乗ってきて、たてつづけにそれと知られた盗賊の首領を二人も捕えた。
　こうなると、いよいよ解任の望みはなくなる。

「六十の声を聞こうというのに、このような、いそがしいおもいをせねばならぬとは……」

五兵衛は毎日のごとく、小沼治作へ零した。零しぬいた。

その揚句が、

「むかしは、よかったのう」

である。

それならば、何も一所懸命に御役目をつとめずとも、怠けていればよさそうなものだが、兇悪な賊どもが一人でも消え絶えれば、それだけ江戸市民の難儀が減るということなのだから、やり甲斐がないわけでもない。

そのうちに五兵衛は、本所の邸内の奥庭の一隅に、何とおもったか稲荷の祠をつくった。

これが後年、世の人に、

「徳ノ山稲荷」

と、よばれるようになる。

小沼治作が、

「御奇特なことでござりますな」

こういうと、五兵衛は苦笑を浮かべて、

「いや、何……この稲荷は、日本左衛門を祀ったつもりでおるのじゃ」

「ほ。さようでござりましたか……」

「いや、その、何……彼奴め、ちょと面白い男であったからのう」

「いかさま」

「なれど、このことは口外いたすなよ」

「心得ておりまする」

そのころの徳山五兵衛が、小沼治作へ、つぎのようなことを洩らしている。

「ちかごろ、市中見廻りに出ていると、一目で悪者どもの顔がわかるようになった。なれど、それをいちいち捕えてしまっては、これはもう数限りのないことじゃ。江戸の御牢内には入りきれまい。ま、一口に盗賊と申しても、困窮の揚句に切羽つまって盗みをはたらく輩をすべて御縄にかけていては、いまの時世から申して、それこそ捕えきれまい。

のう、小沼。善のみの人間なぞ、この世に在るはずもない。わしとて同様じゃ。悪と善が支え合い、ともかくも釣り合いがとれておれば、先ずよしとせねばならぬが今の世の中じゃ。なれど、これは、そのほうのみに申すことよ。他人へ洩らしてはなるまいぞ」

三

火附盗賊改方の長官として、徳山五兵衛秀栄の名は、江戸府内において、

「だれ知らぬものはない」

ことになった。

盗賊共も恐れをなしたかして、一時は、江戸府内に盗賊の跳梁が絶えた。

そのためもあったろう。

寛延二年（一七四九年）の秋になって、五兵衛は盗賊改方を解任せられた。
後任は、別になかった。
（やれやれ……）
五兵衛は、ちょうど六十歳になった。
小沼治作は、何と七十歳である。
しかし、小沼は、いよいよ元気で、
「このようなことを申しあげては、如何かと存じますが……ちかごろ、私は、このまま、もう死ぬることはないのではないかと、そのような気がいたすこともござります」
などと、いい出したりして、五兵衛を呆れさせた。
用人の柴田勝四郎も七十三歳となって、これまた、伜の平太郎へ跡を継がせる様子もない。
さすがに五兵衛は、三ヶ年にわたる激しい役目の疲れが、
「一度に出た……」
ようなおもいで、この年が暮れるまでは、ぼんやりと日をすごすことが多かった。
何とはなしに、空虚な気分であった。
心身ともに油断のならぬ御役目であったし、実のところ、
（このような日々を送っていたなら、間もなく、わしはあの世へ旅立つことになってしまうであろう）
死ぬるのは仕方もないが、その前に、五兵衛はいま一度、秘戯図の制作を、

（たのしんでみたい）
そうおもった。
お百合との愉楽の日々を一巻の絵巻物にしてはあったが、いま、観直してみると、やはり、物足らぬところも多く、
（ぜひとも、いま一度、描き直してみたい）
これは、かねてからの存念なのである。
それならば、御役目が解任されたのだから、すぐにも絵筆を執ればよいようなものだが、心身の疲れはさておき、このときの五兵衛には火附盗賊改方という役目から離れたさびしさが、たしかにあった。
後年になって五兵衛は、
「いまにしておもうと、わしが相つとめた御役目のうち、盗賊改方が、もっとも、わしの性に合うていたようじゃ」
と、妻の勢以に語っている。
家柄や身分による体裁や規則に縛られることなく、しかも単独の微行も自由であった。
編笠に面体を隠した浪人姿の変装で自由自在に江戸市中の見廻りができることだけでも、徳山五兵衛にとっては、
「掛け替えのない御役目……」
であったに相違ない。

なればこそ……。

二年後の寛延四年正月に、ふたたび、

「火附盗賊改方を、おおせつけらる」

と、幕府より再就任を命ぜられた折に、

「またしても面倒な……」

そういいながらも、家族や家来たちへ見せた顔は、まさに笑みくずれていたという。

ときに、徳山五兵衛六十二歳。

この年は、十月に改元のことあって宝暦元年となるわけだが、六月には大御所の徳川吉宗が六十八歳で死去し、時代は、また新しい局面を迎えることになる。

それはさておいて……。

幕府が、またも徳山五兵衛を必要としたのは、諸方盗賊どもの跳梁がはじまり、ことに相州から甲州にかけて、

「尾張九右衛門」

と名乗る盗賊が、あらわれたことにもよる。

「尾張」と名乗るからには、

「尾張藩に、何ぞ関わり合いがあるのではないか?」

または、

「前の日本左衛門一味の者が、まだ残っていたのではないか?」

その含みもあって、

「これは、徳山五兵衛を相州までさしむけるが、もっともよい」

ということになったらしい。

五兵衛は、五年前と同様、与力・同心をひきいて江戸を出発した。

このときも、七十二歳の小沼治作が五兵衛につきそって行った。

五兵衛も、五年前の捕物の網にかからなかった日本左衛門一味の者ではあるまいかと見込みをつけていたが、どうも、そうではなかったようだ。

このとき、寅吉爺が酒匂川の茶店に生きていて、盗賊改方の探索に、

「一役買った……」

などといわれている。

してみれば、前に寅吉を釈放しておいたことが、いまこそ実ったことにもなる。

例によって、五兵衛の探索は水際立っており、三月十八日に、小田原城下の仏具屋の主人になりすまし、何くわぬ顔をしていた尾張九右衛門と、その配下を合せて七名ほど召し捕った。

このときは、小田原藩の協力を得て、九右衛門以下を峻烈な拷問にかけて自白させ、近隣の諸方に潜む一味の盗賊を、さらに八名、御縄にかけることができた。

尾張九右衛門は、別に、日本左衛門一味でもなく、尾張藩との関係もない盗賊であったが、生国が尾張ゆえ、日本左衛門に、

「あやかりたい」

というので、押し込む先々で臆面もなく名乗りをあげ、犯行を重ねていたものである。

ところで、この年の秋になって、徳山五兵衛は、

「今日本左衛門只吉」

という残酷無比の兇賊を捕えている。

こやつは江戸市中で、たてつづけに盗みをはたらき、暴行殺戮をおこなった。

五兵衛の探索の網がせばめられたので、只吉は一味と共に江戸から逃走し、奥州の川俣へ潜伏しているところを、五兵衛が江戸から出張って行き、召し捕ったものだ。

この賊こそは、かつての日本左衛門の再来を意識しての犯行にちがいなかった。

それだけに、また、日本左衛門こと浜島庄兵衛が、盗賊どもの間では、この上もなく、

「巨い……」

存在であったことがわかる。

かくて、盗賊改方へ復帰したことにより、徳山五兵衛の名は、さらに評判をよぶことになった。

何といっても一年のうちに、尾張九右衛門・今日本左衛門の二兇賊を御縄にかけたのだから、五兵衛の手並は、たしかに称讃に価したといってよかろう。

五兵衛は宝暦三年（一七五三年）、六十四歳をもって盗賊改方を辞したが、この間に大小の差こそあれ、四十余人の盗賊どもを召し捕っている。

四

はなしを前へもどしたい。

寛延四年の春、徳山五兵衛が小田原で尾張九右衛門を捕え、現地において取り調べをおこなっているころ、大御所・徳川吉宗は久しぶりで、本所へ狩りにおもむいている。

「大御所、本所に御放鷹あり。西尾隠岐守忠尚陪遊して鴨を得たり」

と、幕府の記録にもある。

してみると、一時は健康を損ねていた吉宗が、元気を取りもどしたことになる。

しかしながら、死は着実に吉宗へせまっていた。

ともかくも吉宗は、あれほどに大好きな狩りを、死の直前にたのしむことを得た。

間もなく吉宗の病気が再発し、五兵衛が江戸へもどって間もなく、

「大御所の御病気は、非常に重い」

との声が、五兵衛の耳へも入ってくるようになった。

そして、ついに、六月十九日に至って吉宗は危篤に落ち入り、翌二十日の朝、六十八歳の生涯を終えた。

大御所の葬送は閏六月十日におこなわれている。

江戸城から、上野・東叡山の幽宮へ向う葬送の列に、名奉行とうたわれた大岡越前守忠相も加わっている。

このとき大岡越前守は町奉行から寺社奉行に転じていたが、ことさらに、吉宗の恩顧を受けた越前守は、みずからの病患が重く、顔面蒼白となりながらも威儀を正し、粛然として最後の御役目（葬送の御用掛り）をつとめた。

このとき七十五歳の大岡越前守は、結核症状が全身におよび、腹部からの出血もひどかったらしい。

徳川吉宗は独特の方法によって、多くの人材を登用した。

徳山五兵衛も、その一人といってよかろう。

だが、五兵衛の場合は特殊なものであって、他の例とは比較になるまい。

徳川吉宗と町奉行・大岡越前守との関係は、俗説・真説ともに、

「切っても切れぬ……」

ものであったといってよい。

越前守は、千九百二十石の旗本から、ついに一万石の大身となった。

九千九百九十石までが旗本で、一万石からは大名の格となる。幕臣としては最高の名誉をあたえられたわけだ。

また、越前守は吉宗の抜擢にこたえ、

その片腕ともなって職務に精励したのである。

現代の東京都が、日本政府の中枢であるように、将軍と幕府の本拠である江戸という大都市は、

「将軍そのもの。幕府そのもの」

と、いってよい。

町奉行大岡越前守は、その江戸の〔都知事〕と〔警視総監〕を合せて、さらに大きくしたような役目に任じていたことになる。

将軍・吉宗の政治は、越前守の補佐を得て、江戸という都市に展開された。

諸国を治める大名たちにとって、江戸における施政は、そのまま彼らの政治の骨格となる。

国政と都政が分離している現代の日本とは、そこがちがう。

その善悪はさておき、なればこそ将軍・吉宗と大岡越前守の関係の深さが看て取れようというものだ。

越前守は、十月に至って寺社奉行を辞し、十二月十九日に病歿している。

晩年の大岡越前守は、町奉行から奏者番へ転じ、寺社奉行を兼務した。

この奏者番という役職は、もっぱら武家に関する典儀をつかさどるわけだが、越前守の場合は、大御所の吉宗と将軍・家重との間に立ち、種々の重要な案件や意見の疎通をはかり、老中・若年寄への進言をもおこなったというから、名実ともに、

「幕府の重臣」

と、なっていたのであろう。

吉宗の、大岡越前守への信頼は絶大なものがあったらしい。

さて……。

吉宗葬送の当日。徳山五兵衛は盗賊改方の与力・同心をひきい、葬列がすすむ前後を、密(ひそ)かに警備することを命じられている。

これは他の先手組(さきてぐみ)とも協力してのことであったが、吉宗の葬送が終ってのち、本所の屋敷へもどって来た五兵衛秀栄は、小沼治作に、

「これにて、われらの世は終ったようなものじゃ」

しみじみと、そういった。

(わしが……このわしが、この手で、あの大御所様の御頭(おつむり)を打ち叩いたことがあろうとは、世の人の夢にも想うまい)

小沼治作にも、このことだけは洩らしていない。

吉宗にしても、あのとき、五兵衛の姿を見てはいるが、布で隠した面体は知らぬ。

一時は、

(もしや、御存知では……?)

と、おもうことがないでもなかった。

初めて〔本所見廻り方〕をつとめていたころのことだ。

けれども、いまにしておもうと、

(やはり、お気づきではなかったようじゃ)

だが、もう一人、知っている者がいる。

ほかならぬ、お玉であった。

見付の本陣から、釈放してやったお玉だが、その消息は不明である。

(生きているか、死んでいるか……いや、生きてはおるまいな)

どうも、そのような気がしてならぬ。

尾張九右衛門を捕えに小田原へおもむいた折、酒匂川の茶店の寅吉の許(もと)にも、お玉はいなかったようだ。

寅吉爺のところへは、顔を見知っている与力の磯野源右衛門をさしむけ、五兵衛は出向いていない。

尾張九右衛門を捕えるについて、寅吉からもたらされた情報は大きかった。

地元の小田原のことだけに、長年にわたる体験が物をいって、寅吉爺の探りの目と耳は、五兵衛を納得させるに充分であった。

お玉の父親の曾我の喜平治も、盗賊の首領であったにちがいない。

喜平治・お玉の父娘(おやこ)について、寅吉へ尋ねてみたいと思わぬでもなかったが、

(尋ねたところで、あの老爺(おやじ)、決して口を割るまい)

それが、この前の日本左衛門一件のときにもわかっていたし、また一つには、

(尋ねたところで、どうにもなるまい)

さほどに強い執心がもてなかったのは、五兵衛も、やはり老いていたからにちがいない。

翌年の正月になって……。

五兵衛は、老中の堀田相模守から呼び出された。

（ようやくに、御役目から解き放たれるらしい）

と、直感し、これからは、こころゆくまで、お百合との思い出を最後の絵巻に描くことができると、このときばかりは五兵衛も、本心から解任をよろこぶ気になった。

何といっても六十三歳になってしまい、昨年の小田原や奥州・川俣への出張が躰にこたえている。

「小沼。これにて、ようやく肩の荷が下りそうじゃ」

「ようござりました」

小沼治作も、主人の解任をうたがわぬようだ。

五兵衛の活躍で、このところ、江戸市中も平穏であった。

五十八歳になった勢以も、

「これよりは、ゆるりとおすごしなされますよう」

と、いい出たほどである。

ところが、堀田老中の許へ出頭してみると、盗賊改方解任のことではなかった。

五兵衛は落胆をしたが、つぎの瞬間には、たちまち落胆が感動に変ったのだ。

それは、おもいもかけぬことであった。

五

老中・堀田相模守が、徳山五兵衛へ、

「つつしんで、拝領いたすように」

こういって、手渡したものは一振の脇差であった。

大御所・徳川吉宗が、

「われ亡き後に、内々にて徳山秀栄へ……」

形見として下げわたされたのである。

（大御所様は、わしを……わしのことを、お忘れではなかった……）

年齢を老った所為もあってか、五兵衛は帰邸してから、感涙に噎んだ。

「内々に……」

というところに、また特別の親密さがこめられているようにおもわれてならぬ。

その脇差は、室町の時代に、波平宣安が鍛えた一尺六寸一分の逸品である。

鞘は黒漆塗で、柄巻は藍革の菱巻。鐔は小さ目の烏胴という古風なもので、おそらくは元亀・天正の、戦国の世の拵でもあろうか。

五兵衛は帰邸した折に、

「やはり、御解任にて……？」

問いかける小沼治作や、柴田勝四郎へ、

「何の。そのようなことがあろうか」

きっぱりとこたえて、奥へ入って行ったものだから、

「はて……？」

小沼と柴田用人は、不審げに顔を見合せたものだ。

五兵衛が、宣安の脇差を前に泣き噎んだのは、夜に入って、かの〔書見の間〕で独りきりになってからである。

大御所の吉宗が、一人の幕臣へ形見分けをしたのだから、これが公式の事であれば、徳山五兵衛の栄誉は、

「非常なもの……」

といってよい。

だが、吉宗は、あくまでも、

「内々の事……」

として、形見の脇差が五兵衛の手へ届くように、配慮をしておいたのだ。

「五兵衛よ。躬と、そのほうとの間には余人に申せぬ秘密の出来事が、いろいろとあったのう」

その、吉宗の声が、冥府から聞こえてくるようなおもいがするではないか。

五兵衛は、宣安の脇差について、家族や家来たちにも洩らさなかったが、長男の次郎右衛門頼屋へのみ打ち明けている。

六十を超えた自分の老齢をおもってのことだ。

「この脇差について、口外してはならぬぞ。跡継ぎの子のみへ申しつたえておくがよい」

と、五兵衛は頼屋へ念を入れ、

「大御所様が、わざわざ、かように父のことを御心にかけらるるは、父も、それだけのはたらきをしているからじゃ。これも口外なすべき事とおもうな。なれど、胸の底にたたみ込んでおくがよい」

五兵衛にしては、めずらしく、やや誇らしげに、

「父亡き後も、父の名を汚すまい。よいか」

と、いった。

跡継ぎの長男だけには、せめて、これほどのことは言っておきたかったのであろう。

つまり、それほど、吉宗が死ぬる間際まで、自分のことを忘れていなかったことに五兵衛は昂奮をし、その昂奮が翌年になっても、まだ褪めきってはいなかったのだ。

吉宗の葬送が終ると、五兵衛は、ふたたび、火附盗賊改方の役職に精励しはじめた。

「殿様は、ちかごろ若やいでまいられたような……」

七十六歳の老用人・柴田勝四郎が、倅の平太郎へ洩らしたように、五兵衛の活躍ぶりは、相次ぐ盗賊一味の逮捕によってあきらかである。

柴田勝四郎は、依然矍鑠として用人をつとめていたが、ついに、この年、宝暦二年の十一月五日に急死をとげた。

その日の五日ほど前から、徳山五兵衛は風邪の気味で、微行の市中見廻りもせず、寝所へ引きこもっていた。

十年ほど前までの五兵衛ならば、

「これしきのことに……」

寝込んだり、医薬のたすけをもとめたりはしなかったが、ちかごろは、いささかでも体調のくずれを知ると、すぐさま、主治医の遊佐良元の診察を請うようにしている。

遊佐良元は、五兵衛が幼少のころから徳山家の主治医であった遊佐良仙の養子で、養父亡きのちは、養父の跡を継ぎ、幕府の表御番医師をつとめてい、この年、四十四歳になる。

遊佐良元の診察と投薬により、五兵衛は、たちまちに快方に向った。

「かように、躰が衰えてしもうては、もはや、わが行手も知れてある」

などと、つぶやく五兵衛へ、良元はこういった。

「あと、二十年がほどは、嫌でも世間の風に吹かれねばなりますまい」

「わしが……?」

「はい」

「まさかに……」

「いや、冗談を申しているのではありませぬ」

「二十年ならば、八十を超えてしまう……」

「さようでしたかな」

「まさかに……」

「八十を超えて、すこやかなる人は、さしてめずらしゅうはありませぬ」

「まさか……ふ、ふふ……まさか……」

手を振って苦笑にまぎらわせつつも、五兵衛は、

(うれしくない、こともない……)

のである。

たがいに先代からの親密の間柄であり、養父の良仙同様に、こころにもない世辞をいうような遊佐良元ではない。

それをわきまえているだけに、良元から、

「八十までも生きる……」

といわれて、五兵衛は、

(あと、二十年も生きられるのか……)

何とはなしに、こころが勢んでくるのを、どうしようもなかった。

そして、その自分の勢みを、

(われながら、あさましい……)

とも、おもった。

これより先、たとえ二十年を生きていたとて、

(それが、何であろう。二十年などという月日は、あっという間に走り寄ってきてしまうのに、そのような、果敢ない月日をたより、尚も生きたいと願うておるのか、わしは……)

このことであった。

老いてからの二十年は、若いころの二年にも相当せぬ。
世間も、人のこころもわからぬ少年のころや、世の中の風波が身にせまってきて、わけもわからぬのに精一杯、これに逆らい、無我夢中ですごした明け暮れの重み、その充実は、いまにして想うと、
（いつ、死んだとて悔いはない……）
としながらも、主治医に長命を約束されれば、玩具（がんぐ）や菓子をあたえられた子供のようによろこぶ自分が、
（なさけない。あさましいやつ……）
に、おもわれてならぬ。
おもうてもみよ。
四十をこえてより今日までの二十年という歳月が、どのような速度で五兵衛の前を走り去って行ったかを、である。
（一時も早く大人になりたい。一日も早く、新しい年がやって来てほしい）
そう願っていた少年のころの自分が、
（おもってもみなかった……）
ほどの速さで、一日一日が、一年一年が走り去って行くのだ。
（このように、果敢なくなった歳月などに、たよっていてはならぬ。そして、そろそろ、わしはあの世への旅立ちの仕度にかからねばならぬ）
切実に思念してみても、病みかけて回復した肉体が、これを承知せぬ。
その朝。
床払い（とこばらい）をした徳山五兵衛は、上機嫌であった。

六

用人・柴田勝四郎が、居間にいる五兵衛へ挨拶にあらわれたのは、五ツ半（午前九時）ごろであったろうか。
五兵衛は、奥で朝餉（あさげ）の白粥（しらかゆ）を、
「うまい、うまい」
と、三椀（みわん）も食べ、居間へ入ったばかりである。
「御本復、何よりでござりました。おめでとう存じまする」
「何、寝るほどのこともなかったのじゃ。なれど、むりをしてもならぬとおもうて……」
「はい、はい」
このとき、七十六歳の柴田勝四郎の声には何の異常も感じられなかった。
主人（あるじ）の床上げをよろこぶ老顔の血色もよい。
すでに霜月（陰暦の十一月）に入ってい、冷え冷えと晴れわたった冬の日々がつづいていたが、この朝は風も絶え、春が来たように暖かかったので、
「市中の見廻りへ出てみたいような……」

おもわず五兵衛が、つぶやくのへ、
「それはなりますまい」
「何故じゃ?」
「御病後ではござりませぬか」
「病気と申しても、取るにたらぬほどのものじゃ」
「いえ、いえ。さようではござりませぬ」
「そうかの……」
「御年齢のことを、お考えなされますよう」
老いてからの勝四郎は、亡き養父・柴田宗兵衛に似てきた。
いいにくいことを、はっきりというばかりではなく、その顔つきまでも宗兵衛に似てきたようだ。
五兵衛が苦笑して、遊佐良元の言葉をつたえ、
「あと、二十年ほども生きるそうな」
「いえ、いえ……」
勝四郎は、しずかにかぶりを振って、
「御油断は相なりますまい」
と、いうではないか。
「ほう……さようか……」

「老いたる男の躰は、大丈夫とおもうていても、何処かが損われておりまする」
「ふうむ……」
いささか、五兵衛は鼻白んだ。
「なれば、このたびも、殿が御無理をあそばさず、早ばやと御寝所へお引きこもりになられましたること、勝四郎なによりもうれしゅう存じました」
こういって、両手を突き、凝と主人を見あげた老用人の両眼に、隠しても隠しきれぬ真情があふれている。
「む……」
うなずいた五兵衛が、
「かたじけなくおもうぞ」
「おそれ入りまする」
床上げの上機嫌に、柴田勝四郎の言葉が水をかけたかのように感じられたのも一瞬のことで、
（ああ……わしは何故、勝四郎の言葉を素直に聞けなかったのか。これでは、まるで、無駄に年齢をとったようなものではないか……）
五兵衛は、恥じた。
（どうも、ちかごろのわしは、どうかいたしている……）
おのれの単純さに、呆れざるを得ないのである。

そこへ、侍女を従えた勢以が茶を点じ、これをささげてあらわれた。
五十八歳になった勢以の髪に白いものがまじり、そして躰が肥えてきはじめた。
五兵衛が勢以に、
「用人どのへも、茶を……」
と、いった。
めずらしいことではある。
「はい」
勢以が勝四郎を見やって、にっこりとした。
こうしたとき、いつもの柴田勝四郎ならば、
「いえ、これより御用もありますれば……」
などといって、すぐに居間から出て行くはずであった。
ところが、この朝にかぎって、
「かたじけなく……」
むしろ、よろこんで勢以へ頭を下げた。
これまた、めずらしいことといわねばなるまい。
勢以と侍女が、居間から出て行ったあとで、
「いかがでござります、久方ぶりにて絵筆をおとりあそばしては」
「そうじゃのう」

「裏庭の枇杷(びわ)の木が、花をつけております」
「お、さようか……」
「あれを、お描きあそばしては……?」
「そうじゃな」
裏庭の片隅の枇杷の木は、冬に入ると、白い花をかたまり咲かせる。
柴田勝四郎は、その花の写生をすすめたのだ。
「よし。では裏庭へまいってみようか……」
「いえ、まだ、それはなりますまい。うまく剪(き)り取らせてまいりましょう」
今度は五兵衛が、素直にうなずいて、
「では、そうしてもらおうかの」
「はい、はい」
うれしげに立ちかける勝四郎へ、
「あ、これ……」
「はい?」
「いま、茶がまいる」
「あ、さようでござりました」
そこへ、勢以と侍女がもどって来た。
勝四郎は、茶をいただき、

「では、これより枇杷の花を……」
「枇杷の花が、何ぞ？」
と、勢以。
「いえ、殿様がお描きあそばすので……」
「まあ。それは何よりのこと」
このとき、勢以と共に次の間まで入って来た侍女は引き下っている。
「では、これにて」
一礼した柴田勝四郎の姿が、次の間へ消えた。
そのとき、勢以が五兵衛に何か語りかけ、五兵衛もそれにこたえたはずなのだが、何を語り合ったのか、よくおぼえていない。
つぎの瞬間に起った出来事の衝撃で、忘れてしまったものらしい。
はじめに、五兵衛が気づいたのは、次の間から聞こえた、妙な唸(うな)り声のようなものであった。
柴田勝四郎は、すでに次の間から廊下へ出て行ってしまったものと、五兵衛も勢以も思っていただけに、
（はて……？）
いぶかしげに、二人は顔を見合せた。
そのとき、次の間で何かが打ち倒れる物音がした。

七

勢以よりも早く五兵衛が立って、次の間へ駈け入り、
「あっ……」
五兵衛にはめずらしく、驚愕(きょうがく)の叫びを発した。
柴田勝四郎が、畳の上へ、のめり込むように倒れ伏していたからである。
「勝四郎……」
呼びかけつつ、そこは、さすがに徳山五兵衛だ。
きわめてしずかに、勝四郎を仰向けにして見て、
「むう……」
微(かす)かに唸った。
五兵衛につづいて、次の間へあらわれた勢以が、
「すぐさま、遊佐良元先生を……」
いいさして、小走りに廊下へ出て行こうとするのへ、五兵衛が、
「待て」
「は……」
「むだじゃ」
「何と、おおせられまする……？」

「すでに、息絶えたわ」
「えっ……」
おどろいた勢以が、五兵衛の傍へもどって来て、仰臥している柴田勝四郎の顔に見入り、息をのんだ。
この場の異変には、まだ、屋敷内のだれもが気づいていない。
暖かい日ざしの行きわたった奥庭の何処かで、鶺鴒の澄み通った鳴き声がしている。
雀に似た、この小さな鳥は初冬のころになると、時折、徳山屋敷の奥庭の池のほとりへやって来るのだ。
五兵衛も勢以も、しばらくは勝四郎の死顔を見まもって身じろぎもせぬ。
この老用人は強く唇をかみしめ、両手で胸を押えて、一瞬の間に息絶えた。
「苦しんだのも、わずかのことよ」
ややあって、徳山五兵衛が呻くような声で、
「勝四郎は、心ノ臓が悪かったのであろうか？」
「いささかも、気づきませなんだ……」
と、申しわけなさそうに勢以がいった。
「いや、それは、わしもじゃ」
「それにいたしましても、まさかに、このような……」
「うらやましいことよ」

「何と、おおせられまする……？」
「わしも、このようにして、あの世へ旅立ちたいものじゃ」
五兵衛は、両の掌を柴田勝四郎の死顔へ当て、しずかに、ゆっくりと摩りはじめた。
その五兵衛の両眼から、熱いものがあふれ、勝四郎の灰色に変じた唇のあたりへ落ちた。
見る間に、柴田勝四郎の死相が変ってゆく。
いまは幽冥の彼方へ駈け去った魂魄と共に、死顔に残った一瞬の苦悶の痕も消え去ったのである。
「勢以……」
「はい」
「平太郎をよべ。余人には知らすでない。よいな」
「心得ました」
音もなく、勢以が出て行った。
その後で、五兵衛は柴田用人の亡骸を抱えあげ、自分の居間へ運び込んだ。
自分の座蒲団を二つに折り、これを枕がわりにして亡骸を仰臥させた。
三十歳近い勝四郎が、先代の用人・柴田宗兵衛の養子となって、この屋敷へあらわれたのは、つい五、六年前のような気がする。
だが、そのときより四十数年の歳月が経過していた。
「ごめん下されましょう」

廊下から次の間へ、柴田平太郎が入って来て、
「お召しにござりますか?」
「うむ」
勢以は、入って来なかった。
「平太郎。これへまいれ」
「は……」
居間へ入って来た平太郎が、仰臥している父を見て、
「あっ……」
というように、口を開けたが、声にはならぬ。
「急に、息絶えたわ。さ、こちらへまいるがよい」
平太郎は何ともいえぬ顔色となり、父の亡骸の傍へ来て、
「父上……父上……」
低く、呼びかけた。
息絶えたことがわかっていても、そうせずにはいられなかったのであろう。
さすがに平太郎は、泪を見せぬ。
「勝四郎が妻は、いかがいたしておるか?」
「母は縫い物を、いたしおりまする」
「さようか……」

「御居間を汚しまして、申しわけもござりませぬ」
「何を申すことか……」
哀しげな微笑を浮かべた徳山五兵衛が、
「勝四郎が妻……いや、そのほうの母へ、このことを知らせねばならぬ」
「は……」
「こころして知らせるがよい。わかっていような」
「はい」
柴田勝四郎の妻お初は六十二歳になり、老いて尚、まことに健康であった。
「では、知らせてまいれ」
「父の亡骸を、御長屋へ移しませぬと……」
「かまわぬ。長屋の仕度ができるまで、此処で寝かせてやるがよい」
「かたじけなく……」
両手をつかえ、主を見あげた柴田平太郎の両眼が、このときはじめて、じわりと潤みかかった。
「これより後は平太郎。そのほうが亡父にかわって徳山家の家宰となるのじゃ。たのむぞよ」
「お、おそれ入りましてござります」
「よし。行けい」

「はい」

落ちついた足取りで居間を出て行く平太郎を見送った五兵衛が、

「勝四郎……」

柴田勝四郎の死顔へ向って、こういった。

「平太郎も、どうやら一人前の男になったようじゃ」

屋敷内は、しずまり返っていた。

鷦鷯の鳴き声が、池のほとりを飛びまわっている。

敏捷で、一つ処に凝としていない鳥なのである。

勢以が、居間へ入って来た。

「いま、平太郎が母の耳へ知らせにもどった」

「はい」

「次郎右衛門を、これへ」

「そのように、申しおきましてございます」

「ほう……」

五兵衛は、さすがに勢以であるとおもった。

勢以は、夫の胸の内を早くも察知したらしい。

長男の次郎右衛門頼屋があらわれると、五兵衛は、

「柴田勝四郎は、亡父・宗兵衛ともども、徳山家の存続に一命をかけてはたらきくれたること、常々、申し聞かせておいたはずじゃ」

「はい」

次郎右衛門は、三十八歳になっている。

「なれば、勝四郎は、われらが家族も同様と申してよい」

「はい」

「勝四郎の喪葬の宰領をしてつかわすがよい」

「私めが……?」

「うむ。わしは、いま、こうして生きて在るが……さよう、勝四郎の後を追う日も遠くはあるまい。これよりは何事にも、おぬしが平太郎と共に立ちはたらかねばならぬ」

家督こそさせていないが、次郎右衛門頼屋は、もはや徳山家の主も同様なのだと、いいたかったのであろう。

五兵衛は、勝四郎の亡骸に合掌してから、

「次郎右衛門。では、たのむぞよ」

いい置いて居間を出るや、書見の間へ引きこもってしまった。

八

柴田勝四郎は、あきらかに心ノ臓の発作によって急死したのだが、その徴候は、ほとんどなかったといってよい。

もっとも、七十をこえてからの勝四郎が、

「ああ、今日は何とのう、疲れたわい」

などと、老妻のお初に洩らすことはあっても、それは、どこの老人にも見られることであり、そもそも勝四郎は生まれてこの方、病床に就いたことがなかったのだ。

あるいは、苦痛をおぼえても、勝四郎は自分ひとりの胸におさめていたのやも知れぬ。

いずれにせよ、お初や平太郎など、家族の目にも、勝四郎の日常は、

「矍鑠として……」

見えたのである。

柴田勝四郎の葬送が済み、間もなく宝暦二年の年も暮れた。

徳山五兵衛は市中の見廻りに出ることもなく、ほとんど邸内に引きこもっていた。

さいわいに、このところ、江戸市中は平穏であり、盗賊どもの跳梁もなかった。

どういうわけか知らぬが、柴田勝四郎の死は、先代用人の柴田宗兵衛が死去したときよりも、五兵衛の胸の底へ重く深く受けとめられている。

大御所・徳川吉宗も、この前年に死去した。

これまでの、五兵衛に関わっていたというよりも、五兵衛の人生を、

「つくりあげてくれた……」

ともいうべき人びとが、つぎつぎに消え去り、いまは、

（勢以と、小沼治作のみになってしもうた……）

そういってもよいほどなのだ。

勢以の実家の藤枝家にしても、むろん、親しい交誼がつづいているにせよ、岳父の若狭守方教が存命のころと同様とはいえぬ。

交誼の内容が、まったく異なるからだ。

また、縁者の神尾家にしても、五郎左衛門守親亡きのちは、これまた交誼の内容がちがってくるのは是非もないことであり、むしろ、いまは、両家のほうから五兵衛へ相談をもちかけてきたりする。

池の端仲町の高級小間物店の日野屋は、先代の文吉亡きのち、跡つぎの文太郎が二代目の日野屋文吉を名乗り、いまも徳山家へ出入りをしているけれども、よほどの用事がないかぎり、五兵衛が会うこともない。

ただ、五兵衛の生母お静の実家である本石町の扇問屋・駿河屋又兵衛方へ、市中見廻りの途次、ぶらりと立ち寄るのは、徳山五兵衛のたのしみの一つといってよい。

五兵衛にとっては祖父にあたる駿河屋又兵衛の死後、跡をついだ現当主の又兵衛夫婦も長命であり、まことに元気なのだ。

夫婦ともに、とうに八十をこえているのではあるまいか。

かくて、また、新しい年が明けた。

宝暦三年である。

徳山五兵衛、六十四歳。
勢以は五十九歳。
小沼治作は、七十四歳となった。
小沼は、以前と、すこしも変るところがない。
柴田勝四郎が死んだときも、その亡骸へ向って、
「御用人。いずれ、近きうちに、そちらへまいりまするぞ」
などと語りかけたときの、小沼の老顔には、むしろ明るい微笑がただよっていたほどなのだ。
邸内の道場へ出て、徳山家の家来や、盗賊改方の与力・同心たちと共に、剣術の稽古にはげむ日常も変らぬ。
「元気じゃのう」
と、五兵衛が呆れ顔になるのも、当然で、いまでも、短時間の稽古なら七十を超えた小沼へ打ち込める者は、一人もいないのである。
「ちかごろは、とんと、道場へお運びになりませぬな。いかがでござりましょう。久方ぶりにて、お手合せを願わしゅう存じますが……」
と、小沼。
「何を申すことやら……」
苦笑を浮かべた五兵衛が、

「わしが生きてある月日も、もはや、高が知れてあるというに、剣術の稽古などしておられようか」
「では、何をなされたいので……?」
そういわれると、返事に困る。
いまの五兵衛にとっては、根岸の日野屋の寮（別荘）における自分とお百合との交情を絵巻に描くことのみが、
（生きてあるうちの、最後の念願……）
と、なっている。
すでに描いた絵巻は、いま見ると、あまりにも露骨な描写が多い。
秘戯図に熱中していたころは、それこそ、男女の秘毛の一筋一筋を丹念に描いたりしたものだが、今度は双方の裸身をあからさまに描くというのではなく、隠すべきところは隠し、むしろ、自分とお百合との情念が、息づかいが、肌身に浮いた昂奮の血の色が、まざまざと感じられるような絵巻にしたい。
五兵衛の脳裡には、ようやく、その絵巻の構想がまとまりつつあった。
すぐにでも、絵筆をとってさしつかえないのだが、火附盗賊改方という御役目についていると、書見の間へ入っての〔秘密の時間〕が落ちついてすごせぬ。
何分にも、この御役目は油断がならない。
いまは平穏に見えても、どこかの盗賊どもが、密かに押し込みの計画を練っているやも知

れぬのだ。

　これを防ぐためには、絶えず密偵たちをはたらかせ、見廻りを怠らぬようにせねばならぬ。火附盗賊改方の長官として、その名をうたわれている徳山五兵衛だけに、

（この御役目に在るうちは、懈怠はゆるされぬ）

と、おもうのも当然であったろう。

新しい年を迎えて、五兵衛は、ようやく気を取り直したが、

（なれど、もう、そろそろ、御役目が解けてもよいころだが……）

一方では、その日を待ちかねているのであった。

また、いま一つ。

最後の絵巻の完成もさることながら、書見の間の奥へ隠してある秘図の下絵なども、相当の量になってしまった。

　これが余人の目にとまったなら、五兵衛の面目は、

（まるつぶれとなってしまう……）

のであって、何としても自分が死を迎えるまでに、少しずつ、密かに焼き捨ててしまわねばならぬ。

九

　これまでにも五兵衛は、相当の量の、描きためた下絵を焼き捨ててきた。

　裏庭の一隅へ穴を掘り、石組みの〔焼却炉〕のようなものを造らせたのは、五兵衛が三十四歳のときだから、あれから三十年の歳月が経過しているのだ。

秘図のみではなく、草花や風景も描いて、その描き損じを、

「余人の目に、さらしたくない」

という名目をたて、みずから焼き捨てたものだ。

（そうじゃ。うかうかとしてはおられぬ）

柴田勝四郎が死去してのち、徳山五兵衛は一種の焦りをおぼえはじめた。

老齢とはいえ、あれほど丈夫に見えた勝四郎が、それこそ一瞬の間に息絶えた、その場に居合せた五兵衛だけに、

（わしだとて、いつ何時、突然にあの世へ旅立つことになろうやも知れぬ）

　このことであった。

　その後で、遺族や新用人の柴田平太郎、小沼治作などが〔書見の間〕の整理をおこなうことは必定である。

当然、書庫の押入れや地袋、手文庫などの中に隠してある下絵や絵巻を発見されてしまうことになる。

　これは、たまったものではない。

死んだ後のことゆえ、

（知ったことか……）

と、平気になれぬ自分が、五兵衛は恨めしかった。

(何のことやあろう。わしが描いた、あの絵を見て、一同がおどろきあわてる態は、さぞ見ものであろうな……)

そこまで割り切ってしまえぬ自分を、

(何と小心な男なのか……)

なさけなく、おもうことさえある。

だが、やはり、見られたくはなかった。

長男の次郎右衛門頼屋へ、徳川吉宗より密かにあたえられた宣安の脇差を見せ、

厳然と、しかも誇らしげにいいわたしたばかりではないか。

「父亡き後も、父の名を汚すまいぞ」

その父親が生前、たわむれ合う裸身の男女の姿を描くことに熱中していたことを知れば、謹直な次郎右衛門は仰天すると同時に、

(父上は、かようなお人であったのか……)

たちまちにして、五兵衛を軽蔑するにちがいない。

もとより勢以にいたっては、

(わが夫が、このような……)

口惜しさと怒りと絶望に、身をふるわせ、気を失いかねぬ。

柴田平太郎も小沼治作も、呆れ果てるに相違ない。

それを想うと、やはり、五兵衛は自分の〔秘密の時間〕が為した仕わざを、だれにも知られず、息絶える前に消滅させておきたかった。

すでに、東林のお梶から贈られた住吉慶恩作の絵巻一巻は焼き捨ててしまった。

あの、将軍御狩りの日に死を覚悟した五兵衛は、自分が描いた秘戯図や下絵のすべてを同時に焼き捨てた。

だが、一命をとりとめたのち、

(わしの絵はさておき、慶恩作の絵巻だけは……)

何としても惜しかったものだ。

あのとき以来、五兵衛は絵筆を絶つ決心をしたのだが、いつの間にやら、寸暇をぬすんでの秘戯図の潤筆に心を奪われ、下絵も増え、絵巻も仕上げた。

これらのすべてを、生前に、

(焼き捨ててしまわねばならぬ……)

のである。

それならば、いますぐにでも焼却にかかったらよさそうなものだが、五兵衛は最後に、お百合と自分との交歓の情景を、納得の行くまで描きつくしたいとおもう。

そのためには、現存する下絵や絵巻を焼き捨ててはなるまい。大切な資料なのである。

(たわけ者といいわばいえ)

であった。

（この、たのしみを知らぬ者こそ愚かじゃ）

と、居直りたくもなってくる。

理屈も何もない。

絵心のあるなしにかかわらず、いったん、男女の交歓の図を描くことをおぼえたなら、

（小沼とて平太郎とて……いや、次郎右衛門とて、病みつきとなるに相違ない）

と、五兵衛は確信をしている。

むしろ、

（このたのしみを知らぬ者こそ、あわれじゃ）

にんまりと、優越感に浸ることもないではない。

しかし、我に返ってみれば、やはり自分の死後に、

（この隠し事のみは知られたくない……）

のである。

人間という生きものが、これほどまでに見栄や体裁にこだわるものかと、五兵衛は我ながら呆了たるおもいがする。

十

宝暦三年の年が明けると、徳山五兵衛は俄かに多忙となった。

残忍な盗賊団が、江戸市中に跳梁しはじめたからだ。

一月十二日の夜。

日本橋・通三丁目にある薬種問屋・大和屋長右衛門方に十余名の盗賊団が押し込み、主人夫婦や家族、奉公人を合せて十七人を惨殺し、千数百両を奪って逃げた。

このように、血なまぐさい犯行をする盗賊どもが近年は増えつつある。

日本左衛門一味の婦女を犯すことのほうが、

「まだしも……」

と、いってよい。

女子供の見さかいもなく殺害されてしまったのでは、それこそ、

「たまったものではない」

のである。

彼らは、先ず、主人の夫婦の寝間へ潜入し、

「おとなしくしろ」

「金蔵へ案内をしろ」

「いうことを聞かぬと命はない」

と、脅す。

仕方もないので、いわれたとおりにすると、その後で、

「皆殺しにしてしまえ」

となるのであった。

皆殺しにするのは、犯行の手がかりとなるものを消してしまおうとするからだ。

大和屋の場合は、運よく、台所の竈の後ろへ隠れて殺害をまぬがれた女中二人の証言によって、わずかながらも捜索の手がかりをつかむことを得たのである。

この盗賊団の首領は、黒羽根の郷右衛門といい、盗賊改方が苦心の探索をつづけた結果、下総の松戸に潜んでいた郷右衛門を召し捕ったのは、実に、この年の秋であった。

この間にも、盗賊改方は二組の盗賊団の犯行を未然に防いでいる。

どうしたわけか、この年には江戸市中で盗賊どもが蠢動しはじめ、徳山五兵衛は、

「寧日もなく……」

はたらきつづけることになってしまった。

この年……宝暦三年に、徳山五兵衛が捕えた大小の盗賊どもは、合せて三十七名にもおよんだという。

しかも、黒羽根の郷右衛門の一件は別にして、他の盗賊どもの犯行の大半を未然に防いだわけだから、

「さすがに、徳山秀栄じゃ」

幕臣の間でも、五兵衛の活躍ぶりは大変な評判となった。

江戸市民たちの間では、もとよりのことであって、ことに商家の人びとは、

「徳山様の御屋敷へは、足を向けて寝られませぬ」

とか、

「徳山大明神」

の五文字を木版で刷りこんだ魔除けの札をつくり、これを売り出す者まであらわれたそうな。

だが、この年も秋になると、徳山五兵衛秀栄は疲れ切ってしまい、

「欲も得もない。一日も早く、この御役目をやめたいものじゃ」

と、めずらしく勢以に零したのは、それだけ心身にこたえていたのであろう。

小沼治作も、五兵衛をたすけて、よくはたらいた。

五兵衛が、松戸へ、黒羽根一味を捕えにおもむいたときも同行し、捕物陣に加わり、一味の中の浪人くずれを二名も斬って捨てている。

それでいて、いささかも疲れた様子がなく、暇さえあれば邸内の道場へ入り、与力・同心たちへ稽古をつけている。

「いや、小沼には、かなわぬ……」

さすがの五兵衛も、十歳年上の小沼治作の壮健さには、辟易の態であった。

独身の男は短命だというが、

(小沼は別じゃ。小沼は独身ゆえに、あのように、すこやかなのであろうか……)

そうとしか、おもえぬ。

(ああ……わしは、小沼より先に死ぬるにちがいない)

確信といってもよいほどの予感を、五兵衛がおぼえたのも、この年であった。

かくて、この年のうちに、盗賊どもも、盗賊改方の威力を怖(おそ)れ、鳴りをしずめてしまったようだ。

そして、十一月五日。

徳山五兵衛は、ついに、火附盗賊改方を解任された。

このときばかりは、五兵衛が喜色満面となり、

「これでよし。これでよし」

手を叩いてよろこぶありさまが、勢以の目には、

（童子(わらべ)のごとく……）

に、見えた。

ときに、五兵衛は六十四歳であった。

また、年が明けて宝暦四年となる。

老いた五兵衛は、よみがえったように、明るい笑顔を取りもどした。

「もはや、二度と御役目につくこともあるまい」

「長々と、御苦労の事でございました」

と、勢以も、同じおもいであったらしい。

「これよりは、余生を好き自由に送りたいものじゃ」

「はい」

「ゆっくりと、絵筆と遊びたい」

「結構な事にございます」

こうして五兵衛は、書見の間へこもり、かの〔秘密の時間〕を取りもどすことになった。

けれども明るいうちは、秘戯図の筆をとることをつつしまねばならぬ。

つつしむというよりは、邸内には家族をはじめ、多勢の奉公人もいることだし、無断で書見の間へ入って来ることはないにしても、やはり落ちつかぬ。

秘戯図こそは、人びとが寝しずまった夜ふけに、独りきりで描くべきものにちがいなかった。

そこで……。

日中は、他の絵を描く。

草花や人形などの写生から、さまざまな画帖(がちょう)の模写もする。

これまた、たのしくないこともない。

それというのも、長年にわたって絵筆になじんできただけに、絵画そのものへの興味も深まってきたのであろう。

五兵衛が最後に描く絵巻には、何も男女の裸身だけが登場するのではない。

しかるべき風物や、家具や、草花や、もろもろの小道具も描きそえねばならない。

ゆえに五兵衛は、日中に描く絵も、夜半の絵巻制作の下絵のつもりで描いた。

絵巻は、はじめ、お百合と自分との秘図にするつもりであったが、ふと、おもいついて、

開巻の数場面に、お百合の母のお梶との交情を、なつかしいおもいをこめて描き入れること

にした。
五兵衛は、この年いっぱいを下絵にかけるつもりで、来年早々から、彩色の絵巻へ取りかかることにした。
小沼治作が、
「たまさかには、道場へお越し下されますよう」
などと、不満そうにいう。
「おろかなことを申せ」
「何が、おろかでござります？」
「余命いくばくもないというに、木太刀(きだち)を揮(ふる)って汗をかいたところで、どうなるのじゃ」
「殿も、ずいぶんと、お変りなされましたなあ」
「何とでも申せ」
「あれほど、剣の道に御執心であられまいたのに……」
「いまは、絵筆に執心しているのじゃ」
「御勝手になされませ」
小沼も七十五歳となり、五兵衛に対して、すっかり遠慮がなくなって、喜怒哀楽の表情を露骨にする。
小沼は小沼なりに、気ままな老人となりつつある。
それがまた、五兵衛にはおもしろかった。

賀茂川櫛(ぐし)

一

二代目の日野屋文吉が、徳山屋敷へあらわれたのは、この年の春も終ろうとする或日のことであった。
「このたび、久方ぶりにて京へまいりまするが、何ぞ、おのぞみの品々や絵具、筆紙などございましたなら、もとめてまいりまする」
と、日野屋はいった。
「わざわざ、そのことで立ち寄ってくれたか」
「江戸では手に入れがたい品々もございますれば……」
「うむ。いろいろとたのみたいが……そのほかに一つ、ぜひともたのみたいことがある」
「なんなりと、おおせつけ下さいますよう」
と、日野屋。
「京の、祇園(ぎおん)の社の南門を出て、左へ……長楽寺の方(かた)へあがる細道があっての」
「はい、はい」

「その細道を行くと、右手に茅ぶき屋根の風雅な茶店がある。いや、あるやも知れぬ」
「ははあ……？」
「その茶店の名を、東林と申してな」
「とうりんでございますな」
「さよう。東の林と書いて、とうりんじゃ」
「はい、はい」
「この茶店のことを、亡き先代から耳にしたことはないか？」
「いえ、別に……」
先代の日野屋文吉は、東林のお梶と五兵衛のことを、だれにも洩らさなかったらしい。
当然といえば当然だが、
(先代は、口の堅い男であった……)
いまさらに徳山五兵衛は、先代の日野屋の風貌を、なつかしく想い浮かべたのである。
「殿様。その東林と申す茶店が、どうかいたしましたので？」
「いや、わしが若いころ……と申しても、四十何年もむかしのことじゃが、京へまいった折、その茶店のあるじに、わしが世話になってのう」
「はい、はい」
「すでに、そのあるじどのは亡くなられたが、もしや……もしやすると、そのむすめごが茶店のあるじになっているやも知れぬのじゃ。むすめというても、さよう……いまは、五十前後になっていようか……」

「そのお方のお名前は、何と申されるのでございましょう」
「お百合というて、な……」
「はい。たしかに、うけたまわりましてございます」
「それで、な……」
「はい」
「もしも、東林に、お百合がすこやかに暮していたなら、何ぞ、京の町で見立てた品物をみやげにして、訪ねてもらいたいのじゃ」
「かしこまりましてございます」
「別に、これというて用事があるわけではない。お百合と世間ばなしでもして、わしが、このように暮していることをつたえてくれればよい。そして、お百合の、いまの暮しぶりを、おぬしの目で見てきてもらいたい。それのみじゃ。それのみのことでよい」
「わけもないことでございます」
「なれど、日野屋……」
「はい？」
「事情あって、このことは他言無用じゃ」
一瞬、日野屋の顔が、わずかに緊張したようである。
「よいな？」

「心得ましてございます」
「では、たのんだぞよ」
それから五兵衛は、勢以を居間へまねき、
「日野屋が京へのぼるそうな。何ぞ、たのむ事あらば申すがよい」
そこで、勢以も、京都でなくては手に入らぬ高級小間物その他の品々を日野屋にたのみ、その費用を、用人・柴田平太郎が日野屋へわたした。
いまの日野屋は、京都出身の先代とちがい、京の仕入れには先代からの番頭を差しむけることが多い。
それでも、これまでに二、三度は京都へのぼっていよう。
「このたびは、いろいろと用事もございまして、長逗留（ながとうりゅう）になろうかと存じまする」
「さようか。ま、ゆるりとしてまいれ。京なれば二年三年の逗留だとて、飽きはせぬ」
「いえ、とんでもないことで……遅くも、夏を越して、涼風（すずかぜ）が立つころには、江戸へもどってまいりまする」
こういって、日野屋文吉は徳山屋敷を辞去した。
（できるなら、わしも日野屋と共に、京へのぼってみたい）
日野屋が去った後も、しばらくは回想に耽（ふけ）り、五兵衛は日が暮れるまで居間からうごかなかった。
お百合に、

（会ってみたい……）
とは、おもわぬ。
六十を超えた自分と、五十女になったお百合とが、再会をしてみたところで、
（はじまらぬこと……）
であった。
いうまでもなく、なつかしい。
しかし、お百合も亡母のお梶と同様、あれから今日まで、ただの一度も便りをしてよこさぬ。
お百合が突然、江戸へあらわれ、根岸の日野屋の寮で、五兵衛と甘美な数日をすごし、これまた急に姿を消してしまってから、およそ三十年に近い歳月が経過している。
あのときのお百合は、初婚の夫に急死をされ、若い寡婦となったばかりであったが、いまは、何処（どこ）ぞへ再婚をし、わが子や孫たちに囲まれているのではあるまいか。
亡母ゆずりの、あれほどに美しい女ゆえ、再婚の縁談は、いくらもあったにちがいない。
（もしやすると、あのとき、わしに断わりもなく、江戸から去ったのは、すでに後添（のちぞ）えの縁談（はなし）が取り決められていたのではないか……）
そのようにも考えられた。
あるいは、また、
（病を得て、この世の人ではない……）

ということも、ありうる。
お百合の母のお梶も、長命ではなかった。
いずれにせよ、いまの徳山五兵衛は、お百合に会いたくて、京都をなつかしむのではない。
また二十(はたち)前の、五兵衛の、
青春の日々が京の都に塗り込められている。
その都の姿を、
「忘れようとしても忘れきれぬ……」
(死ぬる前に、いま一度、見たいものじゃ)
五兵衛が、そうおもうのは、むりからぬことだといえよう。
日野屋が商用で京都へおもむくと聞いて、東林を訪ねてみてくれとたのんだのは、お百合ひとりの消息を知りたいというよりも、あの、なつかしい茶店の東林が、
(いまは、どのようになっているであろう？)
と、おもうからである。
もしも、お百合が東林にいて、訪問した日野屋から徳山五兵衛の消息を聞いたなら、
「まだ、生きておいでに……」
目をみはるやも知れぬ。
そうおもうと、何やら笑いが込みあげてきて、
「ふ、ふふ……」

脇息(きょうそく)にもたれ、含み笑いを洩らしたときもとき、燭台(しょくだい)の大蠟燭(ろうそく)に火を灯(とも)してあらわれた侍女が、さも気味悪そうに五兵衛を見やった。
「うふ、ふふ……」
空間の一点を見つめたままで、また、五兵衛が笑った。
侍女は、
「ごめん下さりましょう」
いうや、あわてて居間から出て行ってしまった。
(なれど、日野屋に、あのようなことをたのむのではなかったやも知れぬ。いや、たのまぬほうがよかったやも……？)
これから五兵衛は、若き日のお百合と自分との交情を主題にした最後の絵巻に取りかかろうとしている。
それなのに、もしも、お百合に会えた日野屋が江戸へ帰って来て、
「お百合さまは、もう皺(しわ)だらけで、歯も抜け落ち、頭も真白でございました」
などと報告をされたら、絵巻の中のお百合が死んでしまう。
まことにもって、幻滅もはなはだしいといわねばなるまい。
(そうじゃ。これは、たのまぬほうがよいわえ)
夕餉(ゆうげ)をすませたのち、五兵衛は日野屋へあてて、東林訪問の件は、
「取り止(や)めにいたすよう……」

と、書きしたため、
「これを明日、日野屋のあるじへ届けるように」
家来へ命じたのである。

二

日野屋文吉が、五兵衛の手紙を読み、
「承知いたしましたと、殿様へおつたえ下さいますよう」
と、使いの家来に言づけ、京都へ発ったのは、それから三日後のことであった。
やがて、夏が来た。
五兵衛は、夜になると書見の間へ引きこもり、こころゆくまで絵筆と遊んだ。
先ず、四十何年も前の、東林のお梶の下絵からはじめねばならない。
お梶を描いたものは、すべて焼き捨ててしまってあるので、五兵衛は往事をおもい起しつつ、絵筆を運ぶ。
それは、まことにたのしいことだが、同時に下絵もまた、たちまちに増え、溜まりはじめた。
夏の夜は短い。
ときには熱中のあまり、空が白みはじめることもめずらしくない。
そうなれば当然、日中は奥庭の涼風に吹かれて昼寝をすることになる。

「殿様は、御精が出ますな」
「絵筆をお持ちあそばすと、我を忘れておしまいになるそうな」
「ははあ……」
家来たちのうわさを耳にして、小沼治作はおもしろくない。
稽古をなさらずともよいが、たまさかには邸内の道場へお運び下されと、小沼は五兵衛にいった。
自分が家来たちに稽古をつけているのを、
「殿様が、御覧あそばすなら、一同の励みに相なりまする」
と、いうわけだ。
「小沼。そのほう、何歳に相なった？」
「殿より十歳の年長にございます」
「すると、七十五ではないか」
「さよう」
「元気じゃのう」
呆れ果てたかのように、五兵衛は、つくづくと小沼治作をながめやった。
「殿……」
「何じゃ？」
「殿が剣をお捨てなされては、小沼、さびしゅうございます」

「ま、さように申すな」
「なれど、私めは殿が御幼少の折、堀内源左衛門先生の道場へ日々お通いなされ……」
「待て。まあ、待ってくれい」
「は……」
「のう、小沼。そのほうも、わしも剣術は三度の飯よりも好きであった……」
「なればこそ、私は……」
「まあ、聞くがよい。よいか、小沼。いまのわしには絵を描くたのしみもある。六十五にもなった老人の余生は、もはや残りわずかじゃ。わしは到底、そのほうの年齢までは生きられまい」
「何を、おおせられまする」
「さよう……」
いいさして、凝と両眼を閉じた徳山五兵衛が、しずかに右手の指を一つ二つと折ってゆきながら、
「さよう、あと四、五年の寿命ではあるまいか……」
「殿。お躰に、何ぞ変ったことでも……?」
「いや、そうではない。ないが小沼。人というものは、それほど長くは生きられぬものじゃ。そのほうは別としてのう」
「いえ、そのようなことは……」

「のう、小沼。なれば、わしの余生もわずかなもの。そのわずかに残された月日だけは大切にいたしたい。わしの好きなことをやらせてもらいたい」
しみじみと、こういわれては、小沼も返す言葉がない。
「おもうてもみよ。六十五歳の老人に剣術がふさわしいか、または絵筆がふさわしいか。そのこたえを、あらためて申すまでもあるまい」
「は……」
「どうじゃ。わかってくれたか……」
と、五兵衛に優しくいわれて、
「恐れ入りましてございます」
小沼治作は、そこへ、ひれ伏してしまった。
五兵衛が江戸を出奔していた期間は別にして、片時も離れずに附き添ってきただけに、小沼は、心安立てに家来の身分を忘れることが多く、それをまた五兵衛は一度も咎めたことがなかった。
そのことに小沼は、いま、おもいおよんだのであろう。
「まことにもって、不躾なることを申しあげました。わが身分をわきまえず、まことに私めは……」
声がふるえ出した。
「まあ、よいわ。のう小沼。わしは、そのほうを……」

いいさした五兵衛が苦笑を浮かべ、

「いや、おぬしを家来とはおもわぬ」

「何と、おおせられまする」

「そのほう、と呼ぶのも今日から止めにいたそう」

「…………?」

「小沼。いまのわしは、おぬしを、わが友とおもうている」

「と、殿……」

「そのつもりでいてくれ。おぬしが道場で一同に稽古をつけているときの、元気な気合声は、この居間にいてもわしの耳へ入ってくるのじゃ」

「お、恐れ入り……」

「おぬしの気合声を耳にしながら……ああ、まだ小沼治作がすこやかにしていてくれる。小沼に、わしの死水を取ってもらえるとおもえば、何ともいえぬ安らかな気持にもなってまいるのじゃ。わかってくれるか、うむ?」

たまりかねて、小沼は男泣きに泣き出した。

それにさそわれて五兵衛の両眼も潤みかかった。

あわてて眼を押えつつ、

(年を老ると、このように泪もろくなるものか……)

五兵衛は泪を浮かべながら、笑い出してしまった。

この日から後、小沼治作は五兵衛の耳へ剣術のことを一言も入れぬようになった。

いつの間にか、夏が去った。

奥庭を満たしていた目眩くほどの強い日ざしと蟬の声が、つい昨日のことのようにおもわれていたのに、いつしか空は高く澄みわたって、夜に入ると虫がすだきはじめた。

五兵衛は秘戯図の下絵に熱中し、日野屋文吉が京都へのぼったことなど、すっかり忘れてしまっていた。

秋風が立つと、さすがに夏の疲れが出て、病気というのではないが、五兵衛は日中も書見の間で、うつらうつらと一日をすごすことが多くなった。

十日ほどは、絵筆をとる気分にもなれなかったのである。

(わしの躰も、大分に衰えてまいったようじゃ)

そうした或日の午後に、日野屋文吉が徳山屋敷へあらわれた。

日野屋は、二日前に江戸へ帰ったという。

三

日野屋は、徳山家にたのまれ、京都で買いととのえた品物を手代に背負わせ、これを勢以の許へ届けたのち、五兵衛の居間へ入って来た。

「殿様。帰りが遅くなってしまい、申しわけもございませぬ」

「おお、日野屋。さ、こちらへまいるがよい」

「はい」
「いかがしたぞ。遠慮をする間柄でもあるまい。さ、入るがよい」
次の間で、妙にもじもじとしていた日野屋文吉が、
「殿様。実は、その……」
「何じゃ？」
「申しわけのないことを……」
「帰府が遅れたことを、わしは咎めているのではないぞよ」
「いえ、そのことではございませぬ」
「いったい何のことなのじゃ。そこにいては、はなしもできぬではないか。さ、これへまいるがよい」
「それでは、ごめんをこうむりまして……」
日野屋は、傍に置いた小さな袱紗包みを手にして、居間へ入り、
「殿様。実は、お言葉にそむきましてございます」
「そむいた、と……？」
「京へまいりまして、東林という茶店を訪ねましたので……」
「まだ、あったのか？」
「はい。ございました」
「まことか、それは……」

おもわず、徳山五兵衛は膝を乗り出した。
「訪ねずともよい」
と、江戸を発つ日野屋へ、わざわざ使いを出して念を入れたことも五兵衛は忘れたかのように、双眸をなつかしげに輝かせ、
「して……？」
「御内儀は、まさに、お百合さまと申されまして……」
「何……」
絶句した五兵衛へ、日野屋が、
「おゆるし下さいまし」
ひれ伏してしまった。
「さようか……すこやかにしていたと申す……？」
「は、はい」
「お百合がのう……」
「はい……」
「ふうむ……」
日野屋は、祇園の社へ参詣に出かけた折、
（なに、これは自分の胸ひとつに納めておけばよいことだ）
そうおもって、長楽寺の手前にある東林を訪れたのであった。

五兵衛が訪ねてみてくれとたのみ、さらに、訪ねなくともよいといってよこした茶店の女主人(あるじ)とやらへの興味にそそられたのであろう。

すると、お百合がいた。

小女を二人ほど使い、女主人として、愛想よく客をもてなしていたものだから、日野屋は、

「もしや、お名前を、お百合さまとおっしゃいませぬか?」

おもいきって問いかけると、

「はい、百合でございますが……」

「それはそれは、私めは江戸の、徳山様へ出入りをさせていただいております日野屋文吉と申す……」

いいかける日野屋へ、

「まあ、日野屋さんでございましたか」

と、お百合が微笑(ほほえ)んだではないか。

「手前どもを、御存知なので?」

「はい。お名前は、かねてより耳にしておりました」

「そ、それは、あの、いったい……?」

「あなたさまではない、先代の日野屋さまかとおもいますが、私の亡くなりました母から聞かされておりましたし、私も、江戸で、お世話になったことがございます」

「さようでございましたか……」

これまた、日野屋には意外なことであった。

お百合が江戸へ出て来て、根岸の日野屋の寮で、徳山五兵衛と密会を重ねていたことに、いまの日野屋は気づいていなかった。

また、江戸の女のように、てきぱきとした口調で語るお百合も、日野屋の想像とは全く異なっていた。

「徳山様には、お変りもなく……?」

「はい。おすこやかにおわします」

「私の申します徳山様とは、五兵衛秀栄(ひでいえ)様のことでございますが……」

「はい、はい」

「では、まだ生きておいでに……」

いいさして、お百合が笑い出したものである。

「私としたことが、何とまあ、ぶしつけなことを……」

こうなっては日野屋も後へは引けぬ。

五兵衛の近況を、つぶさにものがたるや、お百合は凝と聞き入り、

「わざわざ、お立ち寄り下され、おもいがけなく五兵衛様の御様子をうけたまわり、うれしゅう存じまする」

お百合は、ていねいに礼をのべ、

「日野屋さま。徳山様への手紙を、お届け下されましょうか?」

「よろしゅうございますとも」

すると、お百合は日野屋を奥の一間へ案内し、酒肴の仕度をしてもてなし、五兵衛への手紙をしたためた。

「その手紙、持ち帰ったのであろうな？」

「はい。これに……」

ふところから、お百合の手紙を出しかけた日野屋を手で制し、五兵衛は庭先に目をくばってから、うなずいて見せ、日野屋から手紙を受け取り、

「このことは、他言無用じゃ。わかっていような、日野屋」

「はい」

日野屋は傍の袱紗包みをひらき、

「何じゃ？」

「それに、この品物をあずかってまいりました」

「さて、手前には、ようわかりませぬ」

袱紗の中から桐の小箱があらわれた。箱の紐をほどき、蓋を開けて見て、五兵衛がおもわず、

「あ……」

声をあげた。

箱の中には蒔絵の櫛が一つ、入っている。

その櫛は、ほかならぬ五兵衛が、お百合の母のお梶へ贈ったものであった。

あれは、六代将軍・徳川家宣が病歿した正徳二年のことで、その翌年に五兵衛は勢以と結婚したわけだ。

京都から江戸へもどって来て、四年目になる。

五兵衛は、かねてから、京都のお梶を忘れかね、

（何としても、あの折の礼をしたいものだ）

思案した結果、先代の日野屋文吉が京都へおもむくことを聞き、日野屋にたのみ、十二種類におよぶ髪飾り道具を三段重ねの手箱へ納めたものを特別に誂えさせた。

櫛・笄・簪なども一様のものではなく、さまざまな金属や水晶、珊瑚、鼈甲、螺鈿などを使った細工の中でも、京の賀茂川のながれを中心にした風物を精妙きわまる蒔絵にした四種の櫛を見て、

「ふうむ。これは見事な……」

五兵衛は、これならば、

（きっと、お梶どのも気に入ってくれよう）

と、おもった。

ところが、この贅沢な贈り物を江戸から京都のお梶へ届けた先代の日野屋に対して、お梶は、

「徳山権十郎さまへ、くれぐれもよろしゅうに」

あまりにも、ありきたりの、すげない一言をあたえただけであったそうな。
そのときの落胆を、いまも五兵衛は忘れていない。
いま一つ。
享保十一年（一七二六年）の初夏に、お百合が突然、江戸へあらわれたとき、その髪に、五兵衛がお梶へ贈った櫛の一つがあった。
それは、四つの櫛のうちの、四条の橋を蒔絵にしたもので、お百合は五兵衛に、
「この櫛を、母は片時もはなしませなんだ。櫛も、あの髪道具も、母は亡くなる前の日に、私へ形見としてゆずりわたしてくれたのでございます」
と、語ったものである。
いま、その四条の橋の櫛が、五兵衛の目の前にある。
「むう……」
微(かす)かに唸(うな)りつつ、五兵衛は櫛を手にとり、まじまじと見入った。
さすがに、この櫛にも四十余年の歳月が看てとれた。
「殿様……殿様……」
よびかける日野屋の声に、五兵衛が夢からさめたような面持ちで、
「む……」
「手前、これにて……」
「帰るか……」

「はい」
「さようか。ようも、使いしてくれたの。礼はあらためていたす」
「とんでもございませぬ。では、あの、お叱りもなく……」
「何で叱ろう。なれど、かまえて他言いたすなよ」
「心得ております」
日野屋が去るのを待ちかねて、五兵衛は櫛の小箱と、お百合の手紙を懐中にして、書見の間へ入って行った。

四

お百合の手紙は、それほど、長いものではなかった。
日野屋を待たせておいて書きしたためた所為(せい)もあろうが、もともと、お梶にしろ、お百合にしろ、くだくだと長い手紙を書くような女ではない。
先ず、おもいもかけずに日野屋が来訪し、徳山五兵衛の健在を知って、
「まことに、うれしゅうございました」
と、ある。
つぎに、亡母の形見の内の賀茂川の櫛の一つを、
「何ということもなしに、お手許へおわたしいたしたく……」
と、ある。

五兵衛は、おもわず苦笑を洩らした。
「何ということもなしに……」
というのは、いかにも、お百合らしいではないか。
つまり、この櫛を見て、自分や亡母のことを、
「たまさかには、想い出していただきたい」
とでも、いいたいのであろうか。
または、
「この櫛を、私とおもうて下さいますよう」
と、いっているつもりなのか。
その、どちらかであろう。
それでなくては、何も、日野屋に櫛を届けさせるわけもないではないか。
（勝手なものよ……）
相変らず、気まぐれな女ではある……と、五兵衛はおもったが、腹も立たぬ。六十五歳になった徳山五兵衛は、いまこのとき、お百合からの手紙と櫛を得て、過ぎ去った日々をなつかしむ心の温もりに、こころよく浸ることができた。
苦笑が微笑に変り、その笑みを含みつつ、五兵衛はお百合の手紙を読みすすんだ。
読みすすむうち、五兵衛の面上から微笑が消えた。
わずかに口を開けた五兵衛は、まさに驚愕の表情に変っている。

これが、おどろかずにいられようか……。
「あの折に、身ごもりました徳山様の子は、お町と申しまして……」
お百合が、そう書いている。
あの折というのは、二十八年前に、お百合が江戸へ出て来て、五兵衛と情を交したときのことをさしているにちがいない。
すると、そのときに身ごもった子が生まれていることになるではないか。
お百合は何も知らせてよこさなかったし、五兵衛にとっては、まさに、
「寝耳に水……」
であった。
そのときの子なら、二十何歳に成長した女になってい、その名が、お町だという。
高鳴る胸を懸命にしずめながら、五兵衛は先へ読みすすむ。
お町は、少女のころから絵を描くことを好むので、師匠につけて習わせたところ、めきめき上達をしたそうな。
これまた、五兵衛にとっては一つのおどろきといってよい。
（わしの血を引いたのであろうか……）
われにもなく、五兵衛の胸は弾んできた。
お町が年ごろになったので、諸方から縁談も持ち込まれてきたし、母のお百合は、
「私にかまわずとも、気に入った相手があれば、嫁ぎなされ」

しきりにすすめたが、だれ一人として、お町の意にかなうものがいない。
こうして、お町は、当時の女として婚期を逸してしまったわけだが、いささかも気にかけず、母をたすけて茶店の東林ではたらき、暇さえあれば絵筆に親しんでいた。
ところが、四年ほど前に、祇園の社の境内へ扇売りの男があらわれた。
この男は、みずから扇へ絵を描き、参詣の人びとに売っているのだが、あまり買手もつかぬ。
東林と祇園の社は、目と鼻の先ゆえ、お町も日に一度は参詣をする。
そして、お町は、その扇売りの男なら、
「嫁に行ってもよい」
と、われから言い出した。
扇売りの男は、京都の二条に小さな扇屋の店を出していた菱屋嘉左衛門の子で、名を秋平といい、年少のころ、父に死なれた後は零落をし、母を抱えて扇の行商をしながら、ひどい貧苦の暮しを送ってきた。
この秋平も絵筆を持つと食事も忘れて没頭する。そこで行商をして売る扇に、絵を描き、書をしたためるようになった。
いまは、池大雅と号し、京・大坂に名を知られるほどの絵師となったけれども、貧乏暮しは相変らずで、お町と夫婦になってからは、東林の近くの小さな家に住み、夫婦そろって茶屋の掛け行燈に書画を描いたりして、

「糊口をしのぎながら……」
それでも、まことに仲よく、たのしげに暮しているという。
お百合の手紙には、その池大雅という絵師について、それほど、くわしくしたためてはなかったけれども、
「私から見ましても……」
池大雅は人柄も立派なら絵もすばらしく、いまにかならず世に出ることとおもうが、世に出ぬまま貧困の一生を送ったとて、妻となったお町も満足なら、自分も満足であると、お百合はいいきっている。
このようなことをお知らせいたしたのも、日野屋どのが見え、そちらさまの消息をお聞かせ下されたゆえ、ついつい、なつかしく、
「何とはなしに、お知らせいたしまする」
と、お百合は手紙をしたため終っている。
手紙を読み終えた徳山五兵衛は、茫然自失の態であったが、ややあって、
「かようなことが、あるものなのか……」
と、つぶやいたのである。

五

日本的南画の完成者といわれ、雄渾超俗の名作を数多く残した江戸中期の画家・池大雅に

ついては、くわしく書きのべることもあるまい。

大雅は、扇売りをしていた若いころ、早くも大和・郡山十五万一千石、柳沢家の重臣・柳沢淇園に才能をみとめられ、援助を受けるようになった。

柳沢淇園は、柳里恭と称し、武士でありながら、画家としても詩人としても天下に名を知られた人物で、むろん、徳山五兵衛も、柳沢淇園がいかなる人物かをわきまえている。

だが、自分とお百合との間に生まれたお町の夫である池大雅を庇護し、初期の大雅の絵画を指導したのが柳沢淇園その人であることは、まったく知らぬ。

知らぬままに、徳山五兵衛は世を去ったにちがいない。

お町は大雅と結婚し、玉瀾と号し、貧困の生活を少しも恐れず、夫と共に絵筆に親しみつづけた。

月のよい晩など、大雅が玉瀾に「酒がのみたくなった」というと、玉瀾は着ている一枚きりの着物を売って酒肴をととのえ、大雅が酒を酌みつつ三味線を弾くと、玉瀾は肌着一枚の姿で琴を弾じて合奏し、こころゆくまでたのしんだという。

また、あるとき。

客が、大雅の家へ泊り込み、翌朝になってみると、自分だけが蒲団の中にいて、大雅は絵を描くときに敷く古びた毛氈の下へもぐり込んでい、妻の玉瀾は、画室いっぱいに散らかった紙屑の中に埋まるようにして眠っていたそうな。

また、あるとき。

外出した大雅が絵筆を忘れ、これに気づいた玉瀾が絵筆を持って追いかけて行き、

「絵筆を、お忘れです」

というや、大雅が、ていねいに頭を下げ、

「これはこれは、どこのお方か存じませぬが、まことに、ありがとうございました」

妻と気づかず、礼をのべた。

玉瀾もまた、平然として、

「いえいえ、お礼にはおよびませぬ」

と、こたえ、我家へ引き返したというのである。

この夫婦の、こうした挿話を書きのべていたら、切りがないことになる。

いずれにせよ、池大雅の画名が天下に知られるようになってからも、貧乏暮しに変りはなかったらしい。

それはさておき……。

これまで、まったく音信が絶えていたお百合が、この風変りな娘夫婦のことを、五兵衛に知らせてよこしたについては、いったい、どのような心のうごきがあったのだろうか……。

むろん、知らせたから、五兵衛に「何々してくれ」というのではない。

つまりは、何もむずかしく考えることはないといってよい。

おもいがけぬ日野屋の訪問を受け、徳山五兵衛の消息を聞き、お百合は、なつかしくおもったにちがいない。五兵衛を好もしくおもえばこそ、江戸へあらわれ、肌身をゆるしたので

ある。

そして、いまとなっては、

(生きてあるうち、五兵衛様にお目にかかることはない)

そうおもったとき、お百合は、この機会に、

「あなたさまに、こういうむすめが一人いるのでございますよ」

と、玉瀾のことを打ち明け、おどろきあわてる五兵衛の顔を想像し、ひとり興じているのやも知れぬ。

だが五兵衛は、おどろきはしたけれども、あわてたわけではない。

よくよくおもえば、あのとき、お百合が身ごもっていたことに不思議はないのだ。

また、おどろきはしても、実感がわいてこない。

これは、当然であろう。

二十何年も前の、お百合とすごした僅かな日々が、いまここに、このような実りをもたらしたと、はじめて聞かされても切実な父性の愛が胸の内にわきあがってくるわけでもない。

徳山五兵衛秀栄は、六十五歳になっている。

現代の日本人ではないのだ。

当時、年齢が六十をこえれば、

「長寿を保った……」

といってもよかったのである。

五十そこそこで病歿しても、短命だとはおもわれなかった。

さよう、当時の六十五歳は、現代の七十五歳にも当ろうか。

男も女も、この年齢に達すれば、おのれの感情のうごきを、もてあますこともない。

行手には、この世から消え去る日がせまってきているのだ。

あれもしたい、これもしたいというわけにはまいらぬ。かぎられた日々と時間が、それをゆるさぬ。

京の都で、貧しくとも才能が豊かな画家と夫婦になり、みずからも玉瀾と号して絵筆に親しむという、わがむすめのお町を、

(一目、見てみたい)

とはおもうが、おもったところで、いまの五兵衛にはどうにもならぬ。

二千二百四十石の旗本として、京都へおもむくためには相応の手つづきが要るし、百三十里に近い道中をするには、往復一ヶ月もかかる。

新幹線に乗り、三時間で京都へ到着できる現代ではないのだ。

そうした面倒をかけてまでも、京都へ行きたいとはおもわぬ。五兵衛が日野屋の上洛(じょうらく)を知り、老いた身にやどる微かな感傷から、お百合に自分の消息を知らせようとしたわけだが、お百合とても同じことではなかったのか……。

もしやすると、お百合は、徳山五兵衛という旗本が、

「お前の父親……」

であることを、玉瀾につたえてはいないのではないか。どうも、そのようにおもわれる。

五兵衛は、お百合が日野屋を通じて届けてよこした賀茂川の櫛に見入りつつ、

（江戸にいて、あれこれと、お百合や、お町や……その池大雅という絵師のことなどを想い浮かべているほうがたのしみじゃ）

そうおもった。

もしやすると、お百合は五兵衛の残り少ない余生に、そのたのしみをあたえてくれたのやも知れぬ。

（それにしても、お梶といい、お百合といい、まこと、ふしぎな女たちじゃ。いたずら好きの女狐……いや、それも、美しい女狐であったわ）

五兵衛が、最後の絵巻に、いま手にしている賀茂川の櫛を描き入れることをおもいついたのは、この夜ふけであった。

六

また、新しい年がやって来た。

宝暦五年である。

徳山五兵衛は、六十六歳になった。

前年から引きつづいて、五兵衛は下絵を描き、この年の春になると、ようやくに、

（これなら……）

と、構想がまとまったようだ。

さらに、この下絵を整理し、今度は、絵巻のための下絵にとりかかった。

これは意外に早くすすみ、夏が過ぎるころには、ほとんど下絵ができあがった。

それと並行して、五兵衛は、これまでに描きためた下絵を少しずつ、例の焼却炉で焼き捨てはじめた。

家来たちが、これまた例によって、

「私どもが焼き捨てまする」

しきりにいうのだが、

「描き損じを、余人の目にふれさせたくはない」

と、こたえて、五兵衛は傍にだれも近寄せず、裏庭の一隅にある石組の炉で秘戯図の下絵を焼く。

むろん、秘戯図ばかりではなく、草花や野菜などの下絵も交ぜてある。

それにしても、その中の一枚が風に飛んだりしたのを、うっかりと気づかずにいて、庭を掃除する小者などに拾われたなら、殿様の威光も何もあったものではないのだ。

五兵衛は、気をつかう上にも気をつかった。

しかし、老齢はあらそえぬものだ。

或夜。書見の間で何枚も描いた下絵が気に入らず、まるめては捨て、破いては捨てているうち、その中の一枚をまるめ、何気なく袂へ入れてしまった。

このときの五兵衛の脳裡には、半裸のお梶やお百合の姿態だけしか浮かんでいない。無意識のうちに下絵をまるめ、袂へ入れてしまい、これを、すっかり忘れてしまった。

空が白みかけてから寝所へ入り、次の間へ着物をぬぎ、そこに仕度されてあった寝間着に着替え、臥床へ入った。

朝になると、侍女が、そっと次の間へ入って来て、前夜、五兵衛がぬぎ置いた着物を奥へ持って行き、勢以の指図によって、この日に五兵衛が身につけるものを次の間へ運んでおくことになっている。

五兵衛が目ざめたときは、侍女があらわれて着替えを手つだうが、眠るときの着替えは五兵衛みずからがする。

ともすれば、払暁にいたるまで書見の間にこもっているのだから、それまで侍女を眠らせずにおくこともならぬ。

「よい、よい。わし一人にて着替えをいたす」

五兵衛はこういって、それが、いまは長い習慣となってしまっている。

で、その朝。

次の間へ、侍女ではなく勢以が入って来た。

というのは、前日の五兵衛の顔色がすぐれぬので、勢以は、

「絵をお描きあそばすのも結構に存じまするが、いささか、根をおつめすぎるのではございませぬか?」

と、尋ねたほどであった。

「何の、さしたることはない」

「なれど……」

「老後のたのしみじゃ。躰を損ねるほどのことではない」

「それなれば、ようございますが……」

老年になってからの勢以は、さすがに気力もおとろえはじめ、五兵衛へも、さらに優しげな心づかいをするようになってきていた。

それだけに、前日のことが気にかかっていたのであろう。

近ごろは、五兵衛の入浴が長引いたりすると、勢以が気づかわしげに、侍女なり家来なりをよび、

「お湯殿へまいって、殿の御様子を見て来て下され」

などと、いったりする。

五兵衛は、このごろ、入浴するのにも一人きりであった。

老いてくると、他人に背中をながしてもらったりすることが、まことにわずらわしくなってきたのだ。

ゆえに、勢以が心配する。入浴中に躰のぐあいが悪くでもなって、倒れたのではあるまいかと、おもうらしい。

しかし、湯殿の外にも湯加減を見る小者がつききりでいるのだし、外の廊下にも家来が一

人、控えているのだから、何か異常があれば、すぐにわかるはずなのだ。
それでも、勢以は心配をする。
だから、この朝も、
（昨日は、お顔の色がすぐれぬように見受けられたが、よう、おやすみになっておられようか……？）
次の間と寝所の境の襖を細目に開け、中の様子を窺った。
五兵衛は、こころよげに寝入っている。
勢以は安心をして、音がせぬように襖を閉めた。
すぐ目の前に、五兵衛がぬぎ置いた着物がある。
これは、侍女が片づけることになっているのだけれども、そこは女であった。
ここへ来た序にとおもったのかして、勢以は五兵衛の衣類に手をかけた。
と……。
袂に、何か入っている。
何気なく、勢以は袂に手を入れ、中に入っていたものを引き出した。
紙である。下絵がまるめたまま入っていた。
勢以は、はじめ、描き損じの紙で五兵衛が痰でもぬぐったのか、または鼻を擤みでもしたのかとおもった。
手に取ってみると、痰がついているようでもない。

（何を、お描きあそばしたのであろう？）
微笑みつつ、勢以が、まるめた紙をひろげた。
すると、ふくよかな乳房と、みごとな肉置きの、女の下半身が、いきなり勢以の目の中へ飛び込んできた。
「あ……」
おもわず声を発し、勢以は両手で顔を被った。
つぎに、はっとして、境の襖へ耳を当て、寝所の気配をうかがった。
五兵衛は依然、目ざめてはいない。
ほっとして、あらためて下絵を手にして、勢以は見入った。
その手指が、わなわなとふるえ、めっきりと皺の増えた顔が、苦い薬でものまされたかのような表情をたたえている。
「汚らわしい……」
とばかり、秘戯図の下絵を投げ捨てるのかというと、そうでもない。
見入っている。勢以は凝と見入ったまま、身じろぎもせぬ。
そのとき、廊下へ侍女の足音が近づいてきた。
勢以はぎょっとして、一瞬、泣き出しそうな顔つきになったが、すぐに下絵をまるめ、自分の胸もとへ押し込んだ。
「奥方様……奥方様……」

廊下の外で、侍女がよびかけてきた。
「おお……」
「殿様の御着物を……」
「入るがよい」
「はい」
侍女が次の間へ入るのと入れちがいに、勢以が、すっと廊下へ出て、
「殿様の御着物を、早う」
と、いった。
「はい」
侍女が、五兵衛の着物や帯をたたむのを、勢以は廊下に立ったまま、見まもっている。
まだ、着物の袂に別の下絵が入っているやも知れぬとおもったのであろうか。
侍女は、いつにない勢以の様子に緊張した。
勢以は、侍女を従えて自分の居間へ入り、五兵衛の着物をも運ばせ、侍女が去ったのち、あらためて点検をおこなったようである。
この日。勢以は、ついに五兵衛の前へ姿を見せなかった。
朝の挨拶にもあらわれぬので、五兵衛は不審におもったが、いまはもう、夜に入るのを待ちかねて、
（今夜は、あのように描いてみよう。いや、こうしてみたらどうか……？）

絵巻のことで頭がいっぱいになっているから、老いた妻のことなど気にかけてもいない。
翌日。
勢以が挨拶にあらわれたとき、五兵衛が勢以の顔を見やると、勢以が目を逸(そ)らし、何か、あわてたように、すぐさま引き取って行った。
（妙な……？）
と、感じたが、いまの五兵衛にとっては、どうでもよいことであった。

七

この年も終るころ、徳山五兵衛の最後の秘戯図は完成に近づいた。
長い月日をかけ、充分に下絵を描き、構想を練ってきただけに、いざ絵巻に取りかかると、おもいのほかに筆がすすんだ。
それも、はじめのころのような丹念さではなく、お梶やお百合や、自分の裸身を描くにしても、えらびにえらんだ描線のみを用い、描いた五兵衛だけにしかわからぬ含みをもたせた。
むかしは、男女の性器や秘毛などを克明に描写することが昂奮(こうふん)をさそい、それこそ、
「眼を血走らせて……」
熱中しつつ、絵筆を運んだものだが、いまはさすがに、その空(むな)しさをさとってもいたし、また根気もない。
お梶のふくよかな腹部が太股(ふともも)の付け根へ吸い込まれるあたりへ、わずかに墨を置いたのみ

で、

（もはや、充分……）

なのであった。

（これならば、来春までには、描き終えよう）

それから、絵巻に仕立てあげねばならない。

絵巻の表装も、五兵衛自身の工夫でやるのだ。

ところで……。

この年も、あと半月ほどで終ろうという或日の午後のことであったが……。

暖かい日和ゆえ、居間の縁側へ毛氈を敷きのべさせ、五兵衛は半切に軽く墨竹を描いていた。

近年の五兵衛は、秘戯図のみではなく、絵筆をとることがたのしみになってきている。

親類の人びとや、分家の徳山家を継いだ次男の小左衛門貞明にもせがまれ、草花や風景を描いてやったりしていた。

六十をこえ、御役ご免の身となった自分に、このようなたのしみが残されていたことを、五兵衛は、

（ありがたい……）

ことだとおもうようになっている。

もともとは、妻の勢以にもみたされぬ欲情を発散させるため、手にした絵筆が、秘戯図以外の対象へも向けられ、それはそれで、五兵衛に深いよろこびをもたらすようになってきたのだ。

さて、手本もなしに墨竹を描き終えた五兵衛が、縁側へ立ちあがり、

「ああ、ようも晴れた」

奥庭の木の間から落ちかかる日の輝きに眼を細めたとき、突然、眩暈をおぼえた。

「あ……」

ぐらりとよろめいたことはおぼえているが、後は、おぼえていない。

気がつくと、五兵衛は庭へ落ちていた。

それは、ごく短い間のことであったらしい。

はっと起きあがって、あたりを見まわしたが、さいわい、だれにも見られなかったらしい。

あわてて五兵衛は縁側へあがり、呼吸を鎮めた。

（醜態じゃ。まさに、醜態……）

このありさまを余人に見られたなら、取り返しがつかぬ。

（この五兵衛秀栄ともあろうものが……）

である。

（もはや、わしもいかぬか……）

呼吸をととのえつつ、五兵衛は得体の知れぬ寂寥感に、老体を抱きすくめられた。

一年ほど前から、自分の躰が急に衰えはじめたことを、五兵衛は自覚している。

それでいて、医師に診せようとはおもわなかった。

(医薬の効能というものは、これを受けいれる人の躰に、まだちからが残っていてこそのものじゃ)

これは、徳山五兵衛の持論である。

このごろの五兵衛は、夜ふけの書見の間で秘戯図を描いたあとの始末をするのも面倒になってきている。

さりとて、これだけは、余人の手をわずらわすわけにはまいらぬ。

むかしのように何枚も何枚も描きつづけて飽くことを知らず、ふと気がつくと空が白みはじめていたということもなくなったし、後始末もさしたることはない。

それなのに、

(今夜は、これまで……)

と、絵筆を置くと同時に、疲労が重く重く五体へ伸(の)しかかってきて、寝所へ入ることとさえも億劫(おっくう)になってしまうのだ。

その疲れが、朝の目覚めにも残っている。

(わしの余生も、もう、長くはない……)

つくづくと、そうおもった。

何といっても、眩暈を起して気を失い、庭へ落ちたことに気づかなかったという……この出来事が五兵衛にあたえた衝撃は大きかった。

しかし、また、一方では五兵衛の覚悟も定まったといえよう。

五兵衛が少年のころ、敬慕してやまなかった剣術の師・堀内源左衛門が、

「おのれの躰が死ぬることを、前もってわからぬようでは、男とは申せまい」

と、門人に語っていた声を、五兵衛は、いまも忘れぬ。

自分が死んだ後のことは、何の心配もいらぬ。

長男・次郎右衛門頼屋は四十一歳になり、謹直な人物だし、また、奉公人たちへのおもいやりもある。先ず、これならば、自分の跡を継ぎ、二千二百四十石の徳山家の当主として、

(はずかしくはあるまい)

と、五兵衛はおもっている。

息絶えるまで、自分の跡目を五兵衛へゆずりたくなくて、仕方もなしに死の病床で家督をゆるした亡父・徳山重俊に引きくらべれば、

(わしは、しあわせな男じゃ)

と、おもわざるを得ない。

五兵衛は、急に、無口となった。

顔色(がんしょく)もすぐれぬし、勢以をはじめ、用人・柴田平太郎も、主治医・遊佐良元の診察を受けるようにすすめたが、五兵衛は、

「年齢(とし)をとって躰が衰えるのは当然のことじゃ。これは別に病ではない。かまえて、よけいなことをいたすのではないぞ」

きびしく、いいわたした。

食がすすまぬわけでもなし、夜は書見の間へ引きこもり、絵筆をとっているのだから、なるほど、病気とはいえまい。

（ゆるりとしても、いられなくなった……）

五兵衛は最後の絵巻の完成を急いだ。

八

宝暦六年の年が明けた。

徳山五兵衛、六十七歳である。

絵巻は、完成に近づいていた。

はじめに、お梶と自分との交情があり、江戸へ帰った五兵衛が先代の日野屋文吉へたのみ、お梶へ贈る髪飾り道具をととのえ、これが出来あがって日野屋が屋敷へあらわれ、その品々の内の、賀茂川の風物を描いた櫛の中の二種を、密かに五兵衛へ見せる情景も描いた。

そして十数年後に、若くして寡婦となったお百合が、突如、江戸へあらわれたとき、根岸の日野屋の寮で、五兵衛がお百合の髪に件の櫛を見出すところも描いた。

根岸の寮の奥座敷で、五兵衛の腕の中に揺動するお百合の裸身。

その髪から畳へ落ちた櫛。

お百合が二代目の日野屋文吉を通じて五兵衛へ返してよこした櫛の下絵だけでも二十余枚

を描いた。

最後の絵巻が完成したのは、この年の四月三日の夜ふけであった。

これを絵巻に表装するのに、約一ヶ月を要したろう。

すべてが終ったとき、五兵衛は、あの堀部安兵衛が吉良邸討ち入りの後、松平隠岐守の中屋敷において切腹をする直前に五兵衛へ形見として贈った蒔絵の硯箱を出し、安兵衛が使用した墨を磨り、絵巻の題簽を、

〔賀茂川櫛〕

と、書きしるしたのである。

（ようやくに、終えたか……）

さすがに、よろこびがわきあがり、

（人の眠りこける夜な夜なを、わしは、この楽しみによって生きてきた。旗本・徳山五兵衛としての生涯も、亡き有徳院様（吉宗）の知遇をかたじけのうし、この泰平の世に、われながら、おもいもかけぬはたらきをした。おもい残すところは、いささかもない。その上に、わしは余人の知らぬ楽しみを得て、余人の幾層倍も楽しみの日々を得たことになるのじゃ）

と、なると、

（わしは、これでも、なかなか、しあわせな男であったのやも知れぬ）

そう、おもわざるを得ないではないか。

おのれの六十七年を振り返ってみて、いまは五兵衛、ことごとく満足をしたといってよい。

この日から、ふたたび徳山五兵衛の老顔に、微笑がよみがえったのである。

勢以も、次郎右衛門も、また家来たちも、その五兵衛を見て、

（やはり、御病気ではなかった……）

と、安堵したようだ。

完成した絵巻は、あの賀茂川櫛と共に、書見の間の鍵つきの手文庫へ納められた。

そして夏が来ると、夜毎に五兵衛は、描きためた下絵に名残りを惜しみつつ、少しずつ、焼き捨てはじめた。

すべてを焼き捨て終えたころ、夏も去った。

いまや、五兵衛に残されたものは、手文庫の中の〔賀茂川櫛〕一巻の絵巻のみとなった。

（これでよし、これでよし）

いつ、死ぬる日が来てもかまわぬ。

（さあ、いつにても来い）

このことであった。

あとは一巻の絵巻のみの始末であるが、それについては、すでに五兵衛は思案をさだめておいた。

この年の夏の暑さも相当なものであったが、五兵衛は無事に乗り切った。

ところが秋風がたちそめて間もなくの或朝、目覚めて半身を起した途端に、またしても激しい眩暈が五兵衛を襲った。

「あっ……」

おもわず、低く叫び、五兵衛は突伏してしまった。

このときは気を失わなかったし、次の間に、だれもいなかった。

間もなく、侍女が次の間へ入って来たとき、

「奥を、これへ……」

寝所から、五兵衛の声がした。

侍女の知らせで、すぐに勢以があらわれた。

「いかがあそばされましたか？」

「うむ……遊佐良元殿を、よんでもらいたい」

勢以の顔色が変って、

「何ぞ、お躰に……？」

「いささか、妙に気が重い。診てもらおうとおもう」

「は、はい」

すぐさま、遊佐良元邸へ、家来が駈けつけて行った。

良元が来て、五兵衛を診察し、

「しばらくは、絵筆をおとりなさいませぬように」

と、いった。

「はい」

意外に、五兵衛は素直であった。
当分の間は一日置きに、診察に来るという遊佐良元へ、
「たのみ申す」
と、五兵衛はこたえた。
これまた、意外のことではある。
良元が帰った後に、七十七歳になった小沼治作が寝所へあらわれた。
「殿。いかがで……?」
「おお、小沼か。いかがも何もないわえ」
「は……?」
「死ぬる日が近い。ほれ、この、わしの顔を見よ。おぬしならば一目でわかるはずじゃ」
そういわれたとき、五兵衛を凝と見まもっていた小沼治作が微笑を浮かべた。
それは、何と形容してよいかわからぬ感じの微笑であった。
哀(かな)しげな微笑……とも、いいきれぬ。
さりとて、むろん、うれしげな微笑ではない。
それは、徳山五兵衛のみがわかっていた微笑なのであろう。
五兵衛も小沼を見返し、二度三度とうなずいて見せ、
「すぐに、と、いうわけでもあるまいが……」
「は……」

「いずれにせよ、間もなく、おぬしとも別れることになろう」
小沼は、こたえなかった。
両眼を閉じた五兵衛が、ややあって、
「小沼。おぬしは、長生きをしてくれい」
依然、小沼は沈黙したままである。
「そして、次郎右衛門をたのむ」
小沼の、こたえはなかった。

それから一ヶ月ほどして、徳山五兵衛は床をはらった。
いったんは衰えた食欲も出てきたし、血色も見ちがえるほどによくなった。
一同、愁眉(しゅうび)をひらいたといってよい。
遊佐良元も、
「もはや、大丈夫……」
と、受け合ってくれた。
床上げの日の午後に、小沼治作が居間へやって来て、
「御本復、おめでとうございまする」
神妙な顔つきで祝いをのべたとき、五兵衛はくすりと笑い、
「小沼。こころにもないことを申すな。おぬしには、よう、わかっているはずではないか」

　小沼が目を伏せた。
「遊佐良元殿も、わかっていいような。あの医者殿は、先代同様、いまの世には、めずらしいほどに医者としての心得があるゆえ……」
「……………」
「なれど、たしかに気分はようなったわ。良元殿の手当が効いたのであろう。のう、小沼。蠟燭の灯が尽きようとする直前には、最後の炎をあげ、一瞬、ぱっと燃えさかるとか……いまのわしがそれじゃ。これより、残り少なくなった明け暮れを、神や仏がたのしませてくれるのであろうか……」
　このとき、五兵衛が口にした神や仏というのは、大自然の摂理をさしたものであったろう。時代は、九代将軍・徳川家重の世になって、大きく移り変ろうとしている。
　五兵衛は次郎右衛門に、こういった。
「これからは大変な世の中になろう。おぬしが気の毒じゃ。何事につけ、せせこましく、息苦しく生きて行かねばなるまい。こころしておけ」
　もはや、いまの五兵衛秀栄には、時勢の変転に、こころをくばっている時間もない。
　そして五兵衛は、ふっつりと絵筆を捨てた。
　そして毎日、居間に坐りこみ、奥庭をながめては瞑想にふけり、夜に入ると書見の間へ引きこもり、かの絵巻をながめることが日課となった。

九

　この年の晩秋に……。
　徳山五兵衛秀栄は、幕府に願い出て許され、隠居の身となり、二千二百四十石の家督を長男の次郎右衛門頼屋へゆずりわたした。
　次郎右衛門が、病後の父へ気がねをして、
「まだ、早うございます」
　と、いうや、五兵衛が、
「この老いた父を、まだ、はたらかせるつもりか」
「いえ、何をもって、そのような……」
「隠居の身とならぬかぎり、いつ、御役目を申しつけられようもはかりがたい。またも盗賊どもが跳梁などいたさば、それ徳山がよいとばかり、駆り出されるやも知れぬわ」
「これは、気づきませなんだ」
「わかればよい。これよりは、徳山家の当主として、何事も、おもうままに取りはからうがよい。いまこのときより、父は何も申さぬ」
　この日から、五兵衛は自分の居間をも、恐縮する次郎右衛門へ明けわたし、離れ屋の〔書見の間〕へ移った。
　この五兵衛の言葉は、真更、嘘でもなかったようだ。

近ごろ、またしても江戸市中に盗賊が出没しはじめ、
「いま一度、徳山五兵衛の出馬を……」
との声も、きこえぬではなかった。
もっとも、五兵衛が家督を長男へゆずりわたしたのは、そのためではない。
間近に迫った自分の死を、はっきりと察知したからである。
勢以は、書見の間を隠居所とした夫の許へ、日に何度もあらわれて語り合うようになった。
勢以は、五兵衛が口にするものなどにも何かと気をくばって、どこで耳にしたものか、
「めずらしき菓子が売り出されたと聞き、取り寄せましてございます。お召しあがり下されますよう」
「これか……」
「はい」
「何という菓子じゃ」
「かすていらと申しまする」
「妙な名じゃな」
「南蛮渡来の製法にて、京の菓子舗・一文字屋が売り出しましたとか……」
「では、京から、はるばると取り寄せたと申すのか？」
「まさかに……」
と、六十二歳の勢以が少女のような笑顔になって、

「その一文字屋の出店が、このたび本石町にできましたので……」
「さようか。どれ……」
口にしてみると、この〔かすていら〕という南蛮菓子の何ともいえぬ濃厚な味わいが、五兵衛は、すっかり気に入ってしまった。
ポルトガルから長崎へ伝えられた、この菓子は卵黄と白砂糖に上等の水飴、小麦粉などを材料にして、ふんわりと焼きあげたもので、価も安くはない。
老父が、この洋菓子を好むと聞いた次郎右衛門は、用人・柴田平太郎に、
「一日も欠かさぬようにいたしてくれ」
と、指示をしたそうな。
次郎右衛門頼屋は、このように、五兵衛にいわせるなら、
「わしとは大違いの孝行者……」
であった。
「いまにしておもえば……」
と、五兵衛が小沼治作へ、
「年少のころの、わしは、さも憎々しげな奴であったろう。亡き父上に疎まれたのも、むりはないと、ちかごろ、ようやくにおもい至ったわい」
しみじみと洩らした。
勢以にしても、ちかごろは、まるで町家の世話女房のごとく、暖かく、まめまめしく、や

さしく、五兵衛の身辺につきそい、面倒を見てくれる。

妻というものは、

（樫の木太刀のような女でも、年を老ると、こうなるものか……）

五兵衛は、老妻の、あまりの変貌ぶりに目をみはるばかりなのだ。

（勢以も、このような資性を生まれながらにもっていたらしい……となれば、いま少し、わしが辛抱をして、手まめに丹精をしてやったなら……）

馥郁とまではいかずとも、或いは、どうにか観賞に堪え得る花片をひらいたやも知れぬ。

（なれど、もはや遅い。遅いわえ）

勢以と臥床を共にしたのは、いったい何年前が最後であったのか……。

もはや、それは、

（むかし、むかしのことよ）

に、なってしまった。

書見の間で、かすていらなどをつまみながら、孫たちのことや、庭の草花のことなどを、勢以と語り合っている自分に気づき、

（これは、わしではないのではないか……）

自分が別人になったような、おもいさえする。

十

この年が暮れ、また、新しい年が明けた。

宝暦七年である。

徳山五兵衛は、六十八歳となった。

新年を迎えた五兵衛の体調は、まことに良好であった。

主治医の遊佐良元が、新年早々に来邸し、五兵衛の躰を診察して後、勢以に、

「もはや、まったく、案ずるにはおよびませぬ」

と、いったそうな。

勢以が大よろこびで、このことを五兵衛に告げると、

「さようか……」

こういったきり、五兵衛が格別によろこぶ様子もないのを、勢以はいぶかしくおもった。

春がすぎ、梅雨の季節となったので、遊佐良元は三日に一度、かならず来邸して診察をおこなった。降りつづく長雨と湿気が老人の衰えた躰によくないことは、いうをまたぬ。

けれども五兵衛は、しごく元気に梅雨明けを迎えた。

（これならば、大丈夫……）

遊佐良元のみならず、勢以も確信を抱いたようである。

夏が来た。

依然、五兵衛は食欲もあるし、血色もよかった。

一日をぼんやりとすごし、夜に入るや、ただ一人になった書見の間で、手文庫の鍵を外し、

最後の絵巻を凝と見つめ、賀茂川櫛を両手の間にはさみ、これを撫でさすりつつ、時間をすごす。

そうしたとき、五兵衛の唇が微かにうごいていることもある。

いったい、何を呟いているのであろうか……。

そして、無事に、夏もすぎた。

この年の陰暦八月十日は、現代の九月二十二日にあたる。

この日の朝。寝所で目ざめ、半身を起したとき、五兵衛は軽い眩暈をおぼえた。

この前のときのように、ひどくはない。

臥床に身を横たえ、両眼を閉じ、静かにしていると、間もなく気分がよくなった。

このことを、五兵衛は、だれにも告げなかった。

三日ほどして、またも、目ざめのときに眩暈を感じた。

このときも軽かった。

つぎの日、また、つぎの日も異常はない。

そして、八月十八日（現代の九月三十日）となった。

午後になって、五兵衛は勢以が手ずから書見の間へ運んで来た例の〔かすていら〕を二片ほど食べたが、間もなく気分が悪くなり、吐いた。

おどろく勢以に、

「何、大丈夫じゃ。すこし、眠ろう」

こういって五兵衛は寝所へ入り、身を横たえ、半刻（一時間）ほど眠ったようだが、突然、激しい頭痛に目ざめた。

つきそっていた勢以が、その五兵衛の顔色が徒ならぬのを見て、すぐさま、家来を遊佐良元邸へ走らせ、寝間にもどって来ると、五兵衛が起きあがろうとしているではないか。

「殿。それは相なりませぬ」

「いや、大丈夫じゃ」

と、いったが、勢以の手をはらいのけることもできなくなっている自分に、五兵衛はおどろいた。

躰中のちからというちからが、すべて消え失せてしまった。頭痛は依然として激しい。

次郎右衛門夫妻をはじめ、家来たちが次の間へ入って来ようとするのへ、五兵衛が勢以に、

「ならぬ。ひ、人ばらいをいたせ。そなたのみへ申しおくことがある」

「は、はい」

勢以は、いわれるとおりにした。

寝所で、二人きりになると、五兵衛は喘ぎつつ、

「もはや、これまでとなったようじゃ」

「そ、そのようなことを……」

「いますこし、間もあるかとおもうたが、もはや、身うごきもならぬ。そこで、たのみがある」

「まだ、早うございます」
「早うはない」
　と、叱りつけるようにいった五兵衛が、
「書見の間に、鍵をかけた手文庫がある。存じていよう」
「はい」
「あれを、これへ運ばせてもらいたい。わしが、息絶ゆるまでに、焼き捨てねばならぬ」
「それは、あの、何故に……？」
「あの手文庫の中には、幕府にとって、まことに大切な……秘密にしておかねばならぬ文書や書状が入っておるのじゃ」
「それほどのものを、何故、焼き捨てねばなりませぬのか？」
　勢以の目が、探るように五兵衛を見まもった。
「申すな。男の……いや、武士の世界には、女などの到底わからぬ重大事があるのじゃ。これは……これは、天下の御政道にも関わることゆえ、わしが死ぬる前に、焼き捨てねばならぬ」
　厳かな気魄が、五兵衛の灰色に変じた顔にみなぎっているかのようだ。
「は、早く……早くいたせ」
「はい」
　勢以が出て行き、件の手文庫を家来たちに寝所へ運ばせた。

　五兵衛は、奥庭に面した寝所の障子を開けさせ、自分は脇息にもたれたまま、目の前の庭の土を掘り、そこへ薪を組むように命じた。
　次郎右衛門も柴田用人も、小沼治作さえも遠ざけた五兵衛は、
「急げ」
　二人の家来に命じて、穴の中の薪に火をつけさせ、燃えあがったところへ、鍵つきのままの手文庫を投げ入れさせたのち、家来たちをも遠ざけた。
　夕闇が淡くただよう奥庭の一隅の穴の中から、紅蓮の火炎が燃えあがるさまを遠くから見ていた家来や侍女たちは、
「いったい、何事が……？」
　息をころしていた。
　脇息にもたれた徳山五兵衛は、化石のごとく、手文庫を焼きつくそうとしている火炎に見入っている。
　その傍に、勢以も身じろがず、複雑な目の色になって炎を睨むように見据えていた。
　手文庫が完全に灰となるのを見とどけてから、五兵衛は、ぐったりと臥床に横たわり、
「みなみなをよぶがよい。別れを告げたい」
　と、いった。
（かくなる前に、わしの手で、あの絵巻と櫛の始末をいたしたかったが……ついに、いまこ

のときまで、未練を残してしもうた。なれど、これでよい）

土気色に変った五兵衛の顔には、安堵と放心の色が浮かびあがった。

遊佐良元が駈けつけて来たのは、このときである。

次郎右衛門夫妻や孫たち。分家から駈けつけて来た小左衛門貞明。小沼治作や用人の柴田平太郎も、五兵衛の枕頭へあつまって来た。

ものしずかな、秋の夕暮れであった。

「勢以……これへ……」

「はい」

顔を差し寄せた老妻に、五兵衛が、

「そなたも、行先、長くもあるまいゆえ、申しておくが、死ぬることは、いざともなれば、さほどに恐ろしいものではないぞよ。冥土へ向うときの懸念は無用じゃ。それまでは、のびのびと暮すがよい」

「と、殿……」

「長年……苦労であったのう」

このとき勢以は、尚も顔を差し寄せ、切なげに身をもみながら、

「いま一度……いま一度、四十余年前にもどって、初めより、やり直しとうございました」

五兵衛の耳もとへ、泪声で、ささやいた。

微かに、五兵衛は笑ったようである。

つぎに、次郎右衛門と小左衛門が顔を寄せると、

「次郎右衛門。小左衛門。正道を踏み外してはならぬぞ」

と、父親らしい一言をあたえ、小沼治作が、

「私めも、間もなく……」

ささやくと、両眼を閉じた五兵衛が、

「待っているぞよ」

うなずいたが、すぐに昏睡状態となり、夜に入ると共に息絶えた。

ときに、徳山五兵衛秀栄は六十八歳。

小沼治作が死んだのは、翌年の二月十日であった。

食を絶ったともいわれ、または、前日まで変りなく暮していたのが、翌朝となって眠ったまま息絶えているのを発見されたともいう。

いずれにせよ、五兵衛亡き後の小沼治作は亡骸同様だったのであろう。

ずっと以前のことだが、小沼は用人の柴田平太郎へ、

「それがしは、いつにても死ぬることができ申す。刃物をつかわずとも、この手指で、ひょいと……」

いいさして、頸筋から喉のあたりをすっと手指で撫でて見せ、微笑を浮かべたことがあったそうな。

さて……。

　この年の夏になり、勢以は俄かに衰弱し、病床についたが、十月一日の朝になって、次郎右衛門一人を呼びよせ、枕頭に置いてある蒔絵の手文庫（これは勢以の嫁入り道具の一つである）を指し示し、

「亡き父上より、お預りいたした大切な品が、この手文庫に入っています。手文庫ごと焼き捨てていただきたい」

「父上のときも、そのようなことを……」

「わやわやと申さいでもよろしい。早うしませぬか」

「なれど、母上。いったい、どのような？」

「御公儀の大事に関わる、まことにもって大切なる品じゃ。亡き父上の御遺言ゆえ、すぐさま、焼き捨てて下され」

　病床から起き出た勢以が見ている前で、奥庭に穴が掘られ、その手文庫は中味ぐるみ焼かれ、灰と化した。

「あ……これでよい」

　勢以は、安堵のよろこびに眼を潤ませ、

「これにて、せいせいと、気がはれました」

と、いい、病間へもどった。

　そして、翌々日の午後、勢以は六十四年の生涯を終えたのである。

　徳山次郎右衛門頼屋が病歿したのは、宝暦十年十一月十四日であった。

　次郎右衛門もまた、死にのぞんで、寝所の手文庫の一つを長男に命じ、父母のときと同様の方法で焼き捨てさせている。

　この長男は、当時、祖父の五兵衛の前名・権十郎を名乗っていた。

　このとき、権十郎が父や祖母の勢以と同様に、灰となる前の手文庫の蓋を素早く開け、中に納められていた秘戯図一巻と賀茂川櫛を抜き出したかどうか、それは知らぬ。

　いずれにせよ、人の手によってかけられた鍵などというものは、まったく、たよりにならぬものらしい。

　それにしても、勢以が、五兵衛の脱ぎ置いた着物の袂の中に発見し、自分の胸もとへ隠し込んだ秘戯図の下絵はどうしたろう。

　絵巻や櫛と共に、手文庫の中へ納められていたのか。それとも紙一枚のことゆえ、勢以がみずから始末することを得たのか……。

解説

中一弥

池波正太郎氏の小説、『おとこの秘図』は、読みすすむにしたがい、まさに、〝題名そのものの小説〟の感をふかくするのである。

昭和五十一年一月一日号から五十三年八月三十一日号の「週刊新潮」に連載時、插絵を担当していた私は、その間は、この小説に展開されている場面をどのような絵にするか、ということで、頭がいっぱいだったので、ひとりの読者としての味わいようで小説を読んだのではなかった。

さて、仕事をはなれて、『おとこの秘図』を読んでみると、ただもう、文句なしに小説に没入してしまうので、純粋に読者としてのよろこびに浸れる。

池波氏の小説の中で、私がいちばん感心するのは、〝女〟の、描きかたのうまさ、である。男も、むろんうまく描かれるけれども、ずばぬけて、女の描きかたが、いたれりつくせりなのである。

私は、男女が登場する小説ならば、女が、どこまで描き得ているかによって、小説の、うまいかまずいかの価値づけがきまるのではないかとさえ思っている。

池波氏の小説の、女を、絵にする時もっとも苦心をはらうのは、小説の中の女に、どこまでせまれるか、という一点である。しかし、なかなか、小説の中に息づいている生身の女と、一体になることは容易でない。

池波氏の文章を借りれば、「女という生きものは」、この私の絵筆ではとても描ききれない。『おとこの秘図』の主人公、徳山五兵衛（幼名・権十郎）が、少年期から青年期にうつるあたりの運命的な、男のかなしさが、まず胸をうってくる。

徳山権十郎に乳を与えた女性との、少年ながら男性権十郎のからみあいは、作者の体験こまやかであろうことをつい想像してしまうのだが、或いはまったく、その絶妙な筆によってのみ表わされたのやも知れぬ。まことに冴えたものである。

これは、私ごとで恐れ入るが、私の幼時、この主人公権十郎の幼年時とちょっと似たようなことを経験した。私が生れた頃は、すでに家運がかたむいていたから、母が、習いおぼえた三味線を、人に教えたり、いわゆる〝芸は身をたすける不しあわせ〟で、母と兄が、わずかな収入で一家をささえ、父は病身でブラブラしていた。この貧しい境涯でも、三味線と端唄、浄瑠璃を習いにくる人達で家の中は明るかった。ところで、この三味線を習いにくる若い女たちの中に、近所の料理屋の仲居がいて、この女が、どういうわけか、稽古につかれると、私を抱いて横になる。色の白い、肉づきのよい二十四、五くらいの、ちょっと器量がよいので、私も素直にいつも抱かれた記憶がある。しかし、権十郎に対する乳母の千のように、特別な愛撫はうけなかったが、はだけた襟もとからのぞいている豊かな、白い乳房をじっと

眺めていたのを、今もおぼえている。

池波氏のいわれる、四、五歳ごろの生活の記憶は、その一生へ影響をおよぼすというのは、私にもなるほどと納得のいくことが多い。

当主となった徳山五兵衛が、京のお梶からもらった秘戯図の巻物に熱中のあまり、ついに五兵衛自身が、思い出すさえ五体の熱くなる、お梶との若き日の悩ましいいとなみを、おのれの筆にとどめる決心をしたあたりから、私も、『おとこの秘図』の挿絵に、秘戯図を描(か)く決意をした。

いよいよ、本文に負けない情味あふれる絵を描いてみようと、「男女の秘図」を、探しにかかった。東京都内の、ある書店から刊行している秘戯図集はあるのだが、むろんのことに、かんじんの所を、白くぼかしてしまってあるため、本当の参考資料とはならぬ。それかといって、真物(ほんもの)の「和印」(春画をいう)は、かりに、個人の所有であっても、秘庫の奥深く蔵(しま)われていて、かんたんには眼にする機会などないのである。

この秘戯図というのは、まことに厄介なものであって、想像だけでは描けない。それも、時代小説の挿絵ともなればなおさらのことである。

江戸時代の、浮世絵の名手が、腕によりをかけて、けんめいに描いた秘戯図には、淫(みだ)らな感じは、まったくない。それでいて、飽かずに眺めていると、ジーンとからだの中を熱くさせられてしまう。それくらいの、真物(ほんもの)の「和印」を手許に置いてみたい。と、欲をいえばきりがないのであった。

さいわい、外国版の、浮世絵秘戯図集が、懇意にしている書店から、ひそかに入手することが出来た。これは、かんじんの所を、かくしたりしていない完全版であった。

この秘戯図をもとにして、私なりに自由な秘戯図を、作ることが出来た。浮世絵の秘戯図には、絵の中にちゃんと約束があって、それを無視しては、一つの品格ある秘戯図とはならない。

徳山五兵衛が、お梶から贈られた、住吉慶恩えがく秘巻をひらくあたりの挿絵に、宮廷の男女が、いとなみを繰りひろげる絵を描(か)いたが、「これは、このまま誌面に出してよいかどうか」と、編集部で首をひねった、と、あとで、担当の記者から聞かされたくらい、誌面許容度ギリギリのところまで描いたりした。

とにかく、池波氏の、文章に乗ってあらわれる男と女の、こまやかな愛情の交わりには、その表現のうまさには、まったくもって頭がさがる。そこには、真を知ってそれを書かず、そして、それ以上のものを、読む人の胸へ灼(や)きつける、心にくいまでの独特の文章力の持ち主、池波氏の真価がある。私は心からそう思うものである。

『おとこの秘図』を、あらためて読みかえしてみて、もう一度、全篇の挿絵を、描き改めてみたい衝動にかられたりするのだが、気に入った小説は、ある年月をおいて、読みかえし読みかえしするのが、本当の、小説の読みかたなのであろう。そうすることによって、自分の人生の長い時間に、その小説が溶け込んでしまうだろう。なんと、たのしいことではないかと思う。

五十年にわたる挿絵の仕事の中で、挿絵の深い味わいを、自分でかみしめながら絵が描けるようになり、また、なにがしか絵も、満足にちかいものに描き得るようになったのは、私が、池波氏の小説に挿絵を描きだしてからであろう。この十五、六年の歳月は、その意味で、私にはまことに尊い。『おとこの秘図』も、その貴重な歳月の中の大切な仕事の一つであった。

（昭和五十八年八月、画家）

この巻は「おとこの秘図㈤歳月」（昭和五十三年八月）、「おとこの秘図㈥賀茂川櫛」（昭和五十三年十二月）として新潮社より刊行された。

文字づかいについて

新潮文庫の日本文学の文字表記については、原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは新仮名づかいに改める。
二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。
三、常用漢字表、人名用漢字別表に掲げられている漢字は、原則として新字体を使用する。
四、年少の読者をも考慮し、難読と思われる漢字や固有名詞・専門語等にはなるべく振仮名をつける。

おとこの秘図（下）

新潮文庫　い-16-18

昭和五十八年九月二十五日　発行
平成十三年八月二十日　四十刷

著者　池波正太郎

発行者　佐藤隆信

発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二―八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部(〇三)三二六六―五四四〇
　　　読者係(〇三)三二六六―五一一一

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・憲専堂製本株式会社

ISBN4-10-115618-2 C0193